岩手県文化財調査報告書　第128集

岩手県内遺跡発掘調査報告書

（平成19年度）

平成21年３月

岩 手 県 教 育 委 員 会

序　　文

埋蔵文化財は、私たちの祖先より培われてきた貴重な歴史的財産であり、国民共有の財産であります。先人の残したかけがえのない財産である埋蔵文化財を、文化財保護法の理念に基づき活用し、後世に伝えていくことは現代に生きる私たちの責務でもあります。

しかしながら、埋蔵文化財は近年の大規模な開発事業等により現状保存をすることが難しくなっております。このような状況のなかで、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との円滑な調整を図るためには、遺跡の性格や所在地、範囲を正確に示す必要があることはいうまでもありません。そして、一つ一つの遺跡に対する地道な取り組みが、その後の埋蔵文化財の保存と活用につながると考えております。

当教育委員会では、国庫補助金の交付を受けて昭和52年度より遺跡の分布調査を実施しており、現在、県内で確認されている遺跡数は１万２千近くにも上ります。これらの遺跡を広く周知する必要があるとともに、開発事業との調整の中で行った発掘調査の記録や、遺跡の範囲及び内容確認を目的とした試掘調査の記録を明らかにする必要があると考え、平成元年度からこれらの調査の報告書を刊行しています。

本報告書は、平成19年度に実施した県内遺跡の発掘調査、試掘調査及び分布調査の成果をまとめたものです。本報告書が県内遺跡の内容把握に活用され、埋蔵文化財の保護に寄与することがあれば幸いに存じます。

調査の実施と報告書の作成にあたり、御指導と御協力をいただきました多くの方々に対し心より感謝申し上げます。

平成21年３月

岩手県教育委員会

教育長　法　貴　　敬

目　　次

例言

Ⅰ　発掘調査

1　経営体育成基盤整備事業江刺西部地区（鶴羽衣遺跡）…… 3
2　経営体育成基盤整備事業江刺西部地区（天竺老婆遺跡）…… 6
3　経営体育成基盤整備事業江刺西部地区（沼尻遺跡）…… 7
4　経営体育成基盤整備事業渋民地区（観音寺遺跡）…… 9
5　畑地帯総合整備事業舌崎地区（釜沢館遺跡）…… 13
6　緊急地方道整備事業（高柳遺跡）…… 14
7　緊急地方道整備事業（高柳遺跡）…… 17
8　松園養護学校整備事業（松屋敷遺跡）…… 21
10　経営体育成基盤整備事業更木新田地区（岡島遺跡）…… 24

Ⅱ　試掘調査

1　いさわダム建設事業（下嵐江Ⅰ遺跡）…… 29
2　いさわダム建設事業（下嵐江Ⅱ遺跡）…… 30
3　いさわダム建設事業（坪渕Ⅱ遺跡）…… 31
4　東北横断自動車道（遠野～東和間）新直轄事業（中嶋遺跡）…… 32
5　一般国道４号渋民バイパス改築工事（昼久保Ⅲ遺跡）…… 33
6　馬淵川沿岸農業水利事業（上平Ⅲ遺跡）…… 34
7　馬淵川沿岸農業水利事業（火行塚遺跡）…… 35
8　畑地帯総合整備事業舌崎地区（雨滝遺跡）…… 36
9　畑地帯総合整備事業舌崎地区（川口Ⅰ遺跡）…… 37
10　広域農道整備事業軽米九戸２期地区（板子屋敷３遺跡）…… 38
11　中山間地域総合整備事業大清水地区（駒板３遺跡）…… 39
12　経営体育成基盤整備事業大川目地区（新町遺跡）…… 40
13　中山間地域総合整備事業野田地区（中新山遺跡）…… 41
14　経営体育成基盤整備事業徳田第２地区（徳丹城跡隣接地）…… 42

15　経営体育成基盤整備事業中寺林地区（八坂遺跡）…… 43
16　中山間地域総合整備事業中居地区（下中居Ⅰ遺跡南区）…… 44
17　中山間地域総合整備事業中居地区（下中居Ⅰ遺跡北区）…… 45
18　中山間地域総合整備事業中居地区（下中居Ⅱ遺跡）…… 46
19　中山間地域総合整備事業中居地区（下中居Ⅲ遺跡）…… 47
20　経営体育成基盤整備事業江釣子第２地区（田代遺跡）…… 48
21　緊急地方道路整備事業（野田Ⅰ遺跡）…… 49
22　経営体育成基盤整備事業白山地区（白山上野遺跡）…… 50
23　経営体育成基盤整備事業白山地区（小林繁長遺跡）…… 51
24　経営体育成基盤整備事業古城地区（境田遺跡）…… 52
25　経営体育成基盤整備事業古城地区（要害Ⅱ遺跡）…… 53
26　経営体育成基盤整備事業都鳥地区（作屋敷遺跡）…… 54
27　経営体育成基盤整備事業都鳥地区（尼坂遺跡）…… 55
28　経営体育成基盤整備事業都鳥地区（牡丹野遺跡）…… 56
29　津付ダム建設事業（子飼沢Ⅰ遺跡）…… 57
30　津付ダム建設事業（子飼沢Ⅱ遺跡）…… 58
31　県営県単調査事業本寺地区（骨寺村荘園遺跡）…… 59
32　経営体育成基盤整備事業夏川地区（白浜貝塚）…… 61
試掘調査出土遺物図 …… 62
発掘調査等一覧表 …… 65

Ⅲ　写真図版 …… 75

Ⅳ　釜石市麓山遺跡発掘調査報告 …… 83

例　　言

1　本書は、岩手県教育委員会が平成19年度に実施した県内遺跡発掘調査事業に係る調査結果の概要報告である。なお、本事業は国庫補助金の交付を受けて実施したものである。

2　本事業は、岩手県教育委員会が調査主体となり、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター及び関係市町村教育委員会の協力を得て実施した。

3　遺跡位置図は国土地理院発行の１／2,5000地形図を、原寸大を原則として、改変したものである。遺構及びトレンチ配置図は、各事業者より入手した地形図を原図として作成したものである。

4　発掘調査については、概略を記している。

5　試掘調査に係る遺跡の推定範囲をアミ掛けで示し、試掘トレンチは実線で示している。

6　本事業の調査、整理、報告書編集等は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の斎藤邦雄、菅常久、花坂政博、櫻井友梓が担当した。また、平泉町及び一関市の一部に係る調査等は生涯学習文化課柳之御所担当が担当した。

なお、Ⅳ釜石市麓山遺跡発掘調査報告については、釜石市教育委員会が本調査及び報告を担当している。

7　本事業の記録及び出土品は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課が保管している。なお、麓山遺跡の調査記録及び出土品は釜石市教育委員会が保管している。

Ⅰ　発掘調査

1　経営体育成基盤整備事業江刺西部地区

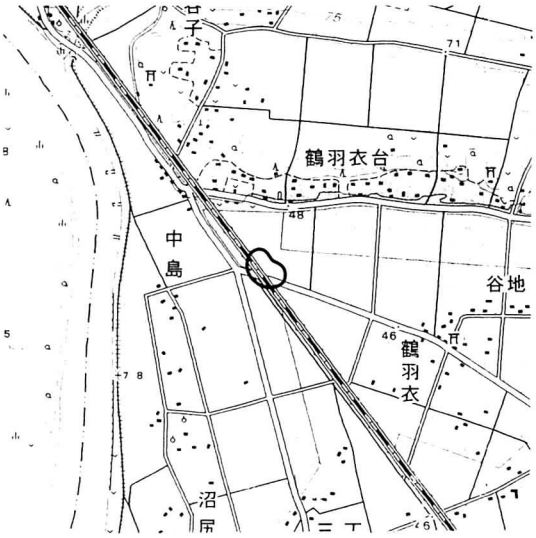
鶴羽衣遺跡（ME96－0223）

所 在 地；奥州市江刺区稲瀬

事 業 者；県南広域振興局農林部農村整備室

調査期日；平成20年12月22日～25日

鶴羽衣遺跡は、奥州市役所の北方向約８kmに位置し、北上川左岸の自然堤防上の微高地に立地している。東北新幹線敷設工事の際に発掘調査が実施され、古代の集落跡が確認されている。今回の調査はパイプライン埋設工事に伴うもので、遺跡隣接地にあたる箇所ではあるが、試掘調査を実施（平成19年10月22日､24日）し、埋蔵文化財が確認された箇所が対象である。



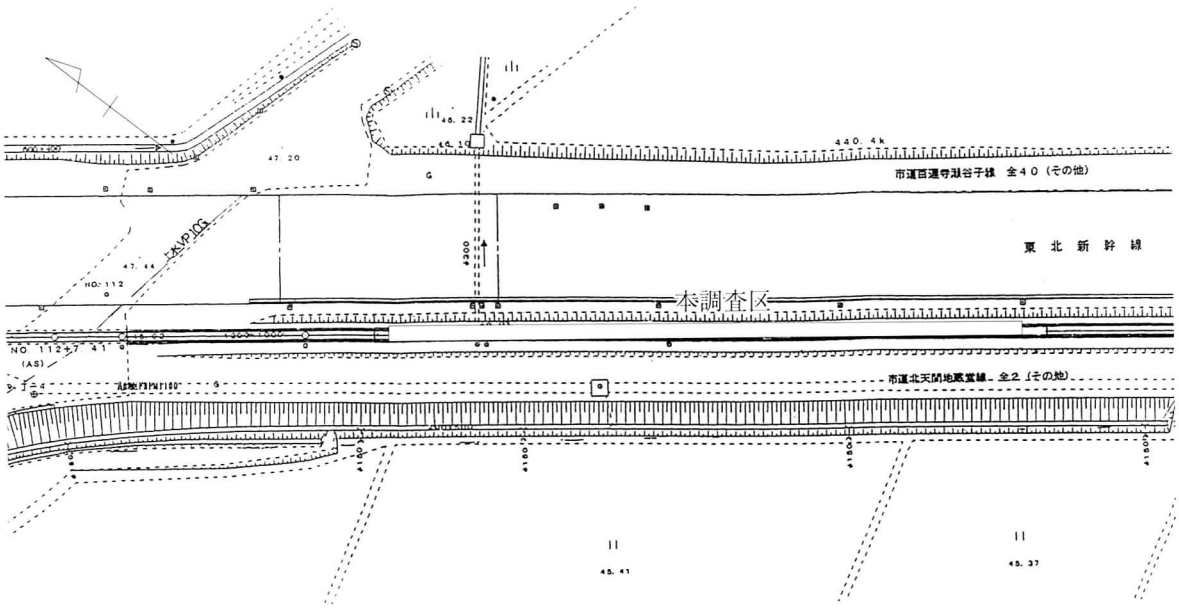
第１図　鶴羽衣遺跡位置図

調査区の基本土層は、表土及び盛土が100cmあり、第Ⅰ層が旧水田耕作土とみられる褐灰色砂質土層で層厚が20～30cm、第Ⅱ層が灰褐色土層で酸化鉄等を含んでおり旧水田耕作土とみられ層厚が10cm、第Ⅲ層が炭化物を多く含む灰褐色土層で層厚が20～40cm、第Ⅳ層が黒褐色土層で土師器、須恵器片を含む層で層厚が40～60cm、第Ⅴ層が褐灰色土層で土師器、須恵器片を含み層厚が０～10cm、第Ⅵ層が地山とみられる褐色砂質土層で検出面にあたる層である。

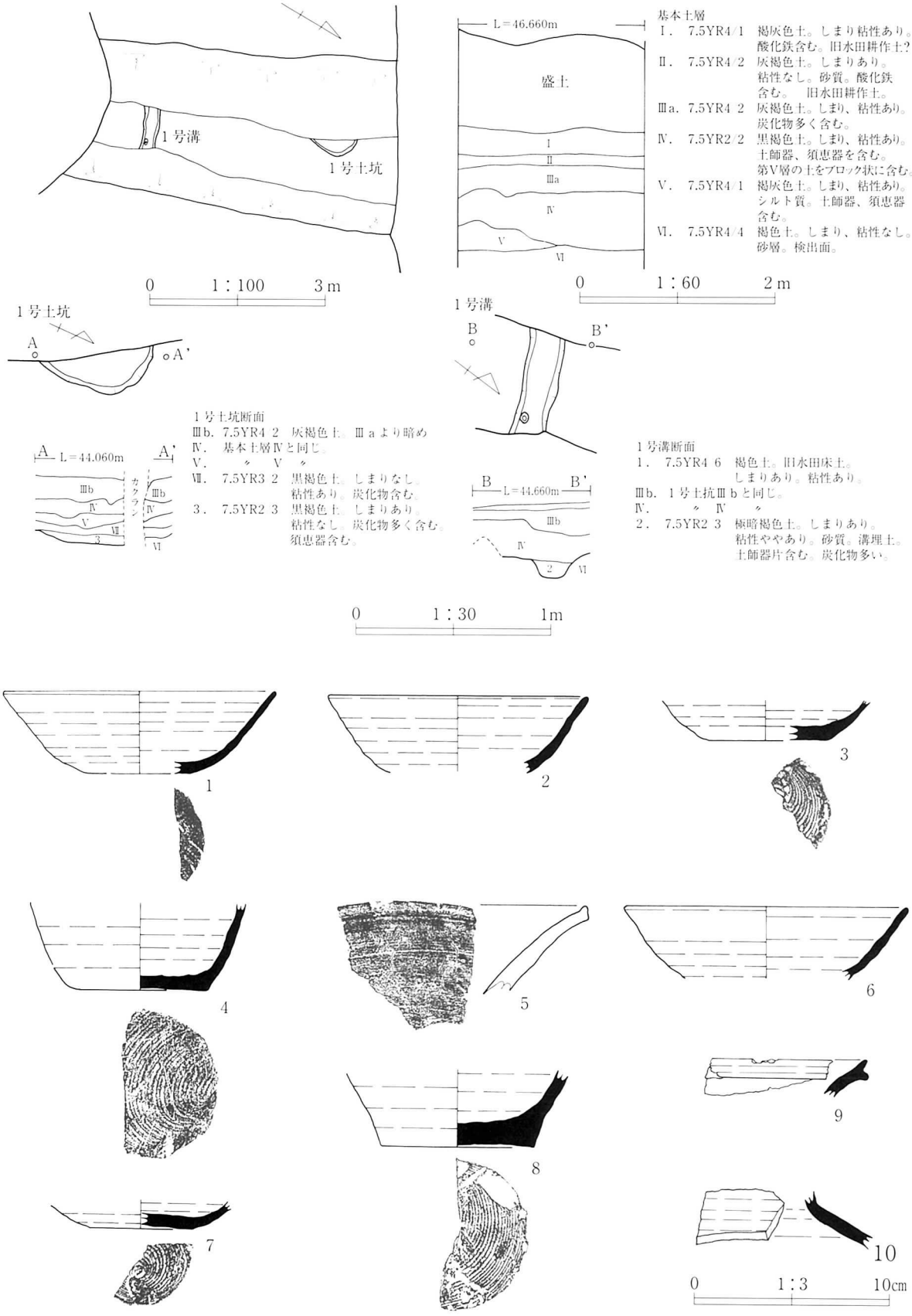
土坑１基（１号土坑）、溝跡１条（１号溝）が検出された他、旧表土にあたると思われる基本層序第Ⅳ層から土師器及び須恵器片が出土した。

１号土坑は、径１ｍほどの円形を示し、深さが15cm程である。埋土は単層で炭化物を多く含む黒褐色土層である。遺構底面からは須恵器坏の口縁部片等が10点ほど出土した。

１号溝は、幅50cm、深さ30cmであり、溝跡南側には、柱穴状土坑１基が重複して検出されている。埋土は単層で炭化物や遺物を含む暗褐色土層である。１号溝からは､土師器坏底部片や須恵器片が出土した。また、１号土坑の北側には、炭化物粒や土師器が集中して確認された区域があったことから、遺構の可能性があると



第２図　鶴羽衣遺跡調査区位置図

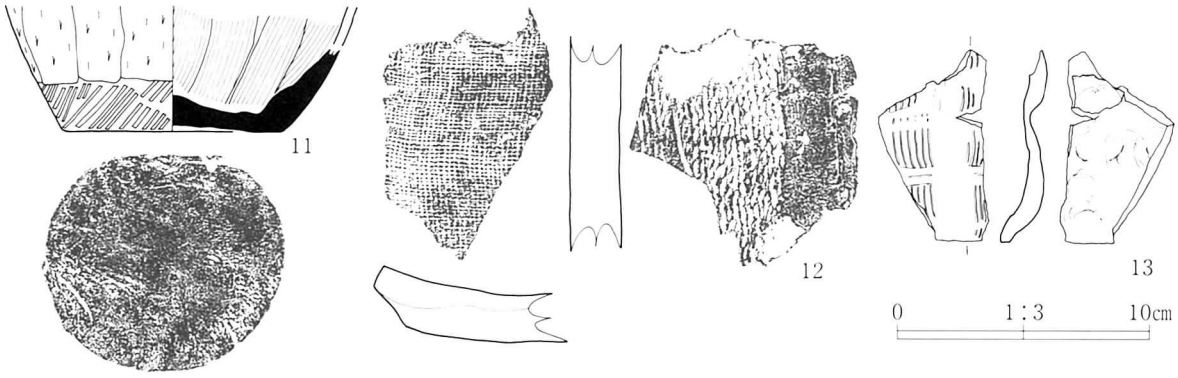


第３図　鶴羽衣遺跡検出遺構・出土遺物（１）

推測して掘り下げたが、明確な遺構プランは確認できず、土器集中区の土層断面を観察すると、黒色土中に褐色砂あるいは青灰色砂が一部ラミナ状に堆積していること、土師器と縄文土器片が同一層序から出土していることなどから、洪水等によって再堆積した包含層であると判断した。

遺物は、1号土坑から、須恵器坏が出土している。底部がわかるものは底部回転糸切りである。1は口径が約12.6cm、器高が約4.2cm、焼成が堅緻である。底部は一部で手持ちヘラケズリが行われており、切り離しは不明である。1号溝から、須恵器片、土師器片が出土している。4は甕類の底部で、底径は7.4cm、底部は回転糸切り無調整である。包含層からは、須恵器坏片、甕片、平瓦が出土している。6は口径が約14.2cmで焼成は不良である。9は甕類の口縁部破片である。12は平瓦の破片である。凹面は布目痕跡、凸面は縄目タタキの痕跡が残されており、端部はヘラケズリで調整されている。凸面の縄目タタキは、一部がつぶれている。胎土には、径1～3mm程度の石粒を含んでいる。

これらの調査結果から、鶴羽衣遺跡では古代の遺物包含層及び遺構を確認できた。遺物は須恵器等を中心としており、また平瓦片も含んでいることが注目される。近隣には、この遺跡の北約2kmほどに瀬谷子窯跡群が所在しており、遺物の内容等から関連が推測される。



鶴羽衣遺跡掲載遺物観察表

番号	出土地点	層位	種別	器種	特　　徴
1	1号土坑		須恵器	坏	口径12.6cm　器高4.2cm　底部一部を手持ちヘラケズリ　7.5Y 7/1　灰色。
2	〃		〃	〃	口径12.9cm　内外面ロクロ目　7.5Y 7　1　灰色。
3	〃		〃	〃	底部回転糸切　5Y 8　1　灰白色。
4	1号溝		〃	甕	底径7.4cm　底部回転糸切　内外面ロクロ目　2.5Y 7　6　明黄褐色。
5	〃		土師器	甕	口縁部破片　内外面ロクロナデ　10YR 6　6　明黄褐色。
6	包含層		須恵器	坏	口径14.2cm　内外面ロクロ目　5Y 8　1　灰白色。
7	〃		〃	〃	底部破片　底部回転糸切り痕　7.5Y 7　1　灰色。
8	〃		〃	甕	底径7.6cm　底部回転糸切　内外面ロクロ目　5Y 7　1　灰白色。
9	〃		〃	〃	口縁部破片　内外面ロクロ目　5Y 5　1　灰色。
10	〃		〃		体部上半部破片　内外面ロクロ目　5Y 6　1　灰色。
11	地山直上		〃	甕	底部破片　底径8.9cm　外面タタキ・ケズリ　内面ヘラナデ　10YR 8　2　灰色。
12	包含層			平瓦	凸面縄タタキ面　凹面布目痕跡　側端部ケズリ。
13	隣接地		土製品	不明	外面縦向にハケメ　内面に指押圧痕。

第4図　鶴羽衣遺跡出土遺物(2)

2　経営体育成基盤整備事業江刺西部地区

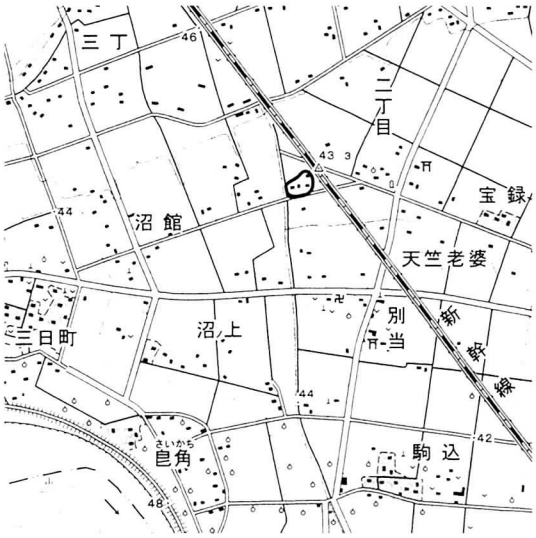
天竺老婆遺跡（ME96－1352）

所 在 地；奥州市江刺区稲瀬

事 業 者；県南広域振興局農林部農村整備室

調査期日；平成20年１月22日～25日

天竺老婆遺跡は、奥州市役所の北方向約6.7kmに位置し、北上川左岸の自然堤防上の微高地に立地している。今回の調査は、パイプライン埋設工事に伴うものである。平成19年10月に実施した試掘調査で、調査範囲の一部から、土師器片や古代の遺物が確認されたことから、発掘調査を行うものである。



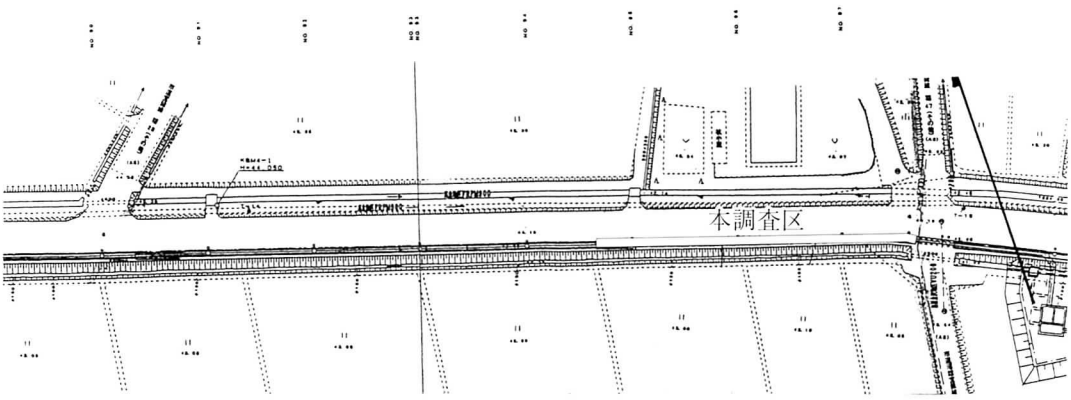
第５図　天竺老婆遺跡位置図

基本土層は第Ⅰ層が表土及び盛土で層厚が120cmほど、第Ⅱ層が暗褐色土層で層厚が10～30cm程度、第Ⅲ層が褐色土層で検出面にあたる層である。

焼土遺構１基が検出された。この焼土遺構は、30×60cmの範囲で大量の焼土粒及び炭化物が認められた。不整形の土坑で、深さは５cm程である。固く焼きしまった焼土が認められた。ただし、焼土遺構周辺で遺物は確認されず、時期は不明である。

遺物は、摩滅の激しい土師器片が１点出土したのみであった。

これらの調査結果から、天竺老婆遺跡は、北上川右岸の微高地に所在する遺跡で、試掘調査等の遺物から古代の集落跡と考えられる。ただし、遺物等が少量のため、詳細な時期は不明である。今回の調査範囲は、範囲が限定されることから遺物等が少ないが、周辺の微高地上に埋蔵文化財が分布すると考えられる。



第６図　天竺老婆遺跡調査区位置図

3　経営体育成基盤整備事業江刺西部地区

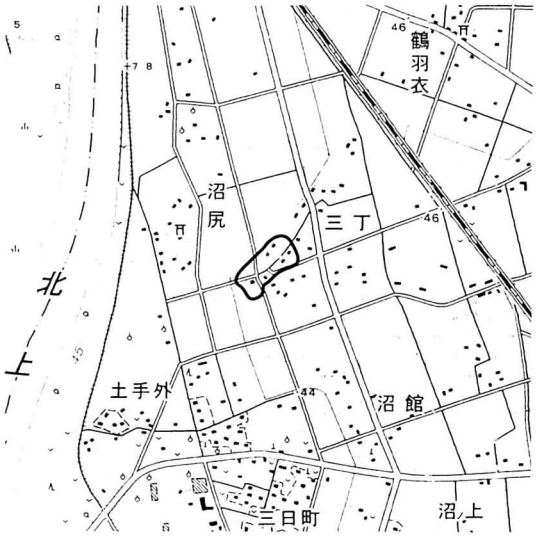
沼尻遺跡（ME96－1215）

所 在 地；奥州市江刺区稲瀬

事 業 者；県南広域振興局農林部農村整備室

調査期日；平成20年１月22日～25日

沼尻遺跡は、奥州市役所の北方向約７kmに位置し、北上川左岸に形成された沖積地上の微高地に立地している。今回の調査は、パイプライン埋設工事に伴うもので、平成19年10月に実施した試掘調査で遺構が確認された区域が対象である。沼尻遺跡では、平成18年度にも当課で一部の調査を行っており、９世紀中葉から後半を中心とした遺物が出土している。

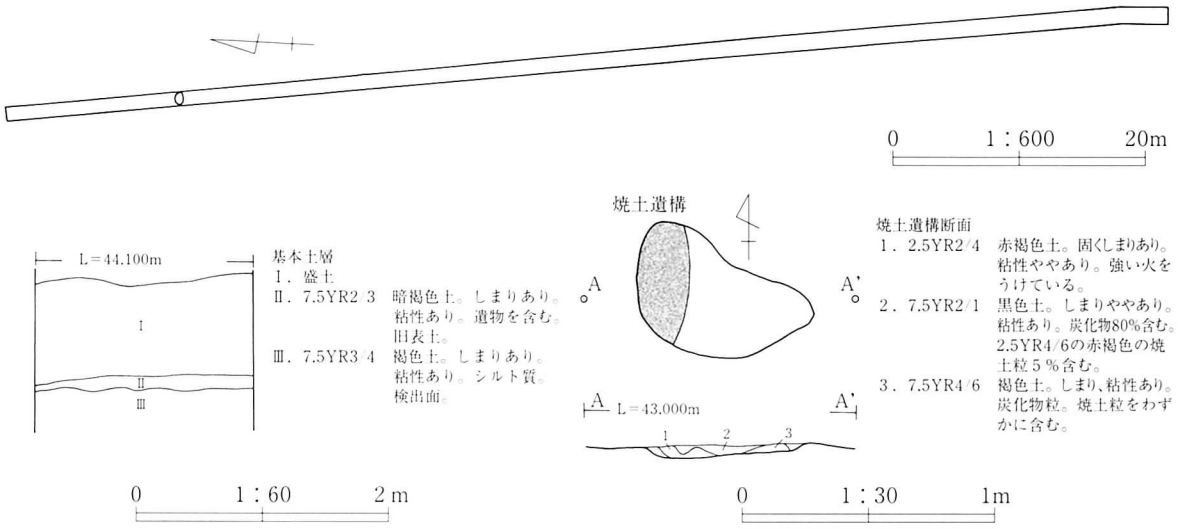


第７図　沼尻遺跡位置図

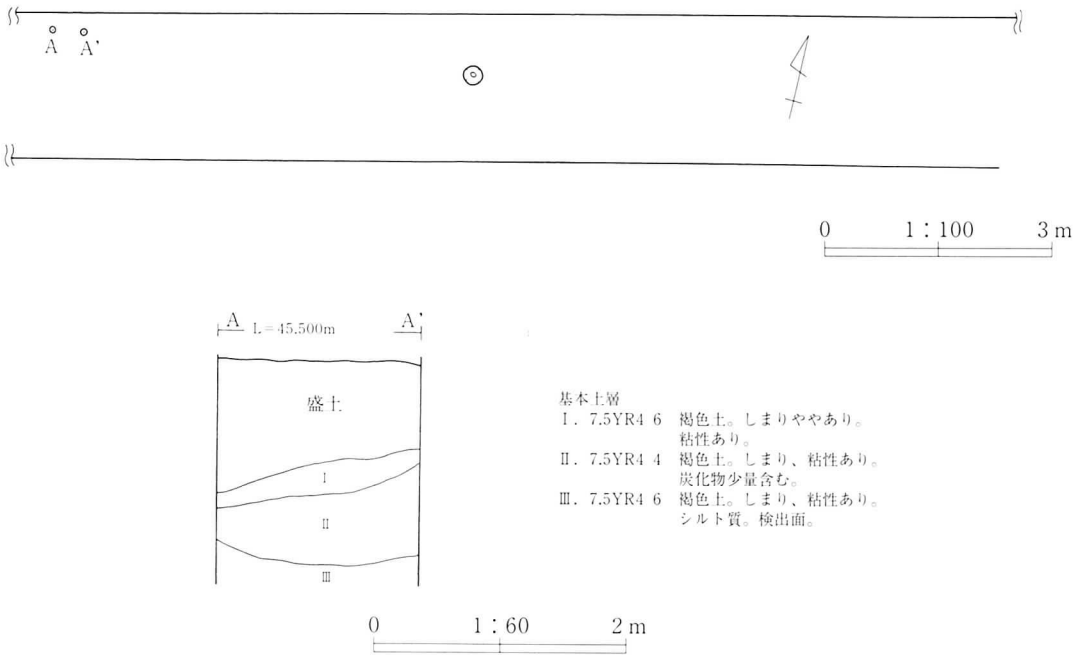
基本土層は、表土及び盛土の下層に、第Ⅰ層が褐色土層で層厚が10～20cm程度、第Ⅱ層が炭化物を少量含む褐色土層で層厚が30～50cm程度、第Ⅲ層が褐色砂質土層で検出面にあたる土層である。

柱穴状土坑１基が検出された。径が25cm程度の円形で、埋土は黒褐色土の単層である。調査区内にはこの柱穴状遺構１基のみしか所在せず周囲から遺物が出土しなかったため、構築時期は不明であるが、試掘調査において、他のトレンチで古代の遺物が確認されており、この遺構も古代に属する可能性が考えられる。また、周囲には微高地上の範囲があり、遺構が所在する可能性が考えられる。

第８図　沼尻遺跡調査区位置図



第９図　天竺老婆遺跡検出遺構



第10図　沼尻遺跡調査区

4　経営体育成基盤整備事業渋民地区

観音寺遺跡（NF61－1115）

所 在 地：一関市大東町渋民

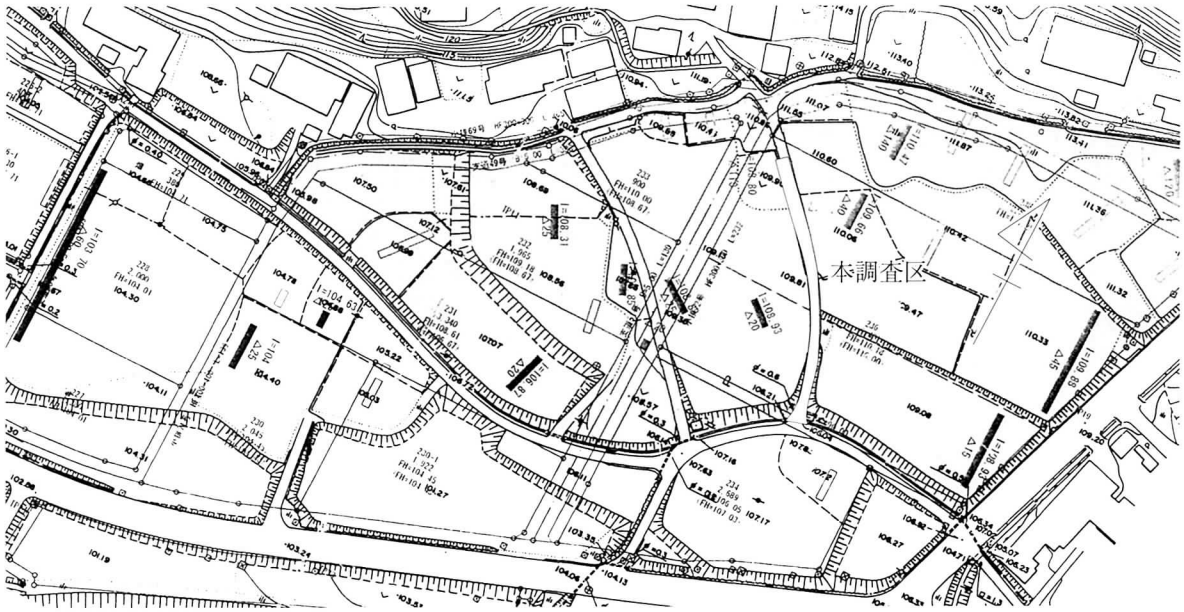
事 業 者：県南広域振興局一関総合支局千厩農林センター

調査機関：平成20年１月21日・25日・29日～31日

遺跡は、一関市役所大東支所の西方約4.3km に位置し、砂鉄川右岸の標高109m前後の河岸段丘低位面上に立地している。当地域において農業基盤整備事業が計画され、当課が従前実施した試掘調査により埋蔵文化財が確認されたことから本発掘調査を実施したものである。現況は水田及び農道である。なお、今回の調査区に隣接した区域については一関市教育委員会が発掘調査を実施している。調査区の設定については一関市教育委員会の調査に準じた。

第11図　観音寺遺跡位置図

今回の発掘調査で土坑６基及び溝状遺構１条と柱穴状の小ピット32個を検出した。１号土坑はＣ５グリッド内で検出された。長軸方向140cm、短軸方向125cmで平面形は隅丸長方形である。長軸方向は北東－南西方向で、短軸の一辺のほぼ中央部に外側に凸辺状に張り出す部分がある。埋土は単層で、黒褐色のシルトでしまりのない層である。底面は平坦で検出面からの深さは約25cmである。遺物は出土していない。２号・３号土坑はＣ４グリット内で検出された。平面形は両者とも80cm±の規模の略円形で深さは40cm～60cmである。埋土は比較的緻密な土質の暗褐色土である。遺物は出土していない。４号土坑はＡ８グリッドで検出された。一部は調査区外にかかり全様については不明である。平面形は楕円形、検出面からの深さは50cmで底面はすり鉢状である。埋土は２層に大別される。人為的な堆積土と思われる濁りのある黄褐色土が大半を占めている。５号･６号は－Ａ８グリッドで検出された。平面形は径100cm前後の略円形で深さは検出面から20～30cm

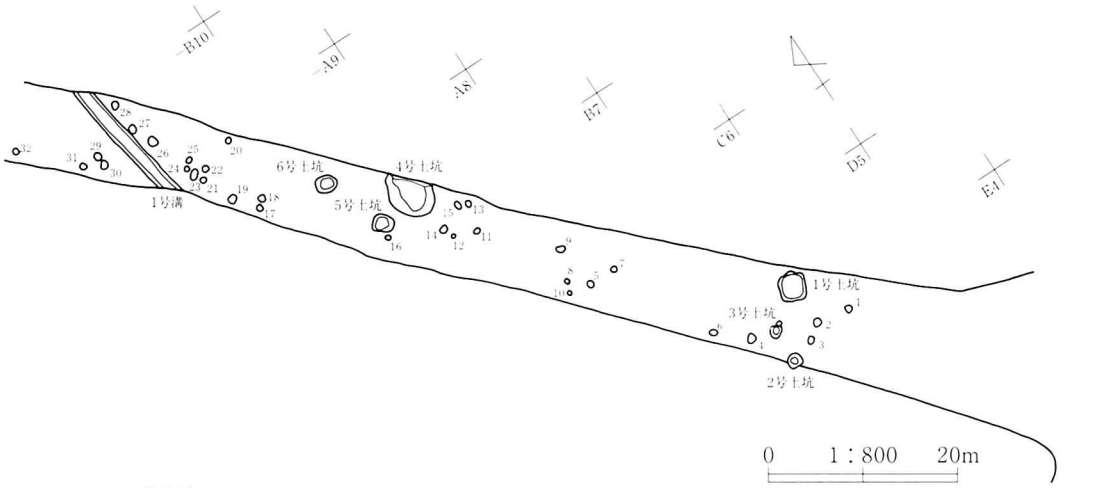


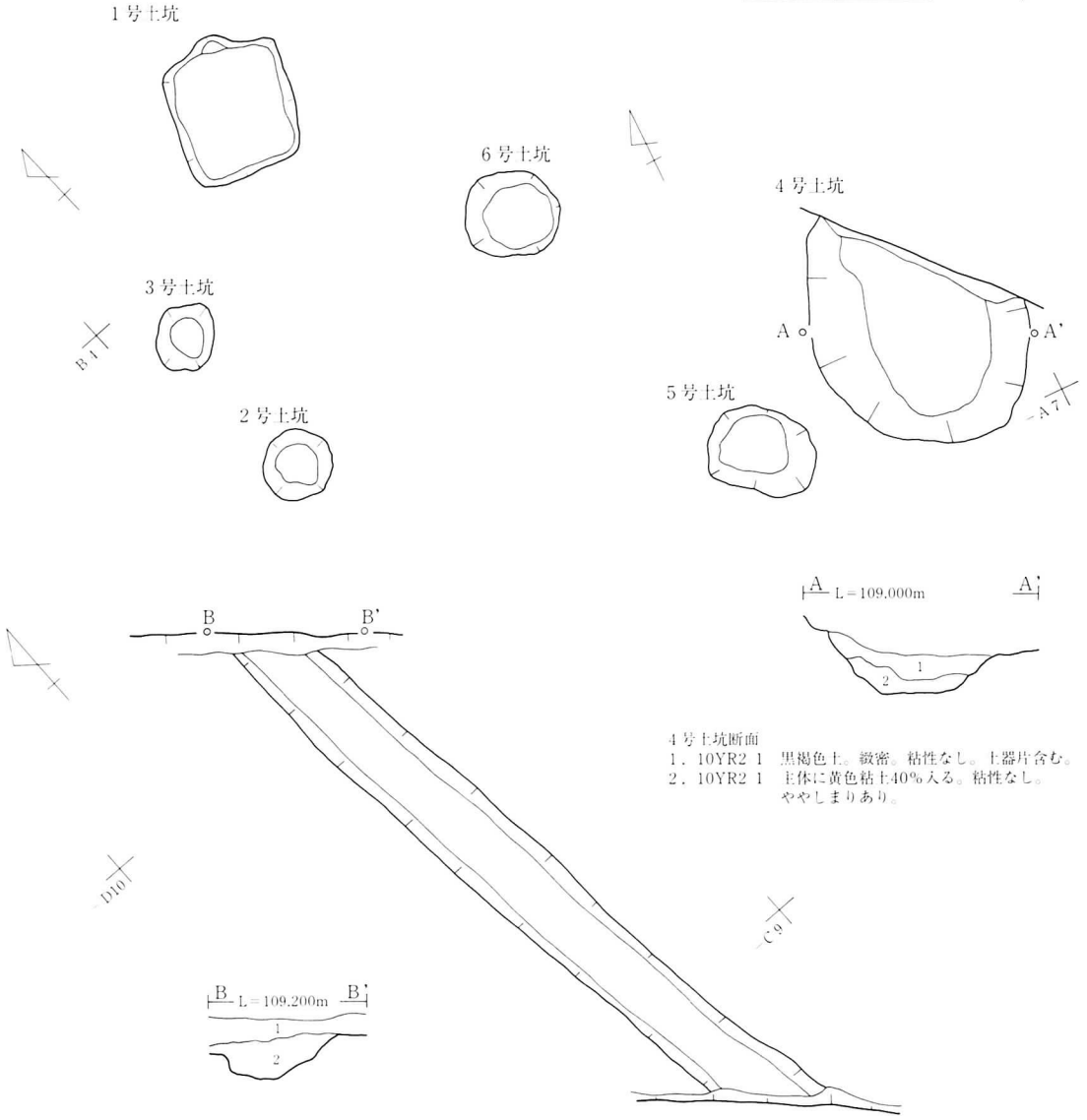
第12図　観音寺遺跡調査区位置図

である。埋土は黒褐色のシルト質土の単層であり、底面は平らである。１号溝はＤ４グリットを中心に検出された。幅80cmから90cmで深さは検出面から10cm程度である。北東から南西方向に向かって緩やかに傾斜している。各遺構からは、遺物等は出土しておらず明確な時期比定は困難である。遺構外から縄文時代早期前葉から中葉頃の条痕文系の土器が出土しており、また隣接地で一関市教育委員会が行った調査でも縄文時代早期と推定される遺構が見つかっておりこの時期に相当する遺構もあるものと思われる。また、土師器片も数点見つかっており周辺に古代の遺構の存在も予想される。

遺構名	位置	規模（cm）			
		縦	×	横	深さ
土坑　1	Ｃ５	140	×	120	25
土坑　2	Ｃ４	80	×	74	40
土坑　3	Ｃ４	70	×	60	61
土坑　4	Ａ８	230	×	(280)	52
土坑　5	－Ａ８	115	×	90	23
土坑　6	－Ａ８	100	×	90	29
溝　1	Ｄ４	85	×	(800)	10
柱穴　1	Ｃ４	32	×	30	7
柱穴　2	Ｃ４	32	×	(30)	22
柱穴　3	Ｃ４	31	×	24	24
柱穴　4	Ｃ４	42	×	38	16
柱穴　5	Ｂ６	30	×	30	19
柱穴　6	Ｂ５	30	×	28	20
柱穴　7	Ｂ６	32	×	25	13
柱穴　8	Ａ６	24	×	22	13
柱穴　9	Ａ６	45	×	35	12
柱穴　10	Ａ６	22	×	20	10
柱穴　11	Ａ７	44	×	28	50
柱穴　12	Ａ７	24	×	24	13
柱穴　13	Ａ７	36	×	32	18

遺構名	位置	規模（cm）			
		縦	×	横	深さ
柱穴　14	Ａ７	48	×	40	12
柱穴　15	Ａ７	44	×	36	13
柱穴　16	－Ａ８	32	×	30	25
柱穴　17	－Ｂ９	33	×	32	18
柱穴　18	－Ｂ９	40	×	41	19
柱穴　19	－Ｂ９	44	×	41	18
柱穴　20	－Ｂ９	27	×	25	21
柱穴　21	－Ｂ９	24	×	23	4
柱穴　22	－Ｂ９	26	×	25	31
柱穴　23	－Ｂ９	63	×	25	30
柱穴　24	－Ｂ９	27	×	26	20
柱穴　25	－Ｂ９	28	×	25	4
柱穴　26	－Ｂ10	48	×	44	5
柱穴　27	－Ｃ10	40	×	40	12
柱穴　28	－Ｃ10	40	×	44	15
柱穴　29	－Ｃ10	44	×	44	21
柱穴　30	－Ｃ10	36	×	36	12
柱穴　31	－Ｃ10	32	×	28	21
柱穴　32	－Ｄ10	40	×	32	20



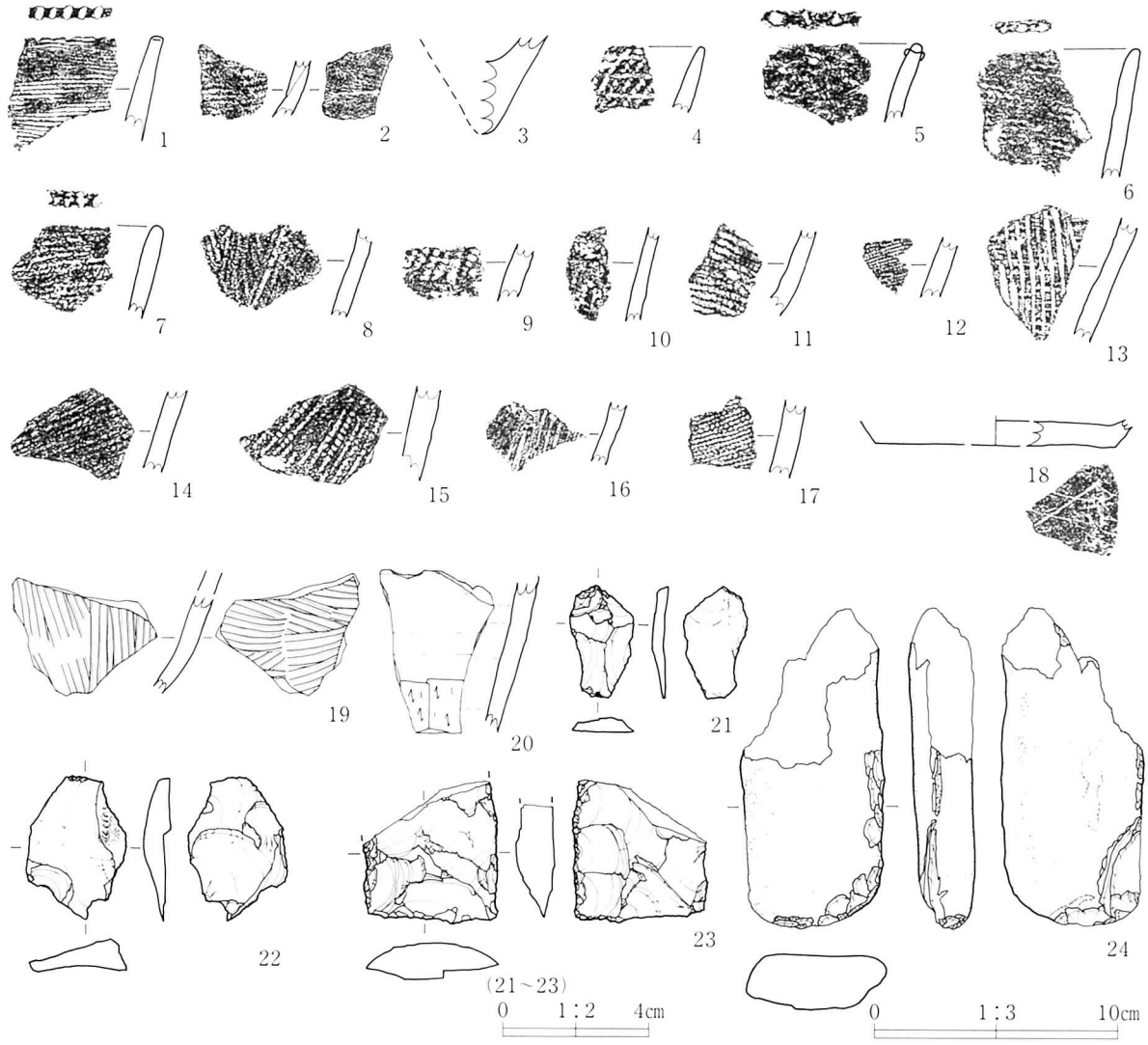


4号土坑断面
1．10YR2 1　黒褐色土。緻密。粘性なし。土器片含む。
2．10YR2 1　主体に黄色粘土40%入る。粘性なし。
　　ややしまりあり。

1号溝断面
1．10YR3 2　黒褐色土。粘性なし。しまりなし。白いパミス状の細粒含む。
2．10YR4 2　灰黄褐色土。粘性なし。しまりなし。炭化物微量含む。

0 1：80 2m

第13図　観音寺遺跡検出遺構



観音寺遺跡掲載遺物観察表

番号	出土地点	層位	種別	器種	特　　徴
1	P2	埋土	縄文		口縁部キザミあり。無節縄文（横走）。
2	P2	埋土	〃		LR縄文。
3		Ⅲ層	〃		尖底。縦方向ミガキ。
4	－D11グリットP		〃		撚糸紋。
5	南側調査区		〃		口縁部キザミあり。撚糸紋。
6		Ⅲ層	〃		撚糸紋。
7		〃	〃		口縁部キザミあり。無節縄文。
8	－D10グリットP		〃		無節縄文。
9	〃		〃		LR縄文。
10	〃		〃		
11	－D11グリットP		〃		LR縄文。
12	〃		〃		
13	－E11グリットP		〃		内外面。条痕文。
14	南側調査区		〃		LR単節縄文。
15	〃		〃		斜行縄文。
16	〃		〃		条痕文。
17		Ⅲ層	〃		LR単節縄文。
18	南側調査区		〃		底部外面。
19		Ⅲ層	土師器		内外面ハケメ。
20	－E11グリットP		土師器	カメ	ロクロ→ケズリ。
21	－B8	Ⅲ層	石器	不定形	
22	〃	〃	〃	〃	
23	－D11グリットP		〃	〃	
24	南側調査区		〃	敲石？	

第14図　観音寺遺跡出土遺物

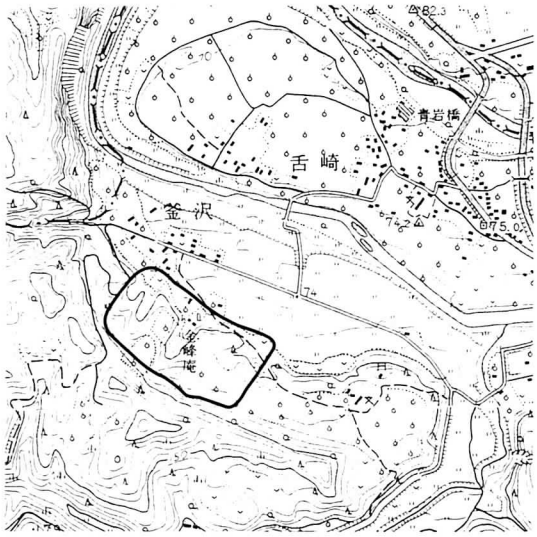
5　畑地帯総合整備事業舌崎地区

釜沢館跡（IE79－1077）

所 在 地；二戸市釜沢

事 業 者；二戸地方振興局農林部農村整備室

調査期日；平成20年２月７日、８日



第15図　釜沢館跡位置図

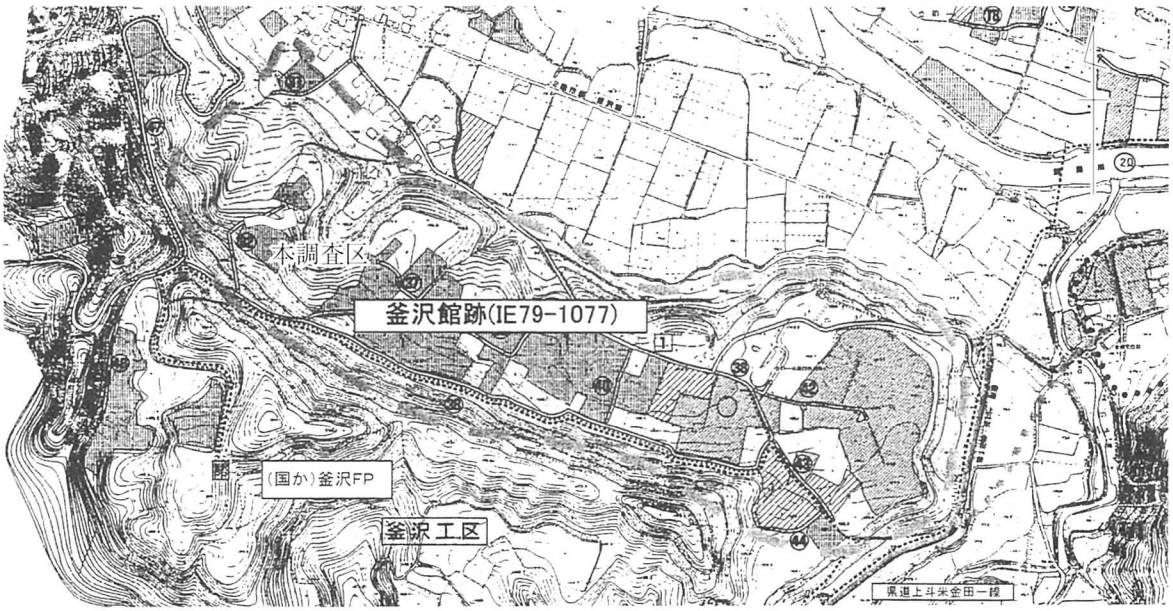
釜沢館跡は、株式会社IGRいわて銀河鉄道金田一温泉駅の北西約3.7㎞に位置し、馬淵川左岸の河岸段丘上に立地しており、現況はリンゴ畑である。岩手県教育委員会編『岩手県中世城館分布調査報告書』（1986；p.272）によると、釜沢館は、釜沢館（本館）と常楽寺館（古館）の東西２郭から構成され、館主は小笠原家であると報告されている。 今回の調査は農道新設工事の一部設計変更に伴うものであるが、旧設計にもとづく本遺跡に係る農道新設予定地については、平成17年度に財団法人岩手県文化振興事業団岩手県埋蔵文化財センターが発掘調査を行っている。その際には、堀を挟んだ北側の曲輪では、竪穴状遺構３棟が検出されているほか、大規模な盛土など普請の痕跡が確認されている。今回の調査対象区域は、堀を挟んだ南側の平場の一部である。

精査の結果、調査区の一部に攪乱を受けている箇所があるものの、概ね耕作土、黒色土（旧表土）直下に、整地層が確認された。今回の調査区内において、他の遺構は確認できず、遺物も出土しなかった。館に関わる遺構は、調査区外に所在しているものと推測される。

遺物等が出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、今回確認した整地層も釜沢館跡に伴うものとみられる。今回は調査範囲が非常に狭いことから、その他の遺構が確認できなかったが、堀を挟んだ曲輪の調査結果からは、整地層に伴う遺構の所在が推測される。

参考文献

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006「釜沢館跡」『平成17年度発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第490集



第16図　釜沢館跡調査区位置図

6　緊急地方道整備事業

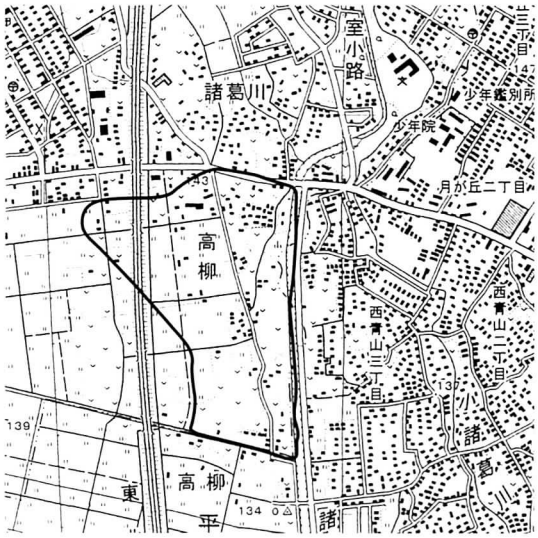
高柳遺跡（LE05－0236）

所 在 地；滝沢村滝沢字高柳

事 業 者；盛岡地方振興局土木部

調査期日；平成19年６月11日、12日、14日、15日

高柳遺跡は、滝沢村役場の東約1.7kmに位置している。諸葛川の右岸の段丘上に立地し、現況は畑及び宅地となっている。本遺跡は滝沢村教育委員会の調査により、７世紀代の竪穴住居跡が調査され、当該時期の土師器が出土したほか、北大式土器が出土したことでも知られている。また、隣接する諸葛川遺跡からも、一部で竪穴住居跡等が検出されており、７世紀代の集落跡が周囲に広がるものとみられる。



第17図　高柳遺跡位置図

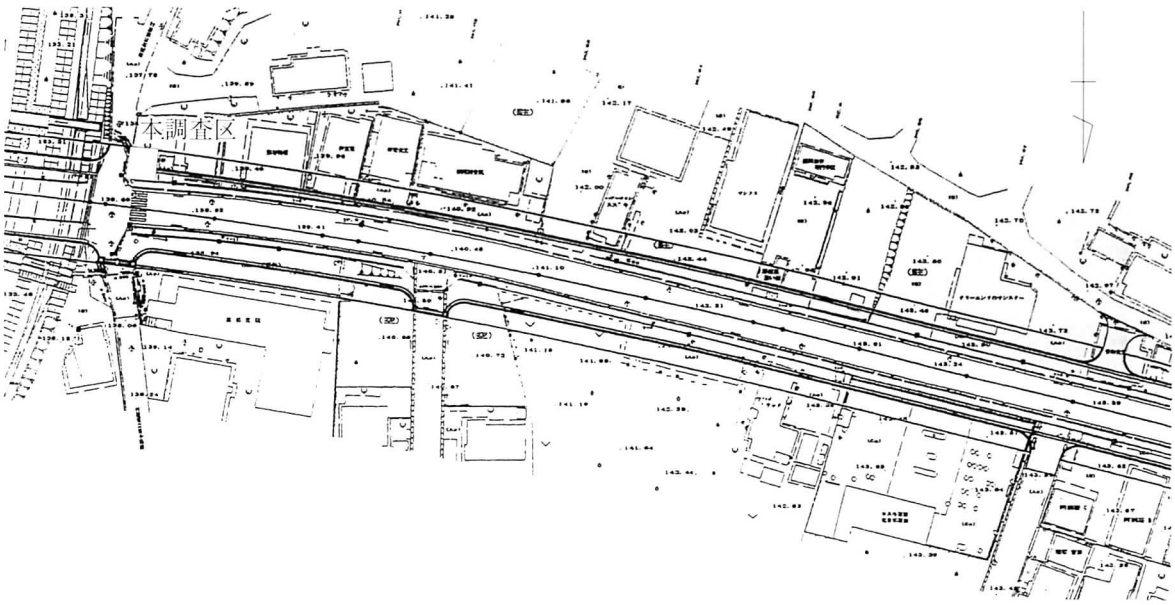
今回の調査は県道223号の改築工事に伴うもので、試掘調査により一部で埋蔵文化財が確認されたことから、本調査を行うものである。調査区は幅５ｍ、長さ20ｍ程の範囲である。今回の調査範囲は、高柳遺跡や諸葛川遺跡で過去に竪穴住居跡が確認された範囲より標高の低い範囲で、諸葛川に下る緩斜面である。

基本土層は第Ⅰ層が表土及び盛土で層厚が100cm程、第Ⅱ層が黒色土層で層厚が30～50cm程、第Ⅲ層が火山灰及び遺物を含む黒色土層で層厚が20～50cm、第Ⅳ層が明褐色土層で検出面にあたる。

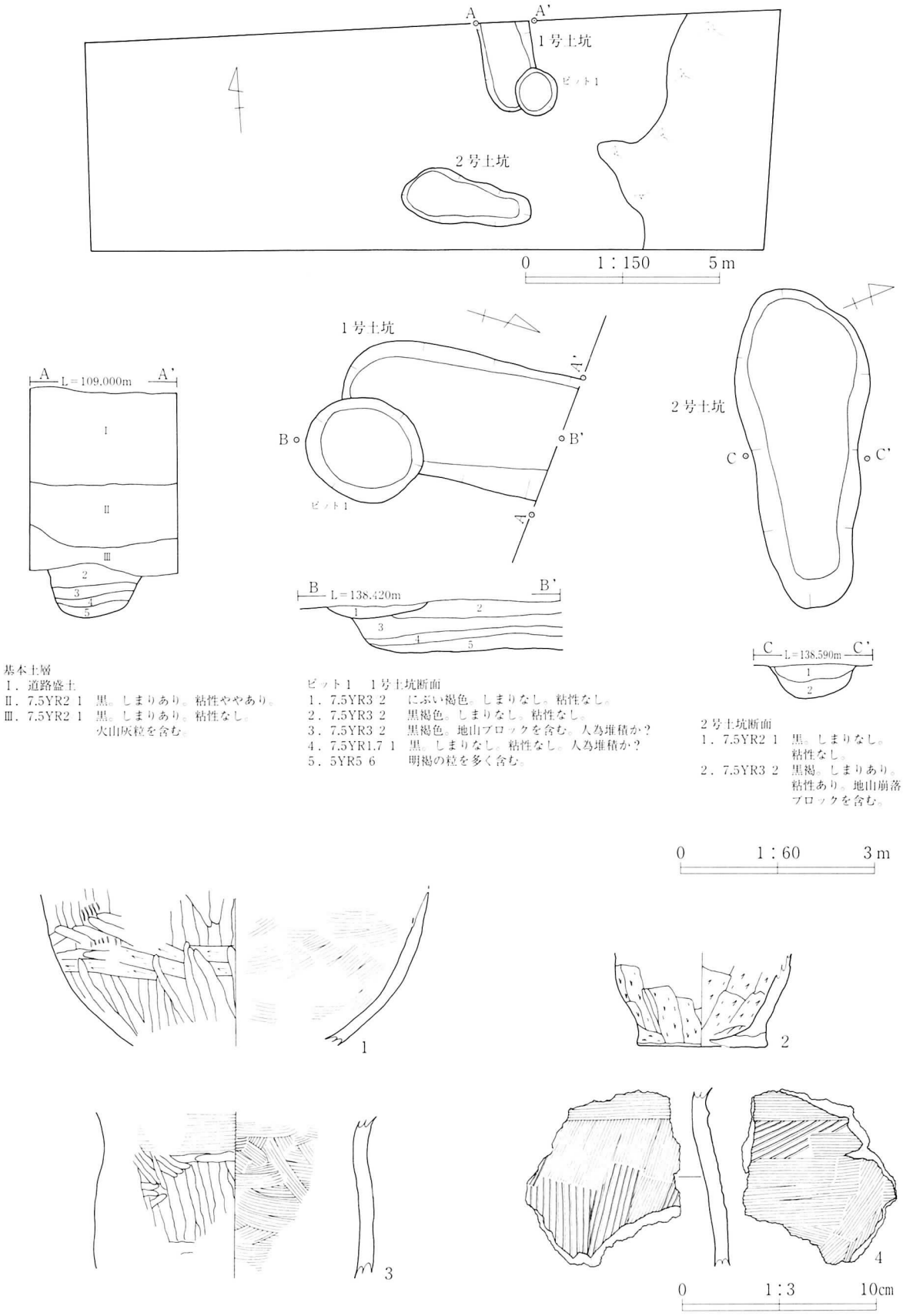
調査区では３基の土坑を確認し、土師器片が出土した。

１号土坑は、幅が160cmほどで長軸が調査範囲内では300cmほどの長方形の土坑である。埋土は５層に分かれ、そのうち３～５層は堆積状況や埋土の様相から人為堆積によるものの可能性が考えられる。ただし、遺物は出土しておらず、時期は不明である。

２号土坑は不整形の土坑で、埋土は２層にわけられる。遺物等は出土しておらず時期は不明である。



第18図　高柳遺跡調査区位置図



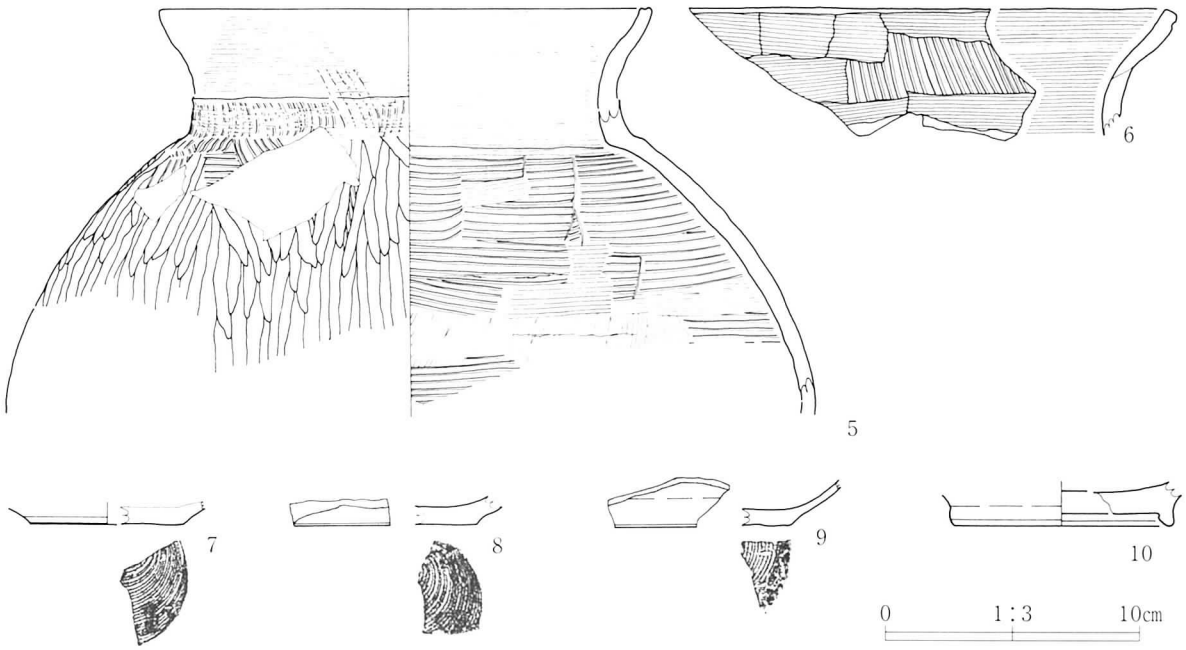
第19図　高柳遺跡検出遺構・出土遺物（1）

3号土坑は、1号土坑を切る形で確認されており、1号土坑より新しい。径80cm程度の円形の土坑である。埋土は単層で、遺物等は出土していない。

今回の調査範囲の東側では遺物包含層が形成されており、遺物はこの層から出土している。これらは諸葛川への落ち際に部分的に形成されている。遺物は土師器が出土している。1は球胴の丸甕または壷の体部破片で、外面はヘラケズリ後に全面にミガキが行われ、内面はヘラナデで調整されている。3、4は長胴甕の体部破片である。5は、球胴の甕もしくは壷で、体部は外面がハケメ調整後にミガキが行われており、一部でハケメが確認できる。内面はヘラナデ後にハケメで調整が行われている。頸部は外面でハケメ後に、内外面ともにナデ調整が行われている。器形等の特徴から、7世紀前葉から中葉頃とみられる。

また、土師器坏の底部片が3点、高台坏の底部片が1点出土している。土師器坏は、いずれも内面非黒色処理のロクロ土師器坏で、底部は回転糸切り無調整である。器形等から9世紀後半から10世紀初頭の遺物とみられる。

今回の調査結果から、高柳遺跡等で過去に確認されている竪穴住居跡等は、今回の調査範囲の緩斜面まで広がらず、以前確認されている範囲の標高のやや高い斜面にとどまるものと考えられる。



高柳遺跡掲載遺物観察表

番号	出土地点	層位	種別	器種	特　　徴
1	包含層		土師器	甕	体部　外面　ケズリ→ミガキ　内面　ナデ。
2	〃		〃	〃	底部　内外面　ヘラケズリ。
3	〃		〃	〃	胴部　外面　ナデ→ミガキ　内面　ナデ。
4	〃		〃	〃	〃　外面　ハケメ→ナデ　内面　ハケメ→ナデ。
5	〃		〃	壺	口縁部～胴上半　頸部　ハケメ→ナデ　内面　ナデ　体部　外面　ミガキ。
6	〃		〃	〃	口縁部　外面　ハケメ→ナデ　内面　ナデ。
7	〃		〃	坏	ロクロ　底部回転糸切痕。
8	〃		〃	〃	〃　〃
9	〃		〃	〃	〃　〃
10	〃		〃	高台坏	〃

第20図　高柳遺跡出土遺物（2）

7　緊急地方道整備事業

高柳遺跡（LE05－0236）

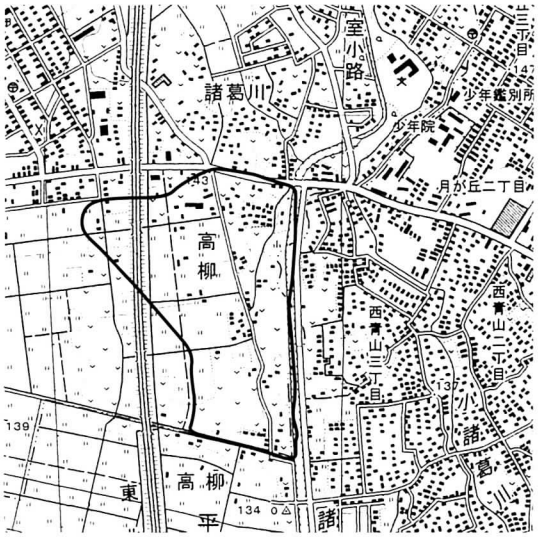
所 在 地；滝沢村滝沢字高柳

事 業 者；盛岡地方振興局土木部

調査期日；平成20年２月27日、28日

今回の調査は県道223号の改築工事に伴うもので、試掘調査により一部で埋蔵文化財が確認されたことから、本調査を行うものである。調査区は幅５ｍ、長さ20ｍ程の範囲である。今回の調査範囲は、６で報告した範囲の段丘上部に位置する範囲である。

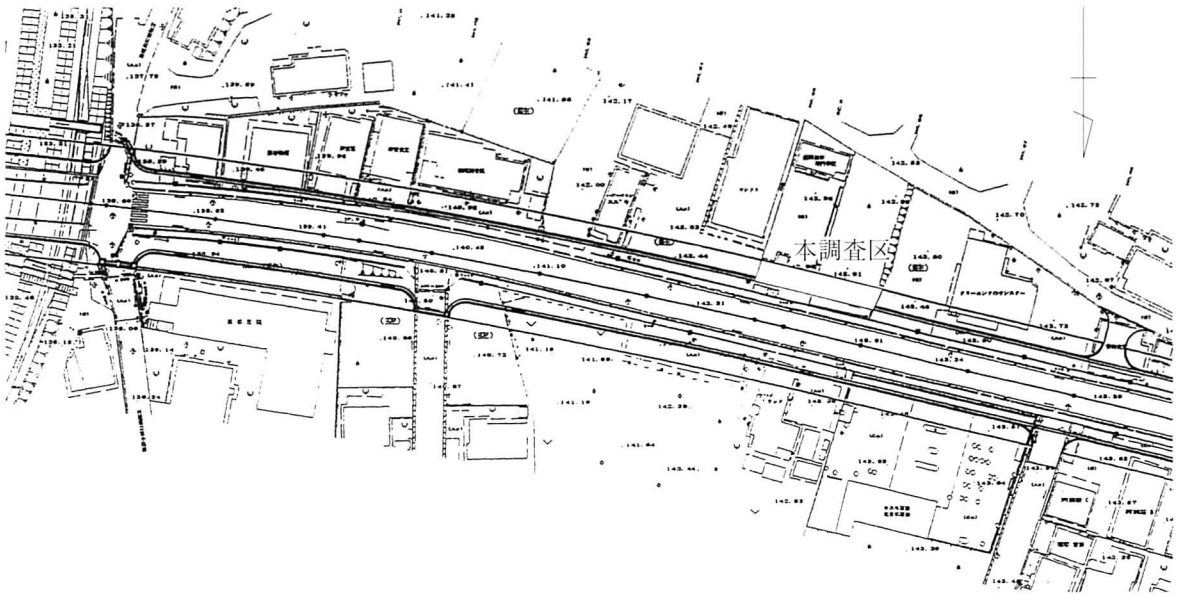
調査区の基本層序は、第１層は道路敷き等の盛り土、第Ⅱ層が暗褐色土層、第Ⅲ層が検出面で地山とみられる黄褐色土層となっている。第Ⅲ層上面にて遺構を検出している。



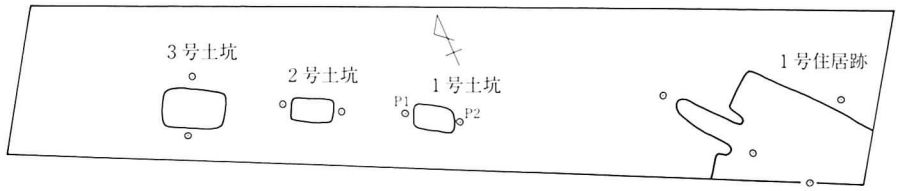
第21図　高柳遺跡位置図

調査区東側で竪穴住居跡１棟、調査区中央から西にかけて並列する方形の土坑を３基確認した。いずれの遺構も第Ⅲ層上面で検出した。遺物は、竪穴住居から土師器坏、甕が出土した。

１号竪穴住居跡は平面形が方形で、カマドをもつ住居跡である。カマドは西に煙道部をむけている。住居跡は、全形は不明であるが、調査区内では約３×2.5ｍを確認しており、方形とみられる。埋土はいずれも自然堆積土で、堆積層を７層に区分した。８層、９層はそれぞれ住居内の柱穴の埋土である。カマドは竪穴住居の地山を削りだして成形した後に、表面に粘土を貼り付けて整形している。南側の袖には石が残されており、カマド周辺から同様の受熱痕跡のある石が出土したことから、この竪穴住居跡のカマドは粘土で成形した後に側壁部分に、石を貼り付けて成形したものとみられる。煙道部及び煙出しは削平を受けているが、約１ｍほど西側に延びている。住居の床面は、掘り方の上面に全体に２～３㎝程の貼床を行っている。住居内では、貼床上面から、柱穴が４基確認された。径はいずれも20～30㎝ほどで、深さは20㎝である。埋土は単層である。またカマドの北側、住居の北西隅に土器がまとまって確認された。いずれの土器も正位で、完形に近い形で残されていた。この範囲は床面が５㎝ほど掘りくぼめてあり、その範囲にのみ土器が残されてい

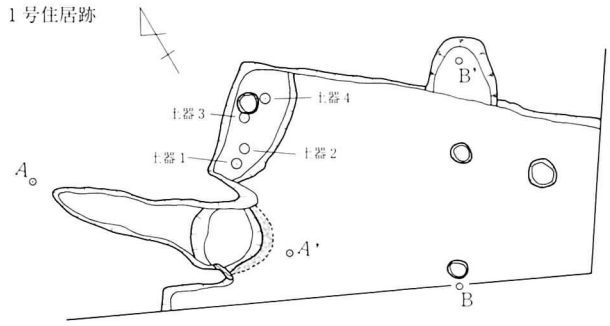


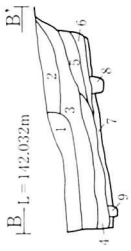
第22図　高柳遺跡調査区位置図



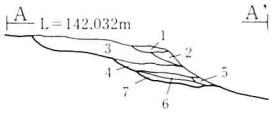
0　1：150　5m

1号住居跡



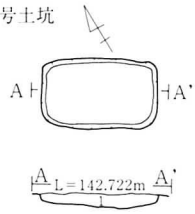


住居跡断面
1．試掘トレンチ
2．7.5YR4/3　褐色土。地山ブロックやや含む。
3．7.5YR4/2　灰褐色土。
4．7.5YR4/1　褐灰色土。
5．10YR5/3　にぶい黄褐色土。壁の崩落した地山ブロックを含む。
6．10YR6/4　にぶい黄橙色土。地山ブロック少し含む。土器を少し含む。粘床。
7．7.5YR
8．P1埋土。
9．P2埋土。



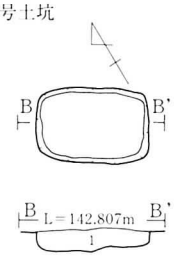
住居跡及びカマド断面
1．7.5YR3/1　黒褐色土。シルト。
2．7.5YR5/6　明褐色土。カマド。地山崩落土。
3．7.5YR5/2　灰褐色土。焼土ブロック含む。
4．7.5YR6/3　にぶい褐色土。焼土ブロック。炭化物含む。
5．5YR5/3　にぶい赤褐色土。焼土ブロック。地山ブロック含む。

1号土坑



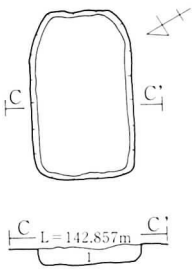
1号土坑断面
1．7.5YR3/1　黒褐色土。地山ブロック混じる。

2号土坑



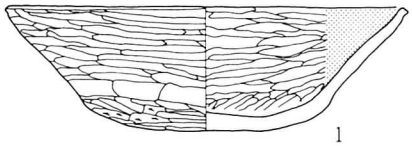
2号土坑断面
1．7.5YR3/1　黒褐色土。
地山ブロック混じる。

3号土坑

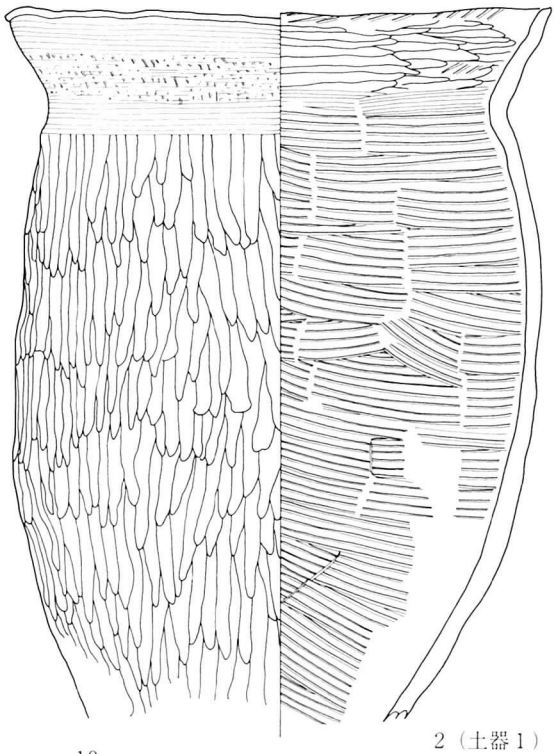


3号土坑断面
1．7.5YR3/1　黒褐色土。
地山ブロック混じる。

0　1：30　1m



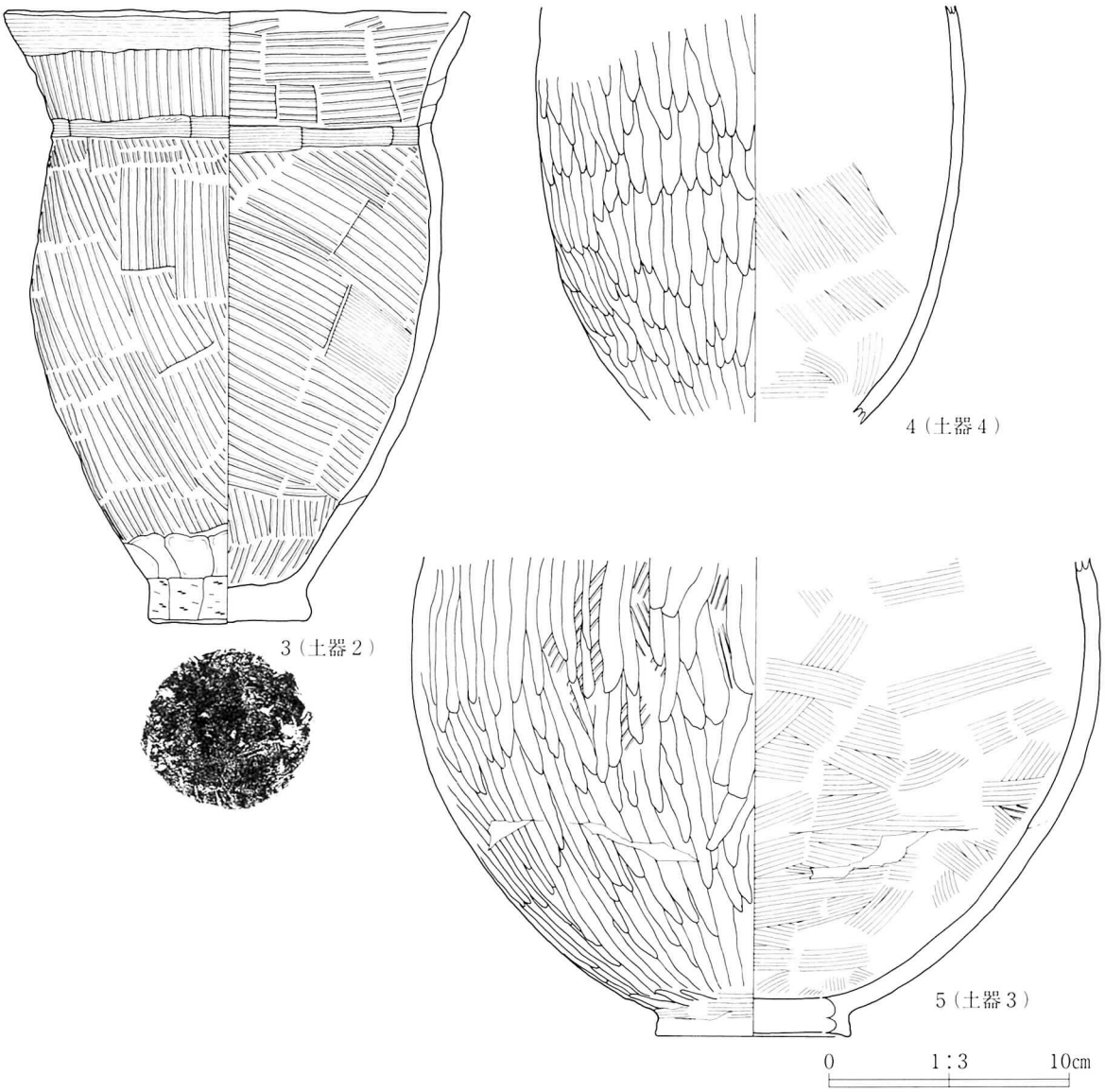
1



2（土器1）

0　1：3　10cm

第23図　高柳遺跡検出遺構・出土遺物（1）



高柳遺跡掲載遺物観察表

番号	出土地点	層位	種別	器種	特　　徴
1	住居内		土師器	坏	内黒　丸底　外面　ミガキ　ケズリ　内面　ミガキ。
2	〃　（土器１）		〃	甕	外面　口縁　ハケメ→ヨコナデ　胴部　ミガキ　内面　口縁　ハケメ→ミガキ　胴部　ハケメ。
3	〃　（〃２）		〃	〃	頸部　外面　ハケメ→ナデ　内面　ハケメ　体部　外面　ハケメ　内面　ハケメ。
4	〃　（〃３）		〃	〃	外面　ミガキ　内面　ナデ。
5	〃　（〃４）		〃		外面　ハケメ→ミガキ　内面ハケメ→ナデ。

第24図　高柳遺跡出土遺物（２）

る。このことから、住居の隅に正位で土器が並べておかれたものと想定でき、その際に床面を一部整形したものと考えられる。この他に出土遺物は、住居中央部床面から、土師器坏が出土している。ただし、全体に遺物の出土量は少ない。

出土した遺物は、いずれも土師器で、カマド脇からまとまった状態で土師器甕が出土している。1は土師器坏で住居跡床面から出土している。口径が16.8cm、器高が5.3cmで、丸底の器形である。口縁部は方形に整形している。外面は体部やや下半部分にナデ調整により段が形成されているが、内外面ともに稜は形成されていない。外目は体部全体にミガキが行われており、体部下半部分には一部にヘラケズリの痕跡が残されている。内面は黒色処理が行われている。2は土師器甕で、口径が21.6cm、器高は残存している部分で28cmである。正位でおかれた状態で出土した（土器1）。体部外面はミガキ、内面はハケメ調整である。口縁部は外面がハケメの後、横ナデ、内面がハケメ後にミガキで、頸部接合部分でヘラナデが行われている。3は土師器甕で、長胴甕で体部最大径が体部上半から中央になる。口径は20.8cm、器高は27.2cm、底径が7.1cmである。体部外面はハケメ調整が行われており、底部付近はヘラケズリである。体部内面もハケメ調整である。頸部及び口縁部は、外面はハケメの後にヘラナデ、内面は横方向にハケメで頸部接合部分がナデである。口縁部端部は方形に整形されている。胎土に雲母を多く含む。これも正位で置かれた状態で出土した(土器2)。4は土師器甕の体部で全形は不明であるが、長胴甕とみられる。外面はミガキ、内面は一部がヘラナデ調整されている。正位で置かれた状態で出土した(土器4)。5は土師器の球胴甕または壷の体部である。全形は不明である。外面はミガキが行われており、一部にハケメが残されており、ハケメ後にミガキが行われたとみられる。内面はヘラナデ調整である。正位でおかれた状態で出土した（土器3）。これらの出土遺物は、その特徴から、7世紀前葉から中葉の時期と考えられる。これまでの調査で確認されている高柳遺跡の出土遺物と同時期もしくはやや新しい時期とみられる。

土坑は3基が同じ向きに、並列している。1号土坑は95×50cm、2号土坑は95×50cm、3号土坑は140×80cmである。埋土はいずれの土坑も単層で、人為堆積土とみられる。竪穴住居検出箇所より標高が高く、削平のためか、いずれの土坑も深さが20cm程度と浅い。

遺物は、3号土坑では、埋土中底面付近から土師器甕の体部片を1片確認しているが、その他に出土遺物はない。遺物等も少なく時期や性格は不明であるが、底面付近に土師器片が含まれていることから、竪穴住居跡等と同時期の可能性が考えられる。

これらの調査の結果、高柳遺跡からは7世紀前葉から中葉頃の竪穴住居跡1棟と、ほぼ同様の時期とみられる土坑3基を確認した。特に出土した土器は、点数は少ないものの、カマド脇に正位で置かれた状況で出土しており、一括性の高いものと考えられる。これらの遺物の特徴は、従来高柳遺跡で出土した土器と共通する特徴を多くもつが、異なる特徴をもつものも含んでおり、当該地域の土器を捉える上でも重要な資料と考えられる。特に7世紀代の出土遺物はこれまで出土事例が多くなく、注目される。

また、今回の竪穴住居跡は、高柳遺跡でこれまで確認された竪穴住居跡から、やや異なる範囲から検出されており、高柳遺跡等で確認されている集落域がやや段丘上部まで広がることが確認された。過去の調査結果から、段丘の縁に沿うかたちで住居跡等が多く分布するとみられるが、一部に段丘上部にも分布すると考えられる。

基準点座標Ｐ１（ｘ＝－30085.431，ｙ＝22917.384)、Ｐ２（ｘ＝－30084.677，ｙ＝22918.276)

参考文献

滝沢村教育委員会1987『高柳遺跡』滝沢村文化財調査報告書7集

滝沢村教育委員会1989『高柳遺跡』滝沢村文化財調査報告書9集

8　松園養護学校整備事業

松屋敷遺跡（KE96－0318）

所 在 地；盛岡市上田字松屋敷

事 業 者；岩手県教育委員会事務局教育企画室

調査期日；平成19年９月30日

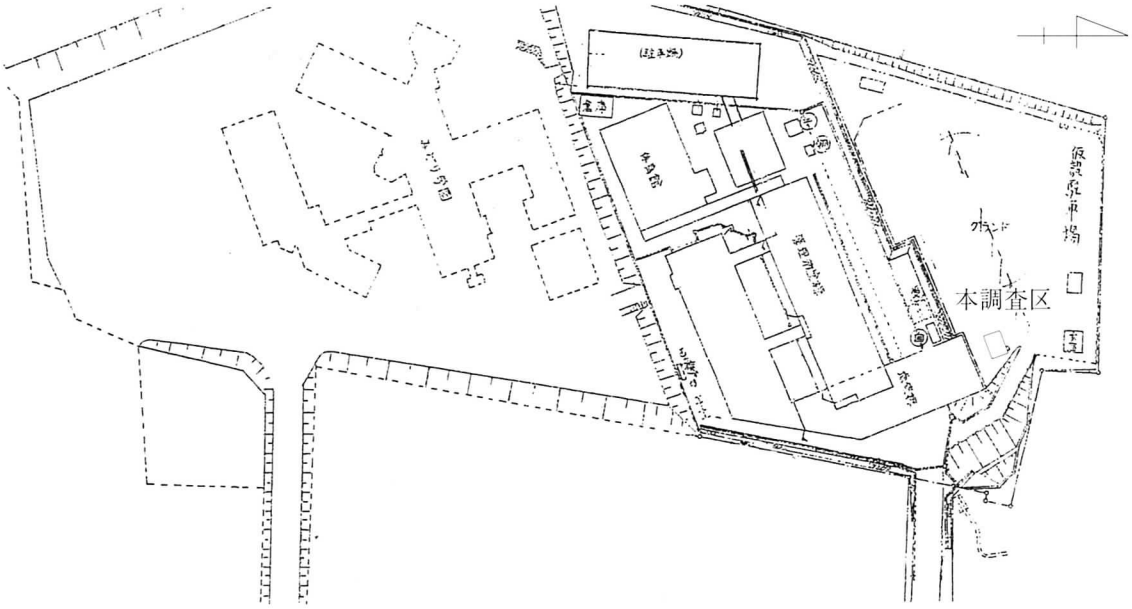
第25図　松屋敷遺跡位置図

松屋敷遺跡は、盛岡市役所の北約５kmに位置し、北上川左岸の四十四田丘陵に立地しているが、地形改変が著しい。本遺跡では、松園養護学校校舎建設に伴い、平成５年に岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが発掘調査を行い、縄文時代早期及び中期の竪穴住居跡が検出され、これらの遺構と遺物包含層から、多量の土器が出土している。また、今回の事業に伴って同センターが平成19年度に第２次発掘調査を行い、大木８a式期を中心とした縄文時代中期の竪穴住居跡や土坑が検出されている。

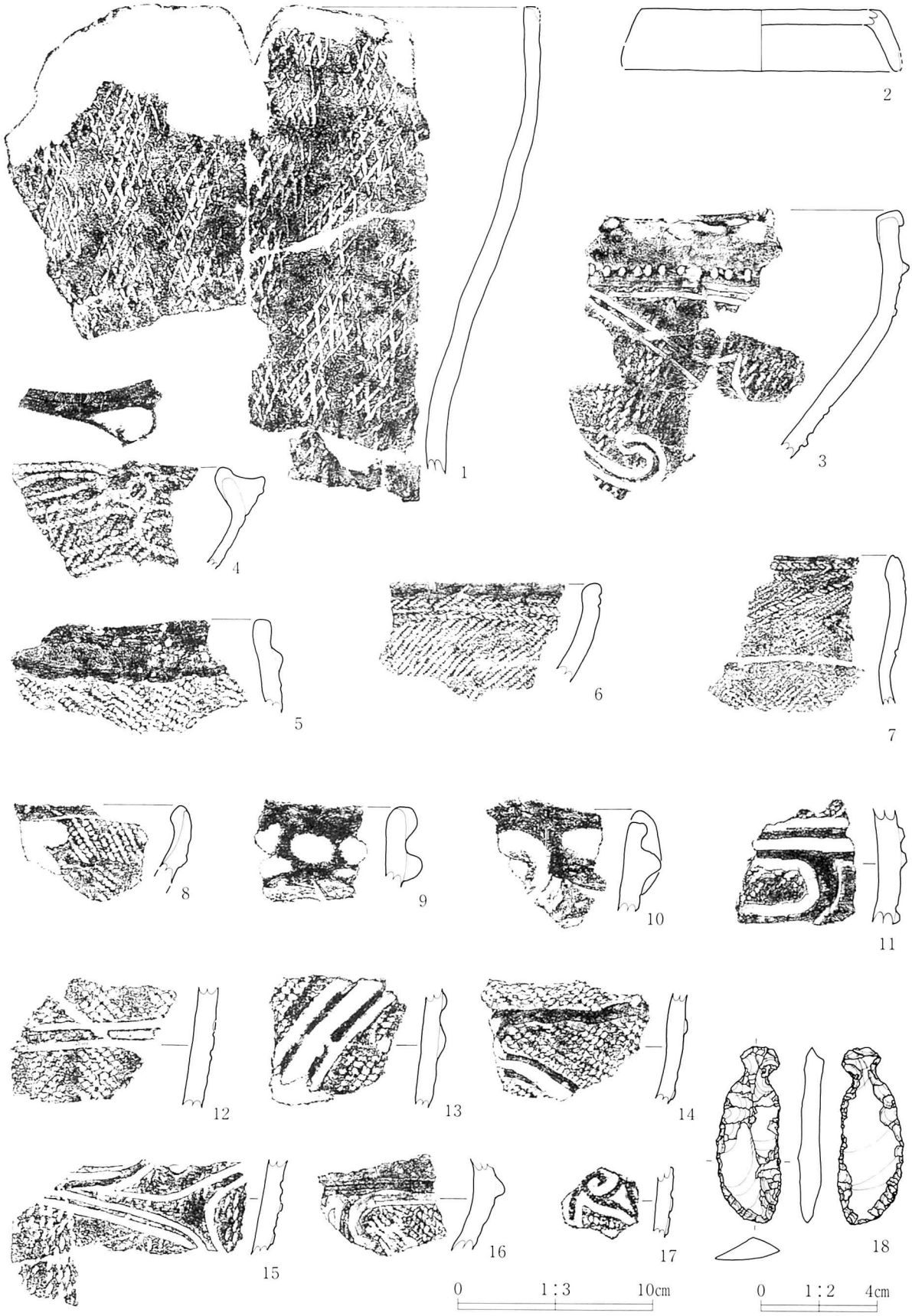
ここで掲載する遺物は、当課で工事立会を行った範囲で出土したものである。調査範囲は松屋敷遺跡第２次調査における調査区の北東側20mほどの箇所で、工事のための掘削深や範囲が狭小であることから、工事立会としたものである。遺物は、狭い範囲の堆積層から出土したもので、遺構等に伴って出土したものではないが、ここでは代表的な遺物を掲載する。

１は体部に網目状撚糸文が施文されており、縄文時代前期の大木５～６式とみられる。口縁部まで残存しており、口縁部直下まで施文が行われる。

２は器台とみられるが、全形は不明である。外面はミガキ、内面はナデが行われ、外面は丁寧な調整が行われているが、内面は粗雑な調整にとどまる。器高は3.1cmほどで、器厚は約0.8cmほどである。他遺跡でこれまで確認されている器台は、器高が厚く穿孔がみられるものが多いが、２ではそれらが確認できない。４は浅鉢の口縁部である。波状の隆体文をもち、口縁部周辺に縄文原体の圧痕がある。６は深鉢の口縁部で、



第26図　松屋敷遺跡調査区位置図



第27図　松屋敷遺跡出土遺物

松屋敷遺跡掲載遺物観察表

番号	出土地点	層位	種別	器種	特　　徴
1	落ち込み		縄文	浮鉢	網目状撚糸縄文　大木５～６式
2	〃		〃	器台	器台　外面　ミガキ　内面　雑なナデ
3	〃		〃		口縁部
4	〃		〃	浅鉢	原体圧痕　LR縄文　大木８a
5	〃		〃		〃　RL縄文　大木８a
6	〃		〃		〃　LR縄文　大木８a
7	〃		〃		〃　LR縄文　大木８a
8	〃		〃		〃　RL縄文　大木８a
9	〃		〃		〃　RL縄文　大木８a
10	〃		〃		〃　RL縄文　大木８a
11	〃		〃		胴部　大木８a
12	〃		〃		〃　大木８a
13	〃		〃		〃　大木８a
14	〃		〃		〃　大木８a
15	〃		〃		〃　大木８a
16	〃		〃		〃　大木８a
17	〃		〃		〃　大木８a
18	〃		〃	石匙	完形

原体圧痕が施されている。９､13はやや新しい様相をもつものとみられる。

石器の出土量は少ない。図化したものは18で、石匙である。全長は6.7㎝、幅は2.7㎝で、背面腹面の両面に調整が行われている。

このように今回出土した遺物は１をのぞいて、その中でやや新しいものもみられるが、その多くが縄文時代中期の大木８a式に属するものと考えられる。前述のとおり、松屋敷遺跡ではこれまで大木８a式期を中心に集落跡が確認されている。今回の範囲は、これまでの調査のやや北側にあたる範囲であるが、今回出土した遺物も、縄文時代中期の大木８a式に帰属するものを中心としている。

参考文献

阿部勝則2001「岩手県内出土の縄文時代中期の器台について」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』ＸＸpp.1－10

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995『松屋敷遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第224集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2008『松屋敷遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第545集

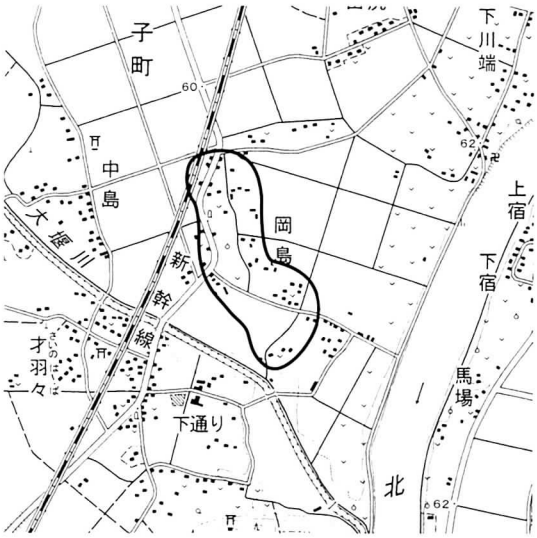
9　経営体育成基盤整備事業更木新田地区

岡島遺跡（ＭＥ56－1289）

所 在 地；北上市二子町字岡島

事 業 者；県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室

調査期日；平成19年６月25日､26日



第29図　岡島遺跡位置図

岡島遺跡は、遺跡は、北上市役所の北東約3.6kmに位置し、北上川右岸の沖積地上に形成された微高地上に立地している。今回の調査は、歩道設置工事に伴うもので、平成18年度に実施した試掘調査において埋蔵文化財が確認された箇所が対象である。

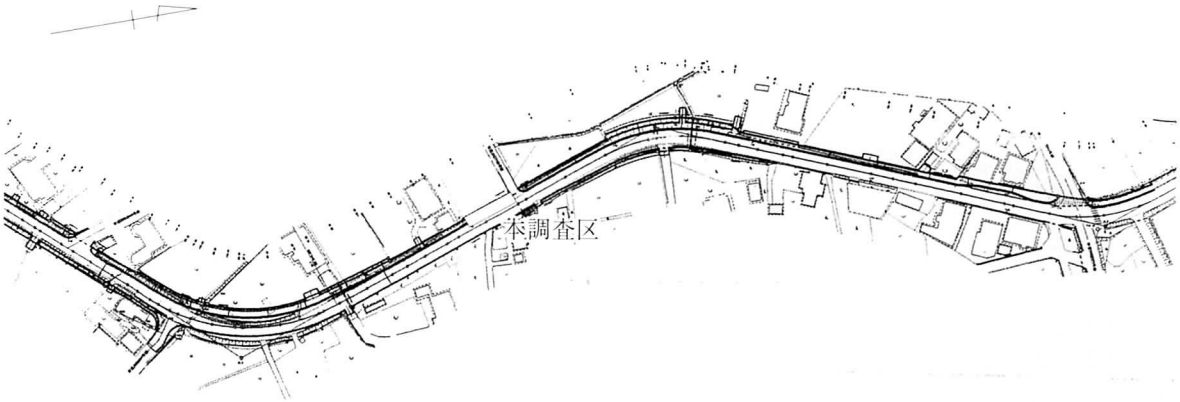
基本土層は第Ⅰ、第Ⅱ層が表土及び盛土で層厚が40cm程度、第Ⅲ層が黒褐色土層で層厚が40cm程度、第Ⅳ層が黒褐色砂質土層で層厚が20cm程度である。

精査の結果、溝跡（１、２号溝）が２条と柱穴状土坑３基が検出された。

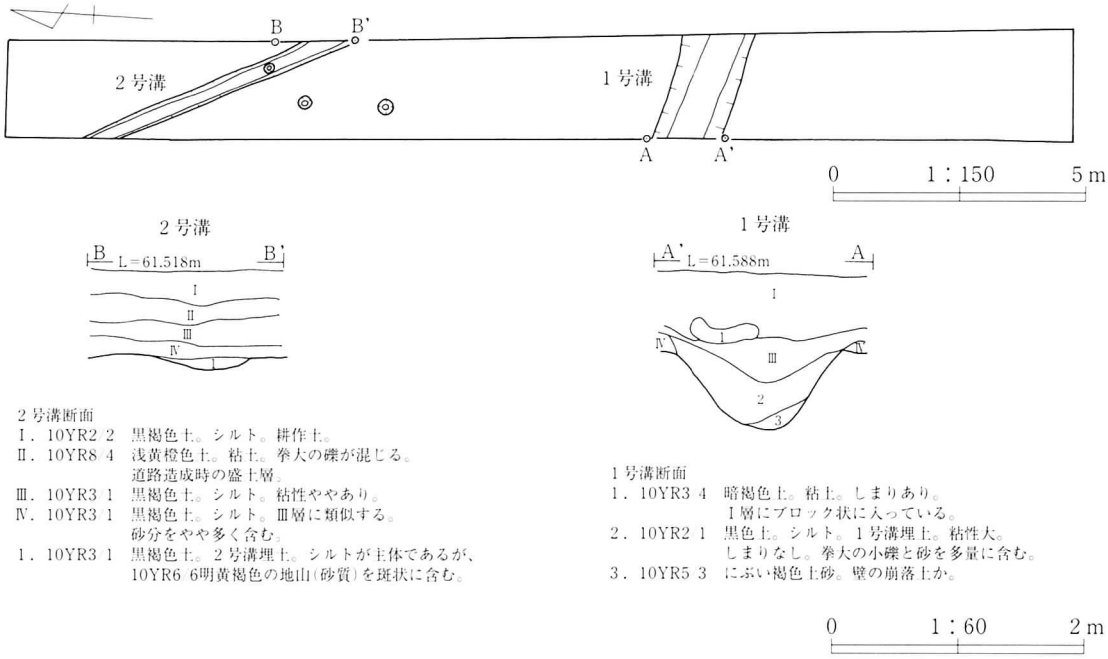
１号溝はほぼ東西方向に走っており、幅110～120cm、深さ80～90cmの規模である。遺物が出土していないため、遺構の構築時期は不明である。

２号溝については、北東－南西方向に延びており、幅40cm、深さ12cmほどである。この溝の一部は、調査時にはすでに使用されずそのまま埋められていた旧排水路施設による攪乱を受けていたものの、比較的良好に残存していた。遺物は出土しておらず、構築時期は不明である。

３基の柱穴状土坑は、ほぼ円形を示し、径30cm、深さ30cmのものが２基、径20cm、深さ20cmのものが１基であった。建物跡を構成するものと推測されるが､調査区内にはこれら以外に柱穴状土坑が確認できなかったことから、同一の建物跡を構成する他の柱穴等は、調査区西側の現畑地下に所在しているものと推測した。検出された柱穴状土坑３基の構築時期は遺物が伴わないため不明である。



第30図　岡島遺跡調査区位置図



2号溝断面
Ⅰ．10YR2/2　黒褐色土。シルト。耕作土。
Ⅱ．10YR8/4　浅黄橙色土。粘土。拳大の礫が混じる。
　　道路造成時の盛土層。
Ⅲ．10YR3/1　黒褐色土。シルト。粘性ややあり。
Ⅳ．10YR3/1　黒褐色土。シルト。Ⅲ層に類似する。
　　砂分をやや多く含む。
1．10YR3/1　黒褐色土。2号溝埋土。シルトが主体であるが、
　　10YR6/6明黄褐色の地山(砂質)を斑状に含む。

1号溝断面
1．10YR3/4　暗褐色土。粘土。しまりあり。
　　Ⅰ層にブロック状に入っている。
2．10YR2/1　黒色土。シルト。1号溝埋土。粘性大。
　　しまりなし。拳大の小礫と砂を多量に含む。
3．10YR5/3　にぶい褐色土砂。壁の崩落土か。

第31図　岡島遺跡検出遺構

Ⅱ　試掘調査

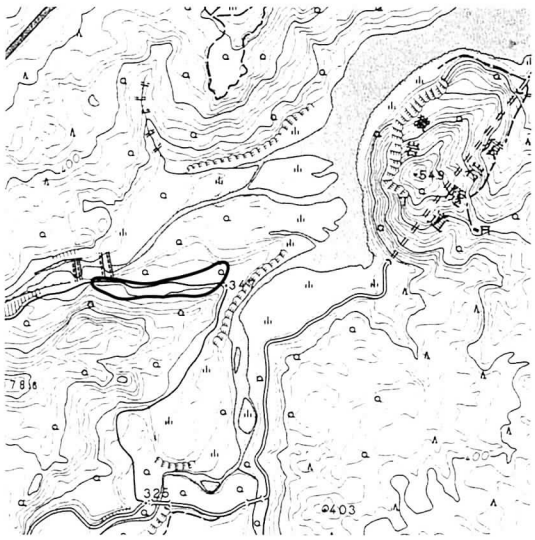
1　いさわダム建設事業

下嵐江Ⅰ遺跡（NE31－0084）

所 在 地；奥州市胆沢区若柳

事 業 者；国土交通省東北地方整備局
　　胆沢ダム工事事務所

調査期日；平成19年４月23日、24日



第32図　下嵐江Ⅰ遺跡位置図

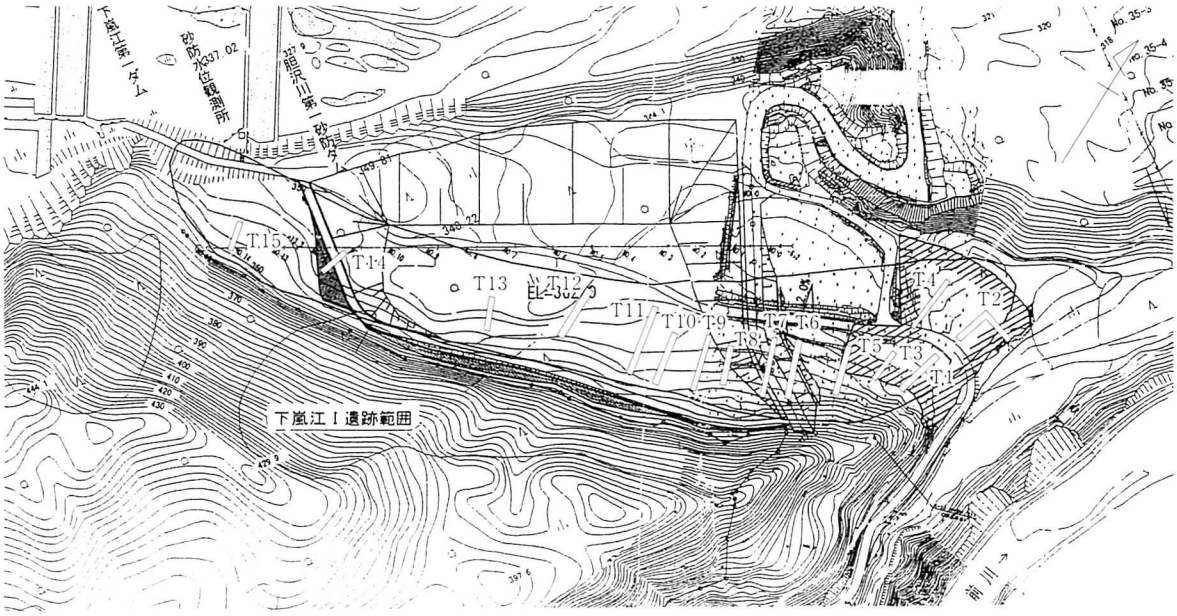
下嵐江Ⅰ遺跡は、奥州市役所の西南西方向約25.2kmに位置し、東流する胆沢川右岸の河岸段丘上に立地している。今回の調査は、ダム建設事業に伴い発生する残土置き場予定地が対象である。調査対象区に15本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ15）。

仙北街道を挟んで西側に位置する山裾に、Ｔ１、Ｔ３、Ｔ５～Ｔ15を設定し、東側に緩やかに傾斜している斜面にＴ２及びＴ４を設定した。山裾に設定した各トレンチにおいては、傾斜が急となるトレンチ中央部分から西端にかけては、第Ⅰ層下に第Ⅳ層あるいは、第Ⅳ層下層にあたると思われる褐色礫層が露出していた。傾斜が緩くなるトレンチ東側にかけて、旧表土にあたると推測される黒色土の堆積がみられる箇所（Ｔ１、Ｔ３、Ｔ５～Ｔ８）があり、Ｔ３においては、溝状遺構が検出され、埋土には縄文土器片を含んでいる。

緩斜面に設定したＴ２、Ｔ４であるが、Ｔ２において第Ⅴ層上面で径30cm大の円形を呈する柱穴状土坑２基が検出され、縄文土器片も数点第Ⅲ層から出土した。

沼地状の湿地部分周辺に設定したＴ11～Ｔ13については、表土直下に水成堆積であると推測される厚い黒色土がみられ、その下層はグライ化した粘土層であった。湿地を挟んだ北西の尾根部分にＴ14及びＴ15を設定した。表土下は、70cm以上の崖錐性の礫を多く含む層があり、その下層はグライ化した粘土層もしくは褐色礫層がみられ、周囲の地形観察から山体が崩落して堆積した箇所であると推測した。

以上のことから、本遺跡における遺構及び遺物は、緩斜面を中心に所在し、沢を挟んだ東側には所在していないと判断した。



第33図　下嵐江Ⅰ遺跡調査区位置図

2　いさわダム建設事業

下嵐江Ⅱ遺跡（NE31－0096）

所 在 地；奥州市胆沢区若柳

事 業 者；国土交通省東北地方整備局

胆沢ダム工事事務所

調査期日；平成19年４月24日、７月23日

第34図　下嵐江Ⅱ遺跡位置図

下嵐江Ⅱ遺跡は、奥州市役所胆沢支所から西約15kmに位置し、胆沢川左岸の山間の段丘上に立地している。今回の調査は、胆沢ダム建設事業に伴うものである。調査対象範囲に14本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ14）。

Ｔ１からＴ５を設定した範囲では、いずれのトレンチでも、表土下に一部で黒褐色土層が確認されたが、遺構及び遺物は確認されなかった。また、Ｔ２からＴ５を設定した範囲では、黒褐色土層が確認できず、過去の地形改変により土層が大きく削平されていることが確認できた。

Ｔ６～Ｔ14を設定した範囲では、一部で遺構等が確認された。Ｔ６の南東端から30×35cm程の柱穴状の遺構が10基程度確認された。遺物等が確認されなかったため、時期は不明であるが掘立柱建物跡を構成する可能性が高いと考えられる。Ｔ７からは、竪穴住居状の遺構が２基確認された。このほかに、Ｔ８、Ｔ10、Ｔ13でも柱穴状の遺構が多数確認された。

これらの調査の結果、下嵐江Ⅱ遺跡では、柱穴等を中心に遺構等が確認された。この範囲では、旧街道沿いの番所跡等の所在が知られており、今回の調査で検出した遺構も関連するものがあるとみられる。また、遺物等は確認されなかったものの、土層の状況からは遺構等の検出面が複数あると考えられる。

第35図　下嵐江Ⅱ遺跡調査区位置図

3　いさわダム建設事業

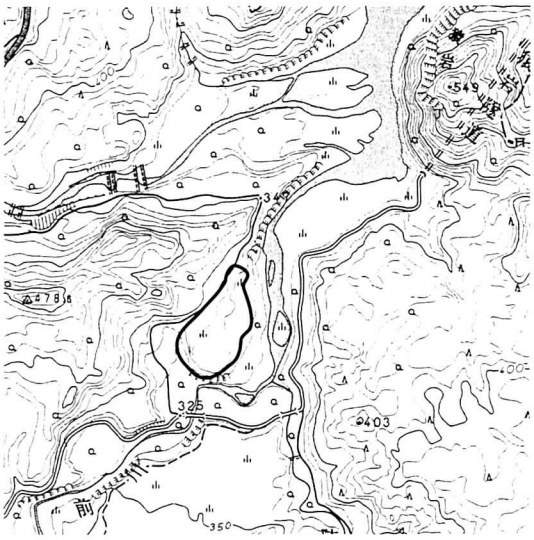
坪渕Ⅱ遺跡（NE31－1023）

所 在 地；奥州市胆沢区若柳字坪渕

事 業 者；国土交通省東北地方整備局

胆沢ダム工事事務所

調査期日；平成19年７月14日、15日、11月29日、12月14日



第36図　坪渕Ⅱ遺跡位置図

坪渕Ⅱ遺跡は奥州市役所の西南西約25kmに位置し、胆沢川支流前川の左岸の河岸段丘上に立地している。今回の調査は、ダム建設事業に伴う工事用道路及び付け替え道路の建設予定箇所を対象としている。坪渕Ⅱ遺跡では、調査区に14本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ14）。

遺跡は前川対岸に猿岩を望む、川へ下がる南向きの緩斜面である。Ｔ３では、近世墓とみられる土坑を３基、縄文時代とみられる土坑を１基検出した。周辺部から縄文土器片も確認されており、このトレンチの周辺には住居跡等を含む縄文時代の遺構の存在が予想される。また、この調査区の上部の道路を挟んだ山裾の緩斜面にＴ８～Ｔ10のトレンチを設定した。Ｔ８では、縄文時代の土器片を含む土坑を２基、30×30cmの土坑を１基、50×50cmの土坑を１基確認した。また、90cm四方程度に広がる焼土遺構も確認している。Ｔ９では、130×100cmほどの土坑を１基、Ｔ10では、焼土遺構を１基確認している。Ｔ11、12では、遺構等はみられず、沢筋にあたることが土質等から推測された。これらの試掘調査結果から、坪渕Ⅱ遺跡は、縄文時代の集落跡を中心として、一部に近世墓等が存在することがわかる。Ｔ３を設定した緩斜面から山裾のＴ８～Ｔ10を設定した緩斜面の、沢で区切られる範囲に、遺構等が存在するものと判断できる。

第37図　坪渕Ⅱ遺跡調査区位置図

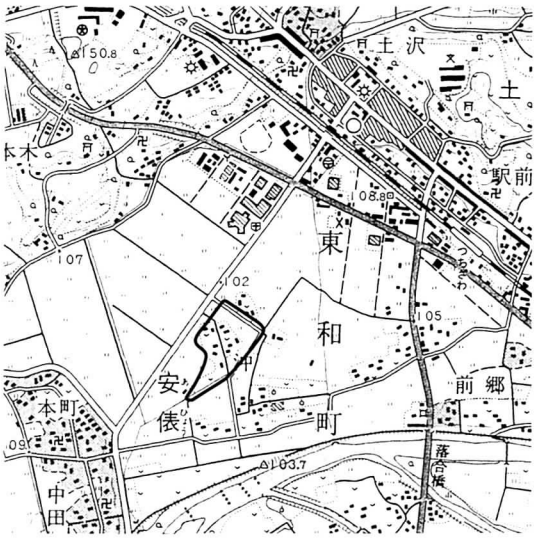
4　東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）新直轄事業

中嶋遺跡（NE38－0210）

所 在 地；花巻市東和町安俵

事 業 者；国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所

調査期日；平成19年５月８日



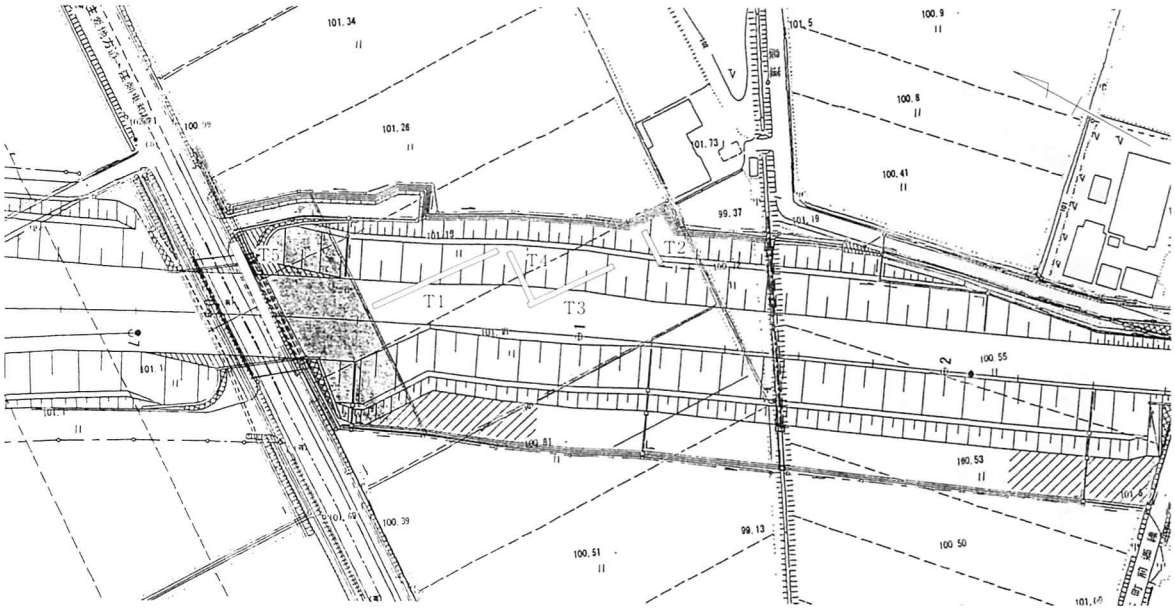
第38図　中嶋遺跡位置図

中嶋遺跡は旧東和町役場の南西約1.0kmに位置し、猿ヶ石川北岸の自然堤防から後背湿地にかけて立地している。現況は水田及び道路で標高は100m前後である。今回の調査は東北横断自動車道（遠野～東和間）新直轄事業に伴うもので、調査対象区域に５本のトレンチを設定した。調査範囲は主要地方道江刺東和線で東西に分かれており、遺跡範囲に近い東側に５本、西側に１本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ５）。

東側の調査区では、北側が南側より標高が高く、北側が自然堤防の端部に南側が後背湿地にあたるものとみられる。後背湿地に位置するとみられるＴ１、２、３では９世紀中葉とみられる土師器や須恵器を含む層が確認された。この包含層は20cm程度の厚さである。自然堤防面に設定したＴ４では遺物包含層にあたる層は、削平されており存在しなかったが土師器片が検出された。また、Ｔ４では幅約１ｍ程の南北に走る溝が検出された。今回の調査範囲は自然堤防の端部であることから、遺構等も少なかったが、より自然堤防面の中心に向かう箇所では平安時代の遺構等が分布するものとみられる。

調査区西側では、東側と同様に北側が南側より標高が高くなる様子がうかがえた。しかし、遺物を含む層も確認されなかった。このため、遺構等の分布は東側の調査区内に収まるものと考えられる。

以上の結果、中嶋遺跡では自然堤防に近接する後背湿地から自然堤防にかけて、平安時代の遺物が確認された。遺物の状況や地形面の様相から、自然堤防上には当該時期の遺構が存在するとみられる。



第39図　中嶋遺跡調査区位置図

5　一般国道４号渋民バイパス改築工事

昼久保Ⅲ遺跡（KE57－0139）

所 在 地；盛岡市玉山区芋田字昼久保

事 業 者；国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所

調査期日；平成20年１月８日

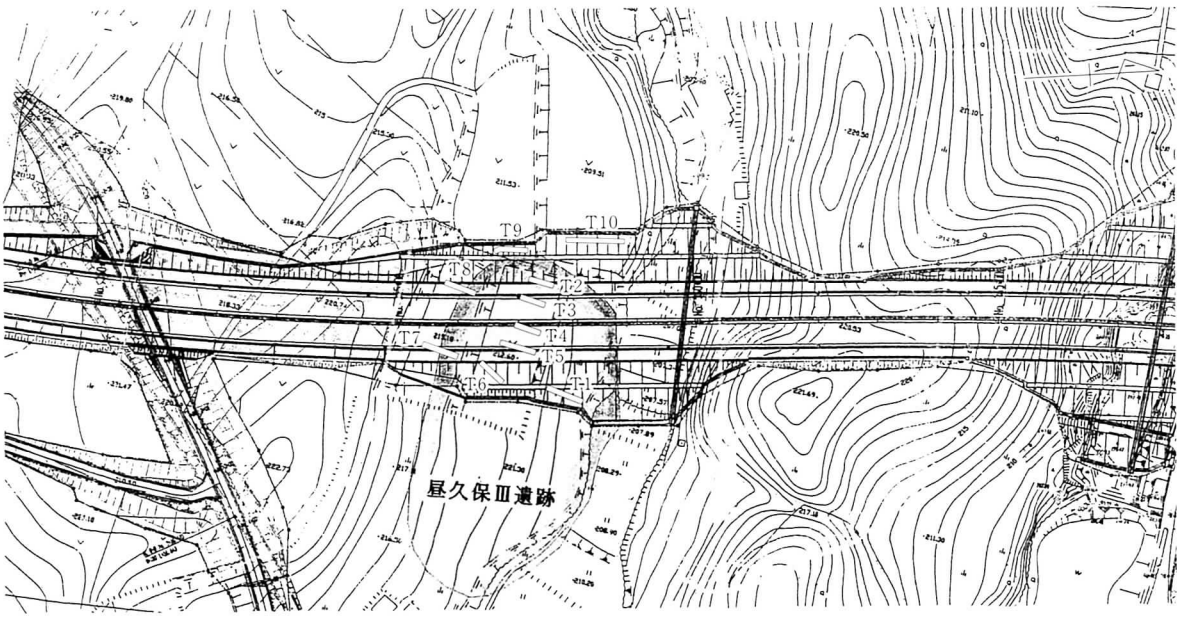
昼久保Ⅲ遺跡は、盛岡市玉山区総合支所の北北東約2.7km に位置し、北上川の支流の小河川左岸の緩斜面端部に立地しており、標高は210から215mである。現況は果樹園となっており、平坦部をつくる造成時の地形改変が行われていることがわかる。今回の調査は、一般国道４号渋民バイパス建設事業に伴うもので、調査対象範囲に10本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ10）。

第40図　昼久保Ⅲ遺跡位置図

基本層序は、Ⅰ層表土、第Ⅱ層が黒褐色土層で層厚15cm、第Ⅲ層が暗褐色土層で層厚40cm、第Ⅳ層が黒色土層で層厚50cm、第Ⅴ層が遺構検出面にあたる黄褐色土層である。

最も低い平坦部に設定したＴ１では、第Ⅴ層上面で土師器及び、焼土遺構が確認された。より高い箇所に設定したＴ２からＴ10では、一部で表土中から土師器片等が出土したが、遺構等は確認されなかった。

これらの調査結果から、昼久保Ⅲ遺跡の今回の調査範囲では、削平等により地形が大きく改変されているが、一部に土師器等が出土することがわかる。遺構等も今回の調査範囲内では、多くは確認されていないが、遺物の出土状況等から周辺には古代の集落跡等が所在するものとみられる。



第41図　昼久保Ⅲ遺跡調査区位置図

6　馬淵川沿岸農業水利事業男神支線用水路工事

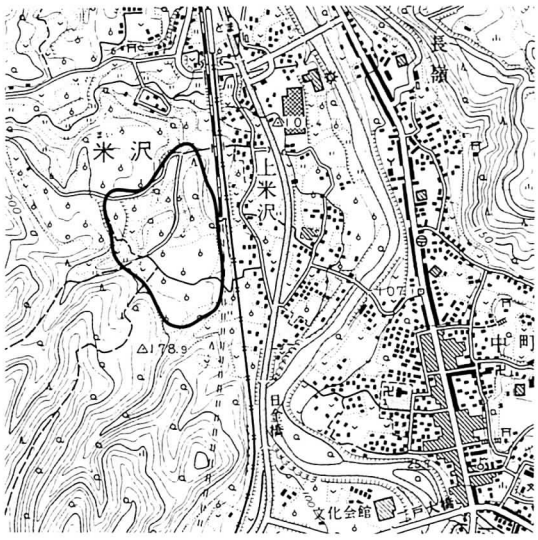
上平Ⅲ遺跡（IE99－2218）

所 在 地；二戸市米沢字上平

事 業 者：東北農政局馬淵川農業水利事業所

調査期日；平成19年９月11日、10月４日、11月27日

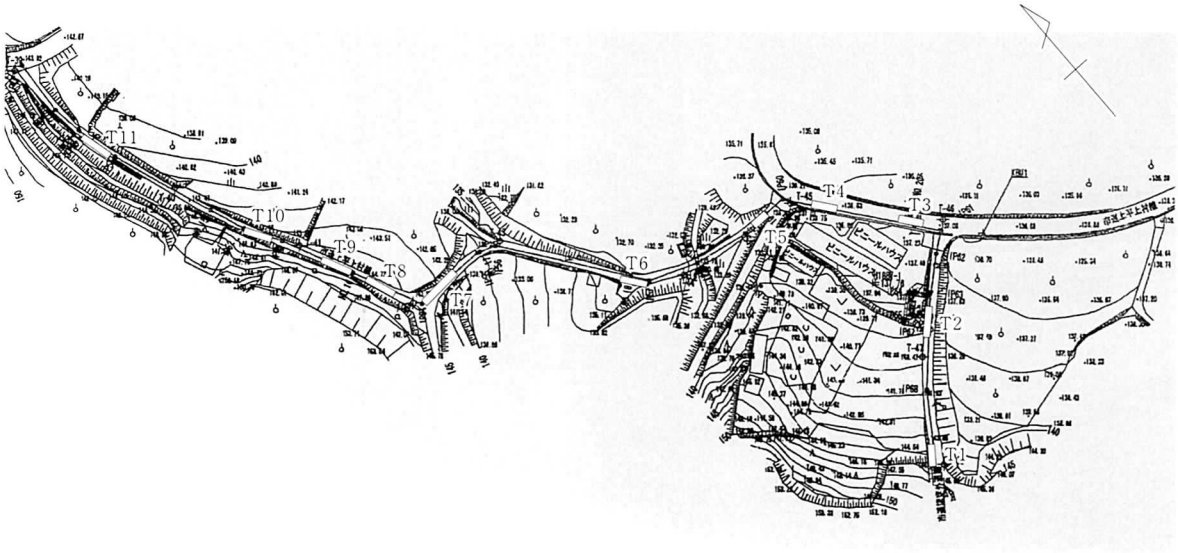
上平Ⅲ遺跡は二戸市役所の北西約2.1km、馬淵川左岸の河岸段丘上に立地し、標高は136～143mである。今回の調査は馬淵川沿岸農業水利事業男神支線用水路工事に伴うものである。 今回調査を実施する上平Ⅲ遺跡は縄文、古代の散布地として周知されている。試掘トレンチは現道の下に埋設するパイプライン設置予定の11箇所に設定した（Ｔ１～Ｔ11）。



第42図　上平Ⅲ遺跡位置図

今回の調査では調査区南東のＴ２～Ｔ４において遺構、遺物が確認されている。Ｔ２では地表－95cmから土坑が１基検出された。不整な礫が混入している状況が確認されている。遺物は出土していない。Ｔ３は地表－100cmから土坑と思われる遺構が確認されているが、検出した範囲が狭かったため、土坑以外の遺構になる可能性もある。Ｔ４からは灰白色火山灰の下、地表から110cmほどの位置から土師器が出土した。また同じ面からは隅が方形の住居状の遺構が確認されている。ただ、これも検出の範囲が狭かったためどのような遺構になるか定かではない。ただし、十和田ａ火山灰層と思われる灰白色の火山灰の下の土層を掘り込んでいることから、同火山灰より以前のものであると考えられる。

この他についてはＴ７で土器片が数点確認されたものの、標高の高い地点からの流れ込みのものであると思われ、その他のトレンチについても遺物、遺構は確認されなかった。



第43図　上平Ⅲ遺跡調査区位置図

7　馬淵川沿岸農業水利事業男神支線用水路工事

火行塚遺跡（JE09－1211）

所 在 地；二戸市石切所字火行塚

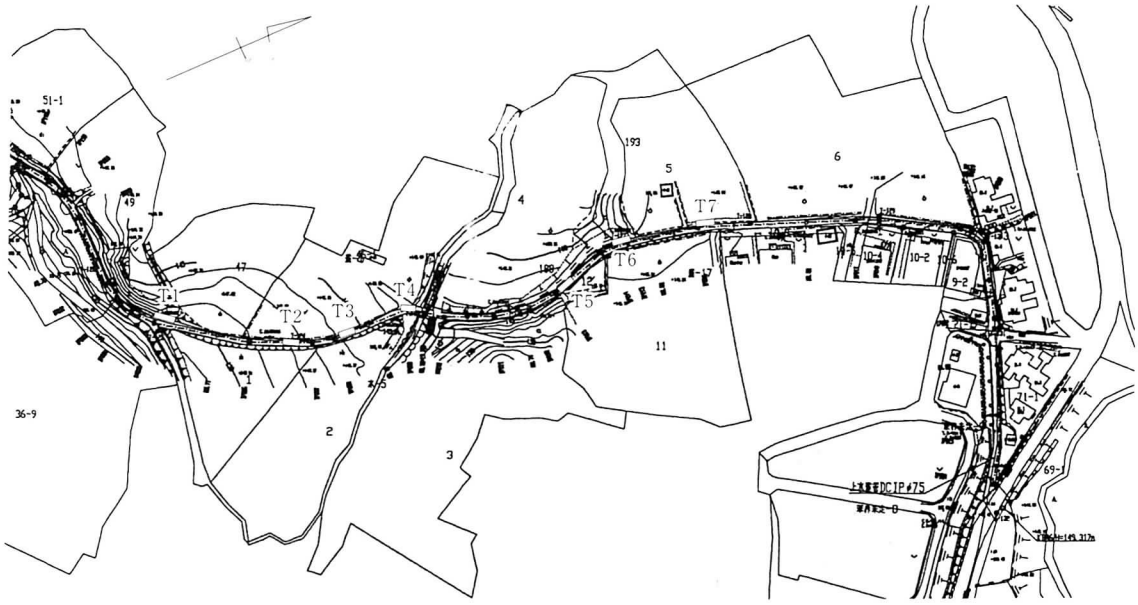
事 業 者：東北農政局馬淵川沿岸農業水利事業所

調査期日；平成19年９月11日

火行塚遺跡は二戸市役所の南西約2.6km、馬淵川左岸の河岸段丘上に立地し、標高は160m前後である。今回の調査は馬淵川沿岸農業水利事業男神支線用水路工事に伴うものである。 今回調査を実施する火行塚遺跡は縄文から弥生、古代の集落跡として周知されている。試掘トレンチは現道の下に埋設するパイプライン設置予定の７箇所に設定した（Ｔ１～Ｔ７）。

第44図　火行塚遺跡位置図

Ｔ２では表土下のⅢ層の黒色土層中の10cmほどの地点から縄文土器が出土した。精査の際、数点の土器の出土がみられ、このあとも多数の土器の出土が見込まれたため、この箇所に関しては途中で精査を中止した。Ｔ４ではⅡ層の黒褐色土層から土器の出土がみられたが、このトレンチのⅡ層からは水道管の埋設が確認されていることから、この層は攪乱されているものと思われるが、この周辺には何らかの遺構が所在する可能性がある。Ｔ５ではⅢ層から土器の出土がみられ、その下の地山まで検出したものの、遺構を確認することはできなかった。Ｔ６、Ｔ７は遺物、遺構は確認されなかったが旧表土が厚く残っており、地形的にもＴ４、Ｔ５からの続きであるため、この周辺についても遺構、遺物が存在する可能性がある。今回は住宅等の関係でＴ７より南側は試掘できなかったが、地形的な連続性から、この地点より南側も埋蔵文化財が所在する可能性があると考えられる。



第45図　火行塚遺跡調査区位置図

8　畑地帯総合整備事業舌崎地区

雨滝遺跡（IE89－2346）

所 在 地；二戸市

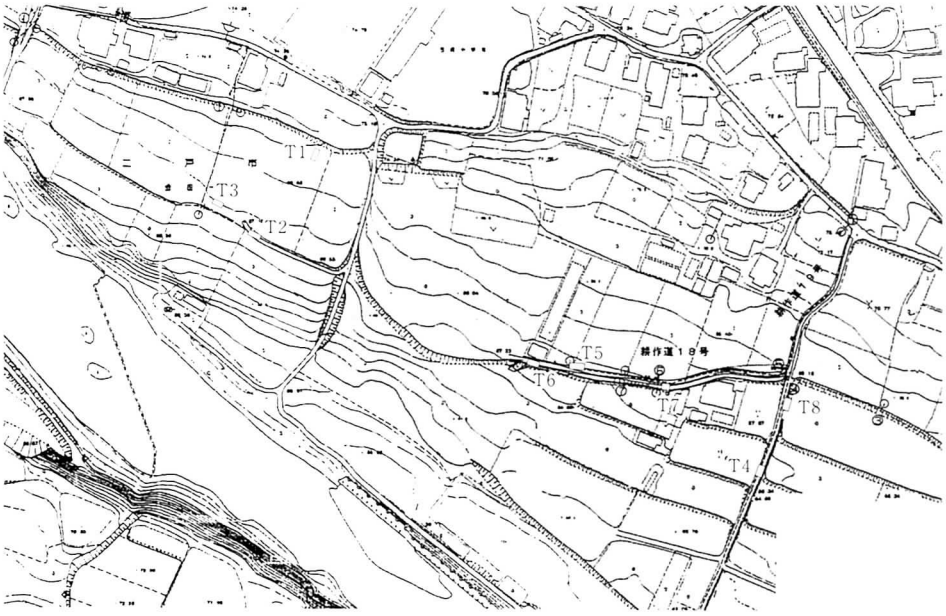
事 業 者；二戸地方振興局農林部農村整備室

調査期日；平成20年１月９日

雨滝遺跡は、二戸市役所の北西方向約8.1kmに位置し、馬淵川右岸の河岸段丘上に立地している。遺跡の現況は、宅地、リンゴ畑等として利用されている。本遺跡は、昭和30年代に明治大学が調査を実施し、縄文時代晩期の土器、土偶等数多くの土器が出土したことで著名である。

第46図　雨滝遺跡位置図

今回の調査は、パイプライン埋設箇所、給水栓設置予定箇所及び現農道舗装予定箇所が対象であるが、一部に平成14年度に試掘調査を終了した区域もある。調査対象箇所に８本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ８）。現リンゴ畑にＴ１、Ｔ３を設定した。Ｔ１とＴ３は同様の層序であり、Ｔ１においては、縄文土器が数点出土したが、明確な遺構は確認できなかった。遺跡範囲外ではあるが、Ｔ１を設定した畑地と地形的に連続している畑地に予定されている給水栓設置箇所にＴ３を設定した。トレンチの一部は、古代の土師器の甕胴部片、底部片が集中して出土した。周囲から流れ込んだものとは考えにくく、竪穴住居跡等の遺構が周囲に所在している可能性が高い。現農道部分にＴ２を設定したが、Ｔ１及びＴ３を設定した畑地に隣接しているものの、過去に地形改変を大きく受けていることが伺え、この農道部分には遺構等は所在しない。Ｔ４～Ｔ６を設定した。Ｔ４においては、土器片、炭化物粒等は確認できなかった。平成14年度調査では、今回設定したＴ４の北側水田にトレンチを設定したが、遺構及び遺物は確認されていない。Ｔ５及びＴ６は現農道に設定した。Ｔ２での状況と同様に、農道築造時に大きく地形改変を受けており、第Ⅵ層、第Ⅶ層であった。遺構及び遺物は確認できなかった。馬淵川に向かってやや急に傾斜するリンゴ畑に予定されている給水栓設置予定箇所にＴ７を設定した。表土から、縄文時代のものと思われる摩滅した土器片が出土したが、他の遺物あるいは遺構等は確認できなかった。出土状況及び地形的なことから、周囲から流れ込んだものと思われる。この畑から一段低い水田にＴ８を設定したが、遺構及び遺物は確認できなかった。



第47図　雨滝遺跡調査区位置図

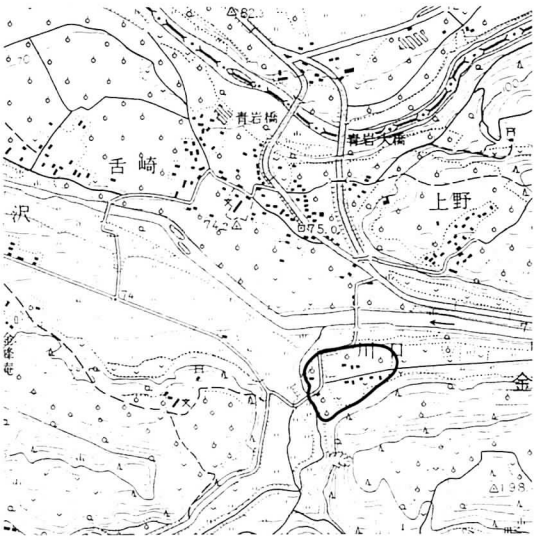
9　畑地帯総合整備事業舌崎地区

川口Ⅰ遺跡（IE79－1188）

所 在 地；二戸市金田一字川口

事 業 者；二戸地方振興局農林部農村整備室

調査期日；平成20年１月10日



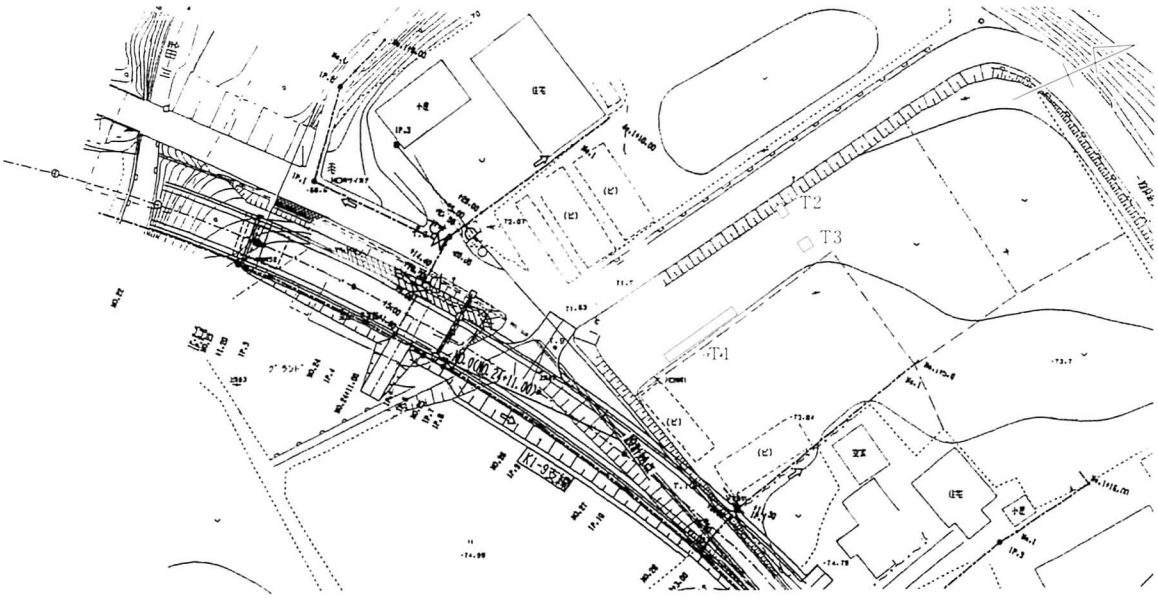
第48図　川口Ⅰ遺跡位置図

川口Ⅰ遺跡は、二戸市役所の北西約7.7kmに位置し、馬淵川左岸の河岸段丘上に立地しており、標高は74～78m前後である。現況は畑地となっている。今回の調査は畑地帯総合整備事業舌崎地区に伴うものである。本遺跡では一般県道上斗米金田一線整備事業に伴い、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが発掘調査を行っている。その際には、縄文時代後期の遺構及び遺物が出土している。今回の調査範囲に３本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ３）。

基本土層は第Ⅰ層が表土・耕作土で層厚20～30cm、第Ⅱ層が黒褐色土層で十和田ａ火山灰が部分的に混入する層で層厚が20～30cm、第Ⅲ層が暗褐色土層で層厚が20～30cm、第Ⅳ層が中掘火山灰層で層厚が10～15cm、第Ⅴ層が暗褐色土層で層厚が30～60cm、第Ⅵ層が地山とみられる土層である。

Ｔ１では、30×30cm程度から25～30cm程度の柱穴状遺構を３基確認した。いずれも第Ⅲ層上面で確認している。このほかのトレンチでは遺構は確認されなかった。

これらの調査の結果、川口Ⅰ遺跡の遺構の広がりが今回の調査範囲まで部分的に広がることが確認された。



第49図　川口Ⅰ遺跡調査区位置図

10　広域農道整備事業軽米二戸２期地区

板子屋敷３遺跡（IF74－0096）

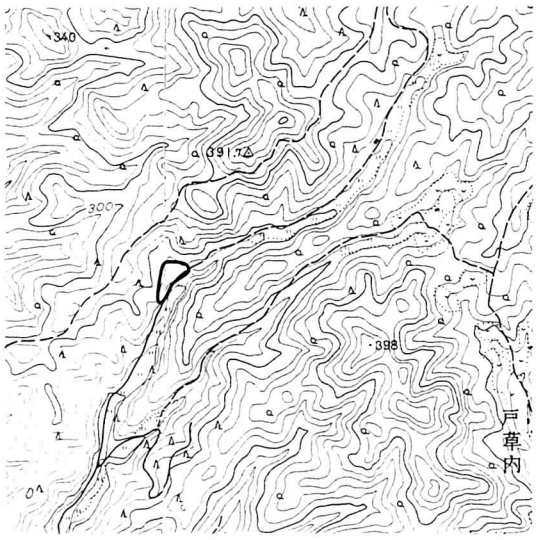
所 在 地；軽米町上舘地内

事 業 者；二戸地方振興局土木部

調査期日；平成19年４月12日、25日、26日

板子屋敷３遺跡は、軽米町役場の北東約3.4km、雪谷川の支流、坊里沢によって形成された丘陵部に立地している。調査区の標高は300～310mで、現況は山林となっている。今回の調査は広域農道整備事業軽米九戸２期地区に伴うものである。

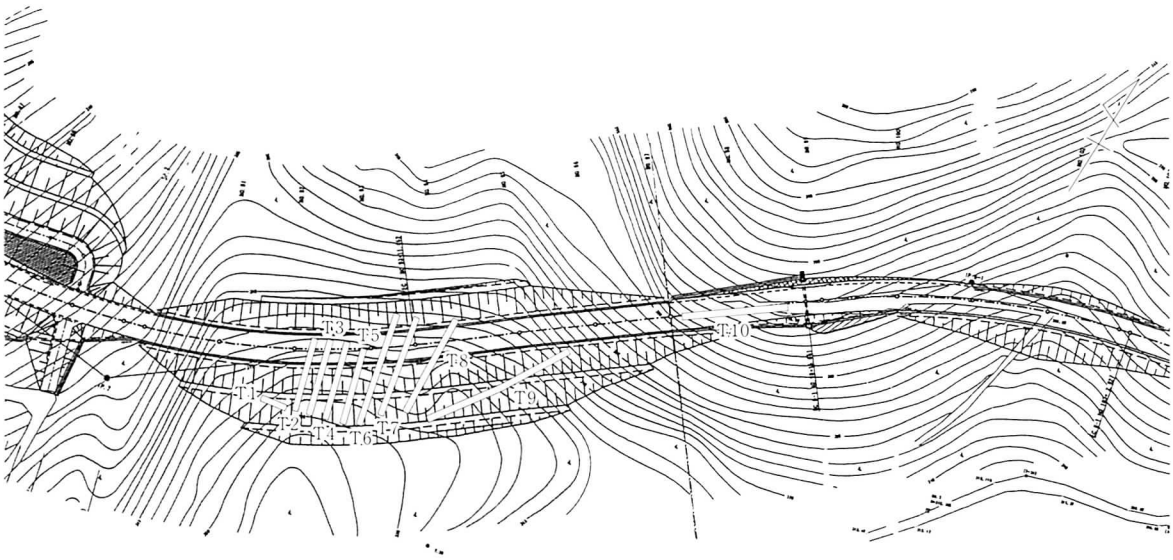
今回の調査区は平成18年度調査区の西側にあたり、平成18年度調査区の西端で遺構が検出されたため、遺構が検出される可能性があると予測され、今回試掘することとした範囲である。



第50図　板子屋敷３遺跡位置図

トレンチは主に北側の最も高い位置にある平坦面から南側にかけて設定した。層位は、北側の平坦面は表土の堆積が薄く、下部の黄褐色土及び南部浮石層が比較的よく残り、斜面が急になるに従って表土の腐葉土が厚く堆積する。

今回の試掘調査では土坑３基と柱穴状遺構２基がそれぞれ検出された。土坑１基は調査区東部に設定したＴ３の南側急斜面上から検出された。規模は径175×180cmほどで円形を呈する。また土坑２基は調査区中央部やや西よりのＴ８の北部、やや平坦面に近い位置から検出されている。規模はそれぞれ、140×130cm、130×130cmほどである。その他に柱穴状土坑と見られる遺構も２基検出された。１基はＴ４から規模は30×30cmほどである。もう１基はＴ６で確認され、規模は30×30cm、平面で確認される形状はやや楕円形状である。



第51図　板子屋敷３遺跡調査区位置図

11　中山間地域総合整備事業大清水地区

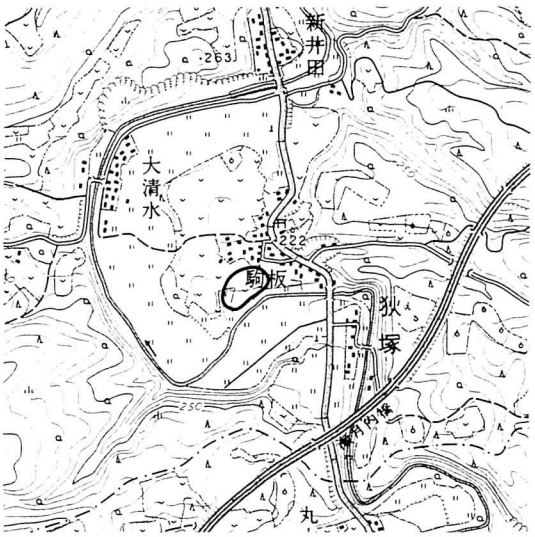
駒板３遺跡（IF92－1057）

所 在 地；軽米町大字山内

事 業 者；二戸地方振興局農林部農村整備室

調査期日；平成19年10月30日

駒板３遺跡は、軽米町役場の北東北約6.8kmに位置し、瀬月内川の右岸の河岸段丘上に立地している。今回の調査は、中山間地域総合整備事業大清水地区に伴うものである。本遺跡は、軽米町教育委員会の分布調査により新規に発見されたもので、現在の道路部分等に縄文土器の散布がみられる。今回の調査範囲に17本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ17）。

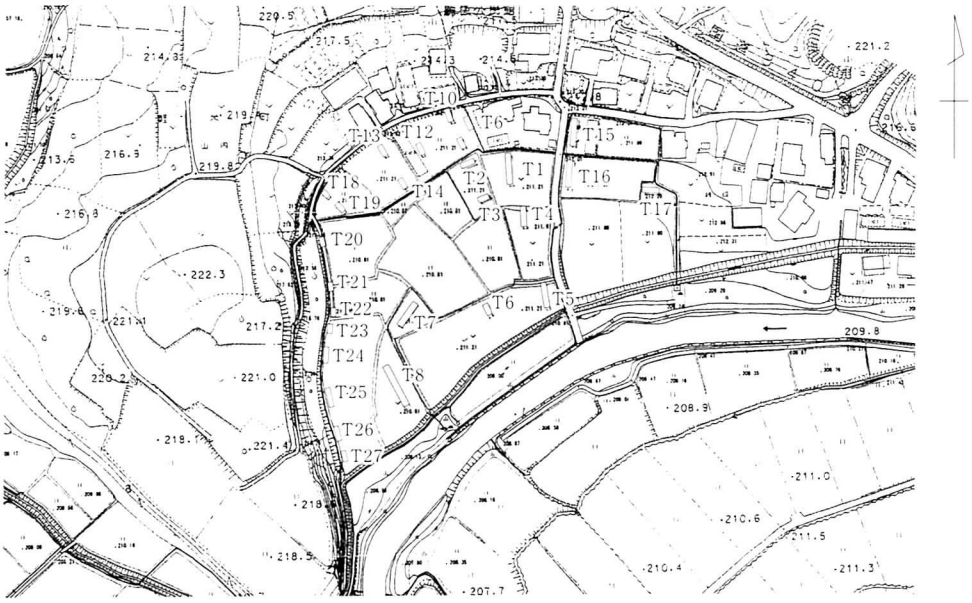


第52図　駒板３遺跡位置図

Ｔ６では、表土下に黒褐色土層が確認され、上面で30×30cm程度の土坑、縄文土器が確認された。Ｔ１、Ｔ４では、黒褐色土層は削平のため確認されなかったが、地山層とみられる明褐色土層上面で縄文土器が確認された。このため、埋蔵文化財の分布は、現在の宅地側にも広がると考えられる。T15、T16、T17では柱穴及び縄文土器が確認されたことから、本遺跡の分布は一部で東側にも延びるとみられる。ただし、Ｔ６を設定した箇所を中心に最も縄文土器の分布が密になることなどから、駒板３遺跡の中心はこの付近にあたるものとみられる。

Ｔ９からT14、T18～T20を設定した範囲では、土層の状況から湿地帯であったとみられ、これらの範囲は後背湿地にあたる箇所であると考えられる。

今回の調査から、駒板３遺跡は瀬月内川と後背湿地に挟まれた段丘上に広がる遺跡であると考えられる。



第53図　駒板３遺跡調査区位置図

12　経営体育成基盤整備事業大川目地区

新町遺跡（JF29－2081）

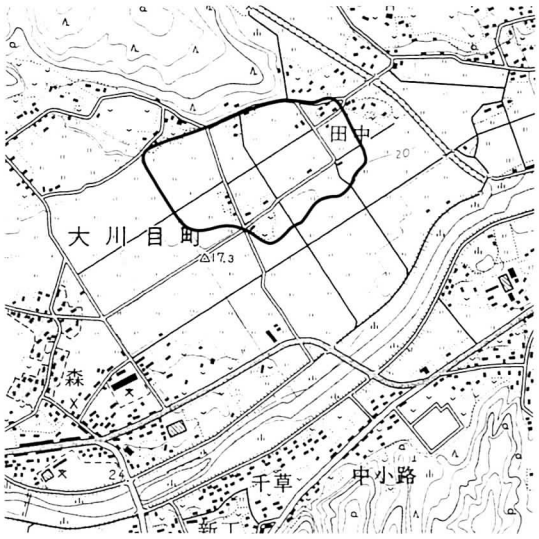
所 在 地；久慈市大川目町地内

事 業 者：久慈地方振興局農政部農村整備室

調査期日；平成19年10月22日～　23日

新町遺跡は、久慈市役所の西約4.8km、久慈川によって形成された沖積地上に立地している。遺跡の標高は15～18mを測り、現況は水田となっている。今回の調査は経営体育成基盤整備事業大川目地区に伴うものである。

調査区は18年度に実施できなかった箇所を中心に、79箇所のトレンチを設定した。



第54図　新町遺跡位置図

調査区の南部ほど湿地が広がる様子が見られた。また自然堤防の高まりが所在する箇所も数カ所確認できたが、遺物が所在していたと思われるⅡ層の黒褐色土が過去の地形改変で大きく削平されてほとんど残存していない状況が多くのトレンチで確認できた。

今回の調査区の北東部のT49のⅡ層内から25×25cmほどの土坑が確認された。柱穴状を呈しているようでもあるが、詳細は明らかではない。ただ埋土には土器の砕片が混入しており、当該時期のものである可能性が極めて高い。土器は同トレンチのⅡ層内から数片出土しているが縄文時代のものである。また、T49の南隣の田面に設定したT50からもT49のものと同規模の土坑が確認され、ここでも埋土に土器片が混入している様子が確認された。また、T50の東側に設定したT59からは土器片が入った溝状遺構が２条確認された。この溝の中の一つはT62まで続いている様子が確認されている。遺構内で確認された土器は縄文時代後期のものがみられたが、遺構外からは土師器、須恵器なども確認されており、これらの時期に相当する遺構が所在する可能性もある。遺物は古墳時代中期とみられる土師器も出土している。25はミニチュア土器で、内面がナデ、外面は一部にナデが行われ、径0.3cm程度の穿孔が行われているが、器形等は不明である。須恵器は体部の破片で器種や器形は不明であるが、内面がナデ調整で外面にカキメが行われている。

第55図　新町遺跡調査区位置図

13　中山間地域総合整備事業

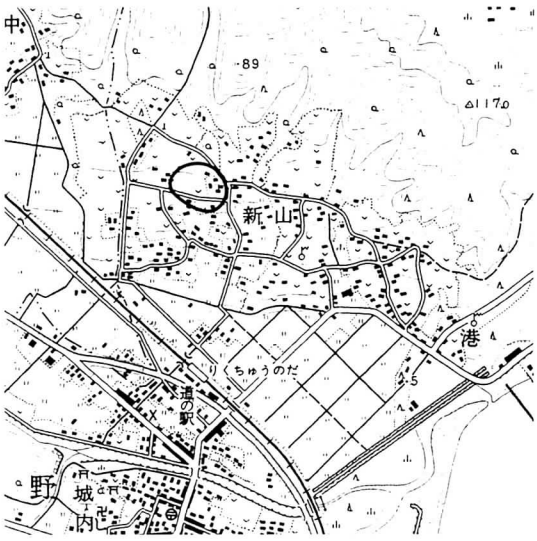
中新山遺跡（JG51－1032）

所 在 地；野田村大字野田字中新山

事 業 者；久慈地方振興局農林部農村整備室

調査期日；平成19年10月19日

中新山遺跡は、調査区は、野田村役場の北方向約1.3㎞に位置し、南向きに緩やかな傾斜地に立地している。今回の調査は道路改築事業に伴うもので、調査対象箇所に４本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ４）。

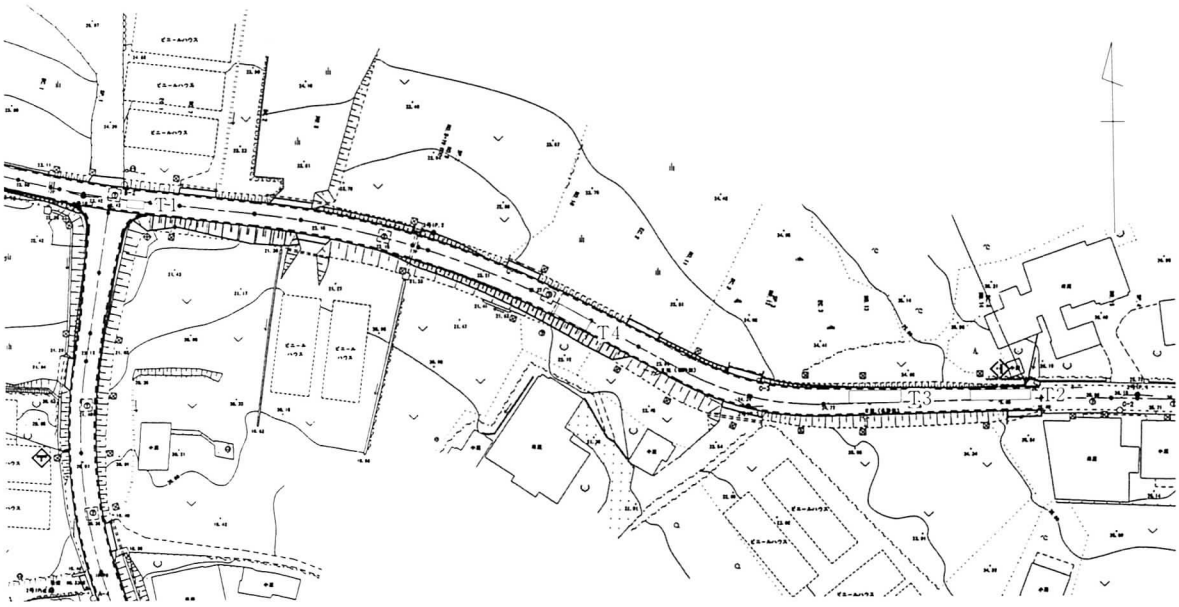


第56図　中新山遺跡位置図

遺跡範囲隣接地に設定したＴ１においては、すでに埋設されている下水道管の工事による掘削が広範囲に及んではいたが、旧表土にあたると思われる暗褐色土が約90㎝下で確認されたため、掘り下げようとしたが、道路が崩壊する恐れが生じたため重機による試掘調査を断念した。

下水道管が埋設されていない工事予定範囲にＴ２～Ｔ４を設定した。これらのトレンチでは道路盛土、盛土層下は褐色ローム層であり、現道築造の際に大きく地形改変を受けていることがうかがえたが、Ｔ４において、第Ⅲ層において径25㎝大の柱穴状土坑４基、柱痕跡が認められる径40㎝大の柱穴状土坑１基が検出された。埋土は黒色土層で、炭化物粒も含まれていた。

以上のことから、現道開削の際に地形改変は受けてはいるものの、遺構が残存している範囲があることがわかった。



第57図　中新山遺跡調査区位置図

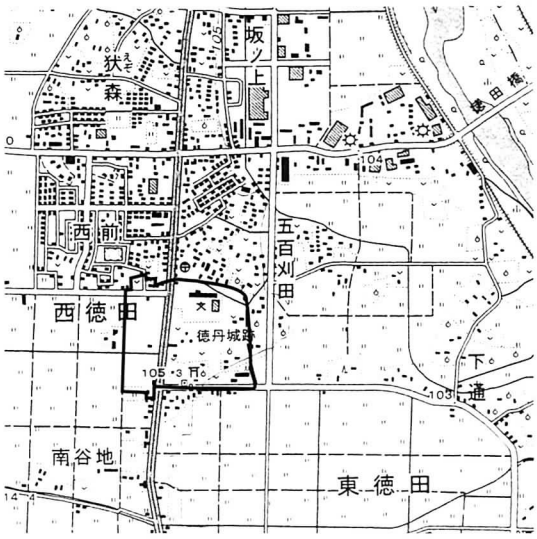
14　経営体育成基盤整備事業徳田第２地区

徳丹城跡（LE47－1174）隣接地

所 在 地；矢巾町徳田

事 業 者；盛岡地方振興局農林部農村整備室

調査期日；平成19年11月８日、９日



第58図　徳丹城跡隣接地位置図

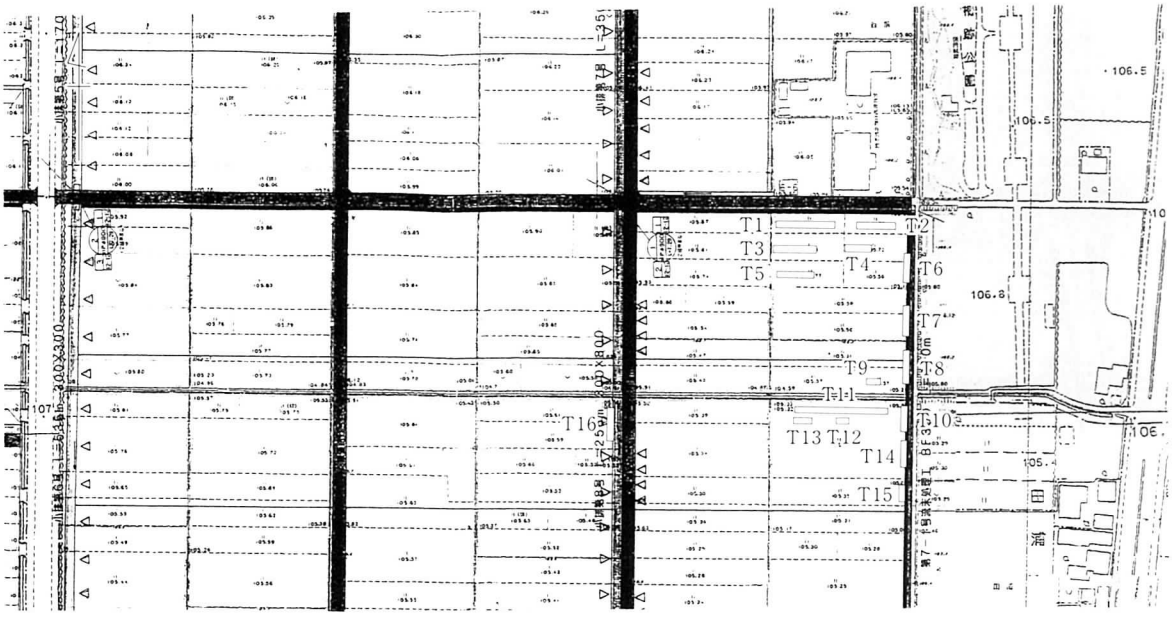
徳丹城跡は、矢巾町役場の東南東約1.4kmに位置し、北上川右岸の低位段丘上に立地している。今回の調査は、経営体育成基盤整備事業に伴うもので、平成19年５月に分布調査を行い、埋蔵文化財が所在する可能性があると回答した地点で、徳丹城跡（LE47－1174）に隣接する地点であることから、試掘調査が必要であるとした箇所である。徳丹城跡は、９世紀初頭（812年頃）に創建された陸奥北辺の古代の城柵遺跡であり、国史跡に指定されている。今回の調査範囲に16本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ16）。

Ｔ10、Ｔ12、Ｔ13では第Ⅲ層で、上幅約200cmの東西方向の溝を確認した。この溝は黒色土の埋土中に９世紀前半とみられる土師器等を含んでおり、埋土は堅くしまっている。

徳丹城跡西南隅では、これまでの継続調査の結果東西方向の溝と南北方向の溝が確認されており、東西方向の溝はさらに西に伸びることが指摘されていた。今回の溝は上幅等もこれまで確認されている溝と類似し、埋土中の遺物の年代からも徳丹城期のものとみられ、徳丹城に関連して、外郭を東西方向に走る重要な遺構であると考えられる。

なお、溝の伸びを確認するために設定したＴ16では溝は確認できず、グライ化した土層であることから徳丹城跡西側の範囲でみられた湿地帯がこの範囲まで広がっていたものとみられる。この他のトレンチでは、いずれの層でも遺構及び遺物は確認できなかった。

これらのことから、今回の調査範囲は徳丹城の城外であり、遺構は徳丹城外郭から延長する溝のみが確認されたが、城内や周辺での水利用等を考える重要な遺構と判断できる。



第59図　徳丹城跡隣接地調査区位置図

15　経営体育成基盤整備事業中寺林地区

八坂遺跡（LE96－1159）

所 在 地；花巻市石鳥谷町中寺林地内

事 業 者：県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室

調査期日；平成19年12月12日、13日

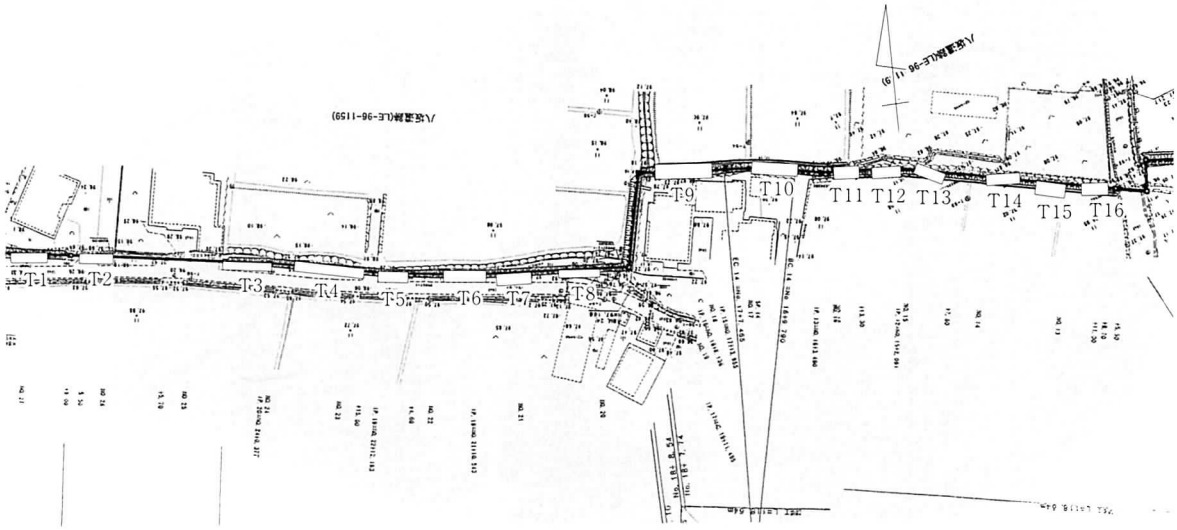
八坂遺跡は、花巻市役所の北約9.6km、葛丸川によって形成された沖積地上に立地している。調査区の標高は96～98mを測り、現況は水田となっている。今回調査を実施した八坂遺跡は平安時代の散布地として周知されている。今回の調査は経営体育成基盤整備事業中寺林地区に伴うものである。

第60図　八坂遺跡位置図

今回の調査区は今年度(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施された地点に隣接する地域にあたる。今回の調査では事業予定箇所にＴ１～Ｔ16までのトレンチを設定して実施した。

その中でＴ１～Ｔ８については地山より上層が盛土されており、その中にゴミなどが混じっている状況が確認されるなど、大きく造成により改変されていることが明らかになった。一方、現在住宅が建っている場所に隣接する箇所に設定したＴ９からは柱穴状土坑が２基検出されている。この地点はⅡ層に旧表土と見られる黒褐色土が25cmほど残っており、検出された遺構は柱穴１が地表から85cmの地点で30×30cmほどの規模のものが、また柱穴２は地表から70cmの地点で25×25cmの規模のものがそれぞれ検出された。このうち柱穴１については隅丸方形状を呈していた。

調査区東部に設定したＴ11～Ｔ16からは一部に黒褐色土がⅡ層またはⅢ層に残るものも確認されたが、遺構、遺物は確認されなかった。



第61図　八坂遺跡調査区位置図

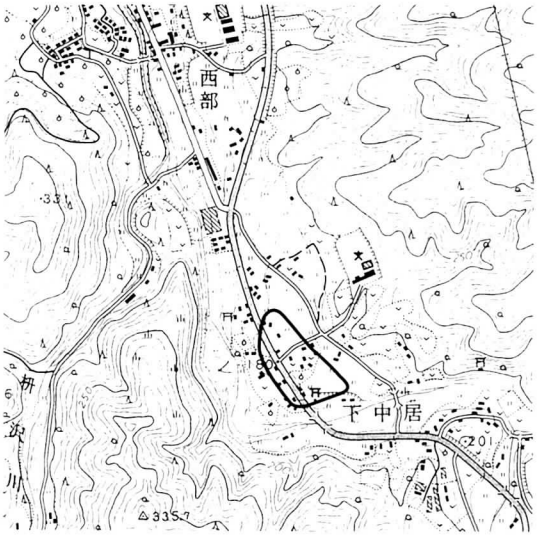
16　中山間地域総合整備事業中居地区

下中居Ⅰ遺跡（MF60－1013）南区

所 在 地；花巻市大迫町外川目

事 業 者；県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室

調査期日；平成19年11月８日、９日



第62図　下中居Ⅰ遺跡位置図

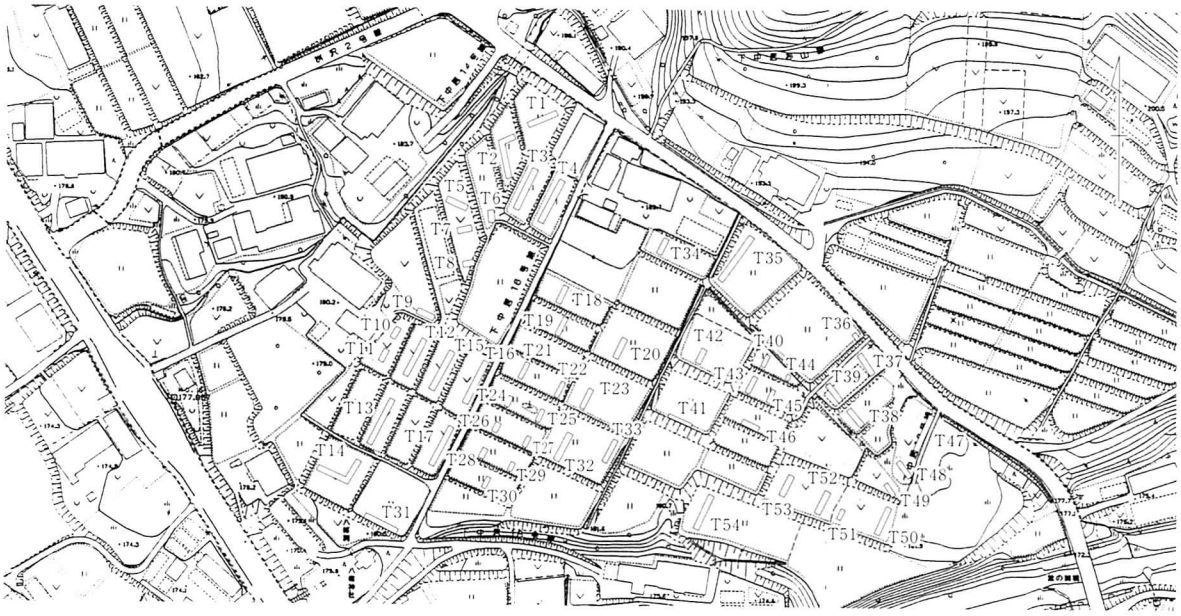
下中居Ⅰ遺跡は、花巻市役所の西南西約17kmに位置し、旭又川右岸の段丘上に立地している。今回の調査は、経営体育成基盤整備事業によるものである。遺跡は西向きの緩斜面に立地し、現況は水田である。今回の調査範囲に54本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ54）。

基本土層は、第Ⅰ層が表土及び耕作土、盛土で層厚70cm、第Ⅱ層が褐色土層で層厚20cmで遺構検出面にあたる土層である。第Ⅳ層が地山とみられる明褐色土層である。

Ｔ18からＴ30では一部での水田造成時の地形改変がみられたが、第Ⅱ層の褐色土層がこるトレンチでは遺物を包含しており、柱穴や土坑などが確認された。緩斜面の上部で、改変が少なかったとみられるＴ35では30×30cmの土坑が、Ｔ34では60×45cmの土坑がみられた。またＴ18など遺物を多量に包含しているトレンチもあり、遺構の存在が考えられる。Ｔ35では50×50cmの土坑、Ｔ14では100×100cmの竪穴住居状の遺構も確認されており、段丘面の端部まで埋蔵文化財が広がるものとみられる。

Ｔ１からＴ12は、地山層に礫を多く含んでおり、また堆積の状況から北側に傾斜することが確認された。層序の状況等から、現在の北側の水田及び畑地に下がる沢状の地形であったとみられる。また、Ｔ42からＴ54では、厚い盛土の直下に礫層がみられ、以前の水田造成時に地形改変が行われたことがうかがわれた。また、一部で水性堆積によるとみられる黒色土層が確認されたことから、湿地帯であったと考えられる。

これらの結果から、下中居Ⅰ遺跡は両側を沢状の地形に挟まれた、段丘上に立地する遺跡とみられる。遺物は縄文時代のものに限られ、その時期も限定される。



第63図　下中居Ⅰ遺跡調査区位置図

17　中山間地域総合整備事業中居地区

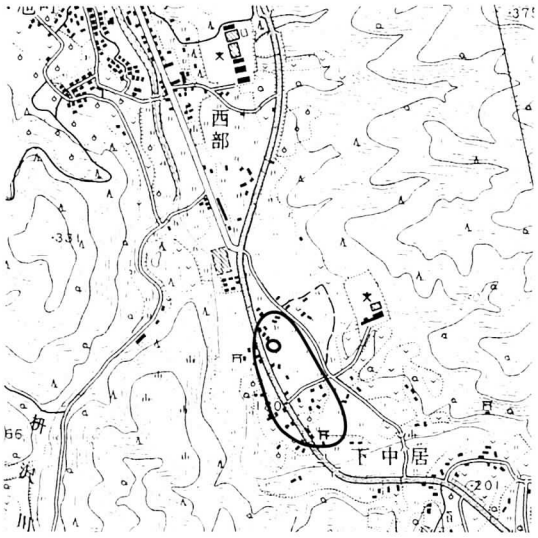
下中居Ⅰ遺跡（MF60－1013）北区

所 在 地；花巻市大迫町外川目

事 業 者；県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室

調査期日；平成19年11月８日、９日

下中居Ⅰ遺跡は、花巻市役所の西南西約17kmに位置し、旭又川右岸の段丘上に立地している。今回の調査は、経営体育成基盤整備事業によるもので、花巻市教育委員会が分布調査を行い、埋蔵文化財が所在する可能性があると回答した地点で、下中居Ⅰ遺跡に隣接した地点である。今回の調査範囲に28本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ28）。



第64図　下中居Ⅰ遺跡位置図

基本土層は、下中居Ⅰ遺跡南区と同様である。

Ｔ18からＴ28は現在民家のある周辺に設定した。Ｔ22、Ｔ23、Ｔ18、Ｔ19では、表土下に地山層が確認されたが、Ｔ23では柱穴及び土器が、Ｔ22では土坑及び土器が、Ｔ18、19では土器及び柱穴が確認された。Ｔ20及びＴ21では土坑が確認された。Ｔ24～Ｔ27では、Ｔ18からＴ21を設定した面ほど濃密な分布ではなかったが、土器や柱穴が確認された。ただし、Ｔ28の道路側及びＴ26の山側では削平が一部でみられた。これらは縄文土器の様相からほぼ単一の時期のものとみられる。土坑や柱穴等が多くみられ、土器類も豊富なことから、緩斜面上に立地する集落であったと考えられる。この他のトレンチでは、表土直下に礫を多く含む地山層がみられ、一部で地山層がグライ化していたことなどから、沢状の地形であったとみられる。今回の調査範囲は、沢状の地形に挟まれた、段丘上に立地する集落跡であると考えられる。

第65図　下中居Ⅰ遺跡調査区位置図

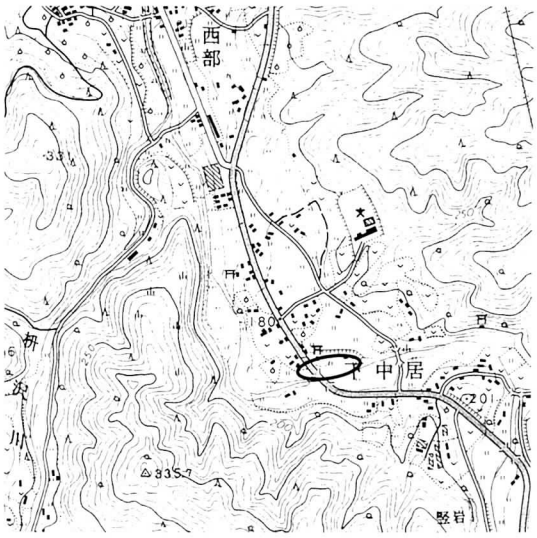
18　中山間地域総合整備事業中居地区

下中居Ⅱ遺跡（MF60－1025）

所 在 地；花巻市大迫町外川目

事 業 者；県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室

調査期日；平成19年10月29日、11月29日



第66図　下中居Ⅱ遺跡位置図

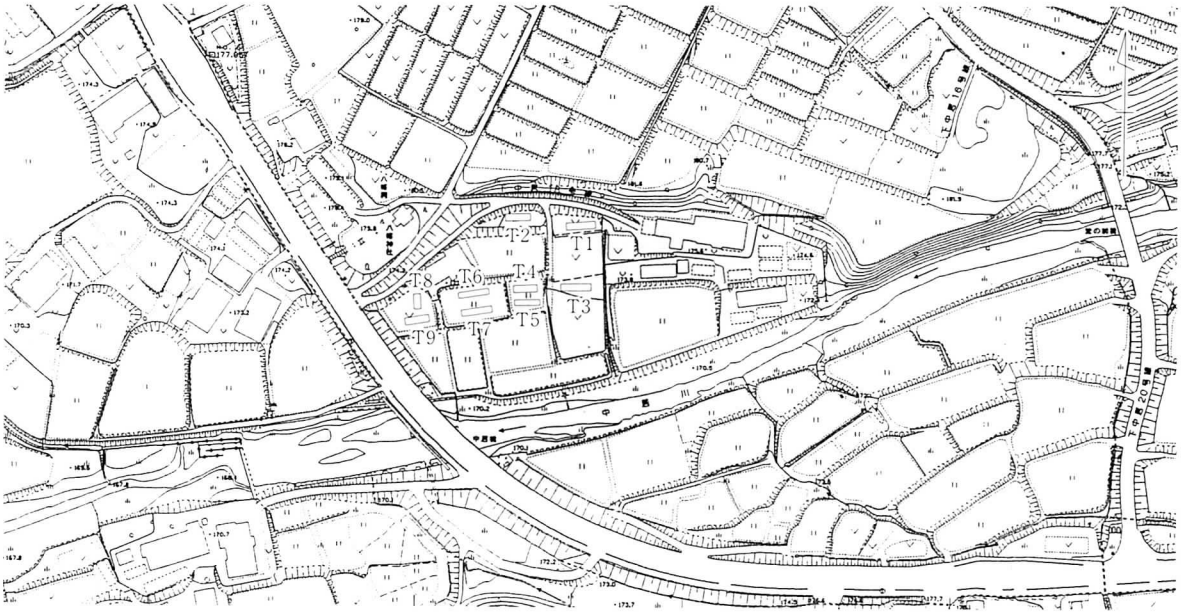
下中居Ⅱ遺跡は、花巻市大迫支所の東南東約２㎞に位置し、中居川右岸に立地している。今回の調査は、中山間地域総合整備事業中居地区に伴うもので、切土の田面及び道排水路部分を対象としている。今回の調査区に９本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ９）。

基本土層は、第Ⅰ層が表土及び耕作土で層厚が20～50㎝、第Ⅱ層が褐色土層で層厚が25～40㎝、第Ⅲ層が黒褐色土層で層厚が15～30㎝、第Ⅳ層が地山とみられる黄褐色土層である。

Ｔ１では、第Ⅱ層で遺物包含層を確認した。出土した土器は縄文土器で、撚糸文により網目状に縄文が施文されているが、小片のため詳細な時期は不明である。遺物密度は比較的濃いものと判断できる。この遺物包含層の広がりは、Ｔ２でも確認されたが、Ｔ３では確認されておらず、部分的なものと考えられる。これらの範囲は、調査区北側に広がるやや標高の高い緩斜面の末端となっている。

Ｔ５では土坑、Ｔ６及びＴ７、Ｔ９では柱穴を確認している。柱穴は規則的な配置がみられ、建物跡等を構成するものと考えられる。ただし、これらの遺構では遺物を伴っておらず、時期は不明である。

これらの調査結果から、下中居Ⅱ遺跡では沢筋にあたる範囲に遺物包含層が形成され、中居川と沢との間のやや標高の高い範囲に遺構が所在すると考えられる。



第67図　下中居Ⅱ遺跡調査区位置図

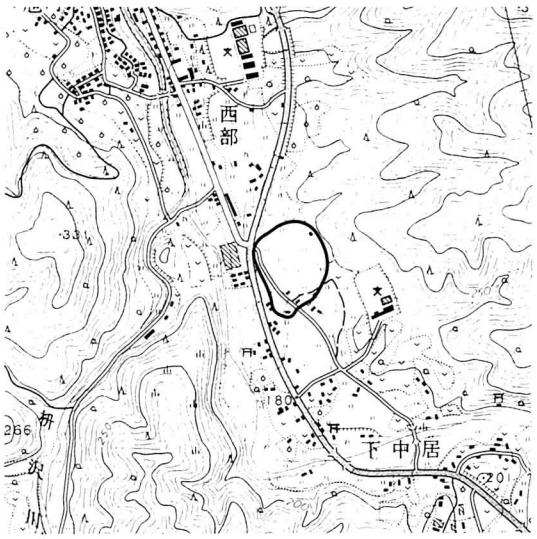
19　中山間地域総合整備事業中居地区

下中居Ⅲ遺跡（MF60－0060）

所 在 地；花巻市大迫町外川目

事 業 者；県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室

調査期日；平成19年７月17日、10月26日、10月29日、11月15日、16日、29日、30日



第68図　下中居Ⅲ遺跡位置図

下中居Ⅲ遺跡は、花巻市役所の東北東方向約17.1kmに位置し、中居川右岸の沖積地まで山から延びている緩斜面に立地しており、遺跡の標高は、175～188mで、現況は主に水田及び畑地となっている。今回の調査は経営体育成基盤整備事業に伴うもので、切土予定の田面・農道及び排水路設置予定箇所が対象である。調査対象箇所に110本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ110）。

水田造成による地形改変を大きく受けている区域ではあったが、比較的標高の高い水田に設定したＴ12、Ｔ13、Ｔ32、Ｔ41で縄文時代の遺構及び遺物が確認された。Ｔ12においては、柱穴状土坑２基（径20cm大１基、径30cm大１基）が検出され、遺構埋土上面には土器が含まれていた。Ｔ13においても径30cm台の柱穴状土坑１基が検出されている。Ｔ32においては、縄文時代のものと思われる土器片を多く含む包含層が確認されている。Ｔ41においては、200cm以上×40cm大の陥し穴状遺構１基が検出されているが、Ｔ41からは遺物は確認されなかった。遺構が確認された区域より一段低い沢縁の水田にＴ１～Ｔ６を設定した。旧地形において急斜面を改変して水田造成した箇所であると思われ、遺構及び遺物は確認されなかった。

遺構が確認された区域より低い水田に設定したＴ16～Ｔ24、Ｔ33～Ｔ38においては、第Ⅲ層に礫が多く含まれるようになり、標高が下がれば下がるほど、第Ⅲ層の堆積は薄くなっていた。これらのトレンチからは遺構及び遺物は確認されなかった。遺構が確認された区域より南側の水田部分は、周囲よりも凹んだ地形であり、山から沢が注がれている湿地であった。この区域に設定したトレンチのほとんどは、表土直下に水成堆積と思われる黒色土が堆積し、その下層はグライ化した粘土層あるいは礫層が観察された。これらの区域に設定したトレンチからは遺構及び遺物は確認できなかった。

第69図　下中居Ⅲ遺跡調査区位置図

20　経営体育成基盤整備事業江釣子第二地区

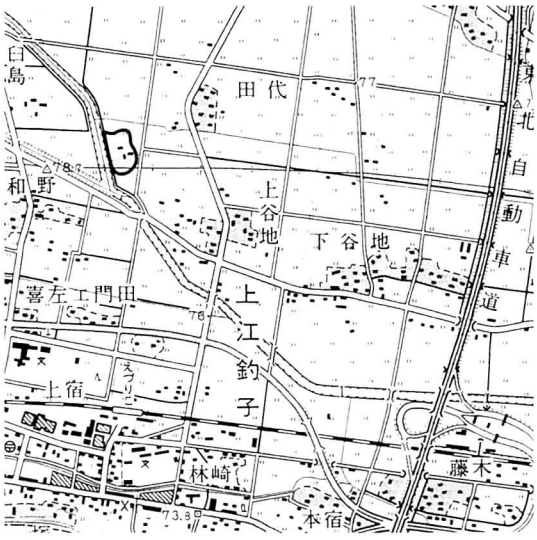
田代遺跡（ME55－2121）

所 在 地；北上市上江釣子10地割

事 業 者：県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室

調査期日；平成19年12月10日

田代遺跡は、北上市役所の北西約3.9km、和賀川によって形成された沖積地上に立地している。遺跡の標高は77m前後を測り、現況は水田、畑地となっている。今回調査を実施した田代遺跡は中世の集落跡として周知されており、別名「田代主殿屋敷」とも呼ばれる。今回の調査は経営体育成基盤整備事業江釣子第二地区に伴うものである。



第70図　田代遺跡位置図

今回の調査は22箇所のトレンチを設定して実施した。特にも支道第２号の拡幅及び延長箇所に堀または溝が所在する可能性があることを想定して、現在の住宅の北側に南北のトレンチを５本設定した（Ｔ１～Ｔ５）。

その結果、そのトレンチ全てから幅55cmほどの溝状遺構が検出された。溝はＴ１からＴ５まで東西に伸びる様子が確認されたが、Ｔ１より東側は転作のため調査ができなかったものの、溝の断面から更に東側に延びる可能性が極めて高い。また溝は過去の耕作によって上部が削平され、溝の幅が広がる様子が断面からみられる。ただ、Ｔ20では遺構が確認されなかったことから、溝状遺構は田面７の範囲で留まるとみられる。また西側についてはＴ６で溝状遺構が確認されなかったことから、Ｔ５の一段高い面から屋敷を囲むように南側に曲がる可能性もあるが、今回の調査においては明らかに曲がるかどうかは確認できなかった。Ｔ６～Ｔ８からは黒沢川の旧河道であることを示す遺跡外にあたる北側のＴ10～Ｔ17及びＴ19～Ｔ22についても遺構は確認されなかった。溝状遺構が確認された面とほぼ同じ高さの面に設定したＴ18からは柱穴状遺構と見られる遺構が３基検出されている。検出面の深さは－40cmであり、規模は25×25cmほどのものである。この高さと同じ面には溝状遺構のほかに建物跡などが所在する可能性がある。

今回の調査において遺物が一切確認されていないことから、確認された溝状遺構や柱穴状遺構が詳細な時期は不明である。

第71図　田代遺跡調査区位置図

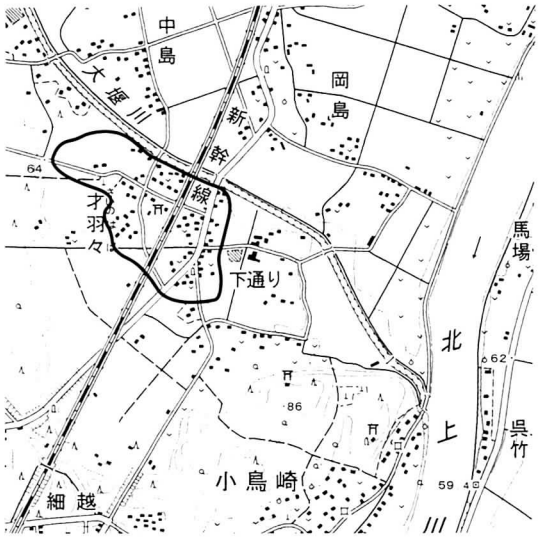
21　緊急地方道整備事業

野田Ⅰ遺跡（MF56－2213）

所 在 地；北上市二子町地内

事 業 者；県南広域振興局北上総合支局土木部

調査期日；平成19年７月26日



第72図　野田Ⅰ遺跡位置図

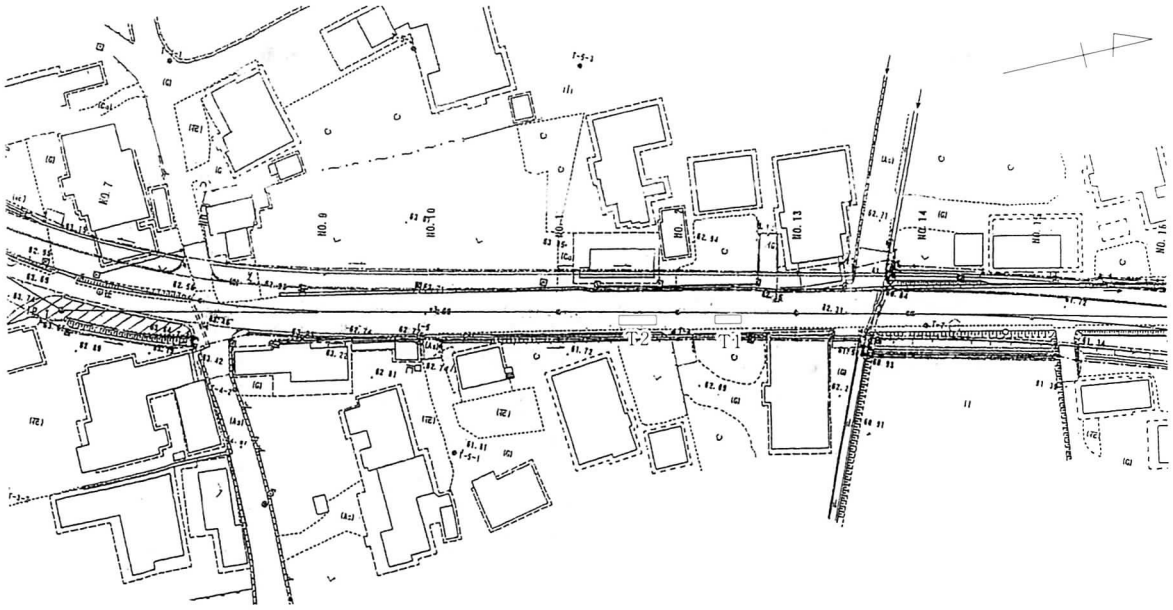
野田Ⅰ遺跡は、北上市役所の北東方向約3.2kmに位置し、北上川支流の大堰川右岸に形成された沖積地上の微高地に立地している。現況は主に水田及び宅地となっている。今回の調査は県道改良工事に伴うもので、現道路内路盤下を掘削して路盤厚を厚くする箇所が対象である。本遺跡は、昭和51年度に東北新幹線事業に係る本発掘調査が実施されており、縄文時代、弥生時代、古代の複合遺跡として周知されている。また、今回の道路改良工事に伴う歩道拡幅箇所は、平成18年度に岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによる本発掘調査が実施され、古代の竪穴住居跡、建物跡等が検出されている。

交通量の多い現道下の調査であるため、通常の試掘調査を実施することが困難であった。また、事業者側の事前調査から、現道内路盤が50～60cm程度はあるというデータから、工事の際に立ち会うこととしていた。

要工事立会範囲とした区域において、最も薄いところで現道内路盤の厚さが42cm、工事の掘削予定深さが65cmの箇所があり、盛土直下に土器を含む旧表土が確認されたことから、この区域においてのみ、試掘トレンチを設定した（Ｔ１、Ｔ２）。

Ｔ１では、第Ⅲ層において、径30cm 大の柱穴状遺構１基が検出され、その埋土には土師器片が含まれていた。Ｔ２では、摩滅が激しいものの土師器片を含む旧表土にあたると思われる第Ⅱ層が確認された。

これらのトレンチを設定した区域を頂点として南北方向にかけて現道の路盤が厚くなり、現道路盛土厚内での工事となることから、埋蔵文化財の所在状況については確認していない。



第73図　野田Ⅰ遺跡調査区位置図

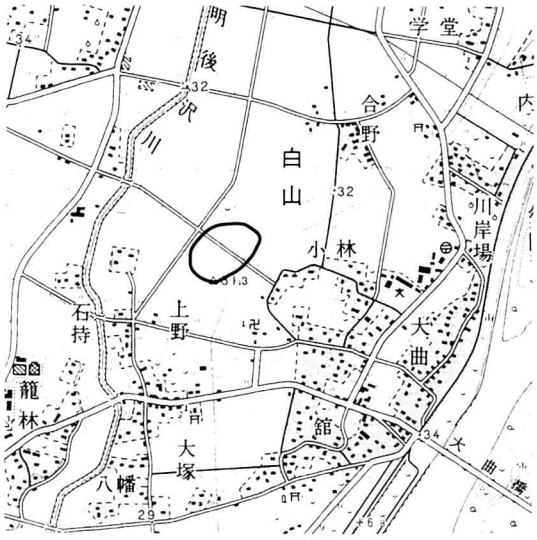
22　経営体育成基盤整備事業白山地区

白山上野遺跡（NE47－1032）

所 在 地；奥州市前沢区白山

事 業 者；県南広域振興局農林部農村整備室

調査期日；平成19年５月15日、11月13日、14日、
　　平成20年１月22日



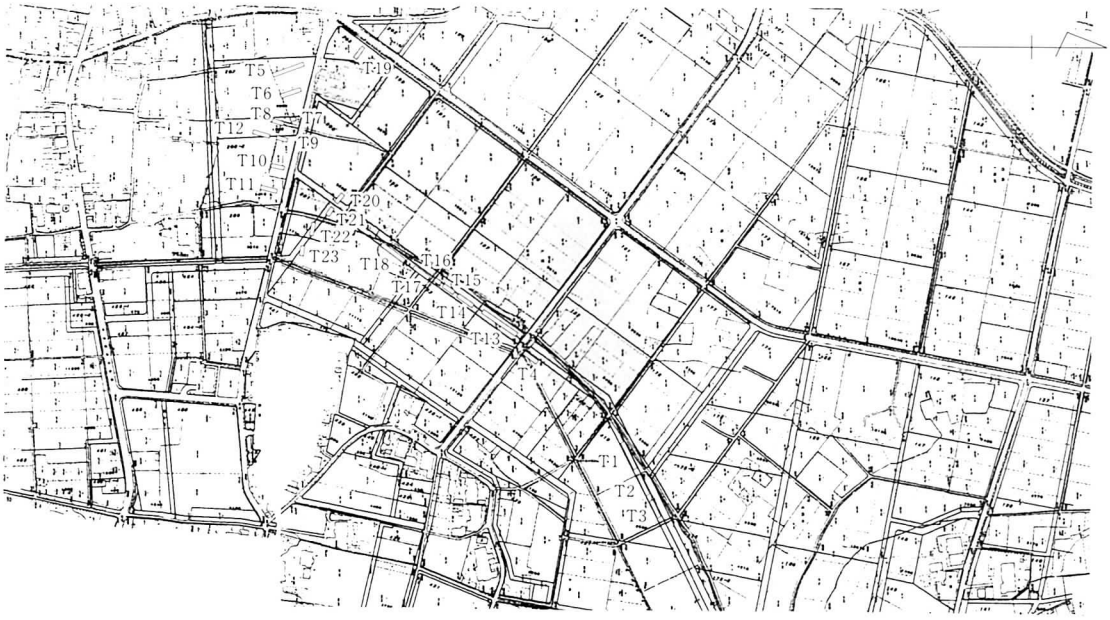
第74図　白山上野遺跡位置図

白山上野遺跡は、JR東北本線陸中折居駅の南東2.7kmに位置している。北上川右岸の沖積平野にある微高地上に立地し、現況は畑及び水田となっている。本遺跡は縄文時代の遺跡として周知されており、昨年度の調査で埋蔵文化財が確認されている。今回の調査は、昨年度の調査範囲に隣接した範囲で道水路予定の範囲及び切り土となる田面が対象である。昨年度の調査範囲では縄文時代の土坑等が検出されている。調査対象区域に５本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ５）。

Ｔ１は調査区の東側に設定した。表土下に地山層とみられる黄褐色土層が確認された。周辺調査区では、黄褐色土層の上層に黒褐色土層等が確認され、遺構検出面となっていた。このため、このトレンチを設定した範囲では、過去の水田造成等により地形改変が行われたと考えられる。いずれの層序でも、遺構及び遺物は確認されなかった。

Ｔ２～Ｔ４は、昨年度の調査で埋蔵文化財が確認された面と標高がほぼ同様の面に設定した。Ｔ２からは表土下に地山層とみられる黄褐色土層が検出され、上面から溝状の遺構が１条確認された。周辺から土器の細片も出土している。Ｔ３では、表土下に縄文土器を多く含んでいる褐色土の遺物包含層がみられた。Ｔ４では、遺物包含層が確認され、暗褐色土層の上面で、３ｍ四方程度の炭化物等が集中する範囲が確認され、焼土等も含んでおり、竪穴住居状の遺構と判断している。これらのＴ２～Ｔ４を設定した範囲は、昨年度の調査で確認された遺構等が広がるものと考えられる。

Ｔ５はＴ２～Ｔ４を設定した段丘面から一段低い面に設定した。このトレンチでは、表土下に砂礫層が確認され、その下層は砂層となっていた。周辺調査区の状況等から、このトレンチを設定した面は旧河道にあたる範囲と考えられる。



第75図　白山上野遺跡調査区位置図

23　経営体育成基盤整備事業白山地区

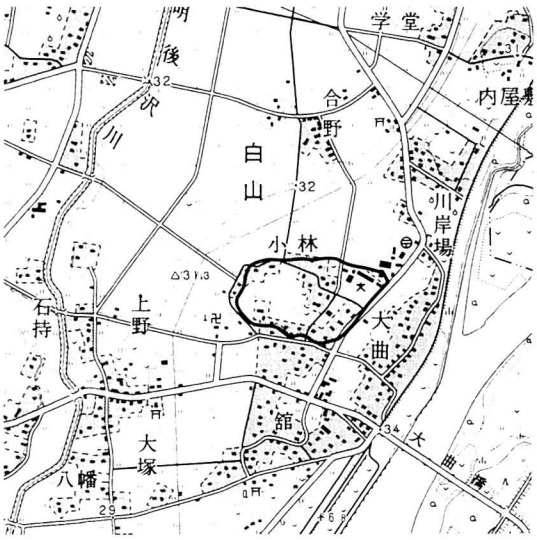
小林繁長遺跡（NE47－1046）

所 在 地；奥州市前沢区白山

事 業 者；県南広域振興局農林部農村整備室

調査期日；平成19年10月29日、30日、11月13日、14日

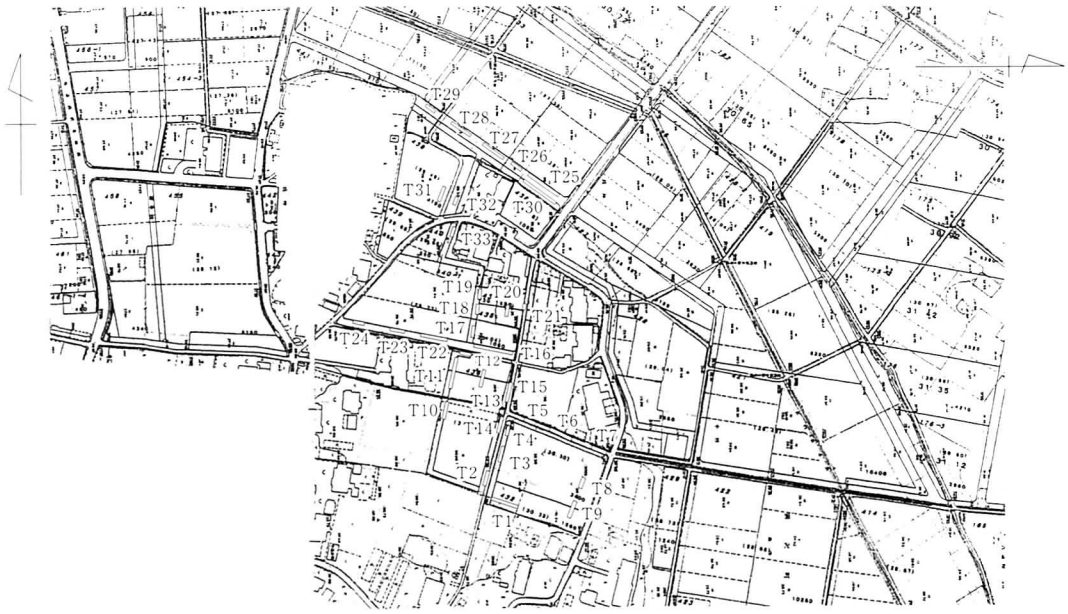
小林繁長遺跡は、奥州市役所前沢総合支所の北東約3.5kmに位置し、北上川右岸の沖積地上に立地しており、標高は30～31m程である。現況は水田である。今回の調査は、経営体育成基盤整備事業白山地区に伴うもので、切り土の田面及び道排水路部分を対象としている。小林繁長遺跡は、縄文時代、弥生時代、平安時代の遺跡として周知されている。今回の調査対象範囲に33本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ33）。



第76図　小林繁長遺跡位置図

調査区東側では、Ｔ１で表土下の黒褐色土層で幅約75cm程度の溝状遺構、80×80cm程の土坑が検出された。Ｔ３では、幅80cm程の溝状遺構が確認さえた。Ｔ６でも、東西方向に伸びる幅約90cm程の溝が確認された。Ｔ12からは、遺構は確認されなかったが、縄文土器及び剥片が出土した。より東側に設定したＴ16からは、30×30cm程の隅丸方形の柱穴状遺構が確認された。Ｔ17からは、焼土遺構が確認され、縄文土器も出土した。Ｔ18、Ｔ19では、遺構は確認されなかったが、縄文土器片が出土した。Ｔ22からは、縄文土器が多数出土し、竪穴住居状の遺構も確認された。Ｔ23からも土坑が確認され、Ｔ31からも、焼土遺構が確認され、縄文土器が多数出土した。Ｔ33からも縄文土器が出土した。

これらの調査結果から、小林繁長遺跡は、北上川右岸の沖積地上に所在する微高地の範囲に広がっており、出土遺物等から縄文時代中期を中心とした遺跡であると考えられる。



第77図　小林繁長遺跡調査区位置図

24　経営体育成基盤整備事業古城地区

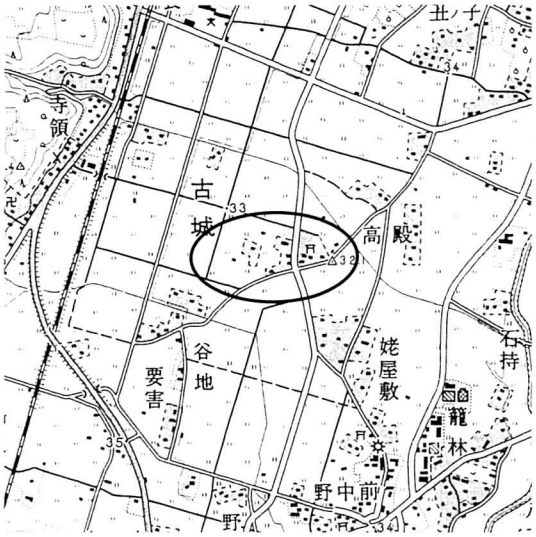
境田遺跡（NE46－1227）

所 在 地；奥州市前沢区古城

事 業 者；県南広域振興局農林部農村整備室

調査期日；平成19年10月16日、17日

今回の調査範囲は、JR東北本線陸中折居駅の南約２km に位置している。北上川右岸の沖積平野にある微高地上に立地し、現況は畑及び水田となっている。今、以前の分布調査回答で試掘調査が必要と回答した箇所である。調査対象区域に109本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ109）。



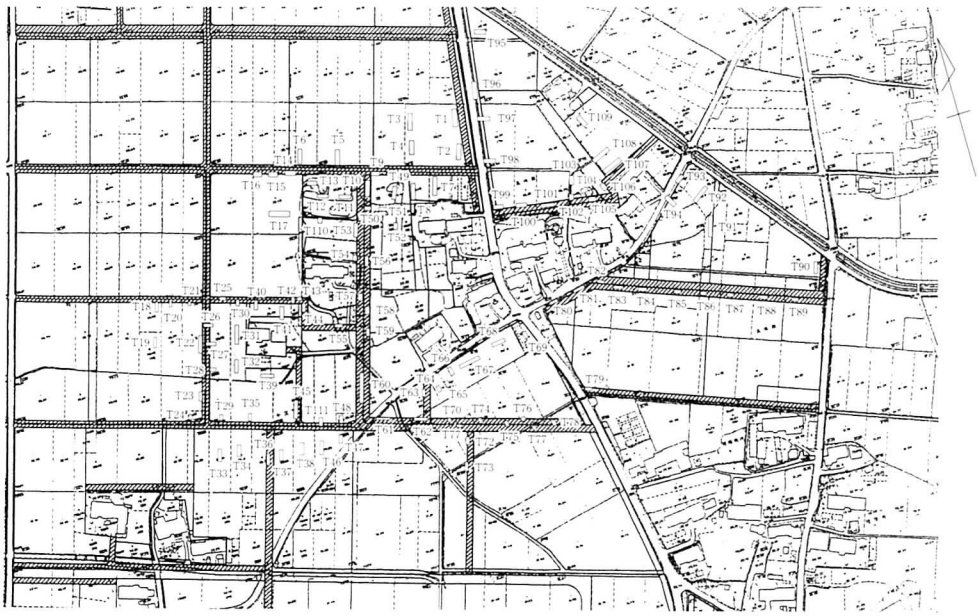
第78図　境田遺跡位置図

Ｔ11～Ｔ13は周辺の田面より高い微高地状に残された箇所に設定した。Ｔ11では15×15cmの柱穴が第Ⅳ層上面で、土師器坏の底部が第Ⅲ層中で確認できた。Ｔ12では30×30の土坑と土師器坏が同様の層序から確認でき、Ｔ13でも土師器が検出された。これらのことから、Ｔ11～Ｔ13を設定した微高地は本来の地形をとどめており、周辺が削平されたために現在のように独立して残されたもの考えられる。この微高地の周辺に設定したトレンチでは第Ⅱ層の直下に地山層が確認されており、水田造成時に削平されたものとみられる。なお、Ｔ13の周辺には近世の墓石が残されている。

Ｔ40では陥し穴が第Ⅳ層上面で確認された。このトレンチの周辺では、第Ⅲ層等はみられなかったものの、Ｔ40～Ｔ44では周辺部がグライ化した地山層は異なり、湿地帯ではなかったものとみられる。Ｔ40で陥し穴が検出されており、同様の層序の残る周辺部まで遺構が広がるものとみられる。

この他のトレンチでは遺構及び遺物は確認されなかった。

以上の結果、Ｔ11～Ｔ13を設定した微高地とＴ40～Ｔ44を設定した宅地周辺で、埋蔵文化財が確認された。



第79図　境田遺跡調査区位置図

25　経営体育成基盤整備事業古城地区

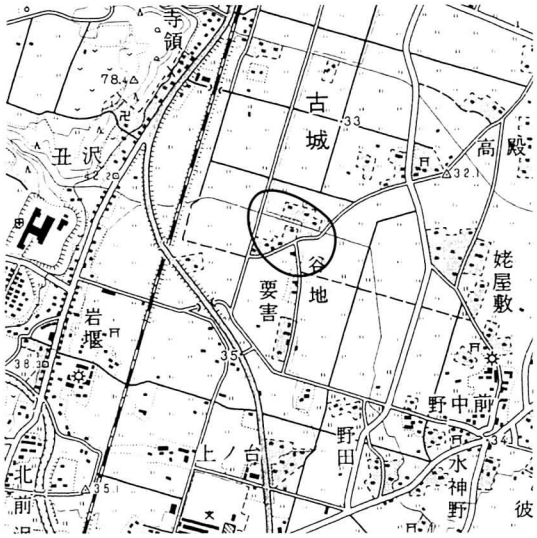
要害Ⅱ遺跡（NE46－1255）

所 在 地；奥州市前沢区古城

事 業 者；県南広域振興農林部農村整備室

調査期日；平成19年10月19日

要害Ⅱ遺跡は、奥州市役所前沢総合支所の北東約2.5kmに位置し、北上川右岸の沖積地上に立地しており、標高は32～33m程である。現況は水田となっている。平成17年度に当課で分布調査を行い、埋蔵文化財が所在する可能性があると判断し、今回試掘調査を行ったものである。今回の調査は経営体育成基盤整備事業に伴うもので、道排水路及び田面の切り土部分を対象としている。今回の調査範囲に19本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ19）。



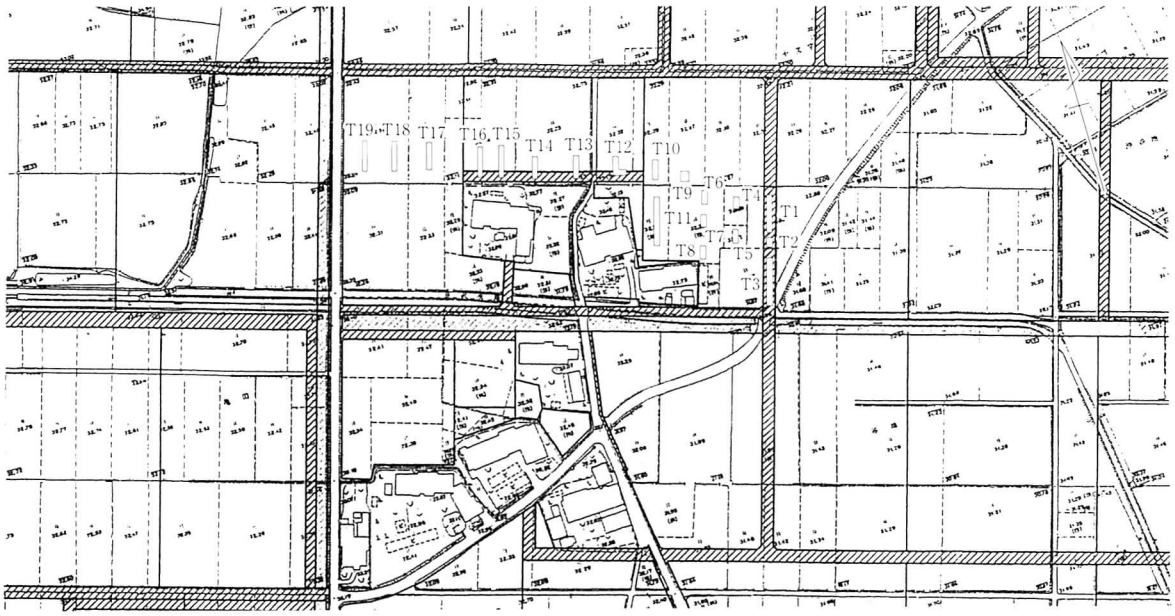
第80図　要害Ⅱ遺跡位置図

調査区の基本土層は、第Ⅰ層が表土、耕作土で層厚20cm、第Ⅱ層が黒褐色土層で、遺物を包含しており、層厚が15cm、第Ⅲ層が地山とみられる黄褐色土層である。

Ｔ９をのぞくＴ１～Ｔ８では、いずれも第Ⅱ層の残存が良好でなく、過去の水田造成などに伴う地形改変により大きく削平が行われたとみられる。

Ｔ９では第Ⅱ層から、土師器片が出土している。また、土坑を１基、柱穴状遺構を３基確認している。柱穴状遺構１基からは、埋土中から土師器片が出土しており、遺構も当該時期のものと考えられる。また、埋土の状況が、その他の遺構とも同様であり、同時期の遺構と考えられる。

今回の調査の結果、要害Ⅱ遺跡は以前の水田造成等により、地形の改変が行われているが、一部で、遺構検出面が残存することが確認された。土師器片等が出土していることから、古代の集落跡が所在するものと考えられる。



第81図　要害Ⅱ遺跡調査区位置図

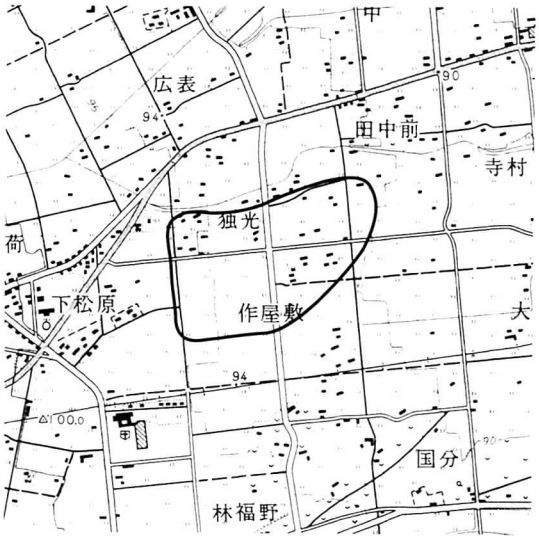
26　経営体育成基盤整備事業都鳥地区

作屋敷遺跡（NE25－1123）

所 在 地；奥州市胆沢区南都田

事 業 者；県南広域振興局農林部農村整備室

調査期日；平成19年10月９日～11日、11月１日



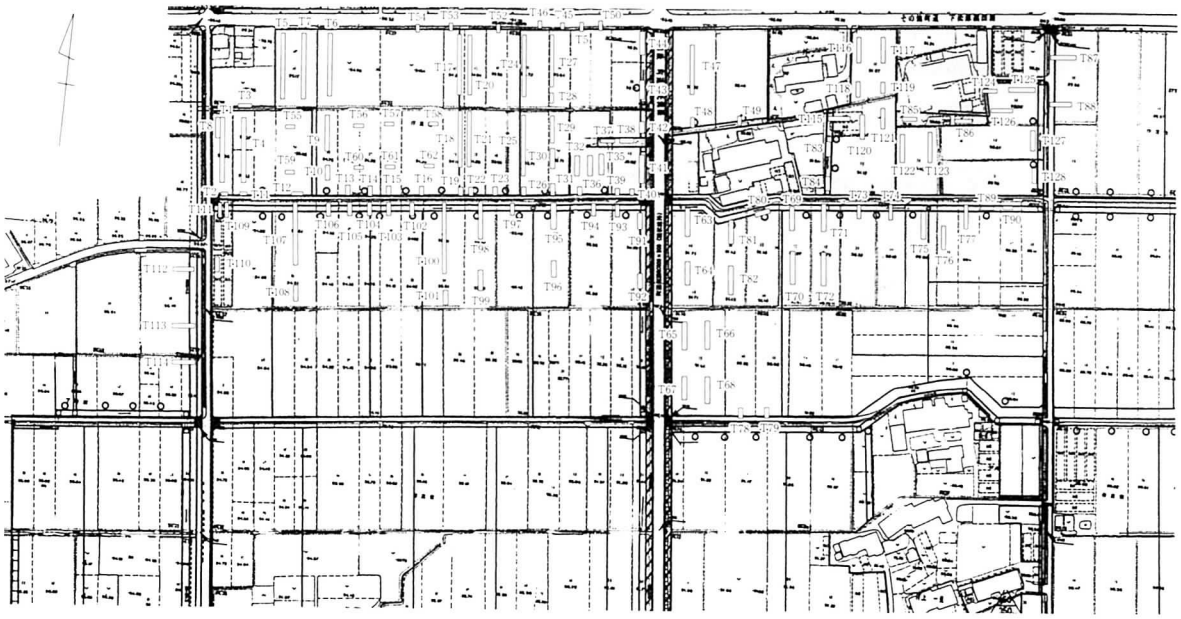
第82図　作屋敷遺跡位置図

作屋敷遺跡は、奥州市役所の南西約5.9kmに位置し、胆沢扇状地の低位段丘面に立地しており、標高は90～96m程である。現況は水田である。今回の調査は経営体育成基盤整備事業都鳥地区に伴うもので、切り土の田面及び道排水路部分を対象としている。今回の調査範囲に128本のトレンチを設定した。（Ｔ１～Ｔ128）。

調査範囲の西側に設定したＴ１、Ｔ８から190×15cm程の東西方向に伸びる陥し穴状の土坑を確認している。また竪穴住居の煙道部分とみられる遺構を確認した。埋土中から、土師器片と須恵器片が出土している。調査範囲の北東側に設定したＴ７では、北西から南東方向に伸びる幅80cm程度の溝跡を確認しているほか、30×30cmほどの柱穴状の土坑を確認している。このトレンチでは、土師器片が出土している。Ｔ５、Ｔ６からも溝跡や土坑を確認しており、これらの遺構を確認できた範囲より南側の範囲に設定したＴ２、Ｔ11～Ｔ31では、湿地帯とみられる黒色土層が厚く堆積しており、これらの範囲では標高がやや低く湿地帯が広がると考えられる。

調査範囲の中央部分に設定したＴ41～Ｔ44では竪穴住居状の遺構や柱穴、溝跡を確認しており、これらの範囲にも遺構が所在すると考えられる。これらの遺構の周辺からも土師器、須恵器が出土しており、当該時期の遺構と考えられる。遺物は、土師器、須恵器のほか、灰釉陶器とみられるものを含んでいる。遺物の特徴から、９世紀後半を中心とした時期とみられる。

これらの調査結果から、作屋敷遺跡では南側の湿地帯からやや標高の高くなる現在の町道付近を中心に竪穴住居跡や溝跡が所在すると考えられる。遺物は土師器や須恵器が多く、９世紀後半代とみられるほか、灰釉陶器等も出土しており、注目される。また、少量ながら縄文時代中期の土器も出土しており、縄文時代の遺構も所在する可能性があるとみられる。



第83図　作屋敷遺跡調査区位置図

27　経営体育成基盤整備事業都鳥地区

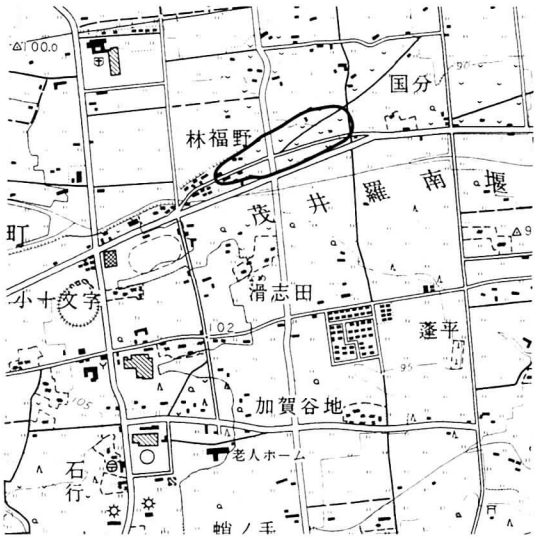
尼坂遺跡（NE25－1123）

所 在 地；奥州市胆沢区南都田

事 業 者；県南広域振興局農林部農村整備室

調査期日；平成19年11月11日、12日

尼坂遺跡は、奥州市役所胆沢総合支所の北東約0.7kmに位置し、胆沢扇状地の段丘面に立地しており、標高は約92m程である。今回の調査は経営体育成基盤整備事業都鳥地区に伴うもので、切り土の田面及び道排水路部分を対象としている。今回の調査範囲に17本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ17）。

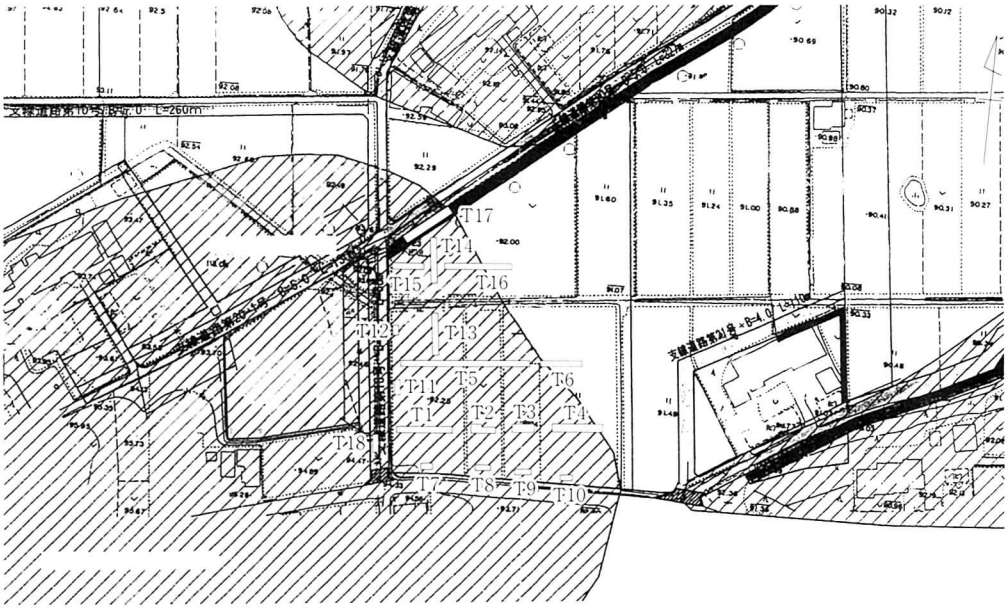


第84図　尼坂遺跡位置図

基本土層は、第Ⅰ層が表土・耕作土で層厚が10～40cm、第Ⅱ層が黒褐色土層で層厚が65～90cm、第Ⅲ層が地山とみられる黄褐色土層である。

Ｔ16では溝状の遺構が確認されたほか、Ｔ３では縄文土器片が出土している。Ｔ１～Ｔ６、Ｔ11、Ｔ12では削平が少なく、基本土層が確認されたが、その他のトレンチでは水田造成等による削平がみられた。

今回の調査範囲は、尼坂遺跡の中心とみられる段丘面より、標高の低い低位段丘面にあたる範囲であり、埋蔵文化財の分布はそれほど広くないと考えられる。ただし、一部で遺構が確認されているほか、縄文土器片も出土していることから、遺跡の端部にあたるとみられる。



第85図　尼坂遺跡調査区位置図

28　経営体育成基盤整備事業都鳥地区

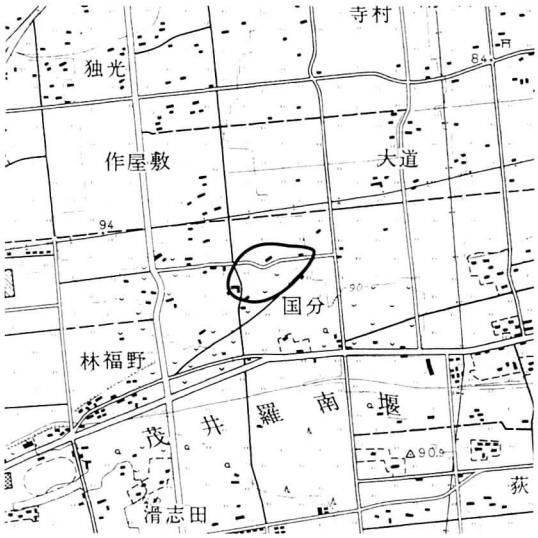
牡丹野遺跡（NE25－0185）

所 在 地；奥州市胆沢区南都田

事 業 者；県南広域振興局農林部農村整備室

調査期日；平成19年10月11日、12日、15日、11月１日

牡丹野遺跡は、奥州市役所の西方約5.2kmに位置し、胆沢扇状地の低位段丘面である水沢段丘面に立地している。今回の調査はほ場整備事業に伴うもので、切土予定の田面、農道及び排水路設置予定箇所が対象である。今回の調査範囲の西側の宅地周辺では、平成18年度に平安時代の竪穴住居跡を確認しており、当課で発掘調査を行っている。調査対象箇所に53本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ53）。

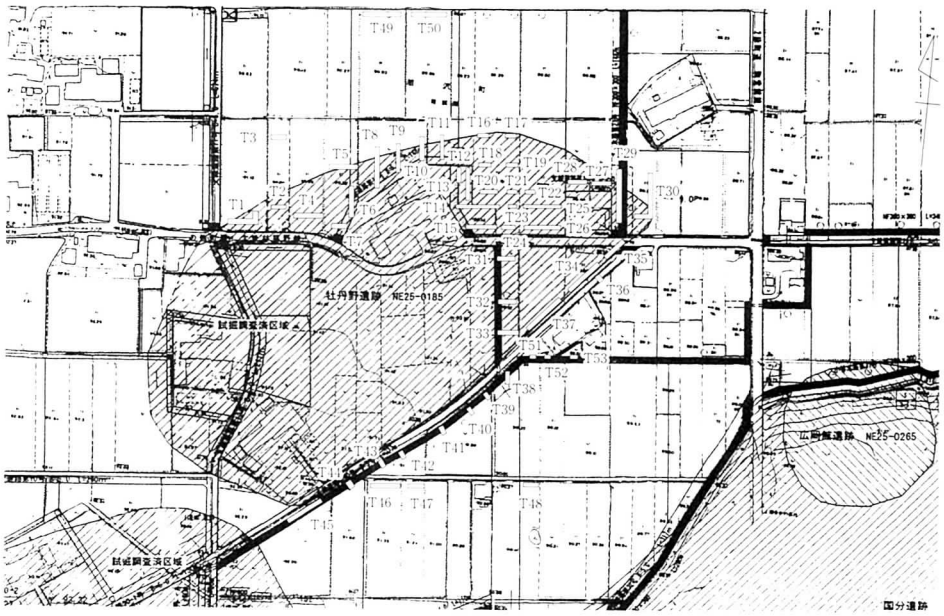


第86図　牡丹野遺跡位置図

基本土層は第Ⅰ層が表土・盛土で層厚が15～30cm、第Ⅱ層が第１検出面にあたる黒色土層で層厚が０～20cm、第Ⅲ層が漸移層で層厚が０～15cm、第Ⅳ層が第２検出面にあたる褐色土層である。

Ｔ１において、第Ⅲ層上面で古代の竪穴住居跡１棟を検出した。埋土は黒色を示し、多量の土器片、焼土粒及び炭化物粒が含まれていた。Ｔ４では、耕作土直下に包含層が確認された。そのほかＴ44において、第Ⅳ層上面で古代竪穴住居跡、Ｔ12及びＴ46で時期不明の溝跡２条、時期不明であるがＴ13で径30～35cm大の柱穴状土坑２基、Ｔ28で60×80cmの楕円を示す土坑１基が検出された。Ｔ12、Ｔ13においては基本層序と同様の層序を示していたが、Ｔ28においては、耕作土直下に第Ⅳ層の順であった。

以上のことから、遺構が確認された箇所は、現在の宅地及びその周辺であり、旧地形においても微高地であった区域であると推測した。



第87図　牡丹野遺跡調査区位置図

29　津付ダム建設事業

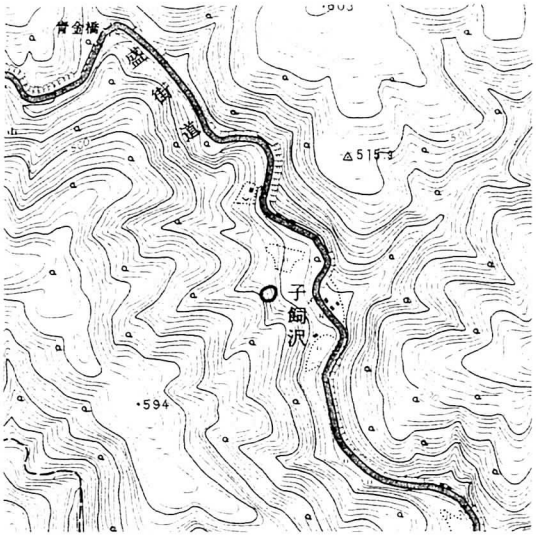
子飼沢Ⅰ遺跡（MF13－0150）

所 在 地；住田町世田米字子飼沢

事 業 者；大船渡地方振興局土木部津付ダム建設事務所

調査期日；平成19年12月４日

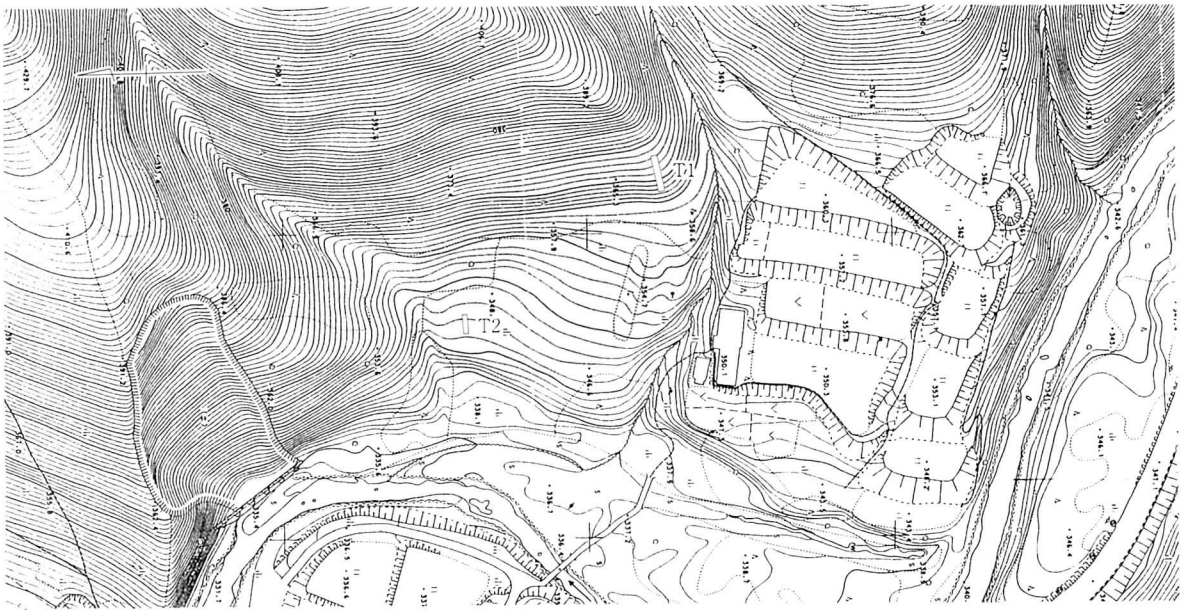
子飼沢Ⅰ遺跡は、住田町役場から西約11kmほどに位置し、大股川右岸の河岸段丘上に立地している。調査対象区域は、分布調査により埋蔵文化財包蔵地の可能性があると示された範囲である。近接した箇所には、江戸時代末の製鉄遺跡である子飼沢高炉跡が存在する。調査対象区域に２本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ２）。



第88図　子飼沢Ⅰ遺跡位置図

Ｔ１では、表土下に礫の混じらない土層が確認された。第Ⅲ層において、30×40cm程度の土坑を１基確認した。土坑埋土には、縄文土器片を含んでおり、縄文時代の遺構と判断できる。Ｔ２では、礫の混じる土層が表土下にみられ、検出面等は確認されなかった。Ｔ２を設定した面は、Ｔ１を設定した緩斜面より標高の下がった面であり、河川の影響を受けやすい地形であったと考えられる。これらのことから埋蔵文化財は、Ｔ１を設定した緩斜面に広がり、縄文時代の遺跡と考えられる。

これらのことから、今回の調査範囲は子飼沢Ⅱ遺跡の縄文時代の遺構と同様に、大股川右岸の段丘上に展開する縄文時代の遺跡とみられる。ただし、この遺跡範囲には緩斜面や平場等が少なく、遺構の広がりは少ないものとみられる。



第89図　子飼沢Ⅰ遺跡調査区位置図

30　津付ダム建設事業

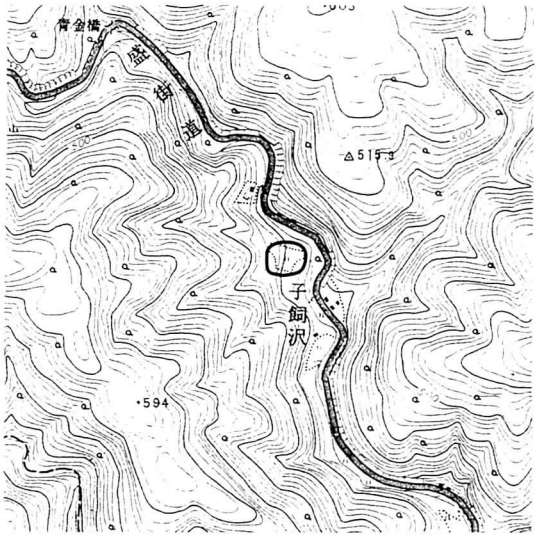
子飼沢Ⅱ遺跡（MF13－0140）

所 在 地；住田町世田米字子飼沢

事 業 者；大船渡地方振興局土木部津付ダム建設事務所

調査期日；平成19年12月３日、４日、12月６日、７日

子飼沢Ⅱ遺跡は、調査区は、住田町役場の西方約11.5㎞に位置し、大股川右岸に形成された河岸段丘状の緩やかな傾斜地に立地し、周知の遺跡である子飼沢高炉跡とは川を挟んで、南側に立地している。調査区の標高は、約337～362ｍを測り、現況は宅地跡及び畑地跡となっている。今回の調査は、ダム建設事業に伴う残土置場候補地に係るもので、調査対象区域に11本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ11）。



第90図　子飼沢Ⅱ遺跡位置図

Ｔ１、Ｔ２を設定した箇所は、水田造成時に大きく地形改変を受けていることが伺え、第Ⅰ層、第Ⅱ層下層は、第Ⅵ層であった。 水田あるいは畑地は、旧地形において山側を削平し、それによる発生土を盛土材として川側に盛土を施して造成していた。そのため、厚い盛土の下層は、旧表土と思われる黒色土が残存しており、掘り下げたところ、縄文時代の土器を含む包含層が２箇所確認された。Ｔ３において含まれる土器片が少なかったため、掘り下げたが遺構は確認できなかった。流れ込んだと思われる摩滅の激しい土器片もみられた。

さらに標高の高い水田にＴ５、Ｔ７、Ｔ９を設定した。盛土内から多量の炉壁片、鉄滓が出土したことから掘り下げたところ、Ｔ５において、第Ⅲ層上面から掘り込んだと思われる鉄滓が多く埋土に含まれる土坑（径120×140㎝）が１基検出された。Ｔ５に近接してＴ８を設定した。Ｔ８においては、盛土からも鉄滓が出土したため、掘り下げたところ、多量の黒色の小礫、炉壁片、鉄滓が広範囲で分布している箇所が確認され、鉄滓は気泡が多く抜けた穴を持つことから、鍛冶炉に伴うものであると推測し、黒色の遺物分布範囲は、鍛冶炉の前庭部に当たる区域であると推測した。その他の遺物が出土していないため、構築時期は不明であるが、近接して子飼沢高炉跡が所在しており、関連する近世に構築された鍛冶炉等が所在する可能性が考えられる。

第91図　子飼沢Ⅱ遺跡調査区位置図

31　県営県単調査事業本寺地区

骨寺村荘園遺跡（ＮＥ72－2283）

所 在 地；一関市本寺

事 業 者；県南広域振興局一関総合支局農林部農村整備室

調査期日；平成19年11月５日

骨寺村荘園遺跡は、遺跡は、一関市役所の北北西約15kmに位置し、磐井川左岸の河岸段丘上に立地している。現況は、主に水田及び宅地となっている。本遺跡は、中尊寺所蔵の「骨寺村絵図」にも描写されている中尊寺の荘園跡として周知されている。また、同時に、中世さながらの景観が残っているとして、重要文化的景観として指定されている区域である。

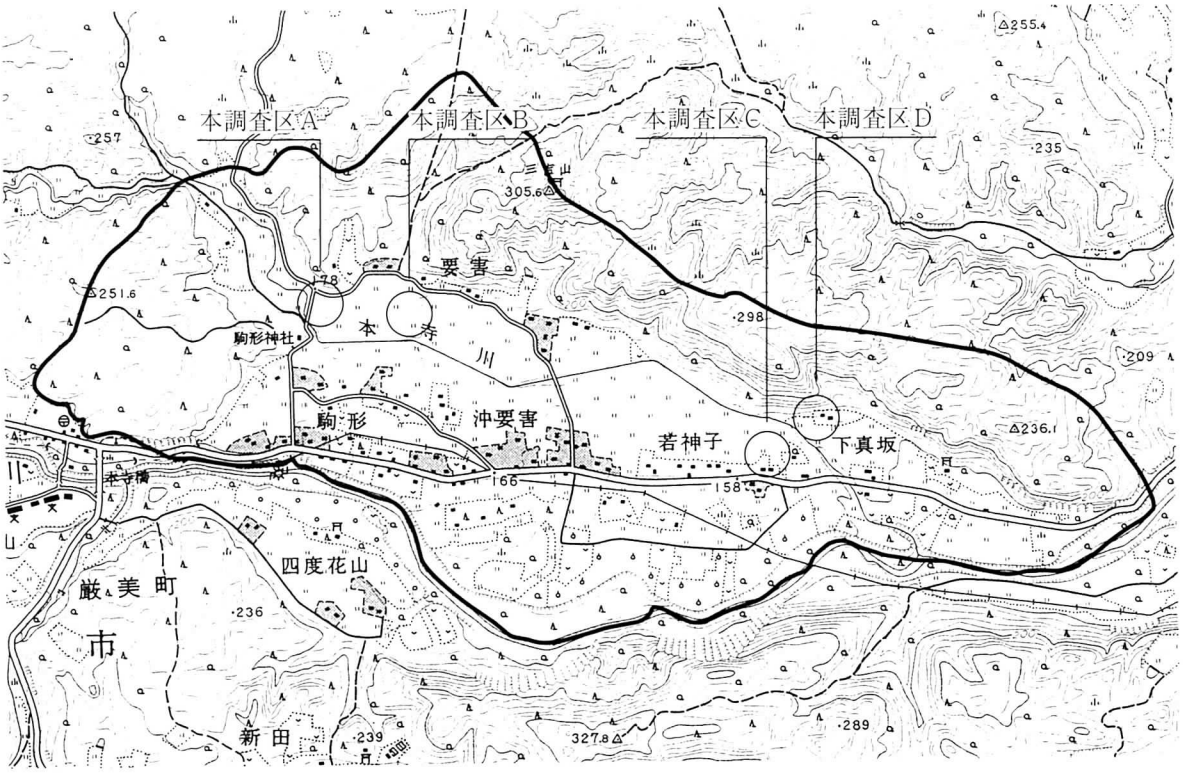
今回の調査はほ場整備事業に伴うもので、試験施工の暗渠排水設置予定箇所の田面、言動部分、畦畔除去箇所が対象である。調査対象区域は４箇所であることから、田区39番を調査区Ａ、田区455番を調査区Ｂと便宜上呼称することとする。調査対象区域に10本の試掘トレンチを設定した（調査区Ａ；Ｔ１～Ｔ２、調査区Ｂ；Ｔ３～Ｔ10）。

調査区Ａに設定したＴ２において、第Ⅰ層、盛土下に十和田ａ降下火山灰をブロック状に含む層がみられ、掘下げたところ、第Ⅴ層上面で径30cm大の柱穴状土坑２基、径80cm以上の楕円形を示す土坑１基が検出された。これら遺構の埋土は、黒色であったが、遺構に結びつくような遺物は確認できなかった。Ｔ２において、第Ⅳ層の黒色土から古代のものと思われる土師器片が数点出土した。そのことから、検出された遺構の時期は、古代であると推測される。

調査区ＢにＴ３～Ｔ10を設定した。いずれのトレンチも、基本層序と同様の層序であり、検出面にあたる層は確認されず、地山面はグライ化が著しかった。

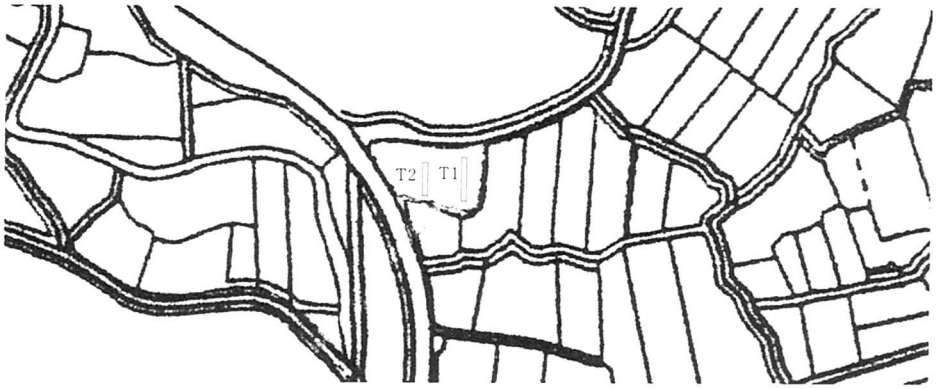
調査区Ｃでは、現在の道路面の下層に黒色土層、砂礫層となっており、湿地帯であったと考えられる。

調査区Ｄでは、畦畔を除去する範囲を対象としている。この範囲では畦畔除去分以下の掘削は行っていない。



第92図　骨寺村荘園遺跡調査区位置図

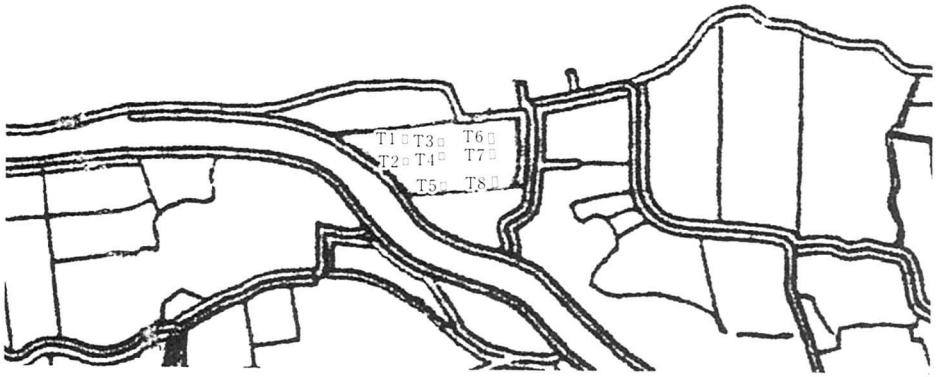
調査区Ａ



調査区Ｂ

調査区Ｃ

調査区Ｄ



第93図　骨寺村荘園遺跡調査図

32　経営体育成基盤整備事業夏川地区

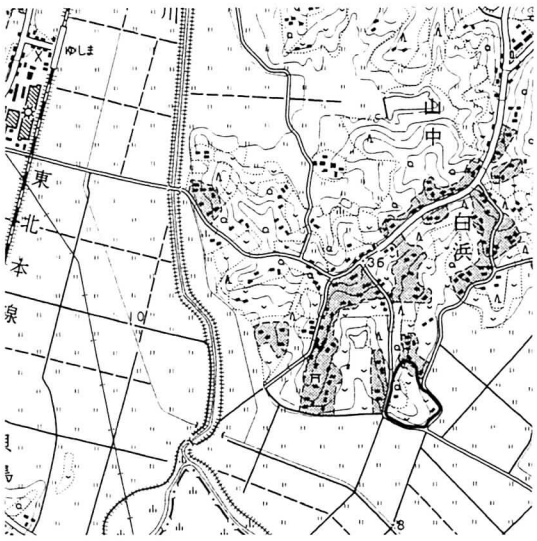
白浜貝塚（OE47－2391）

所 在 地；一関市花泉町湧津字台

事 業 者；県南広域振興局一関総合支局農林部農村整備室

調査期日；平成19年10月17日

白浜貝塚は、一関市役所花泉支所の南東約５kmに位置し、夏川によって形成された沖積地上につきだした台地上に立地し、標高は約6.5mほどである。本遺跡では、当課で試掘調査を行っており、縄文時代後期後半から晩期の遺物が出土している。今回の調査範囲は白浜貝塚が所在する段丘から南東側に下がった水田部分で、遺物包含層等が所在する可能性があることから、試掘調査を行った。今回の調査範囲に７本のトレンチを設定した（Ｔ１～Ｔ７）。



第94図　白浜貝塚位置図

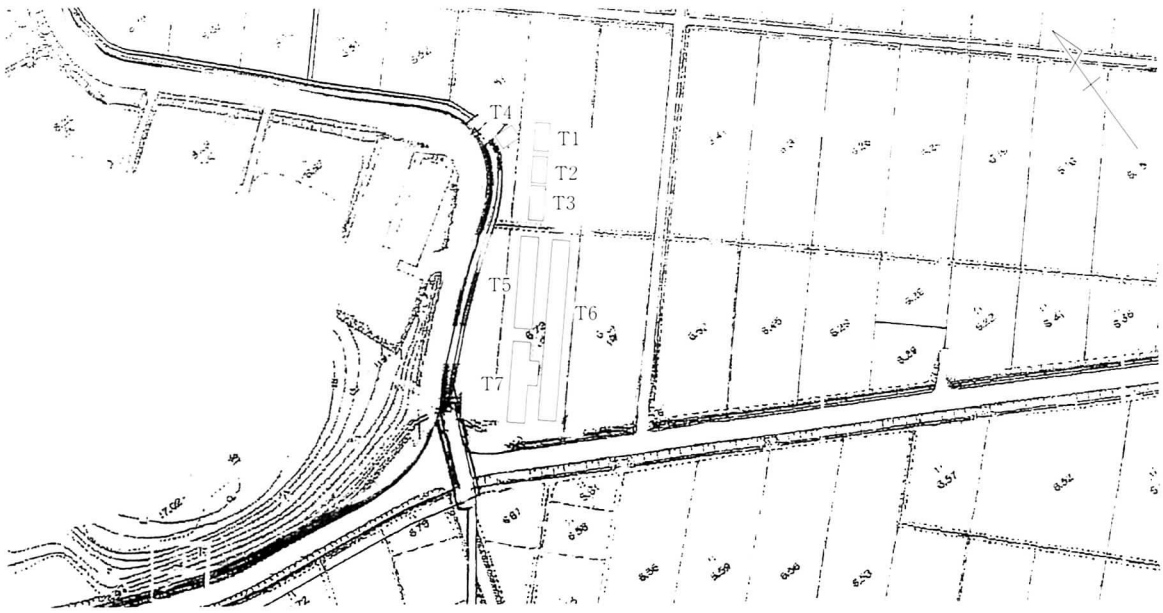
基本土層は、第Ⅰ層が表土で層厚が15cm、第Ⅱ層が青灰色砂質土層で層厚が15cm、第Ⅲ層が灰黄色粘土質土層で遺物を含んでおり層厚が５cm、第Ⅳ層が黄褐色シルト質土層で遺物を含み層厚が10cm、第Ⅴ層が暗褐色シルト質土層で層厚が15cm、第Ⅵ層が浅黄色シルト質土層で層厚が５cm、第Ⅶ層が暗褐色シルト質土層で層厚が40cm、第Ⅷ層が灰色粘土質土層である。

調査範囲の南側に設定したＴ５～Ｔ７では、第Ⅲ層から縄文土器等が出土している。また、Ｔ７では第Ⅳ層で白浜貝塚の遺跡本体から、今回の調査範囲のある湿地帯に向かって伸びる沢跡を確認しており、堆積土中から縄文土器片が出土している。

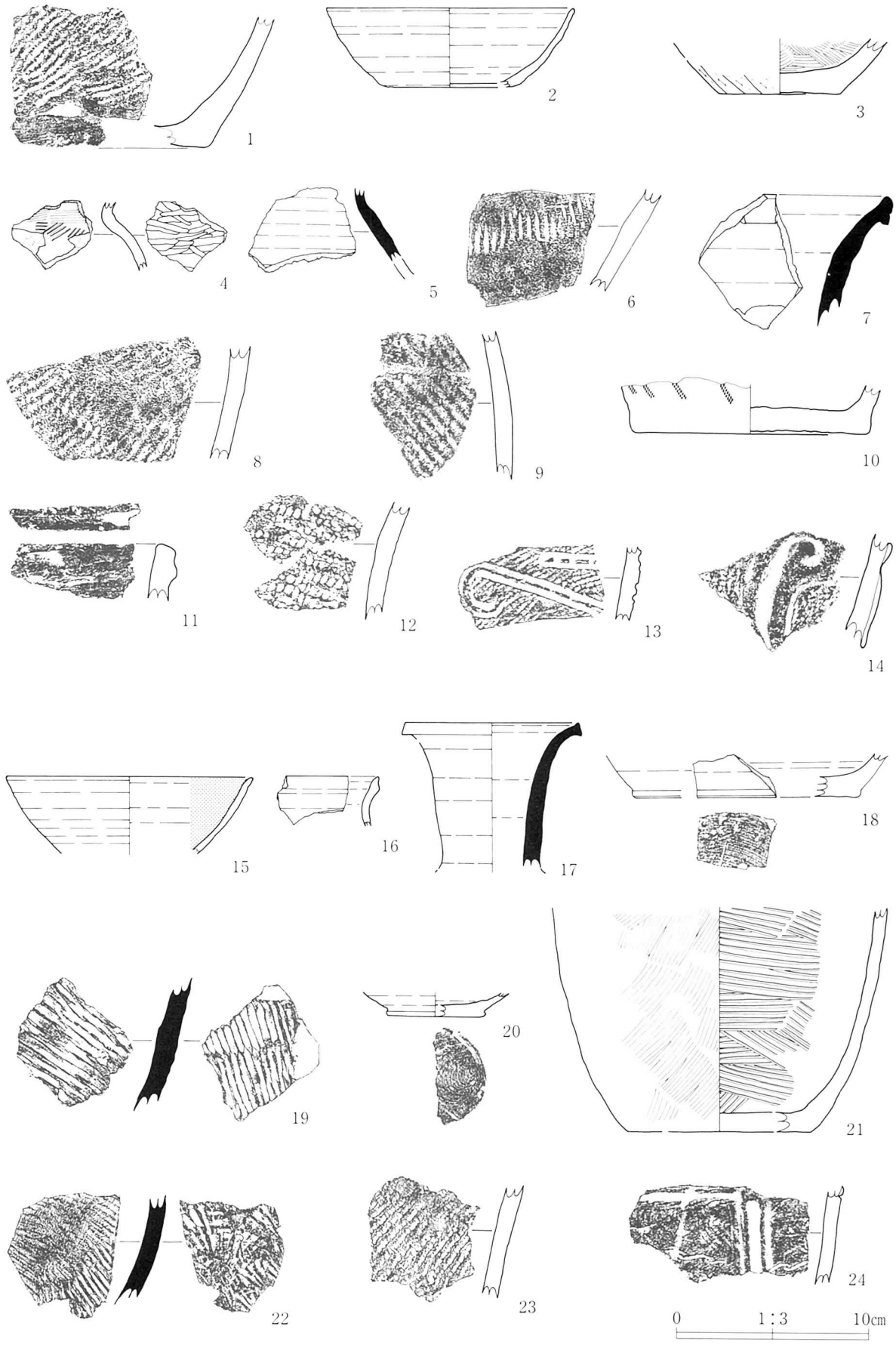
また、これらのトレンチより北側に設定したＴ１～Ｔ４では、第Ⅲ層、第Ⅳ層が確認されなかった。

これらの調査結果から、今回の調査範囲は湿地帯であった範囲とみられるが、一部に貝塚本体が立地する丘陵部分からの土器が含まれる層が伸びるとみられる。

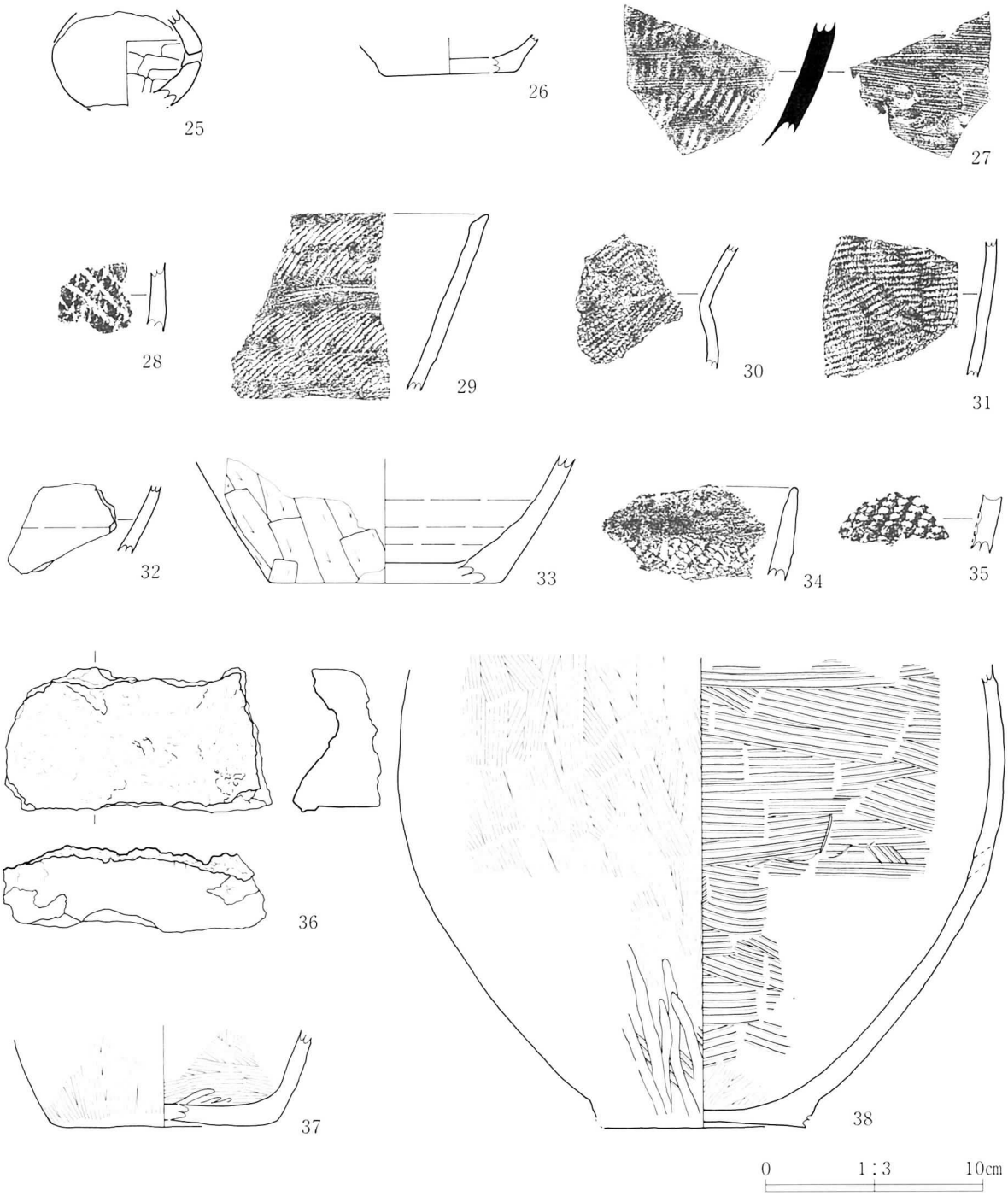
岩手県教育委員会1998『岩手の貝塚』岩手県文化財調査報告書第102集



第95図　白浜貝塚調査区位置図



第96図　試掘調査出土遺物（１）



第97図　試掘調査出土遺物（２）

試掘調査掲載遺物一覧

番号	遺跡名	層位	種別	器種	特徴
1	上平Ⅲ	カクラン	縄文	深鉢？	ＬＲ縄文　胎土に雲母を多く含む
2	白山上野	Ⅱ層（包含層）	土師器	坏	内外面　ロクロ目
3	〃	〃　〃	〃		外面ケズリ　内面ナデ
4	〃	〃　〃	〃		外面　ハメ目　ナデ　内面黒色処理ミガキ
5	〃	〃　〃	須恵器	カメ	ロクロ
6	〃	〃　〃	陶器	〃	外面タタキメ
7	〃	〃　〃	須恵器		ロクロ
8	小林繁長		縄文	深鉢	マメツが著しい
9	〃		〃	〃	ＲＬ縄文
10	下中居Ⅰ	Ｔ110カクラン土	〃		底部破片　縄文　中期
11	下中居Ⅱ		〃		
12	下中居Ⅲ	包含層	〃		
13	下中居Ⅲ	黒色土	〃		縄文　中期
14	作屋敷		〃		縄文　中期　大木８ｂ式
15	〃		土師器	坏	ロクロ　内面　黒色処理
16	〃		〃	甕	ロクロ
17	〃		須恵器	壺	ロクロ
18	〃		灰釉陶器		ロクロ　底部回転糸切り痕
19	〃		〃	甕	タタキメ
20	境田		土師器	坏	ロクロ　底部回転糸切り痕　内面非黒色処理
21	〃		〃	甕	外面ナデ　内面ハケメ
22	〃		須恵器	〃	タタキメ
23	新町		縄文		
24	〃		〃		
25	〃		土製品	ミニチュア土器	古墳時代中期か
26	〃		土師器	坏	
27	〃		須恵器		タタキメ
28	駒板３		縄文		撚糸文
29	〃		〃	深鉢	Ｌ単節縄文　縄文後期
30	〃		〃		ＬＲ縄文　縄文後期
31	〃		〃		ＬＲ縄文　縄文後期
32	骨寺村荘園	黒色土	土師器	坏	
33	〃	〃	〃		ロクロ　外面ケズリ
34	子飼沢Ⅰ	Ｔ４黒色土	縄文		
35	〃	Ｔ11黒色土	〃		
36	〃	盛土		炉壁？	
37	昼久保	用途不明土抗	土師器	甕	外面ナデ　内面ナデ　底部内側にミガキ
38	雨滝		〃	〃	外面ヘラナデ　内面ハケメ

平成19年度　試掘調査一覧

No	調査期日	事業名	事業者	遺跡名	所在地
1	平成19年4月12日	広域農道整備事業軽米九戸2期地区	二戸地方振興局土木部長	板子屋敷3遺跡隣接地	軽米町
2	平成19年4月23日～24日	胆沢ダム建設事業	国土交通省東北地方整備局胆沢ダム建設事務所長	下嵐江Ⅰ遺跡	奥州市
3	平成19年4月23日～24日	胆沢ダム建設事業	国土交通省東北地方整備局胆沢ダム建設事務所長	下嵐江Ⅱ遺跡	奥州市
4	平成19年4月25日～26日	広域農道整備事業軽米九戸2期地区	二戸地方振興局土木部長	板子屋敷3遺跡隣接地	軽米町
5	平成19年5月8日	東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）新直轄事業	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所長	中嶋遺跡隣接地	花巻市
6	平成19年5月9日	東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）新直轄事業	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所長	落合2区1遺跡	花巻市
7	平成19年5月9日	東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）新直轄事業	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所長	倉沢10区Ⅰ遺跡	花巻市
8	平成19年5月15日	経営体育成基盤整備事業　白山地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	白山上野遺跡	奥州市
9	平成19年5月24日	一般国道106号都南川目道路改築工事	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所長	可能性あり②	盛岡市
10	平成19年5月22日	畑地帯総合整備事業　奥中山地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	椛の木遺跡	一戸町
11	平成19年5月22日	畑地帯総合整備事業　奥中山地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	西田子ＸＸＸⅡ遺跡	一戸町
12	平成19年6月4日	道路改築事業	県南広域振興局一関総合支局土木部千厩土木センター所長	可能性あり	一関市
13	平成19年6月4日	通常砂防事業	県南広域振興局土木部長	中屋敷Ⅱ遺跡	奥州市
14	平成19年6月5日	一般国道45号中野バイパス改築事業	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所長	真木沢Ⅳ遺跡	田野畑村
15	平成19年6月6日	緊急地方道路整備事業	釜石地方振興局土木部長	可能性あり①	釜石市
16	平成19年6月7日	広域農道整備事業軽米九戸2期地区	二戸地方振興局土木部長	板子屋敷3遺跡隣接地	軽米町
17	平成19年6月8日	主要地方道一戸葛巻線小鳥谷地区道路改良事業	二戸地方振興局土木部長	穴久保遺跡隣接地	一戸町
18	平成19年6月11日	緊急地方道路整備事業	盛岡地方振興局土木部長	高柳遺跡	滝沢村
19	平成19年6月15日	緊急地方道路整備事業	盛岡地方振興局土木部長	高柳遺跡	滝沢村
20	平成19年6月15日	緊急地方道路整備事業	盛岡地方振興局土木部長	諸葛川遺跡	滝沢村
21	平成19年6月26日	主要地方道花巻北上線平沢地区歩道設置工事	県南広域振興局北上総合支局土木部長	三坊木遺跡隣接地	北上市
22	平成19年6月29日	主要地方道二戸九戸線長興寺地区道路改良事業	二戸地方振興局土木部長	大道端遺跡隣接地	九戸村
23	平成19年7月6日	緊急地方道路整備事業	県南広域振興局北上総合支局土木部長	持田遺跡	九戸村
24	平成19年7月9日～11日	胆沢ダム建設事業	国土交通省東北地方整備局胆沢ダム建設事務所長	坪渕Ⅲ遺跡	奥州市
25	平成19年7月23日	胆沢ダム建設事業	国土交通省東北地方整備局胆沢ダム建設事務所長	下嵐江Ⅱ遺跡	奥州市
26	平成19年7月24日	胆沢ダム建設事業	国土交通省東北地方整備局胆沢ダム建設事務所長	坪渕Ⅱ遺跡	奥州市
27	平成19年7月17日	中山間地域総合整備事業　中居地区	県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室長	下中居Ⅲ遺跡	花巻市
28	平成19年7月26日	主要地方道北上東和線　才の羽々地区	県南広域振興局北上総合支局土木部長	野田Ⅰ遺跡	北上市
29	平成19年8月6日	草地林地一体的利用総合整備事業　二戸広域第1地区	二戸地方振興局農政部長	可能性あり	二戸市
30	平成19年8月9日	中山間地域総合整備事業　大槌地区	釜石地方振興局農林部長	白銀遺跡	大槌町
31	平成19年8月10日	主要地方道岩泉平井賀普代線切牛地区道路維持修繕事業	宮古地方振興局岩泉土木事務所長	大芦Ⅳ遺跡	田野畑村
32	平成19年8月23日	胆沢ダム建設事業	国土交通省東北地方整備局胆沢ダム建設事務所長	坪渕Ⅱ遺跡	奥州市
33	平成19年7月17日	中山間地域総合整備事業　中居地区	県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室長	下中居Ⅲ遺跡	花巻市
34	平成19年8月27日	経営体育成基盤整備事業　江釣子第一地区	県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室長	下糠塚古館遺跡隣接地	北上市
35	平成19年8月28日	中山間地域総合整備事業	宮古地方振興局農政部長	可能性あり	田野畑村
36	平成19年8月29日	校舎等再編整備事業	教育企画室長	大平1遺跡隣接地	釜石市

No	調査期日	事業名	事業者	遺跡名	所在地
37	平成19年8月30日	草地林地一体的利用総合整備事業　二戸広域第2地区	二戸地方振興局農政部長	五枚橋Ⅰ遺跡隣接地	九戸村
38	平成19年9月5日	一般国道282号一本木地区道路改築（改築公安）事業	盛岡地方振興局土木部長	巣子Ⅱ遺跡隣接地	滝沢村
39	平成19年9月4日	直轄河川改修事業　北上上流石鳥谷築堤	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所長	小館遺跡隣接地	石鳥谷町
40	平成19年9月11日	馬淵川沿岸農業水利事業	農林水産省東北農政局馬淵川沿岸水利事業所長	上平Ⅲ遺跡	二戸市
41	平成19年9月11日	馬淵川沿岸農業水利事業	農林水産省東北農政局馬淵川沿岸水利事業所長	火行塚遺跡	二戸市
42	平成19年9月19日	北上川上流流域下水道事業	北上川上流流域下水道事務所長	上野遺跡	盛岡市
43	平成19年9月19日	北上川上流流域下水道事業	北上川上流流域下水道事務所長	除Ⅰ遺跡隣接地	盛岡市
44	平成19年9月20日	広域農道整備事業東磐井地区	県南広域振興局一関総合支局土木部千厩土木センター所長	尖ノ森Ⅲ遺跡	一関市
45	平成19年9月25日	和賀中部農業水利事業	農林水産省東北農政局和賀中部農業水利事業所長	鳥谷森遺跡	北上市
46	平成19年9月28日	主要地方道軽米九戸線細屋地区交通安全施設整備（歩道）工事	二戸地方振興局土木部長	上細屋遺跡隣接地	九戸村
47	平成19年10月1日	新農業水利システム保全事業横瀬地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	可能性あり5	奥州市
48	平成19年10月1日	新農業水利システム保全事業横瀬地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	可能性あり6	奥州市
49	平成19年10月1日	新農業水利システム保全事業横瀬地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	可能性あり7	奥州市
50	平成19年10月1日	新農業水利システム保全事業横瀬地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	可能性あり8	奥州市
51	平成19年10月1日～2日	新農業水利システム保全事業横瀬地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	可能性あり9	奥州市
52	平成19年10月1日～2日	新農業水利システム保全事業横瀬地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	可能性あり10	奥州市
53	平成19年10月5日	北上川上流流域下水道事業	北上川上流流域下水道事務所長	除Ⅰ遺跡隣接地	盛岡市
54	平成19年10月5日	経営体育成基盤整備事業　増沢東部地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	丸太Ⅱ遺跡	奥州市
55	平成19年10月5日	中山間地域総合整備事業　猿沢地区	県南広域振興局一関総合支局千厩農林センター所長	沢田遺跡隣接地	一関市
56	平成19年10月9日～12日	経営体育成基盤整備事業　都鳥地区及び都鳥2期地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	作屋敷遺跡	奥州市
57	平成19年10月9日～12日	経営体育成基盤整備事業　都鳥地区及び都鳥2期地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	国分遺跡隣接地	奥州市
58	平成19年10月11日	経営体育成基盤整備事業　都鳥地区及び都鳥2期地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	広岡館	奥州市
59	平成19年10月11日	経営体育成基盤整備事業　都鳥地区及び都鳥2期地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	尼坂遺跡	奥州市
60	平成19年10月4日	馬淵川沿岸農業水利事業	農林水産省東北農政局馬淵川沿岸水利事業所長	上平Ⅲ遺跡	二戸市
61	平成19年10月15日	経営体育成基盤整備事業　都鳥地区及び都鳥2期地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	牡丹野遺跡	奥州市
62	平成19年10月15日	農地環境整備事業藤ヶ崎地区	県南広域振興局一関総合支局農林部千厩農林センター所長	払川遺跡隣接地	一関市
63	平成19年10月15日	農地環境整備事業藤ヶ崎地区	県南広域振興局一関総合支局農林部千厩農林センター所長	外大久保遺跡隣接地	一関市
64	平成19年10月16日	経営体育成基盤整備事業　古城地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	可能性あり④	奥州市
65	平成19年10月16日	経営体育成基盤整備事業　古城地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	内ノ町遺跡	奥州市
66	平成19年10月16日	経営体育成基盤整備事業　古城地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	可能性あり12	奥州市
67	平成19年10月16日～17日	経営体育成基盤整備事業　古城地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	寺領沖遺跡	奥州市
68	平成19年10月16日～17日	経営体育成基盤整備事業　古城地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	可能性あり7	奥州市
69	平成19年10月16日～19日	経営体育成基盤整備事業　古城地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	可能性あり11	奥州市
70	平成19年10月18日	経営体育成基盤整備事業　古城地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	可能性あり10	奥州市
71	平成19年10月18日	緊急地方道路整備事業	久慈地方振興局土木部長	本波Ⅶ遺跡	久慈市
72	平成19年10月19日	中山間地域総合整備事業　野田地区	久慈地方振興局農政部農村整備室長	中新山遺跡	野田村
73	平成19年10月19日	経営体育成基盤整備事業　古城地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	可能性あり15	奥州市

No	調査期日	事業名	事業者	遺跡名	所在地
74	平成19年10月22日	経営体育成基盤整備事業　江刺西部地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	三丁遺跡	奥州市
75	平成19年10月22日～23日	経営体育成基盤整備事業　江刺西部地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	沼館遺跡	奥州市
76	平成19年10月22日・24日	経営体育成基盤整備事業　江刺西部地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	鶴羽衣遺跡隣接地	奥州市
77	平成19年10月22日～24日	経営体育成基盤整備事業　江刺西部地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	天竺老婆遺跡	奥州市
78	平成19年10月23日～25日	経営体育成基盤整備事業　江刺西部地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	ME96－1226遺跡	奥州市
79	平成19年10月23日～25日	経営体育成基盤整備事業　江刺西部地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	沼尻遺跡	奥州市
80	平成19年10月23日～24日	経営体育成基盤整備事業　大川目地区	久慈地方振興局農政部農村整備室長	新町遺跡	久慈市
81	平成19年10月24日	唐丹漁港広域漁港整備事業	釜石地方振興局水産部長	本郷御番所跡隣接地	釜石市
82	平成19年10月25日	緊急地方道路整備事業	宮古地方振興局土木部長	可能性ありB	宮古市
83	平成19年10月25日	経営体育成基盤整備　和賀中部六原地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	百寄塚遺跡	金ヶ崎町
84	平成19年10月25日	経営体育成基盤整備　和賀中部六原地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	可能性あり4	金ヶ崎町
85	平成19年10月25日	経営体育成基盤整備　和賀中部六原地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	可能性あり5	金ヶ崎町
86	平成19年10月26日	和賀中部農業水利事業	東北農政局和賀中部農業水利事業所長	神楽遺跡隣接地	北上市
87	平成19年10月26日	中山間地域総合整備事業　中居地区	県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室長	下中居Ⅲ遺跡	花巻市
88	平成19年10月29日	北上川上流流域下水道事業	北上川上流流域下水道事務所長	除Ⅰ遺跡隣接地	盛岡市
89	平成19年10月29日	経営体育成基盤整備事業　白山地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	上麻生城遺跡近接地	奥州市
90	平成19年10月29日～30日	経営体育成基盤整備事業　白山地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	上麻生城遺跡近接地	奥州市
91	平成19年10月30日～31日	中山間地域総合整備事業　大清水地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	まつっこ遺跡	軽米町
92	平成19年10月30日～31日	中山間地域総合整備事業　大清水地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	駒板3遺跡	軽米町
93	平成19年11月1日	経営体育成基盤整備事業　都鳥地区及び都鳥2期地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	牡丹野遺跡	奥州市
94	平成19年11月1日	経営体育成基盤整備事業　都鳥地区及び都鳥2期地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	作屋敷遺跡	奥州市
95	平成19年11月1日	経営体育成基盤整備事業　都鳥地区及び都鳥2期地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	国分遺跡隣接地	奥州市
96	平成19年11月2日	新農業水利システム保全事業横瀬地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	可能性あり6	奥州市
97	平成19年11月2日	新農業水利システム保全事業横瀬地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	丸太Ⅱ遺跡	奥州市
98	平成19年11月2日	経営体育成基盤整備事業　古城地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	可能性あり⑦	奥州市
99	平成19年11月5日	県営県単調査事業　本寺地区	県南広域振興局一関総合支局農林部農村整備室長	骨寺村荘園遺跡	一関市
100	平成19年10月25日	経営体育成基盤整備　和賀中部六原地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	可能性あり5	金ヶ崎町
101	平成19年10月29日	中山間地域総合整備事業　中居地区	県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室長	下中居Ⅱ遺跡	花巻市
102	平成19年10月29日	中山間地域総合整備事業　中居地区	県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室長	下中居Ⅲ遺跡	花巻市
103	平成19年11月5日～6日	中山間地域総合整備事業　大槌地区	釜石地方振興局農林部長	渋梨遺跡	大槌町
104	平成19年11月5日～6日	中山間地域総合整備事業　大槌地区	釜石地方振興局農林部長	白銀遺跡	大槌町
105	平成19年11月5日～6日	中山間地域総合整備事業　大槌地区	釜石地方振興局農林部長	桃畑遺跡隣接地	大槌町
106	平成19年11月8日	経営体育成基盤整備事業　徳田第二地区	盛岡地方振興局農政部農村整備室長	可能性あり4（南谷地遺跡隣接地）	矢巾町
107	平成19年11月8日～9日	経営体育成基盤整備事業　徳田第二地区	盛岡地方振興局農政部農村整備室長	可能性あり3（徳丹城跡隣接地）	矢巾町
108	平成19年11月9日	経営体育成基盤整備事業　徳田第二地区	盛岡地方振興局農政部農村整備室長	可能性あり1（十文字遺跡隣接）	矢巾町
109	平成19年11月8日～9日	中山間地域総合整備事業　中居地区	県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室長	下中居Ⅰ遺跡	花巻市
110	平成19年11月8日～9日	中山間地域総合整備事業　中居地区	県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室長	下中居Ⅰ遺跡隣接地	花巻市

No	調　査　期　日	事　　業　　名	事　　業　　者	遺　跡　名	所在地
111	平成19年11月12日	東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）新直轄事業	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所長	長森遺跡	花巻市
112	平成19年11月13日	緊急地方道路整備事業	盛岡地方振興局土木部長	諸葛川遺跡	滝沢村
113	平成19年11月13日～14日	経営体育成基盤整備事業　白山地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	白山上野遺跡	奥州市
114	平成19年11月13日～14日	経営体育成基盤整備事業　白山地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	小林繁長遺跡	奥州市
115	平成19年11月15日～16日	中山間地域総合整備事業　中居地区	県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室長	下中居Ⅲ遺跡	花巻市
116	平成19年11月16日	地方特定道路整備事業	釜石地方振興局土木部長	可能性あり	大槌町
117	平成19年11月19日～20日	中山間地域総合整備事業　大清水地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	まつっこ遺跡隣接地	軽米町
118	平成19年11月19日～20日	中山間地域総合整備事業　大清水地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	駒板４遺跡隣接地	軽米町
119	平成19年11月20日	森林管理道鈴峠１号線（第Ⅰ工区）開設工事	盛岡地方振興局土木部長	荒沢遺跡	軽米町
120	平成19年11月20日	森林管理道鈴峠１号線（第Ⅰ工区）開設工事	盛岡地方振興局土木部長	可能性あり１	軽米町
121	平成19年11月20日	森林管理道鈴峠１号線（第Ⅰ工区）開設工事	盛岡地方振興局土木部長	可能性あり２	軽米町
122	平成19年11月４日	主要地方道岩泉平井賀普代線切牛地区道路維持修繕事業	宮古地方振興局岩泉土木事務所長	大芦Ⅳ遺跡隣接地	田野畑村
123	平成19年11月22日	中山間地域総合整備事業　大清水地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	駒板４遺跡隣接地	軽米町
124	平成19年11月26日～27日	経営体育成基盤整備事業　上淵地区	県南広域振興局花巻総合支局農林部遠野農林センター所長	可能性あり	遠野市
125	平成19年11月26日	校舎等再編整備事業	教育企画室長	蒔前遺跡隣接地	一戸町
126	平成19年11月26日	馬淵川沿岸農業水利事業	農林水産省東北農政局馬淵川沿岸水利事業所長	上川遺跡	二戸市
127	平成19年11月27日	馬淵川沿岸農業水利事業	農林水産省東北農政局馬淵川沿岸水利事業所長	上平Ⅲ遺跡	二戸市
128	平成19年11月27日	馬淵川沿岸農業水利事業	農林水産省東北農政局馬淵川沿岸水利事業所長	横長根遺跡	二戸市
129	平成19年11月29日	中山間地域総合整備事業　中居地区	県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室長	下中居Ⅱ遺跡	花巻市
130	平成19年11月29日～30日	中山間地域総合整備事業　中居地区	県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室長	下中居Ⅲ遺跡	花巻市
131	平成19年11月29日～30日	畑地帯総合整備事業　奥中山地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	西田子遺跡	一戸町
132	平成19年11月29日～30日	畑地帯総合整備事業　奥中山地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	西田子Ⅰ Ⅸ遺跡	一戸町
133	平成19年11月29日～30日	畑地帯総合整備事業　奥中山地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	中村Ⅱ遺跡隣接地	一戸町
134	平成19年11月29日～30日	畑地帯総合整備事業　奥中山地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	大畑Ⅱ遺跡	一戸町
135	平成19年12月３日	道路改築事業	宮古地方振興局土木部長	可能性あり２	宮古市
136	平成19年12月３日～４日	津付ダム建設事業	大船渡地方振興局土木部津付ダム建設事務所長	可能性あり６	住田町
137	平成19年12月３日～４日	津付ダム建設事業	大船渡地方振興局土木部津付ダム建設事務所長	可能性あり７	住田町
138	平成19年12月５日～６日	津付ダム建設事業	大船渡地方振興局土木部津付ダム建設事務所長	可能性あり６	住田町
139	平成19年12月５日～６日	津付ダム建設事業	大船渡地方振興局土木部津付ダム建設事務所長	可能性あり７	住田町
140	平成19年12月10日	経営体育成基盤整備	県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室長	田代遺跡	北上市
141	平成19年12月10日～11日	緊急地方道路整備事業	釜石地方振興局土木部長	可能性あり②	釜石市
142	平成19年12月10日～11日	緊急地方道路整備事業	釜石地方振興局土木部長	可能性あり⑥	釜石市
143	平成19年12月10日～11日	緊急地方道路整備事業	釜石地方振興局土木部長	可能性あり⑦	釜石市
144	平成19年12月10日～11日	緊急地方道路整備事業	釜石地方振興局土木部長	可能性あり⑧	釜石市
145	平成19年12月12日	物流支援交流促進道路整備事業	県南広域振興局土木部長	可能性あり⑮	奥州市
146	平成19年12月12日	経営体育成基盤整備事業　黒岩第１地区	県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室長	三坊木遺跡	北上市
147	平成19年12月12日	経営体育成基盤整備事業　満倉地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	中半入遺跡	奥州市

No	調査期日	事業名	事業者	遺跡名	所在地
148	平成19年12月12日	経営体育成基盤整備事業　満倉地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	崩田遺跡	奥州市
149	平成19年12月13日	緊急地方道路整備事業	県南広域振興局北上総合支局土木部西和賀出張所長	蛭山Ⅰ遺跡近接地	西和賀町
150	平成19年12月12日～13日	経営体育成基盤整備事業　中寺林地区	県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室長	八坂遺跡	花巻市
151	平成19年12月12日	経営体育成基盤整備事業　中寺林地区	県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室長	北寺林遺跡	花巻市
152	平成19年12月12日	経営体育成基盤整備事業　中寺林地区	県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室長	光林寺舘遺跡隣接地	花巻市
153	平成19年12月14日	経営体育成基盤整備事業　中寺林地区	県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室長	八幡Ⅱ遺跡	花巻市
154	平成19年12月17日	中山間地域総合整備事業　内城地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	簗ヶ沢２遺跡隣接地	軽米町
155	平成19年12月17日	中山間地域総合整備事業　内城地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	簗ヶ沢遺跡隣接地	軽米町
156	平成19年12月17日	中山間地域総合整備事業　内城地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	内城10遺跡隣接地	軽米町
157	平成19年12月18日	中山間地域総合整備事業　内城地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	晴山館隣接地	軽米町
158	平成19年12月18日	中山間地域総合整備事業　日頃市西地区	大船渡地方振興局農林部長	中宿遺跡	大船渡市
159	平成19年12月18日	中山間地域総合整備事業　日頃市西地区	大船渡地方振興局農林部長	舟野遺跡	大船渡市
160	平成19年12月20日	一般国道106号都南川目道路改築工事	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所長	可能性あり	盛岡市
161	平成19年12月20日	一般国道106号都南川目道路改築工事	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所長	可能性あり	盛岡市
162	平成19年12月21日	一般県道土淵達曽部線　土淵地区	県南広域振興局花巻総合支局遠野土木センター所長	蓮池遺跡	遠野市
163	平成19年12月25日	東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）新直轄事業	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所長	倉沢10区Ⅰ遺跡	花巻市
164	平成20年１月８日	経営体育成基盤整備事業　都鳥地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	尼坂遺跡	奥州市
165	平成20年１月８日	一般国道４号洪民バイパス改築工事	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所長	昼久保Ⅲ遺跡	盛岡市
166	平成20年１月９日	畑地帯総合整備事業（担い手育成型）舌崎地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	雨滝遺跡	二戸市
167	平成20年１月10日	畑地帯総合整備事業（担い手育成型）舌崎地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	釜沢館	二戸市
168	平成20年１月10日	畑地帯総合整備事業（担い手育成型）舌崎地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	川口Ⅱ遺跡	二戸市
169	平成20年１月15日～18日	経営体育成基盤整備事業　二渡地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	二渡遺跡	奥州市
170	平成20年１月21日	経営体育成基盤整備事業　更木新田地区	県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室長	大木堀ノ内遺跡隣接地	北上市
171	平成20年１月21日	一級河川滝名川総合流域防災事業	盛岡地方振興局土木部長	金館跡	紫波町
172	平成20年１月22日	経営体育成基盤整備事業　白山地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	白山上野遺跡	奥州市
173	平成20年１月23日	経営体育成基盤整備事業　白山地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	上麻生城遺跡隣接地	奥州市
174	平成20年１月29日	経営体育成基盤整備事業　二渡地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	二渡遺跡	奥州市
175	平成20年１月29日	緊急地方道路整備事業	釜石地方振興局土木部長	可能性あり３	釜石市
176	平成20年２月１日	県単交通安全施設整備（Ⅱ種）	花巻地方振興局土木部長	椚ノ目遺跡	花巻市
177	平成20年２月８日	経営体育成基盤整備事業　戸沢地区	盛岡地方振興局農林部農村整備室長	町場Ⅲ遺跡	雫石町
178	平成20年２月13日～14日	東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）新直轄事業	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所長	可能性あり７	遠野市
179	平成20年２月15日	県単交通安全施設整備（Ⅱ種）	花巻地方振興局土木部長	牛角遺跡	花巻市
180	平成20年２月21日	経営体育成基盤整備事業　御所野地区	盛岡地方振興局農林部農村整備室長	塩ケ森Ⅳ遺跡	雫石町
181	平成20年３月19日	経営体育成基盤整備事業　徳岡東部地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	高日向遺跡	奥州市
182	平成20年３月25日～26日	中山間地域総合整備事業　大清水地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	駒板３遺跡	軽米町

平成19年度　分布調査一覧

1　経営体育成基盤整備事業　徳田第一地区　盛岡地方振興局農林部農村整備室長

No	遺跡コード	遺跡名	時代	遺構・遺物	種別	所　在　地	備考
1	ＬＥ47－2034	十文字遺跡	平安		散布地	矢巾町大字東徳田第３地割字十文字	周知
2	ＬＥ47－2034	西前遺跡	古代		散布地	矢巾町大字西徳田第３地割字西前	周知
3	ＬＥ47－1174	徳丹城跡	古代		官衙跡	矢巾町大字西徳田第６地割字五百刈田	周知
4	ＬＥ47－2039	南谷地遺跡	古代		城館跡	矢巾町大字東徳田第６地割字谷地	周知
5	ＬＥ47－1198	川村遺跡	古代		散布地	矢巾町大字東徳田第10地割字川村	周知
6	ＬＥ47－2203	下通遺跡	縄文・古代		散布地	矢巾町大字東徳田第11地割字下通	周知
7	ＬＥ47－2256	渋川遺跡	古代		集落跡	矢巾町大字東徳田第12地割字幅	周知
8		可能性あり					

2　東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～宮守間）新直轄事業　国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所長

No	遺跡コード	遺跡名	時代	遺構・遺物	種別	所　在　地	備考
1		可能性あり１					
2		可能性あり２					
3		可能性あり３					
4		可能性あり４					
5		可能性あり５					
6		可能性あり６					
7		可能性あり７					
8	ＭＦ53－1203	向Ⅰ遺跡	縄文		散布地	遠野市綾織町下綾織字胡四王	周知
9	ＭＦ53－1206	向Ⅱ遺跡	縄文・平安		散布地	遠野市綾織町下綾織字向	周知
10	ＭＦ53－0276	深沢野遺跡	縄文		集落跡	遠野市綾織町下綾織字深沢野古館	周知
11	ＭＦ53－0391	新田Ⅲ遺跡	縄文		散布地	遠野市下綾織字新田	周知
12	ＭＦ53－1305	新田遺跡	縄文		散布地	遠野市綾織町下綾織字新田	周知
13		可能性あり８					
14		可能性あり９					
15		可能性あり10					
16		可能性あり11					
17		可能性あり12					
18		可能性あり13					
19		可能性あり14					
20	ＭＦ54－0213	新里間木野遺跡	縄文・古代		散布地	遠野市綾織町新里	周知

3　物流支援交流促進道路整備事業　　調査日：平成20年２月18日　　大船渡地方振興局土木部長

No	遺跡コード	遺跡名	時代	遺構・遺物	種別	所　在　地	備考
1	ＮＦ13－1389	高屋敷Ⅱ遺跡	縄文		散布地	気仙郡住田町世田米字高屋敷	周知
2		可能性あり				気仙郡住田町世田米地内	

4　物流支援交流促進道路整備事業　　調査日：平成20年２月19日　　大船渡地方振興局土木部長

No	遺跡コード	遺跡名	時代	遺構・遺物	種別	所　在　地	備考
1	ＭＦ96－2116	山脈地遺跡	縄文・古代		散布地	気仙郡住田町上有住字山脈地	周知
2		可能性あり				気仙郡住田町上有住字山脈地	

5　経営体育成基盤整備事業　下矢次地区　大船渡地方振興局土木部長

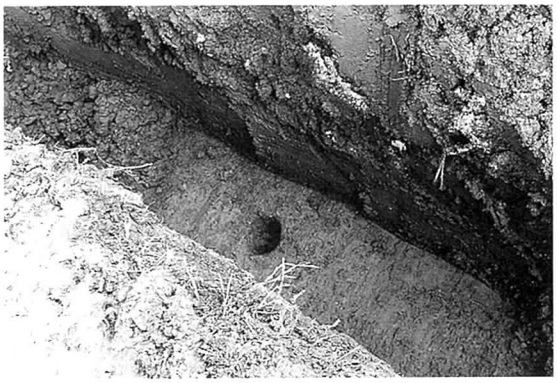
No	遺跡コード	遺跡名	時代	遺構・遺物	種別	所　在　地	備考
1	ＬＥ46－0301	高畑遺跡	縄文・古代		散布地	紫波郡矢巾町下矢次第１地割地内	周知
2		可能性あり１				紫波郡矢巾町下矢次地内	

平成19年度　発掘調査一覧

No	調査期日	事業名	事業者	遺跡名	所在地	検出遺構	面積
1	平成19年6月25日～26日 計2日間	主要地方道北上東和線 二子地区 歩道設置工事	県南広域振興局北上総合支局土木部長	岡島遺跡	北上市	溝跡2条、柱穴状3基	110㎡
2	平成19年6月11日～12日、 14日～15日、18日～19日 計6日間	緊急地方道整備事業	盛岡地方振興局土木部長	高柳遺跡	滝沢村	土坑2基、包含層1箇所	75㎡
3	平成19年6月21日～22日、 25日～26日、11月12日 計5日間	緊急地方道整備事業	盛岡地方振興局土木部長	諸葛川遺跡	滝沢村	包含層1箇所	190㎡
4	平成20年1月22日～25日 計4日間	経営体育成基盤整備事業 江刺西部地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	天竺老婆遺跡	奥州市	焼土遺構1基、包含層1箇所	330㎡
5	平成20年1月30日～2月1日 平成20年2月4日～5日 計5日間	経営体育成基盤整備事業 江刺西部地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	鶴羽衣遺跡	奥州市	溝跡1条、土坑1基、包含層1箇所	210㎡
6	平成20年2月4日～5日 計2日間	経営体育成基盤整備事業 江刺西部地区	県南広域振興局農林部農村整備室長	沼尻遺跡	奥州市	柱穴1基	50㎡
7	平成20年2月7日～8日 計2日間	畑地帯総合整備事業 舌崎地区	二戸地方振興局農政部農村整備室長	釜沢館	二戸市	整地層	40㎡
8	平成20年2月27日～28日 計2日間	緊急地方道整備事業	盛岡地方振興局土木部長	高柳遺跡	滝沢村	竪穴住居跡1棟、土坑3基	100㎡

Ⅲ　写真図版

岡島遺跡



鶴羽衣遺跡

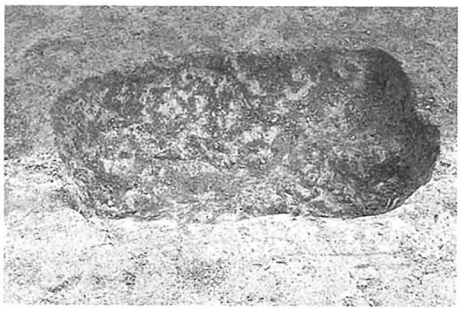
天竺老婆遺跡

高柳遺跡

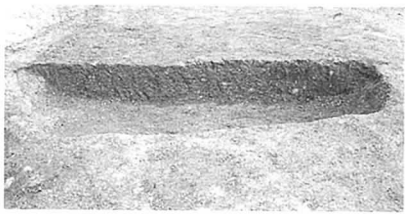
高柳遺跡

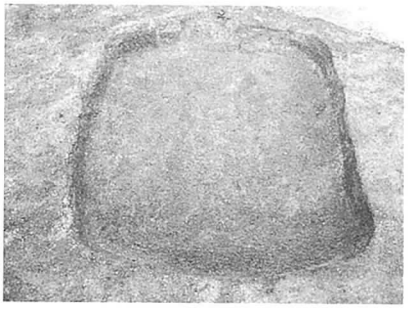
高柳遺跡

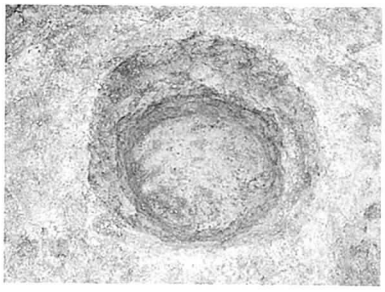
写真図版１　県内遺跡調査状況



高柳遺跡調査状況

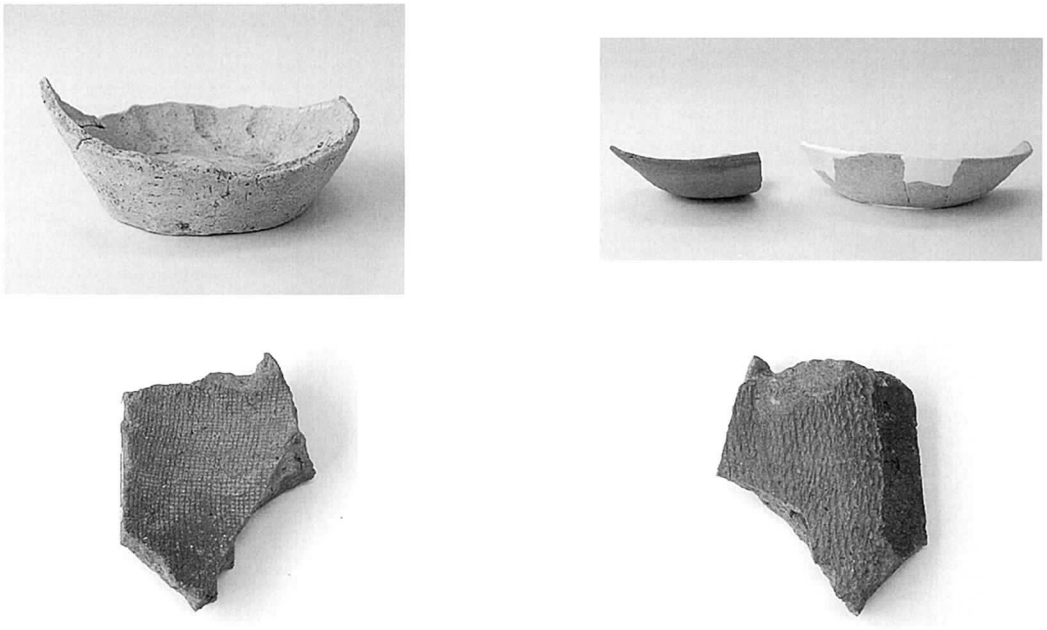




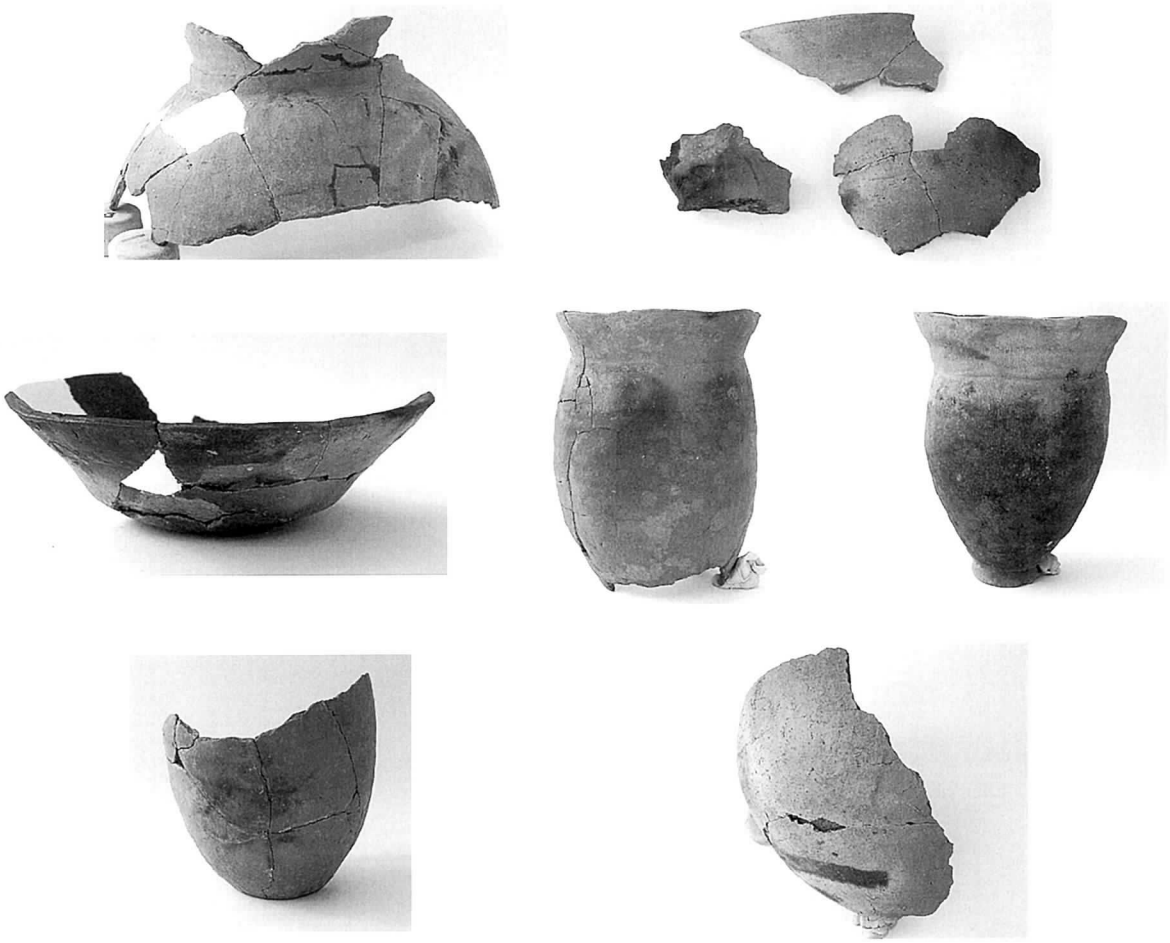


観音寺遺跡調査状況

写真図版２　県内遺跡調査状況

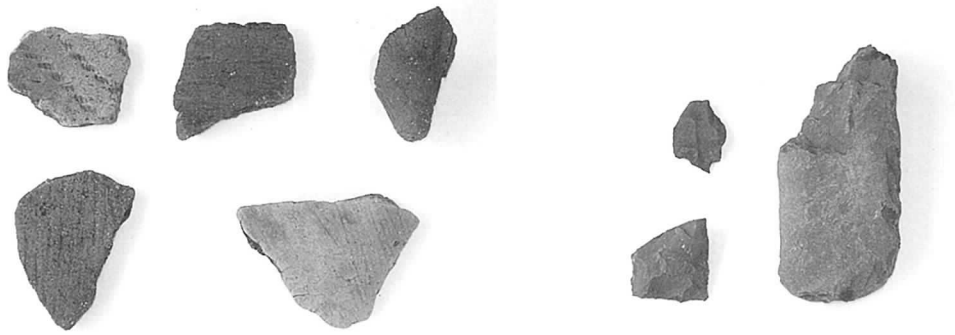


鶴羽衣遺跡出土遺物

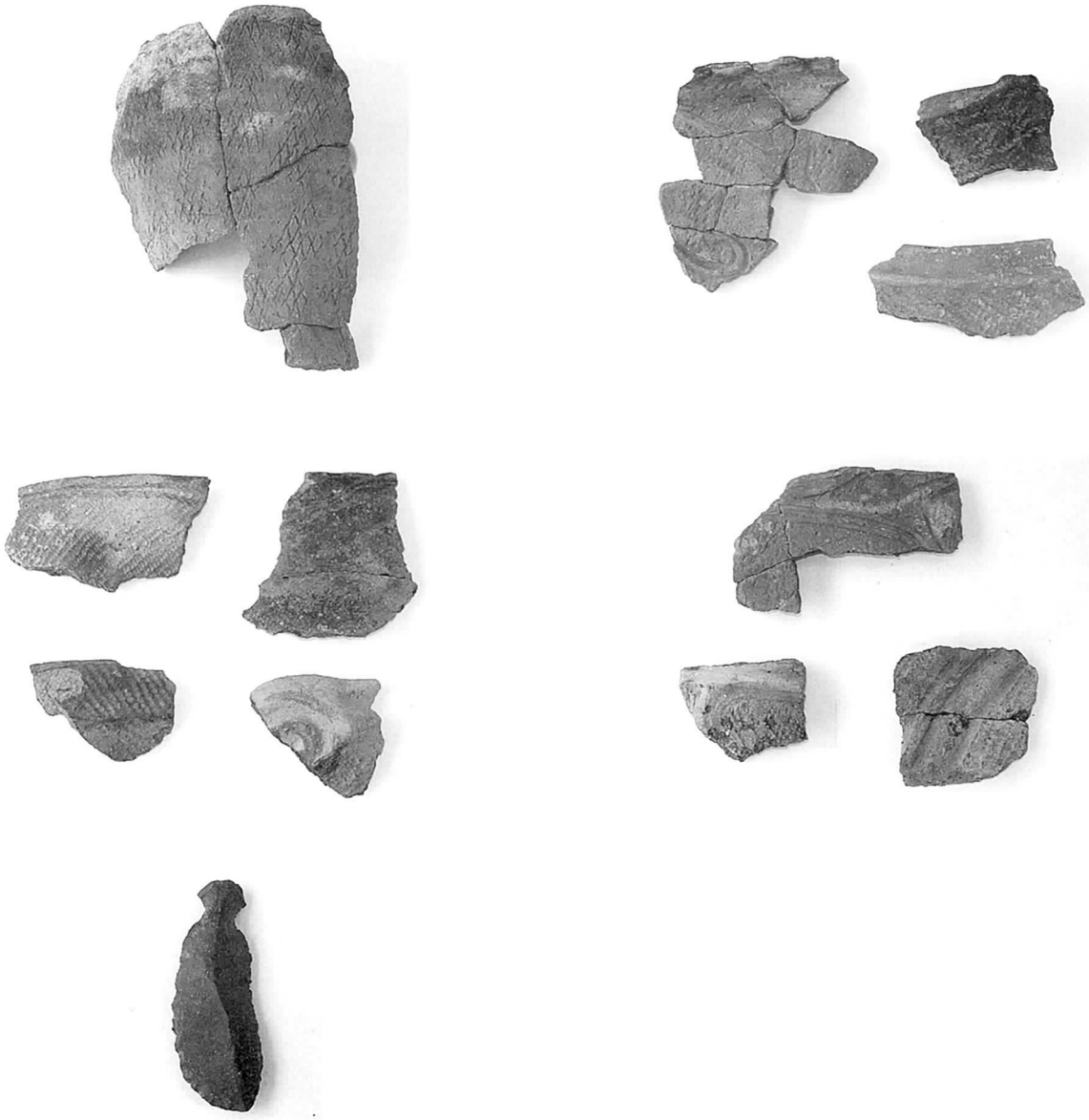


高柳遺跡出土遺物

写真図版３　県内遺跡出土遺物（１）



観音寺遺跡出土遺物

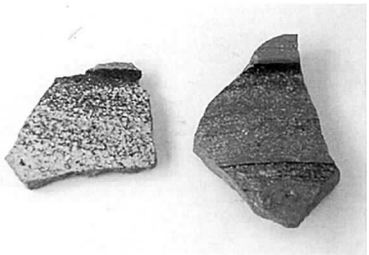


松屋敷遺跡出土遺物

写真図版４　県内遺跡出土遺物（２）

上平Ⅲ遺跡出土遺物

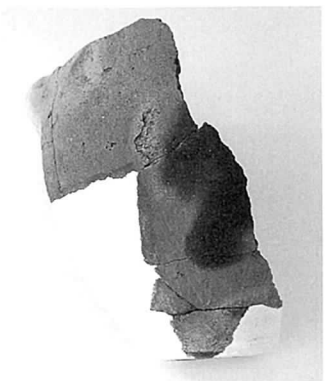
新町遺跡出土遺物



白山上野遺跡出土遺物

作屋敷遺跡出土遺物

駒坂３遺跡出土遺物



雨滝遺跡出土遺物

写真図版５　県内遺跡出土遺物（３）

Ⅳ　釜石市麓山遺跡発掘調査報告

例　　言

1．本報告は岩手県釜石市鵜住居町第７地割及び第12地割に所在する麓山遺跡の発掘調査結果である。

2．本調査は三陸縦貫道釜石山田道路建設に係る緊急発掘調査である。

3．麓山遺跡は岩手県遺跡台帳ではＭＧ42－1274で、発掘調査面積は575.7㎡である。

4．調査期間は下記のとおりである。
　発掘調査　　平成19年12月17日～平成20年１月28日
　室内整理　　平成20年11月１日～平成21年１月30日である。

5．発掘調査及び室内整理は森一欽（釜石市教育委員会生涯学習スポーツ課主任文化財調査員）が担当した。

6．本調査において得られた資料をもとに、麓山遺跡出土の鉄製品及び鉄滓分析と鉄製品の保存処理を㈶岩手県文化振興事業団岩手県立博物館赤沼英男氏のご好意により実施し、その分析結果については掲載した。

7．本報告の執筆は下記のとおりで、編集は森一欽が行った。
　１～３・５　森　　一欽（釜石市教育委員会生涯学習スポーツ課主任文化財調査員）
　４　　赤沼　英男（㈶岩手県文化振興事業団岩手県立博物館上席学芸員）

8．基本層序並びに遺構覆土の土層色調観察や遺物の胎土や釉の色調は「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修1993）を基準とした。

9．遺構実測図の水糸高は海抜高度を示す。

10．本文中で使用しているスクリーン・トーンには個々に指示がしてある。

11．本書において表などで用いる遺構の略記号は以下のとおりである。
　　縄文→Ｊ　　古代→Ｈ　土坑→Ｄ　ピット→Ｐ　溝→Ｍ　焼土→Ｆ
　　例：Ｊ１号土坑→Ｊ１Ｄ　Ｈ１号溝→Ｈ１Ｍ

12．本書における写真図版掲載遺物の縮尺は以下のとおりである。
　１／４・・・須恵器甕・須恵器壺
　１／３・・・上記を除く資料

13．本報告を作成するにあたり、下記の諸氏・諸機関にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝を申し上げる（敬称略）。

花輪盛夫、平川南（国立歴史民俗博物館）、熊谷常正（盛岡大学）、中村英俊、斉藤邦雄、菅常久、櫻井友梓、佐藤嘉広（以上岩手県教育委員会）、赤沼英男、時田里志（以上㈶岩手県文化振興事業団岩手県立博物館）、相原康二、佐々木清文、村木敬（以上㈶岩手県文化振興事業団岩手県埋蔵文化財センター）、八木光則（盛岡市教育委員会）、杉本良、安藤邦彦、君島武史（以上北上市教育委員会）、伊藤博幸、佐藤良和（以上奥州市埋蔵文化財調査センター）、及川真紀（奥州市世界遺産登録推進室）、島原弘征（平泉町教育委員会）、竹下將男、鎌田祐二、長谷川真（以上宮古市教育委員会）、佐藤浩彦（遠野市教育委員会）、国土交通省三陸国道事務所　岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課　㈶岩手県文化振興事業団岩手県立博物館　㈶岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター　盛岡市教育委員会　北上市教育委員会　奥州市教育委員会　㈶奥州市埋蔵文化財調査センター　平泉町教育委員会　宮古市教育委員会　陸前高田市教育委員会　㈱山長建設　㈲スカイ測量設計　釜石市文化財保護審議会

14．本調査において出土した遺物や図面、写真等の資料は釜石市教育委員会で保管している。

1. 調査に至る経緯

1）遺跡の位置

麓山遺跡は、釜石市鵜住居町第10地割に所在し、JR鵜住居駅の北西約1,000m、麓山神社西側隣接地に位置する（第4－1図・第4－2図）。遺跡は鵜住居川の南岸、雄岳山地の縁辺部に立地する。調査区東西及び北側は急斜面となっており、南側は、県道釜石遠野線建設に伴い掘割となっている。

2）調査に至る経緯と調査体制

三陸縦貫道釜石山田道路建設に伴い、岩手県教育委員会で試掘調査を実施した結果、遺物はなかったが、柱穴と考えられる遺構が検出され、地形等を考慮した場合城館跡の可能性が高いと判断された。

工事工程上、ルートの変更は難しく、工事により遺跡が消滅することが確実となったことから、発掘調査を実施することとなった。また、工事日程上、野外調査に関しては、平成19年度中に調査を実施する必要があったことから、国土交通省三陸国道事務所と、岩手県教育委員会、釜石市教育委員会が協議をし、釜石市教育委員会（教育長河東眞澄）が主体として調査を担当することとなった。調査体制は以下のとおりである。

調査担当　森一欽（釜石市教育委員会生涯学習スポーツ課主任・文化財調査員）

野外調査　石本俊雄・岩崎英紀・山崎亘（以上㈱山長建設職員）・有壁三郎・石垣公夫・川崎清子・川崎節子・倉本豊・佐々木京子・八幡美紀子（以上㈱山長建設臨時職員）　地形測量　㈲スカイ測量設計

室内整理　伊澤ゆかり・和田育恵（釜石市教育委員会臨時職員）

2. 調査の方法と調査経過

1）調査方法

重機により表土除去し、遺構を検出した。また、平面位置の表示は世界測地系による公共座標（第X系）値で、高さは海抜で示した。グリッドは公共座標に基づき、5m×5mで設定し、北から南を算用数字表記、西から東を大文字アルファベット表記とした。また、各グリッド内には1m×1mの小グリッドを設定し、南北を算用数字表記、東西を小文字アルファベット表記とした（第4－3図）。

遺構及び遺物の出土地点、地形図はトータルステーションを用い、調査区に任意の3点（TP1・P1・P2）を設定し、X・Y・Z座標で測定した。座標は以下のとおりである。

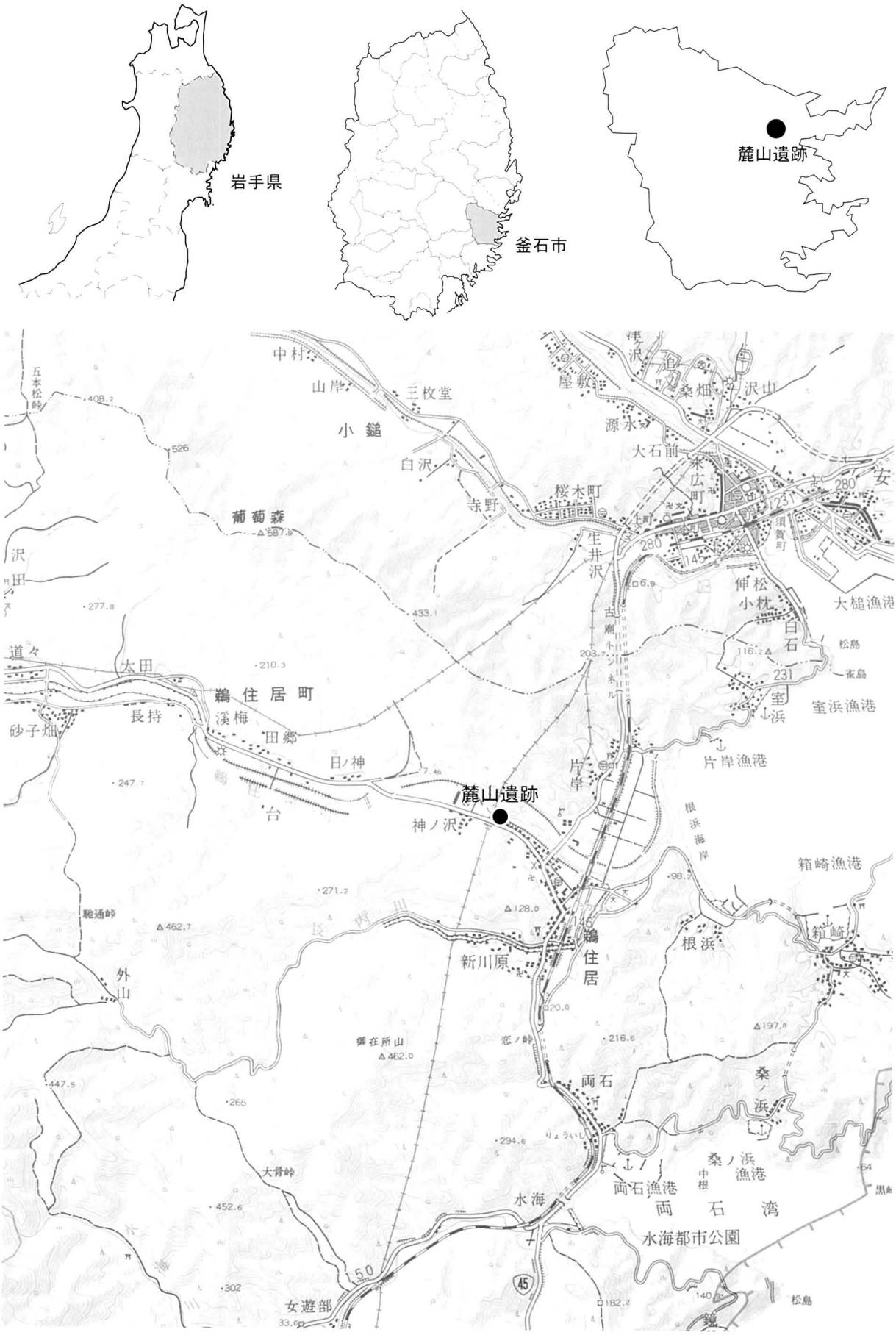
TP1　X＝－73717.459　Y＝90456.796　Z＝20.024m

P1　X＝－73720.504　Y＝90469.036　Z＝20.755m

P2　X＝－73728.102　Y＝90475.494　Z＝19.182m

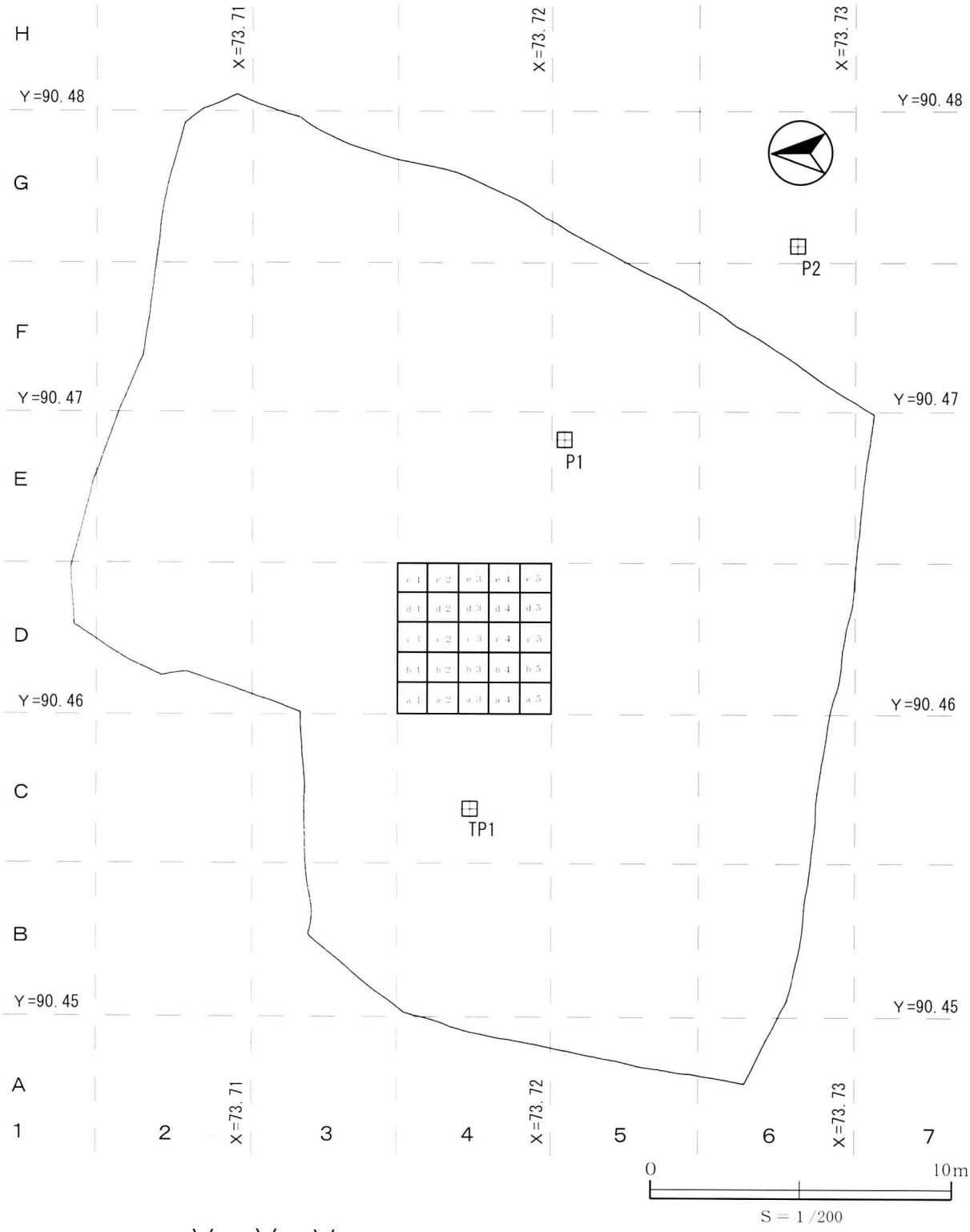
なお、遺構断面図等作成には、P2をB.M.とした。

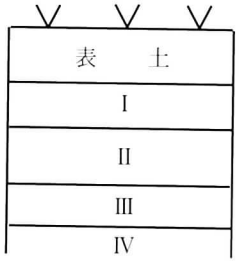
本遺跡の土層は色調や、含有物等の相違から分層した。約30㎝の表土の下には、黒褐色土（Ⅰ層）、暗褐色土（Ⅱ層）、黄褐色土（Ⅲ層）と堆積していたが、平坦部では堆積が薄く、斜面では厚い。遺物は概ねⅡ層で古代・弥生時代の遺物が、Ⅲ層で縄文時代の遺物が見られたが、斜面においては層が逆転しているような場所もあり、Ⅲ層土と想定される土からも、古代の資料が出土する場合も見られた。黄橙色土（Ⅳ層）はローム層で無遺物層であったことから本調査において最終確認面とした。



第４－１図　麓山遺跡位置図（Ｓ＝１／5,000）

第4-2図　麓山遺跡位置図2（S＝1／2,500）





Ⅰ層　層厚 10 ～ 20cm
10YR2/2（黒褐色土）しまり弱く粘性やや強い。
Ⅱ層　層厚 20 ～ 30cm
10YR3/3（暗褐色土）しまり弱く粘性強い。
Ⅲ層　層厚 15 ～ 30cm
10YR5/6（黄褐色土）しまり強く粘性やや強い。
Ⅳ層　最終確認面
10YR7/8（黄橙色土）しまり弱く粘性やや強い。
部分的に岩盤が隆起している。

第4－3図　グリッド配置図及び基本層序模式図

3. 検出された遺構・遺物

1）検出された遺構

今回の調査では、土坑やピット、焼土跡、溝状遺構が検出された（第４－４図）。

〈土坑〉

今回の調査では２基の土坑が確認された。

Ｊ１号土坑はF3･F4Gr.の平坦部に位置し、規模は長軸（南北）255㎝、短軸（東西）105㎝の隅丸長方形を呈す。深さは25㎝である。土坑の北端には直径30㎝、深さ55㎝（確認面より）のピットが検出された。この土坑からは、縄文土器が１点出土した（第4-9図3）。堆積土や出土遺物から縄文時代後期の遺構と考えられる。

Ｈ１号土坑はA6Gr.の緩斜面部に位置し、規模は直径170㎝の円形を呈す。深さは135㎝である。この土坑からは、土師器の坏や赤彩球胴甕と考えられる土師器片、須恵器が出土している（第４-11図７・14・第４-12図11・第４-13図３・５・第４-14図４・７）。出土遺物から判断し、８Ｃ～９Ｃの遺構と考えられる。

〈ピット〉

今回の調査では９基のピットが確認された。これらのピットはE5･E6･F5･F6Gr.にやや纏まって検出された。このうち、Ｈ５号ピットは煙道と考えられるピットで、周辺から住居跡が確認されることが期待されたが、確認できなかった。また、Ｈ８Ｐでは須恵器甕のほか、多量の鉄滓が出土している。

〈焼土跡〉

今回の調査では焼土跡のうち、掘り込みが確認できなかったものを焼土跡とし、１基確認された。Ｈ１号焼土跡はE6Gr.の斜面部に位置し、規模は50㎝である。後述するＨ３Ｍが埋まった後の遺構と考えられる。

〈溝状遺構〉

今回の調査では４基の溝状遺構が確認された。いずれも、平場を区画するための溝であると考えられ、Ｈ１～３号溝は斜面に垂直に、Ｈ４号溝は斜面に平行に延びており、急傾斜となる、調査区北側及び北西側では溝が確認できなかった。

斜面に平行する３基の溝は斜面上方は地山を深く掘るのに対し、斜面下方側は、それほど明確な掘り込みが見られない。特にＨ３号溝は下方の立ち上がりが確認できなかった。以上のことから、溝状に掘りこむ過程で生じた土を下方に盛ることで、少ない労力で溝を深くしていたのではなかろうか。

一方斜面に平行するＨ４号溝は他の溝に比べ、掘り込みが深く、断面がＶ字状となっている。

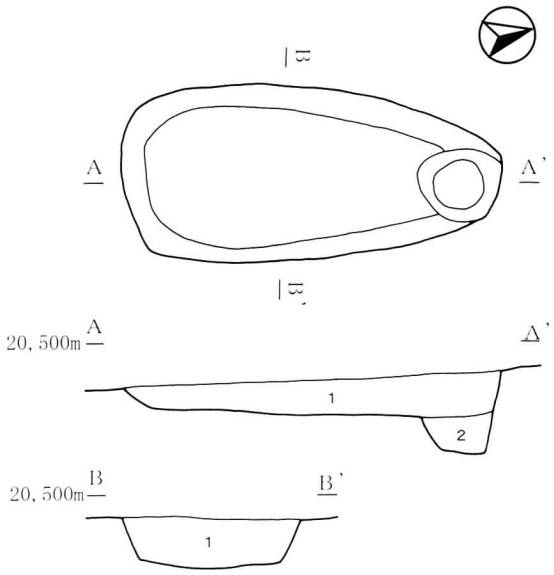
以上から、調査区はＦ３・Ｆ４・Ｅ３・Ｅ４Gr.とＣ４・Ｃ５Gr.の２箇所の平場に分けられ、D2Gr.にも平場が形成されていた可能性が高い。なお、調査区の東側には麓山神社があり、調査区とは岩盤の隆起で隔たっており、その東側は急斜面となっている。一方、調査区南側隣接地は掘割（県道）となっており、この平場がどのように延びるかは不明である。

なお、Ｈ１号～３号溝では多くの須恵器や土師器が出土しているが、Ｈ５号ピットとＨ８号ピット周辺にも多くの遺物が出土していることから、これらの遺物はＨ５ピットなどに関連するもので、溝状遺構群はその後に造成された可能性が高い。

X=73.71
X=73.72
X=73.73
H
G
F
E
D
C
B
A
Y=90.48
Y=90.47
Y=90.46
Y=90.45
1
2
3
4
5
6
7
J1D
H2M
H1P
H5P
H2P
H3P
H4P
H6P
H8P
H9P
H7P
H1F
H3M
H4M
H1M
H1D
撹乱
0
10m
S＝1/200

第4-4図　遺構配置図

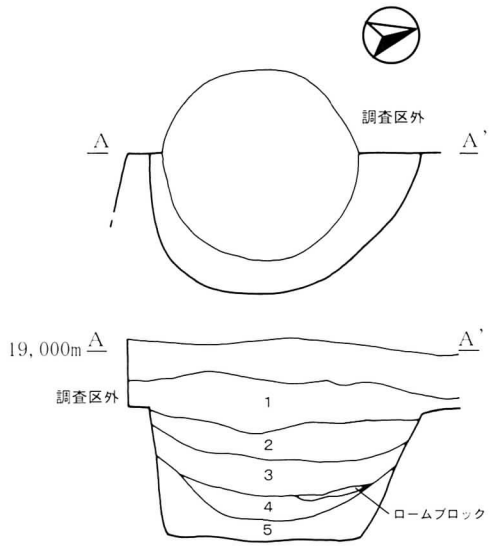
J1号土坑



1層　10YR3/3（暗褐色土）しまりやや強く、粘性弱い。直径2mm～5mmの炭化物や焼土を多く含む。層下部に直径7～12cmの礫を多く含む。

2層　10YR5/6（黄褐色土）しまりやや強く、粘性弱い。直径2mm～5mmの炭化物多く含む。直径3cmほどの礫を多く含む。直径10cm以上の礫も含まれる。

H1号土坑



1層　10YR2/2（黒褐色土）しまりやや弱く、粘性やや強い。

2層　10YR3/3（暗褐色土）しまりやや弱く、粘性やや強い。層下部にロームブロックが含められる。

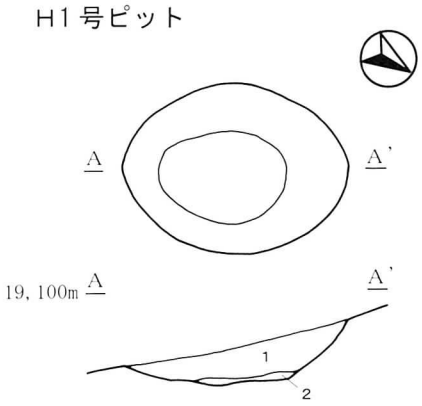
3層　10YR2/3（黒褐色土）しまりやや弱く、粘性やや強い。層下部にロームブロックが含められる。

4層　10YR2/3（黒褐色土）しまりやや強く、粘性やや強い。

5層　10YR2/3（黒褐色土）とロームが混在した層。しまり強く、粘性強い。

層全体として炭化物が多く含まれている。

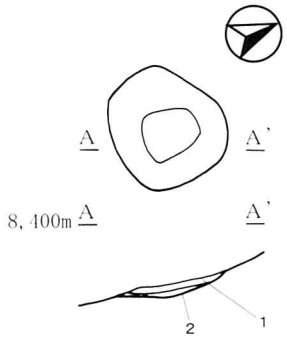
H1号ピット



1層　10YR3/3（暗褐色土）しまり弱く、粘性やや弱い。ブロック状の焼土を多く含む。直径2～15mmの礫をやや多く含む。

2層　10YR5/6（黄褐色土）しまりやや強く、粘性やや強い。直径10mmほどのロームブロックをやや多く含む。ブロック状の焼土をやや多く含む。直径1～2mmの炭化物をやや多く含む。

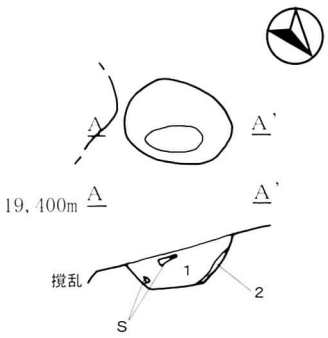
H2号ピット



1層　10YR3/3（暗褐色土）しまり弱く、粘性弱い。部分的に焼土や炭をブロック状に含む。直径5cmほどの礫を少量含む。

2層　10YR5/6（黄褐色土）しまり強く、粘性弱い。部分的に焼土や炭をブロック状に含む。

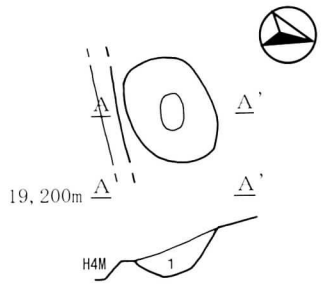
H3号ピット



1層　10YR3/3（暗褐色土）しまりやや弱く、粘性やや弱い。直径3cmの礫をやや多く含む。最大で10cmの礫含む。

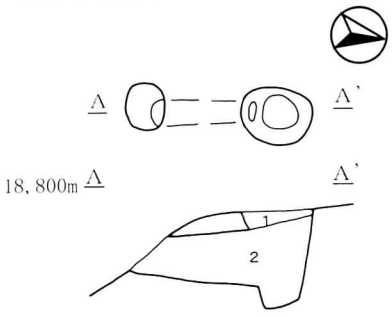
2層　10YR5/6（黄褐色土）しまり弱く、粘性やや弱い。直径2～5mmほどのロームブロックをやや多く含む。

H4号ピット



1層　10YR3/3（暗褐色土）しまり弱く、粘性やや弱い。

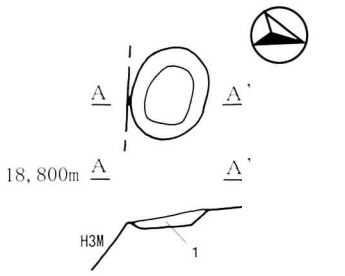
H5号ピット



1層　10YR3/3（暗褐色土）しまり弱く、粘性やや弱い。ブロック状の炭化物を多く含む。

2層　10YR3/3（暗褐色土）しまり弱く、粘性やや強い。ブロック状の焼土や炭化物を極めて多く含む。

H6号ピット

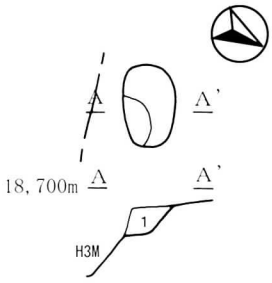


1層　10YR3/3（暗褐色土）しまり弱く、粘性やや弱い。

0　2 m

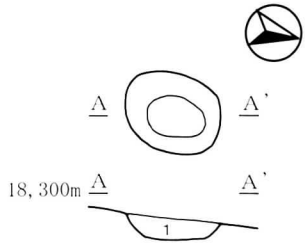
第4-5図　検出遺構平面図及び断面図1

Ｈ７号ピット



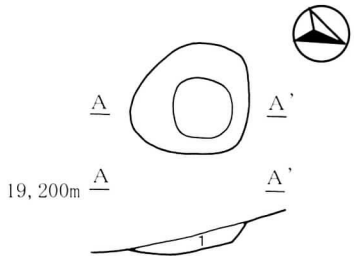
１層　10YR3/3（暗褐色土）しまり弱く粘性やや弱い。

Ｈ８号ピット



１層　10YR3/3（暗褐色土）しまり弱く粘性やや弱い。直径２～５㎜の炭化物を極めて多く含む。直径２～５㎝の礫を多く含む。

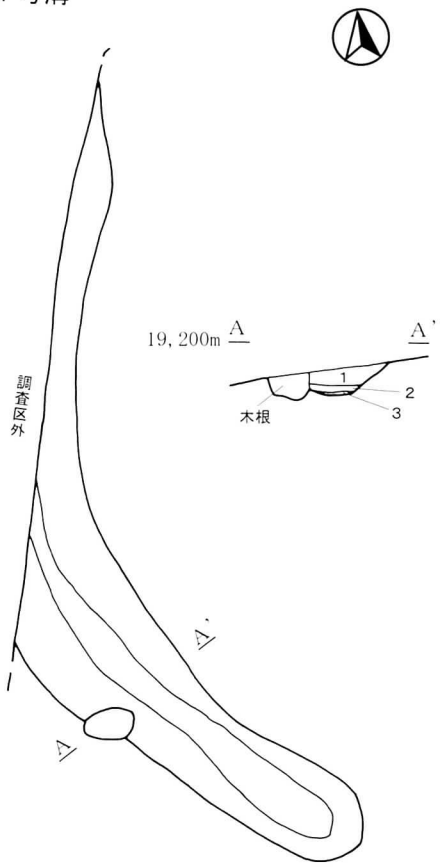
Ｈ９号ピット



１層　10YR3/3（暗褐色土）しまりやや弱く粘性弱い。部分的に焼土ブロックを含む。直径２～４㎜の炭化物を少量含む。

0　2ｍ

Ｈ1 号溝



１層　10YR3/3（暗褐色土）しまり弱く粘性やや弱い。直径３～５㎜の礫をやや多く含む。直系４～８㎜の炭化物を少量含む。

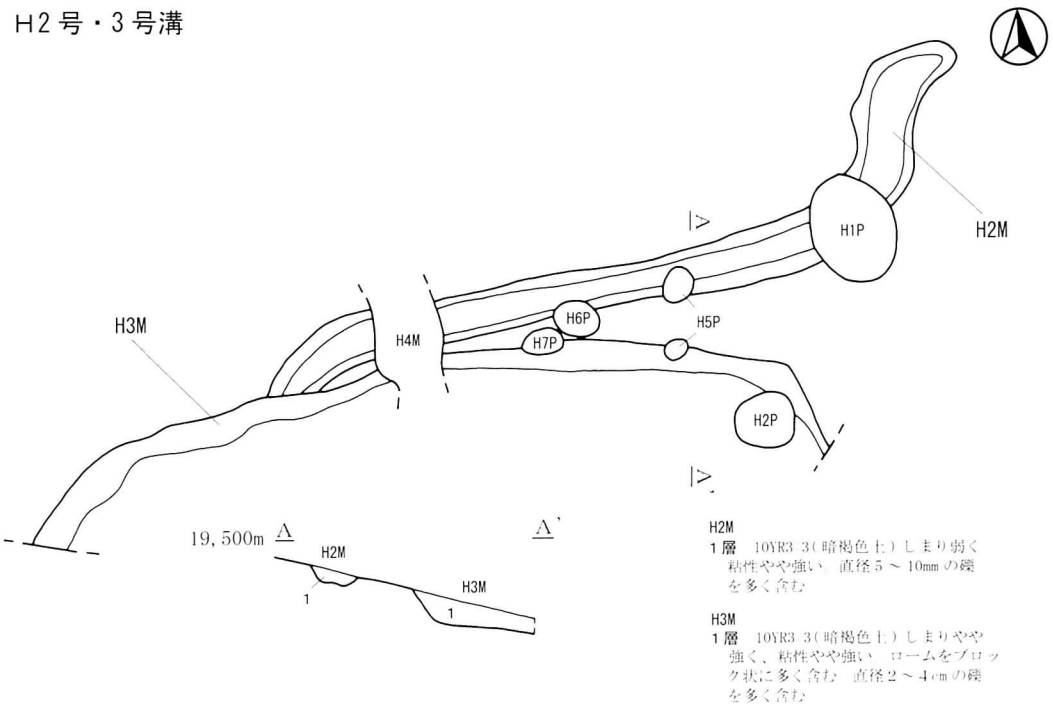
２層　10YR5/6（黄褐色土）しまり弱く、粘性やや強い。直径５～10㎜の礫をやや少量含む。

３層　10YR5/6（黄褐色土）とロームの混在した層。しまり弱く、粘性やや強い。直径５～10㎜の礫をやや少量含む。

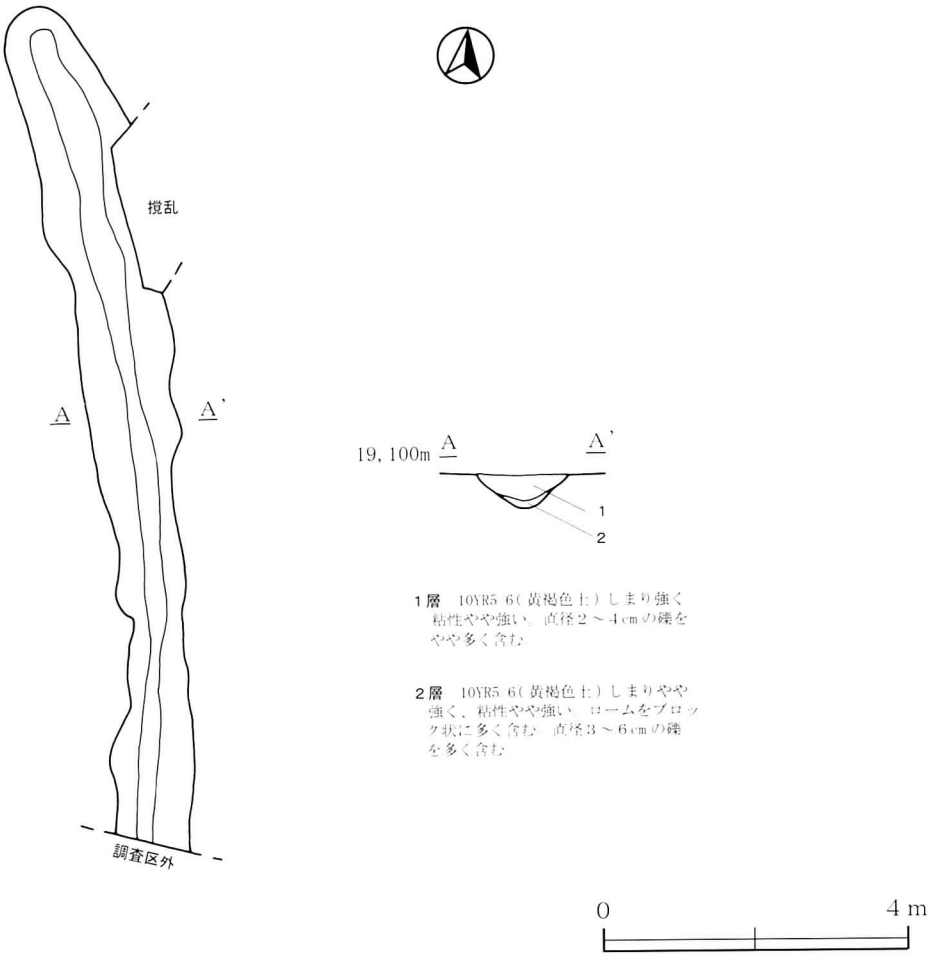
0　4ｍ

第４-６図　検出遺構平面図及び断面図２

H2号・3号溝



H4号溝



第4-7図　検出遺構平面図及び断面図3

2）検出された遺物

今回の調査では、縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器など約350点の資料が出土した以下では、時代ごと、種別ごとに掲載する。

〈縄文土器〉

今回の調査では、約50点の縄文土器片が出土した（第4-8図・第4-9図）。多くは、調査区北側のE2～G2Gr.斜面部で出土した。この他少量であるが、調査区南東部斜面、西部斜面からも出土している。

第4-8図1～5は縄文時代前期前半に属する土器群で、いずれも胎土に繊維を含む。1は結節縄文が施文される。

第4-8図6～16、第4-9図は縄文時代後期前半に属する土器群で、第4-8図6・7は口唇直下に沈線が引かれ、やや袋状の口縁部となる。8～13は口縁部文様帯が無文で頸部に括れを持つ鉢あるいは深鉢の口縁部と考えられる。14～16は充填縄文技法により文様が描かれており、14・16の無文部分は丁寧に磨き調整されている。16は小形の土器のためか、器厚が薄く、区画沈線も細い。

第4-9図1～10は縄文のみが施文される土器片である。いずれも、体部下半の資料と考えられる。1・2は同一個体と考えられる。

11は外面は細い棒状工具で調整され、内面は磨き調整される土器で、縄文後期の小形土器と想定した。12は頸部に括れを持ち、2本の沈線間に、短かい縦沈線を施した土器で、内面は磨き調整されている。縄文時代後期の小形土器あるいは、晩期前半の土器と想定される。13は焼成が良好ではない土器で、平行する沈線の間にコの字の区画沈線を描き、コの字間に列点（あるいは刺突）を施す。縄文時代後期の小形土器と想定される。14は小形の壺形土器の肩部片と考えられる。内面は丁寧に磨き調整されている。

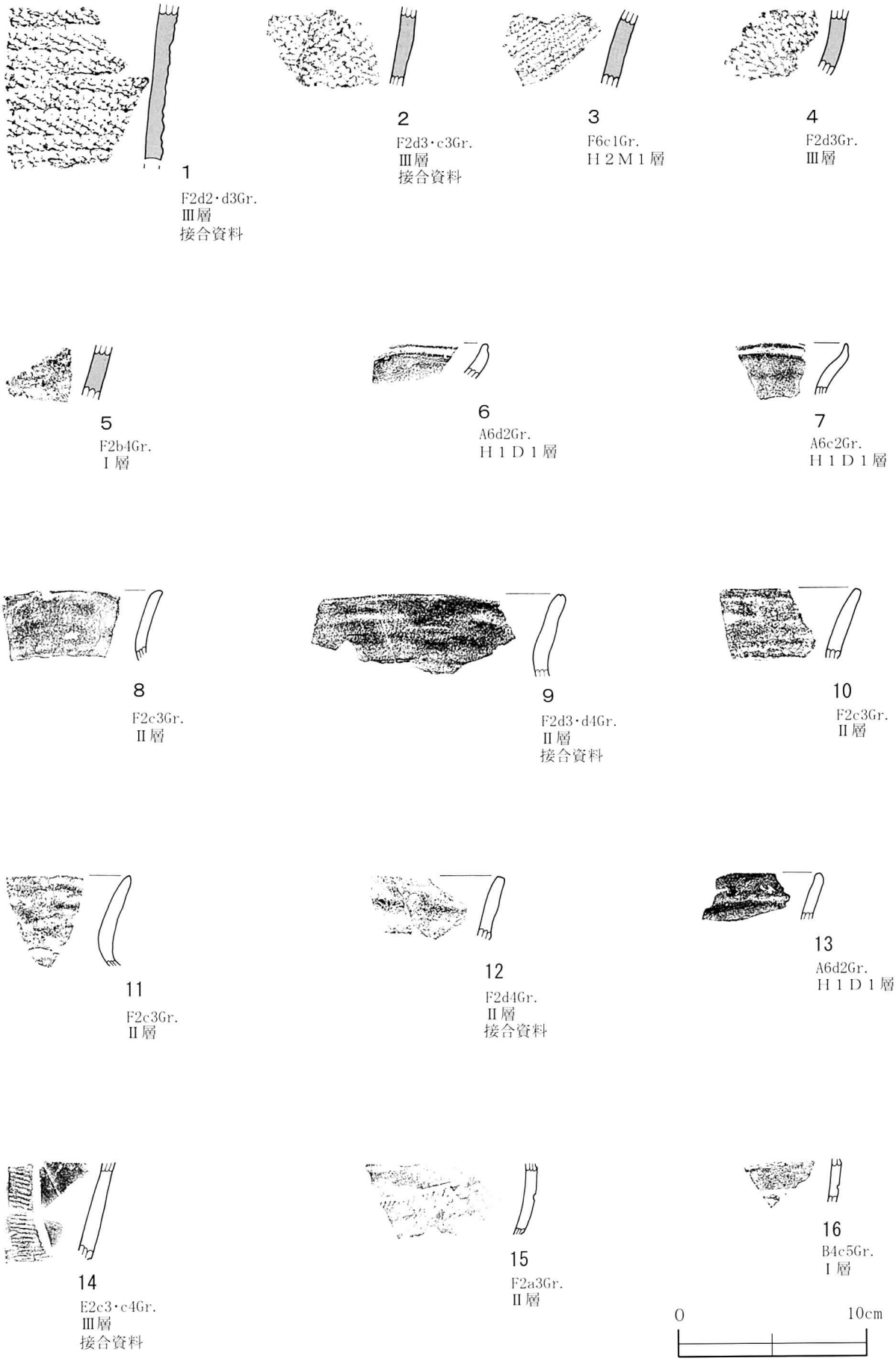
〈弥生土器〉

今回の調査では、約25点の弥生土器片が出土した（第4-10図）。多くは、調査区北側のF2Gr.斜面部で出土した。この他少量であるが、調査区南東部斜面からも出土している。

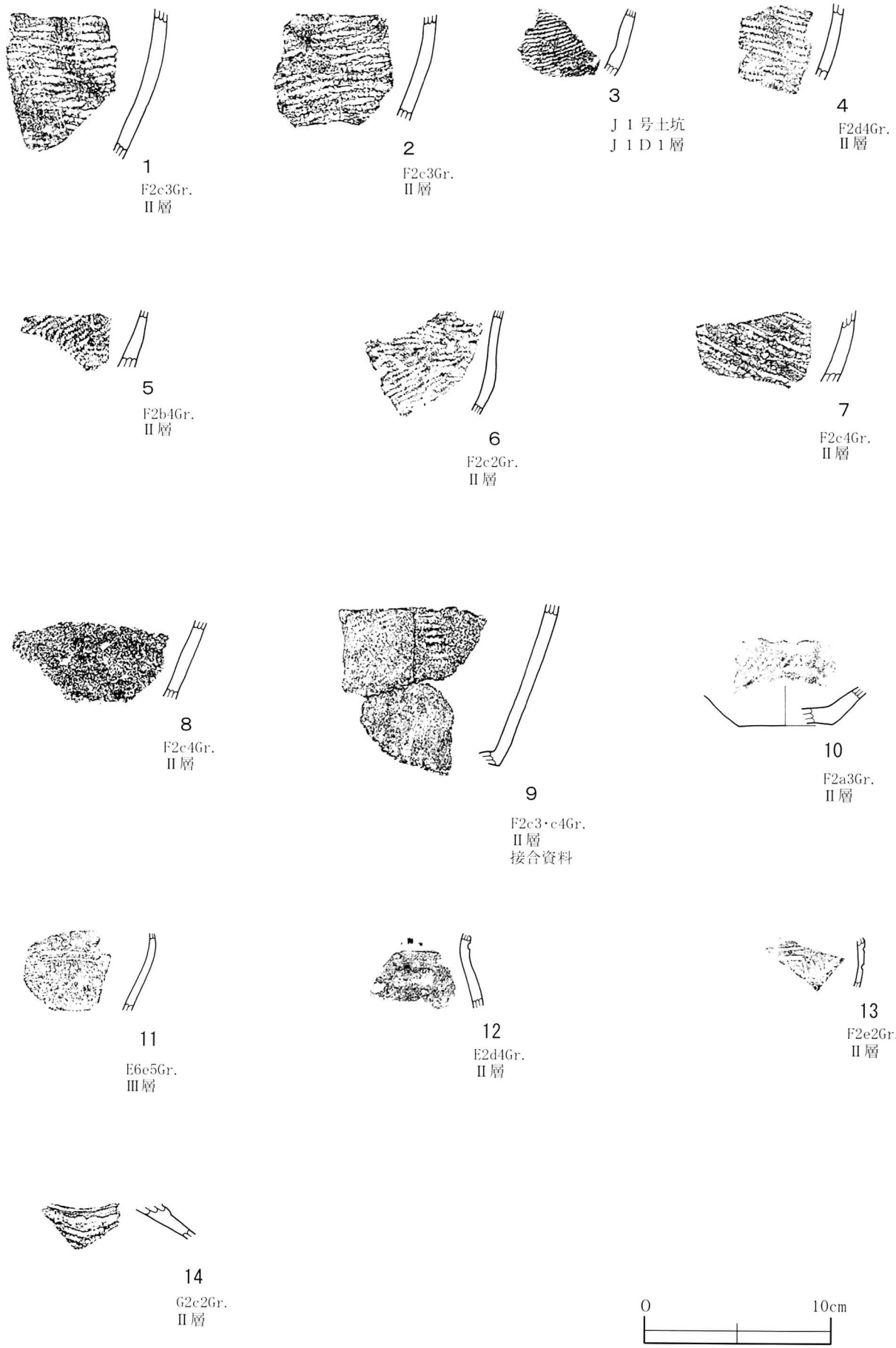
1～8は弥生時代中期前半の土器で、1は浅鉢あるいは高坏の坏部片である。口縁部に2条の平行沈線が引かれその下に「変形工字文C型」あるいは「波状文」（須藤1976）が描かれていると想定される。内面口縁部には沈線が1条施される。2は高坏の脚部片で、2条の沈線の下に波状あるいは蝶形の磨消縄文が施されると想定される。内面は輪積み痕を残す。鉢形土器の体部片で、沈線が施されている。内面は輪積み痕を残す。4～6は同一個体と考えられる。口縁部は小波状口縁を無し磨き調整されている。7・8は同一個体と考えられ、内面は丁寧に磨き調整されている。

9～17は弥生時代中期後半の土器である。9～11は同一個体と考えられ、壺形土器片である。9は頸部～体部上半の破片で、波状の磨消縄文が3条見える。その最上部の縄文体には列点文が施される。12・13は同一個体と考えられる。実測図は、小波状の頂部を示しており、摘み上げたように細くなっているが、波状の低い部分においては口唇部内面に面取りがされている。また、小波状頂部には何単位かで、口唇部に刺突を入れている。口縁部文様体は平行沈線による磨消縄文が施され、縄文帯の中央には波状の沈線が引かれる。

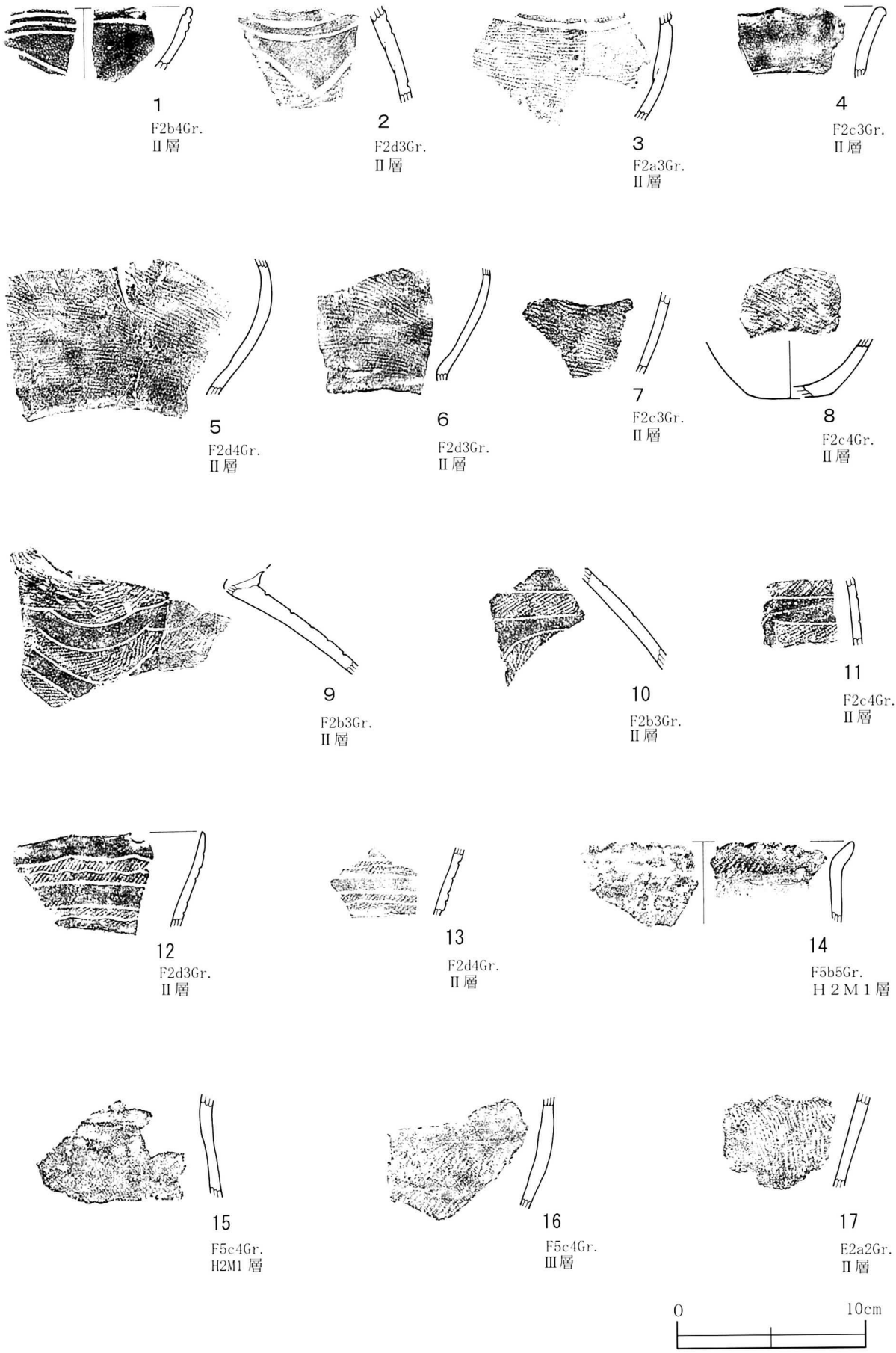
14～16は同一個体と考えられ、口縁部に刻みを加え、波状を呈している。口縁部下で屈曲し、体部には縄文が施される。また、内面の口縁部にも縄文が施される。



第4－8図　出土遺物1（縄文土器1）



第4-9図　出土遺物2（縄文土器2）



第４-10図　出土遺物３（弥生土器）

〈土師器〉

今回の調査では、約130点の土師器片が出土した（第４－11図～第４－13図）。調査区全体から出土しているが、特に、遺構が集中したＦ５からＥ６Gr.やＨ１号土坑周辺で多く出土している。

第４－11図１～15、第４－12図１～６は坏である。第４－11図１は体部中位で段を持ち、内外面とも磨き調整がなされ、内面は黒色処理がされる。ロクロ非使用である。第４－11図２～第４－12図４はロクロ使用の坏である。完形に近い資料は第４－11図４のみで、他は、推定であるが、口径は13.2cm～14.4cmの資料が多く、第４－11図７・８は15.6cm、11は20.1cmとやや大形のものも見られる。底径は4.8cm～6.3cmの資料が多く、第４－11図２のように8.1cmとやや大形のものも見られる。

ロクロは時計回りのものが多いが、反時計周りのものもある。外面はロクロ痕を残すが、体部下部をヘラケズリ調整し、底部は調整をせず糸切痕を残すもの（第４－11図５・第４－12図１・３）や、回転ヘラケズリにより糸切痕を消し、器面調整をするもの（第４－11図２～４・７）が見られる。内面はいずれも黒色処理が施されており、体部上半においては横、下半においては縦方向に磨き調整をしているものが多い。

これらの坏に中で、３点の墨書土器が検出された。うち、第４－11図６・10は判別不能であるが、第４－11図４は「備」と想定される字が書かれている。

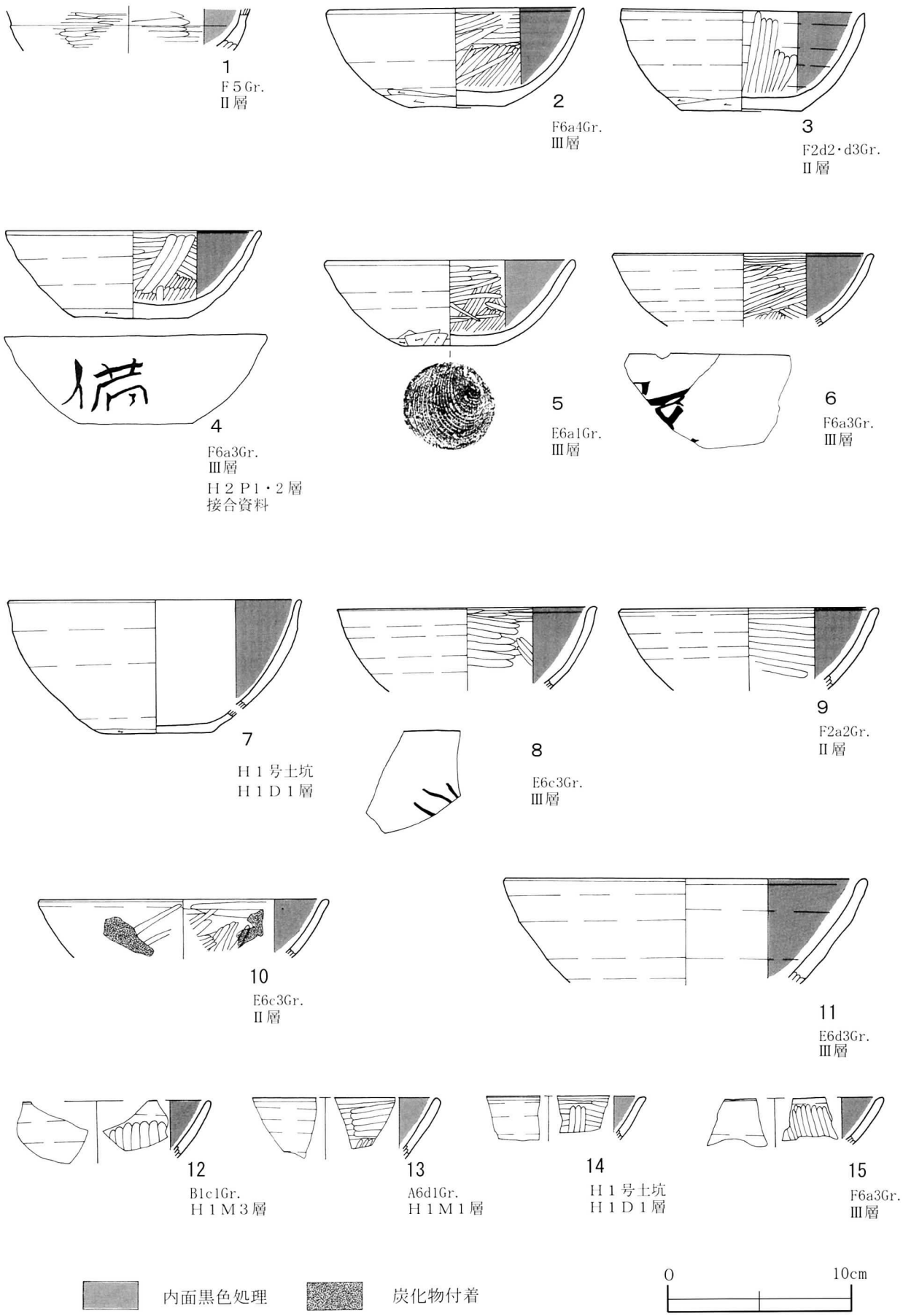
第４－12図５・６は高台（脚部）のある坏である。高台は高くない。２点のみの出土であるが、高台の径が大きく違う。

第４－12図７～第13図10は甕である。今回検出された資料が破片であるため口径が想定されるものが少なかったが、大きさはまちまちであるようである。

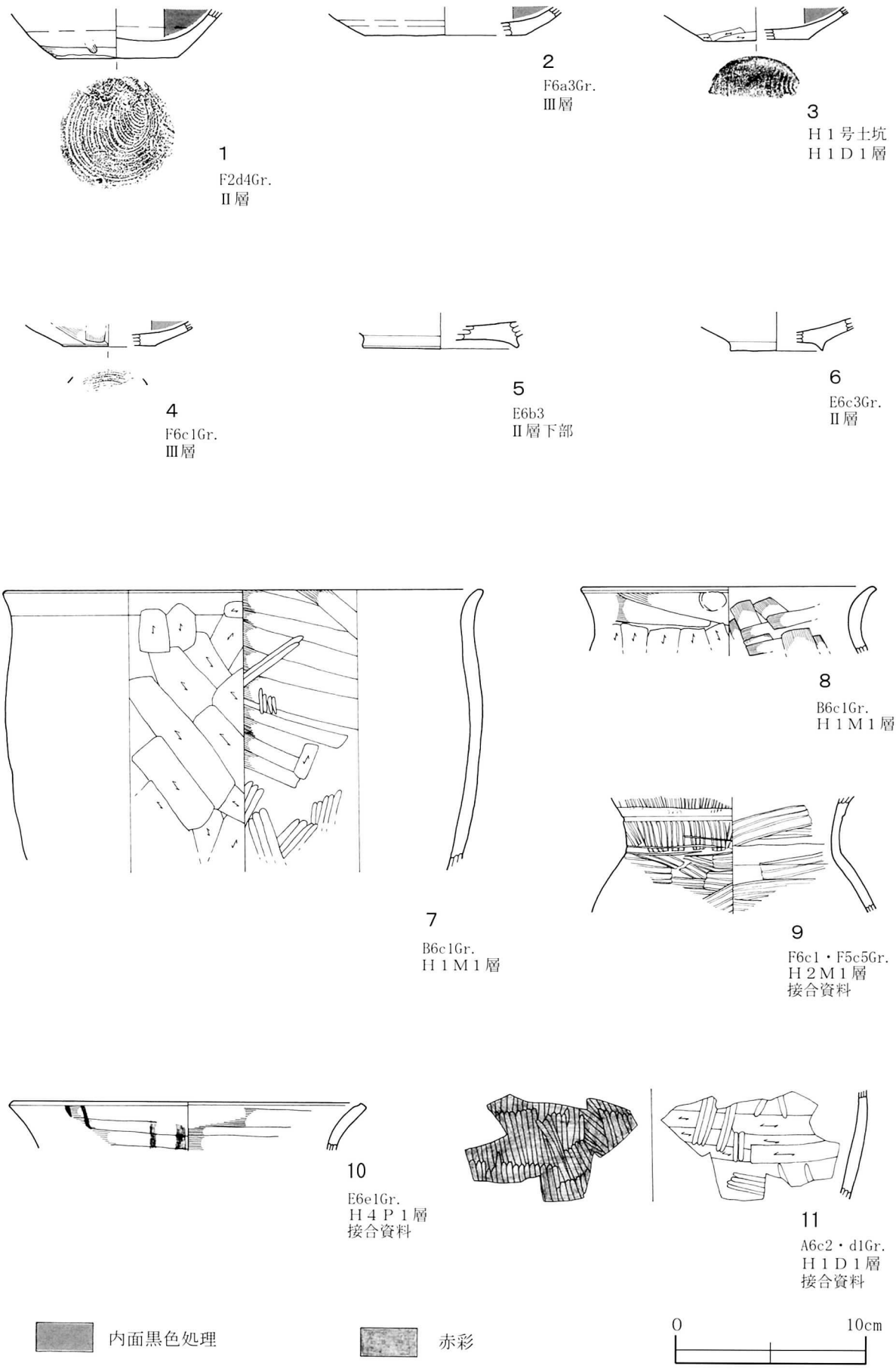
第４－12図７・８・第４－13図１・２・６・８は口縁部に括れを持ち、口縁部が横位のナデ、体部がヘラケズリ調整される。内面はナデあるいは磨き調整、体部下半においてはヘラケズリ調整がさている。

第４－12図９・第４－13図３～５・７は頸部に沈線あるいは段を有し、口縁部及び体部が刷毛調整されるものである。多くは体部の刷毛は縦方向に見られるが、第４－12図９や第４－13図５のように異方向に施されるものもある。また第４－12図９・第４－13図３・４は刷毛自体を文様のように施している。内面は刷毛（第４－12図９）、口縁部～頸部までをナデ調整し、体部をヘラケズリ調整するもの（第４－13図３・４）、ナデ調整（第４－13図７）されるものなどがある。第４－13図９・10は、体部外面が刷毛調整される甕の底部と考えられ、９は内面が刷毛、10は内面がヘラケズリ調整されている。９は底部に木葉痕が残っている。

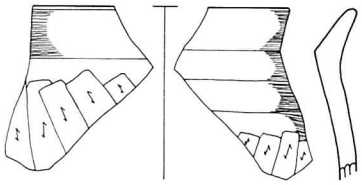
第４－12図10・11は赤彩された甕である。10・11の胎土はいずれも10ＹＲ８／２（灰白色）であることから同一固体化と考えていたが、11は赤彩が厚く塗られているのに対し、10はやや擦れている点や10がＥ６Gr.11がＨ１号土坑出土と出土位置に隔たりがあることから、別個体と考えられる。10は口縁部破片で、内外面ともに横位のナデ調整がされた後、２条か３条１単位で、赤彩で縦線が引かれている。内面には引かれていないが、引かれていない部分の破片である可能性もある。口縁は外湾し、口唇部は面取りがされている。11はＨ１号土坑及びその周辺から小破片となって出土したもので、やや大きな資料１点を実測し、他は、写真のみを掲載した（図版４－８）。体部外面は丁寧に磨き調整された後に赤彩されている。内面はヘラケズリ調整及び磨き調整がされている。



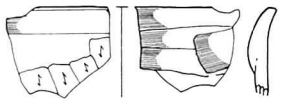
第4-11図　出土遺物4（土師器1）



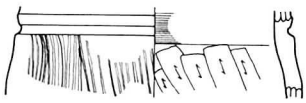
第４-12図　出土遺物５（土師器２）



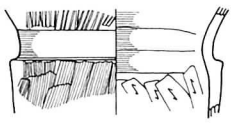
1
F6d4Gr.
Ⅱ層



2
表土一括

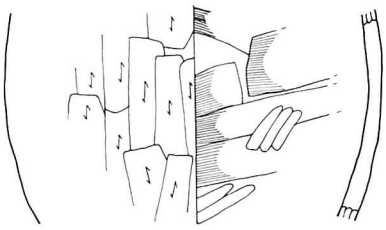


3
H１号土坑
H１D１層

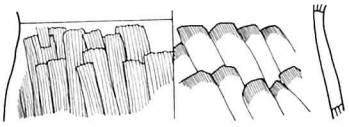


4
E6d3Gr.
Ⅲ層

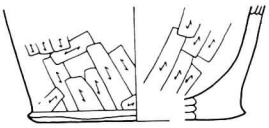
5
H１号土坑
H１D１層



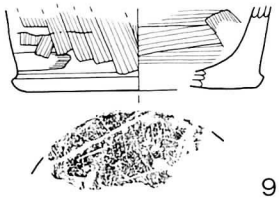
6
E6d3Gr.
Ⅱ層



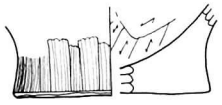
7
E6c3Gr.
Ⅲ層



8
E6b3Gr.
Ⅱ層下部



9
A4e2Gr.
Ⅲ層



10
F2c4GR.
Ⅱ層

第４-13図　出土遺物４（土師器３）

〈須恵器〉

今回の調査では、約70点の須恵器片が出土した（第４-14図～第４-17図）。古代の遺構が集中したＦ５からＥ６Gr.やＨ１号土坑周辺で多く出土している。

第４-14図は坏である。完形に近い資料が無く、４点のみ口径の推定を行ったが、うち３点の口径は13.5㎝～14.4㎝で、２は17.4㎝と他に比べやや大形となる。底部は６点の底径を推定したが、4.5㎝～6.6㎝で、６㎝前後の資料が多いようである。

ロクロは時計回りのものが多いが、反時計周りのものもある。いずれもロクロで整形されており、外面及び内面はロクロ痕を残す。外面体部の最下部はケズリ調整がされるものがあるが（10・15）、底部の糸切痕は残される。

第４－15図は壺または瓶である。１と２は同一個体と考えられる。１や２のように器厚の厚いものや、３～５・９・10薄いものもある。いずれもロクロ成形されており、１と２はロクロ成形後、体部下半はヘラケズリ調整されている。

第４-16図・第４-17図は甕である。このうち第４-16図１・４～第４-17図２は、Ｈ８号ピット周辺から出土しており、同一個体の可能性も有る。完形に近い資料が無く、3点のみ口径の推定を行ったが、１は26.4㎝、２は25.6㎝、３は20.8㎝である。口縁部はいずれも外反し口縁端部が内傾する。第４-16図１・４～第４-17図５は内外面にタタキ目が見られ、第4-17図5の内面は一方向からのタタキ目であるが、他は同心円状のタタキ目となる。外面は第4-17図5は偽格子状のタタキ目になるが、他は一方向へのタタキ目となっており、肩部には沈線が引かれ、タタキ目と沈線による文様となっている。第４-17図７～10は内面にタタキ目などが見られない。第４-17図11は棒状あるいは小石で削ったような調整が見られる。

〈鉄製品〉

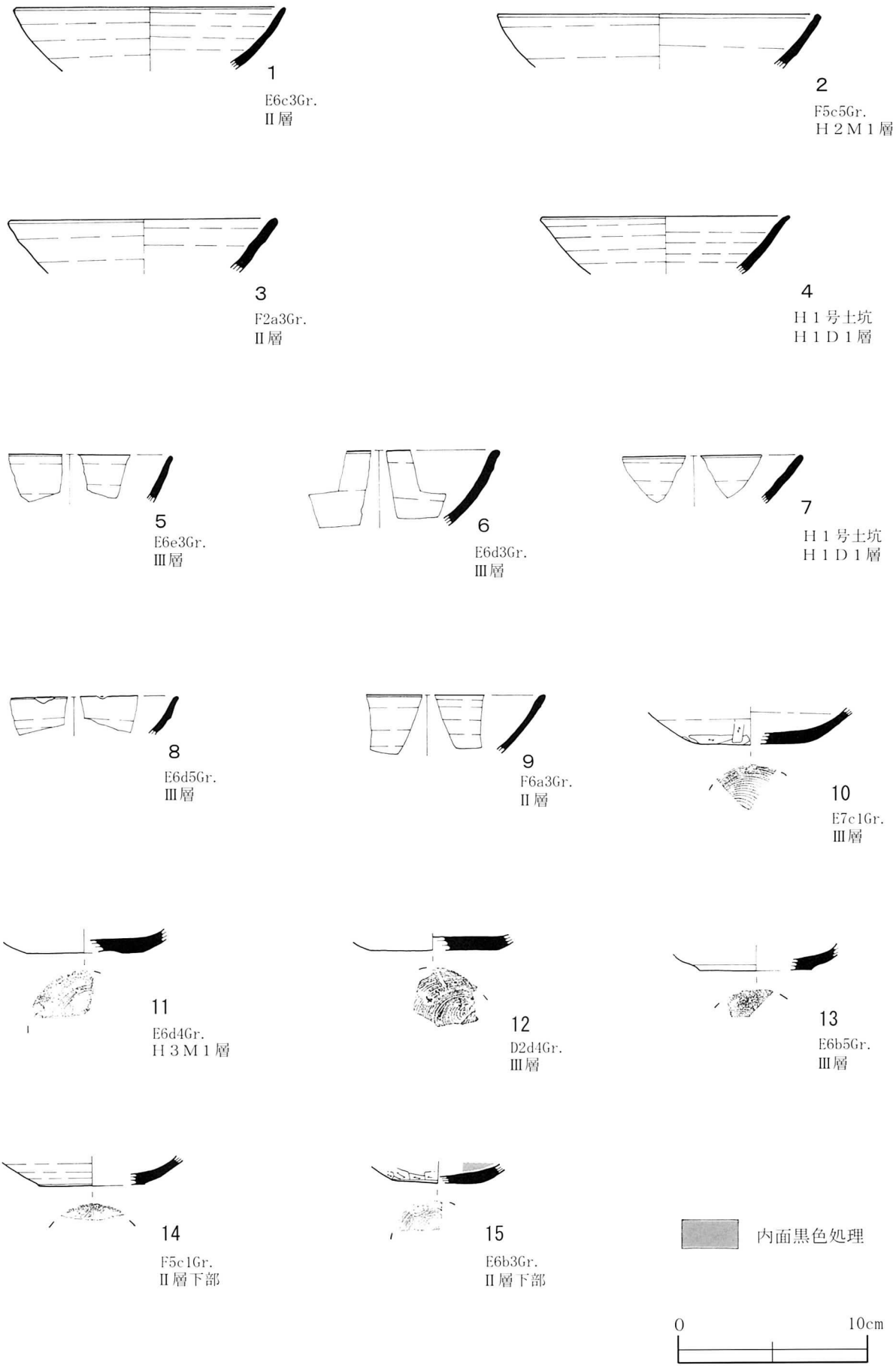
今回の調査において３点の鉄製品が出土した（第４-18図１～３）。岩手県立博物館で保存処理を行った。実測図は処理後のものである。なお、写真図版は、処理前・処理後を掲載した。１は小刀あるいは刀子で、刃部及び茎部ともに欠損している。２は雁又鏃と考えられるが、鏃部や基部が欠損している。３は紡錘車の紡輪部である。軸部分は抜き取られたのか、中央部に孔がある。いずれもＥ6Gr.から出土しており、Ｈ5号ピット（煙道）やＨ８ピットに関連する可能性もある。

〈フイゴの羽口〉

今回の調査では4点出土した。このうち3点を掲載した（第4-18図4～6）。内径は1.4㎝～1.7㎝で、中心がずれているものもある。４・５の外面はヘラケズリ調整されている。いずれも鉄滓が付着し、二次焼成を受けたようにボロボロになっていることから、使用後廃棄されたものと考えられる。4点の出土位置はＦ4Gr.であるが、周辺からは遺構や鉄滓を確認することはできなかった。

〈土製支脚〉

今回の調査で１点出土した（第４-18図７）。全体的に縦方向にヘラケズリ調整されている。Ｈ１号溝より出土しているが、周辺や傾斜上部の平場からは関連する遺構が確認できなかった。

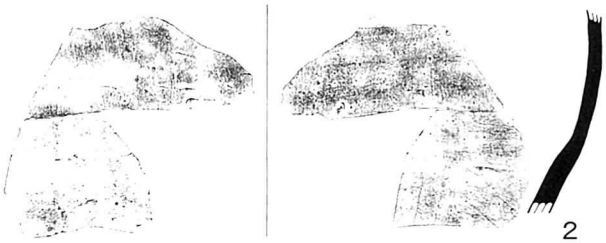


第4-14図　出土遺物7（須恵器1）

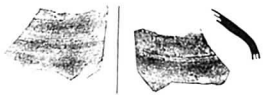
1
E6d4・e3・e4Gr.
Ⅱ層
接合資料

3
E6b3Gr.
Ｈ３Ｍ１層
E6e4Gr.
Ⅱ層
接合資料

4
E6a5Gr.
暗黄褐色土



2
E6e3Gr.
Ⅲ層
接合資料



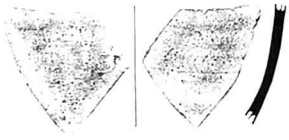
5
E6a4Gr.
Ⅱ層下部

6
表土一括

7
F6b1Gr.
Ｈ２Ｍ１層

8
E6a3Gr.
Ⅱ層下部

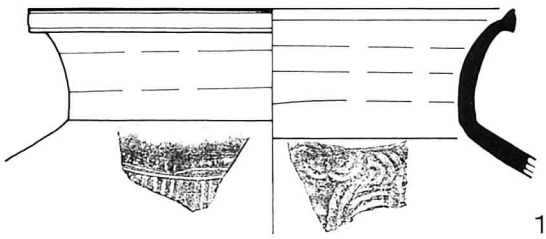
9
F3e3Gr.
Ⅱ層下部



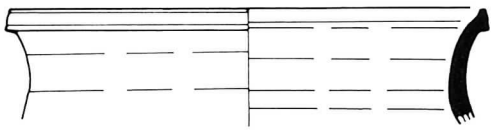
10
F4d2Gr.
Ⅲ層

11
D5e5Gr.
Ⅲ層

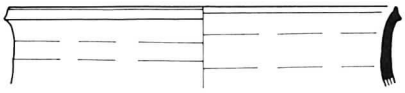
第４-15図　出土遺物８（須恵器２）



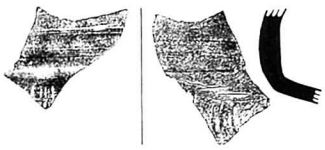
1
E6c5Gr.
H８Ｐ１層



2
E7e1Gr.
Ⅲ層



3
E6d3Gr.
Ⅱ層



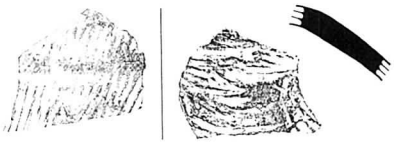
4
F5b5Gr.
H２M１層

5
E6e5Gr.
Ⅲ層

6
E6c4Gr.
H８Ｐ１層

7
E6e3Gr.
Ⅲ層

8
E6b1Gr.
H２M１層

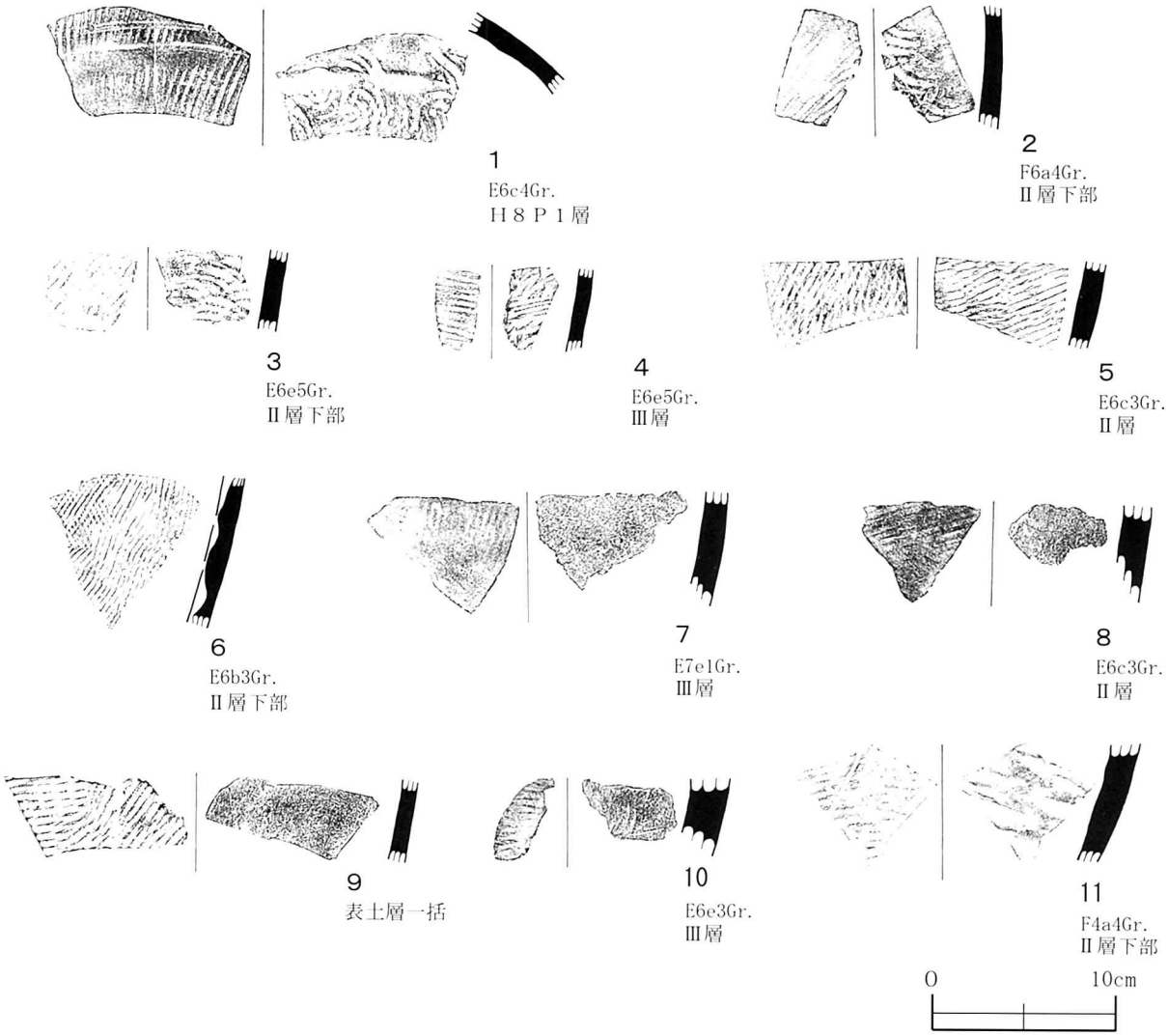


9
E6c4Gr.
H８Ｐ１層

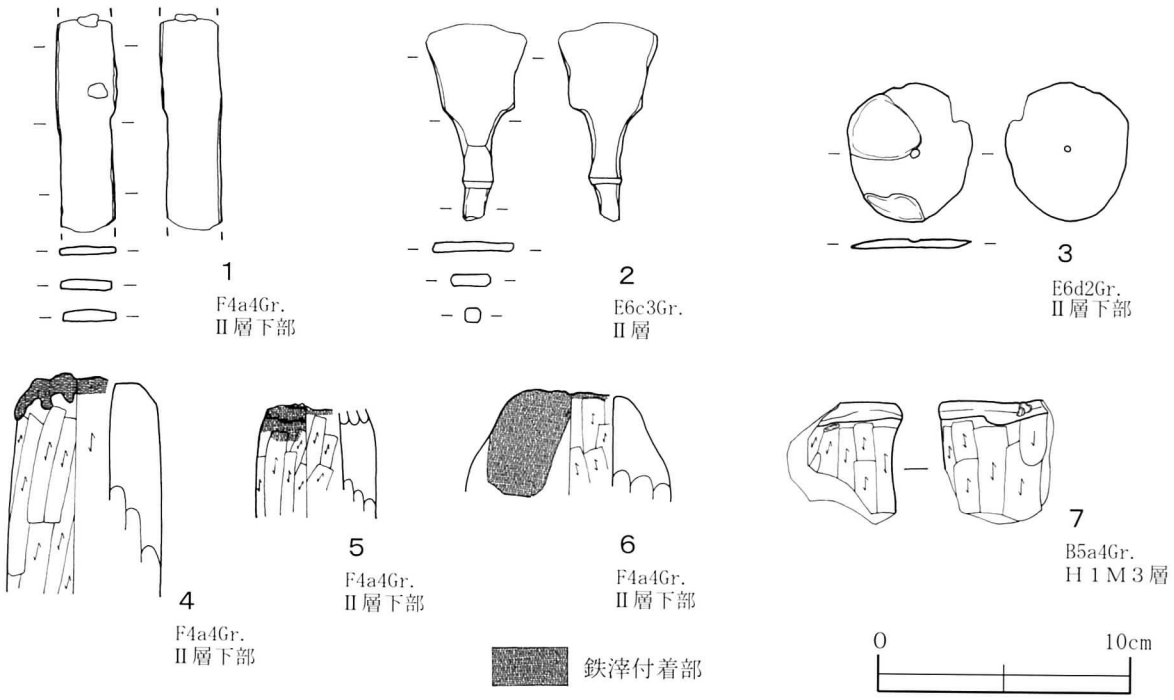
10
E6c4Gr.
H８Ｐ１層

0　10cm

第４-16図　出土遺物９（須恵器３）



第４-17図　出土遺物10（須恵器４）



第４-18図　出土遺物11（鉄製品・フイゴ羽口・土製支脚）

4. 出土鉄関連資料の金属考古学的調査結果

岩手県立博物館　赤沼　英男

1）はじめに

今回の調査では遺跡から3点の鉄器および9点の鉄滓が出土した。検出された資料は遺構の堆積状況および共伴土器によって、9世紀前半と推定されている。律令期に比定される岩手県三陸沿岸出土鉄関連資料の金属考古学的調査例は乏しく、地金の組成の点から出土鉄器の来歴に関する議論はなされていない。出土した鉄滓については羽口が見出されているものの、炉跡は未確認なため、その成因について言及することは難しい。律令期の岩手県三陸地方における鉄器の普及状況に関する基礎データを得ることと、出土鉄滓の成因を推定することを目的として、麓山遺跡出土鉄器および鉄滓の金属考古学的調査を実施した。以下に、調査結果を報告する。

2）調査資料

調査資料は第4-1表に示す12資料で、鉄器3点、鉄滓7点である。鉄滓は外観形状から、椀形滓（No.4）、塊状滓（No.6・7・9・10）、板状滓（No.5・8）に細分される。No.4はほぼ同形態の2つの椀形滓が重なり、固着した資料である。

3）調査試料の摘出

調査対象とした資料をX線透過観察に供し、鉄器と鉄滓に資料分類した。鉄器からの調査資料の摘出は、ダイヤモンドカッターを装着したハンドドリル（以下、ハンドドリルという）を使い、X線透過観察結果から残存状況が良好と判断された部位から、慎重に行った。摘出した試料をさらに2分し大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に用いた。鉄滓については資料に1～2㎝の切り込みを入れ、切り込み面の一方から調査試料を摘出した。鉄器同様摘出した試料を2分し、大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に供した。

4）調査方法

組織観察用試料はエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を金属顕微鏡で観察し、地金の製造方法を推定するうえで重要と判断された領域および非金属介在物を構成する鉱物相を、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）で分析した。摘出した試料の中心部分にメタルが確認されたNo.1鉄鏃については、EPMA分析終了後、ナイタール（硝酸2.5mlとエチルアルコール97.5mlの混合溶液）で腐食し、組織観察した。

化学成分分析用試料は表面に付着する土砂、錆をハンドドリルで丹念に削り落とし、エチルアルコール、アセトンで超音波洗浄した。試料を130℃で2時間以上乾かし、メタルと錆が混在したNo.9試料については直接、他についてはメノー乳鉢で粉砕した後テフロン分解容器に秤量し、塩酸、硝酸、およびフッ化水素酸を使って溶解した。溶液を蒸留水で定溶とし、T.Fe（全鉄）、Cu（銅）、ニッケル（Ni）、コバルト（Co）、マンガン（Mn）、

リン（P）、錫（Sn）、チタン（Ti）、ケイ素（Si）、カルシウム（Ca）、アルミニウム（Al）、マグネシウム（Mg）、バナジウム（V）、いおう（S）に、鉄器ではモリブデン（Mo）を加えた14元素を、鉄滓ではカリウム（K）を加えた14元素を、高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP-AES法）で分析した。

5）調査結果

①　鉄器から摘出した試料の組織観察結果

No.1から摘出した試料は約3割がメタルによって構成されていたので、ナイタールで腐食した。マクロエッチング組織はその全域がほぼ全域が黒く腐食されている（第4-19図）。パーライト［フェライト（αFe）とセメンタイト（Fe_3C）との共析組織］の占める面積割合から0.7-0.8mass%C程度の鋼と推定される（東北大学金属材料研究所編1953）（佐藤編1968）。摘出した試料のメタルには、ガラス質ケイ酸塩中に1μm未満の微細な灰色角状化合物（XT）が混在した非金属介在物がみられる（図1）。EPMAによる含有元素濃度分布のカラーマップ（第4-1写真）は、化合物XTがFe、Ti、Oを主成分とする鉄チタン酸化物であることを示している。

No.2から摘出した試料は錆化が進んでいて、いたるところに亀裂や空隙がみられる（第4-19図）。マクロ組織には微細な線状の空隙（Cm）が層状に並び、島状領域を形成した組織が観察される。これまでに行われた錆化組織の観察結果に基づけば（Knox.R1963）（佐々木1984）、空隙Cmはセメンタイト（Fe_3C）の欠落孔と推定される。空隙Cmによって構成される島状領域をパーライトとし、錆化による組織の膨張を無視すると、標準炭素鋼との比較によって、錆化前の地金の炭素量は、0.3～0.4mass%とみることができる。No.2の錆中にはガラス化した領域に微小粒子が点在する非金属介在物が見出されている（第4-19図）。No.3から摘出した試料片は錆化が著しく、錆化前の地金の炭素量を推定できる組織および非金属介在物を見出すことができなかった（第4-20図）。

②　鉄器から摘出した試料の化学組成

No.1Sa_1（M＋R）のT.Feは84.54mass%で、メタルと錆が混在した試料が分析されている（第4-2表）。No.2Sa_1、No.3Sa_1のT.Feは63～68mass%と低レベルで、相当に錆化が進んだ試料が分析されている。上記3試料からは、0.004～0.008mass%のCu、0.004～0.012mass%のNi、0.008～0.016mass%のCoが検出されている。

錆が混在した試料、および錆化が進んだ試料が分析されているため、埋蔵環境下からの富化の可能性について吟味する必要がある（佐々木、伊藤1987）。そこで3資料の表層部からも試料を摘出し、化学成分分析した。3試料の表層部のT.Feは7～29mass%、Siは12-21mass%、Alは4.6～9.1mass%であり、内部から摘出した試料に比べ、錆化が進み、土砂の混入が著しい。表層部から検出されたCu、Ni、Coは、いずれも内部に比べ低レベルにある。これら3試料に含有されるCu、Ni、Coについては、埋蔵環境からの富化の可能性は乏しいといえる（第4-2表）。

③　鉄滓から摘出した試料片の組織観察結果

No.4は椀形滓の一部である。摘出した試料にはいたるところに大小多数の空隙がみられる。マクロ組織Reg.1内部のEPMAによる反射電子組成像（BEI）は、酸化鉄（IO：ウスタイトに近い）、鉄かんらん石（Fa）、Fe-Al-O系化合物｛Ha：ハーシナイト（$FeO \cdot Al_2O_3$）に近い｝、

および微細粒子が混在した微細粒子が混在したガラス化した領域(Ma)からなる(第4-21図、第4-4表)。

No.5塊状滓から摘出した試料は、マグネタイト(Mag)、鉄かんらん石、および微細粒子が混在した微細粒子が混在したガラス化した領域(Ma)によって構成される(第4-21図、第4-4表)。ほぼ同様の鉱物組成は、No.6板状滓、No.7塊状滓、およびNo.8板状滓から摘出した試料にも見出されている(第4-21図・第4-22図・第4-23図、第4-4表)。

No.9は著しく発泡した小塊状滓である。摘出した試料はその全域が化学組成の異なるガラス化した領域によって構成されていて、局所的に酸化ケイ素(Qtz:石英と推定される)およびマグネタイトと推測される化合物(Mag)が析出している(第4-23図、第4-3表)。No.10も溶融または部分溶融し、発泡した塊状滓である。摘出した試料はガラス化した領域に酸化ケイ素が析出した組織からなる。局所的にマグネタイトと推定される化合物が析出している(第4-3表、第4-24図)。第4-1写真に示すカラーマップから明らかなように、No.9のガラス化した領域内には、微細な金属光沢を呈するFe-Cr-Sr-Ni系化合物が観察される。

No.10塊状滓から摘出した試料も、いたるところに空隙がみられる。マクロ組織Reg.1内部はガラス化した領域を主体とし、ところどころに酸化ケイ素(石英と推定される)および微細なFe-Al-O系化合物が点在する。マクロ組織Reg.2内部もガラス化した領域に微細なマグネタイトが析出した組織からなり、局所的にメタル粒と錆が混在する。

④　鉄滓から摘出した試料の化学組成

No.4Sa_1～No.8Sa_1のT.Feは53～65mass%、SiおよびAlはそれぞれ3.8～8.5mass%、0.9～2.6mass%である。Tiは5試料とも1.5mass%未満である(第4-3表)。調査したNo.4、No.5・8、No.6およびNo.7、酸化鉄と粘土状物質が反応し、生成した鉄滓とみることができる。

No.9およびNo.10のT.Feは7.4～8.2mass%で、上記5試料に比べ低レベルである。Si、Alはそれぞれ26～28mass%、7～12mass%で、粘土状物質を主体とする試料である。

6) 考察

①　推定される古代の鋼製造法

古代の鋼製造法については幾つかの方法が提案されており、見解の一致をみるにいたってはいない。その主因は、原料鉱石(砂鉄もしくは鉄鉱石[1])を製錬して得られる主生成物の組成についての見解の相違にある。

製錬産物である鉄は炭素量に応じ、鋼と銑鉄の2つに分類される。製錬炉で得られた鉄から極力鋼部分を摘出し、含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そのようにして製造された鋼を使って、製品鉄器が製作されたとする見方がある(大澤1984)。製錬炉で直接に鋼が造り出されるという意味で、この方法は近世たたら吹製鉄における鍛押法(河瀬1990)によって生産された鉄塊を純化する操作に近似する。また、この方法によって得られた鉄〔炭素量が不均一で鉄滓が混在した鉄(主に鋼からなるが銑鉄も混在すると考えられている)〕を精製し目的とする鋼に変える操作は、精錬鍛冶[2]と呼ばれている。古代に鋼を溶融する技術は未確立であったと考えられるので(溶融温度は炭素量によって異なるが、炭素量0.1～0.2%の鋼を溶融するためには炉内温度を1550℃以上に保つ必要がある(日本鉄鋼協会編1981)、主として鋼から成る鉄から鉄滓

を分離・除去する際の基本操作は加熱・鍛打によったと推定される。組成が不均一な鉄から純化された鋼を得る操作が精錬鍛冶と呼ばれるようになったのは、上述によるものと推察される。

おびただしい数の鉄仏や鉄鍋、鉄釜をはじめとする鋳造鉄器の普及が示すように(五十川1992；1996)、遅くとも9世紀には銑鉄を生産する技術、すなわち銑鉄を炉外に流し出す製錬法が確立されていたとする見方が出されている(関1996)。得られた銑鉄を溶解し鋳型に注ぎ込むことによって鋳造鉄器が製作される。また、生産された銑鉄を脱炭することにより鋼の製造も可能となる。後者はこの方法に基づくもので、銑鉄を経由して鋼が製造されるという意味で、間接製鋼(鉄)法[2]に位置づけられる。

銑鉄を脱炭する方法の一つとして、近世たたら吹製鉄における大鍛冶(河瀬1990)(村上1996)がよく知られている。たたら吹製鉄には銑押法と鉧押法の2つの方法がある(河瀬1990)。後者における生産の主目的物は鉧鉄(主として鋼からなる鉄塊)、前者は炉外に流し出される銑鉄で、副生成物として炉内に鉧鉄もできる。銑押法において鉧鉄は操業の妨げになるので、鉄棒をたえず炉内に入れ炉外に取り出すようつとめたという。このようにして生産された銑鉄は鍛冶場に運ばれる。そこではまず火床炉の炉底に木炭を積み、その上に銑鉄を羽口前にアーチ形に積み重ね、さらに銑鉄を小炭で覆った後底部に点火する。積み重ねられた銑鉄は内部にあるものから溶融し、滴下する。この時、羽口先付近の酸化性火焔にふれ酸化され、鋼(左下鉄)となる。ここまでの操作は「左下」と呼ばれる。左下鉄は製錬時の副生成物である鉧とともに再度同じ火床炉にアーチ状に積まれ、上述と同様にしてさらに脱炭が図られる。脱炭が十分に進んだところで金敷の上にのせ、加熱・鍛打によって鉄滓の除去と整形がなされる。後者は「本場」と呼ばれる。このように「左下」と「本場」、2つの操作を経て包丁鉄を造る方法が大鍛冶と呼ばれている(村上1996)。上述から明らかなように、大鍛冶における「本場」の操作内容は、先に述べた精錬鍛冶と出発物質こそ異なるものの、基本的にほぼ同じとみることができる。

大鍛冶では空気酸化により局所的に銑鉄の脱炭が図られるが、これとは別に溶銑(銑鉄を溶融状態とする)を準備し、大鍛冶と同じ原理によって脱炭する方法が古代に行われていたとする見方が出されている(赤沼1997)(赤沼・福田1997)(福田1999；2000)(赤沼・佐々木・伊藤2000)。この方法の場合、溶銑の準備とそれを脱炭するための設備または道具が不可欠である。

多量の溶銑を確保するためには銑鉄を溶解するための溶解炉が必要である。少量の溶銑を得るには、砂状物質を素材とするるつぼ状容器を用い、その中に少量の銑鉄塊を入れ、るつぼ状容器ごと火窪炉に挿入し溶銑とする。溶解炉中の溶銑をるつぼ状容器または設備に流し出し、あるいは火窪炉からるつぼ状容器を取り出して、羽口先からそれぞれの溶銑に空気を送り込み脱炭する。るつぼ状容器の場合には、溶銑に酸化鉄を添加し再び加熱して脱炭する方法が行われていた可能性をも考えることができる(赤沼2008)。溶銑中に送り込まれた空気中の酸素は銑鉄中の炭素および鉄と反応し、二酸化炭素および酸化鉄として鉄浴から排出される。鉄の酸化に伴う発熱が、脱炭反応の円滑な進行に寄与したと推定される。青森県青森市野木遺跡の平安期の遺構から上記操作が実施されていたことを示唆する、羽口が装着されたるつぼ状容器が検出されていることをふまえると(青森県教育委員会編2000)、筆者はいわゆるるつぼ製鋼の可能性について、検討する必要があると考える。

② 微量元素による調査鉄器の分類

①で述べたとおり、古代には複数の鋼製造法があった可能性が高い。いずれの方法が用いられたとしても、多段階の工程を経て目的とする鋼が製造されたことは確実である。出発物質として同一の製鉄原料が使用されたとしても、製造方法や製造条件に応じ、最終的に得られる鋼の組成にはばらつきが生じる。従って、金属考古学的調査結果、とりわけ摘出した試料の組成分析結果を単純に比較するという解析方法では、実態を反映した資料の分類結果を得ることは難しい。製造法の如何に係わらず、地金を精度高く分類する方法の確立が必要である。

銅(Cu)、ニッケル(Ni)、およびコバルト(Co)の三成分は鉄よりも錆びにくい金属であるため、鉄中に取り込まれた後は、そのほとんどが鉄中にとどまると推定される。5)-②で述べたとおり、調査した3資料への埋蔵環境下からのCu・Ni・Co3成分の富化が乏しい。従って、合金添加が行われていなかったとすると、その組成比は鋼製造法の如何に関わらず、製鉄原料の組成比に近似すると推定される。

第4-2表の分析結果から、(mass%Co)/(mass%Ni)(本稿ではCo＊と記載する)と(mass%Cu)/(mass%Ni)(本稿ではCu＊と記載する)、(mass%Ni)/(mass%Co)(本稿ではNi＊＊と記載する)と(mass%Cu)/(mass%Co)(本稿ではCu＊＊と記載する)をそれぞれ求め、それらの値をプロットしたものが第4-25図a・bである。図では非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出された資料を黒色、鉄チタン酸化物が見出されなかった資料を白色、非金属介在物が見いだされなかった資料を灰色で表した。No.1から摘出したメタルと錆からなる試料｛Sa1(M+R)｝、錆からなる試料(R)は近接して分布する。錆試料であってもCu、Ni、およびCo3成分比については、メタル試料とほぼ同じ組成比をとることを示している。第4-25図a、第4-25図bのいずれにおいても3資料は離れた位置に分布する。3資料の遺跡内への来歴が異なっていた可能性が高いことを示している。

図には、麓山遺跡とほぼ同時代とみなすことができる盛岡市志波城跡出土鉄片・小鉄塊(盛岡市教育委員会2008)を三角(△)、宮古市隠里Ⅲ遺跡出土鉄器および小鉄塊系資料を四角(□)[3]でプロットした。隠里Ⅲ遺跡出土鉄器・小鉄塊系資料の分布の傾向は麓山遺跡出土鉄器に近似する。なお、上記2遺跡から出土した資料についても、非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出された資料を黒、非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出されなかった資料を白、非金属介在物が見出されなかった資料を灰色で標記した。一方、志波城出土鉄片・小鉄塊の分布傾向は麓山遺跡とは異なる。この結果は、9世紀代の三陸沿岸における鉄器または原料鉄の獲得状況が、ほぼ同じ状況にあった可能性が高いことを示している。志波城跡から検出された鉄片および小鉄塊のCu、Ni、およびCo三成分比が異なる理由としては、一般集落跡と城柵跡という遺跡の性格の差異に加え、内陸部と沿岸部における鉄器または鉄器製作の素材として使用される原料鉄の獲得地域の違いを挙げることができる。この点については、類例の蓄積を図り、さらに検討する必要がある。

③ 鉄滓の成因と麓山遺跡における生産活動

既述のとおりNo.4鉄滓はほぼ同形態の2つの椀形滓が固着した資料の一部である。一般に椀形滓については、固体鉄を加熱・鍛打する際に破砕された鉄滓が火窪炉の中に入り込み、火窪炉の底で固化することによって生成した、とみなされている。すなわち、溶融または部分溶融した飛散物が溶着を繰り返し、炉底部の形状を反映した形で固化した、と

する見方である。上記操作では炉内に存在する炭材が鉄滓中に噛み込まれる。金属考古学的調査を行ったNo.4の凸部表面に炭材の混入はみられない。また、上記プロセスでは、椀形滓が上下に2つ固着した理由を説明することはできない。

6）－①に基づけば、No.4については、銑鉄の脱炭操作過程での生成を考えることができる。この場合、あらかじめ砂状物質または粘土状物質を用いて作成した椀形の容器また設備の中に溶融銑鉄（溶銑）を準備し、必要に応じ造滓材を加えた後、空気酸化によって容器内に生成した溶銑を脱炭し鋼を製造する操作、あるいは椀形の設備あるいは容器の中に溶銑を生成させた後、外熱を加えながら酸化鉄を含む造滓材と長時間接触させ鋼を製造する操作が想定される。遺跡内からは鉄滓とともに気道内径が2.5～3㎝の羽口が検出されている。鍛冶または製錬時に用いられる羽口に比べ気道内径は細く、ある程度の風圧確保が可能で、ノズルの役割を果たしていた可能性がある。No.4が酸化鉄に富んだ鉄滓であること、ほぼ同形態の2つの鉄滓が固着した形状であること、そして上記形状の羽口の検出を考え合わせると、遺跡内では空気酸化により銑鉄を脱炭し鋼を製造する操作、いわゆる精錬が実施されていた可能性が高い。今後の調査において遺跡内およびその周辺から銑鉄塊が検出されれば、精錬が実施されていた可能性が一層高まる。

脱炭操作終了後、生成した鋼塊は回収されるが、鋼がるつぼ状容器に固着し分離が難しい場合、加熱・鍛打して鋼を剥離し、回収が図られたものと思われる。No.4と共に出土した鉄錆と鉄滓が混在した小塊状、あるいは板状を呈する酸化鉄に富んだ鉄滓は、鋼を回収する過程で排出された可能性がある。板状滓については、精錬時に使用した造滓材が鉄浴表面で溶融または部分溶融し、揮発する酸化鉄を取り込んだ後、そのまま固化することによって生成した、と考えることもできる。この点については類例の蓄積を重ね、さらに検討すべき課題である。

粘土状物質が溶融または部分溶融し、著しく発泡した後、固化したことを示すNo.9およびNo.10については、生産設備の一部、椀形容器の一部、あるいは造滓材とみることができる。No.10には鉄錆が混在していることから、反応サイト近傍で生成した資料である可能性がきわめて高い。この点についてもほぼ同時代に比定される鉄生産関連遺構との比較を基に、検討する必要があろう。なお、No.10からは微小なFe-Cr-Sr-Ni系化合物が見出されている。遺跡内およびその周辺に分布する岩石・鉱物組成に関する情報を加味することにより、No.10の素材を推定できる可能性がある。この点についても今後の課題としたい。

7）まとめ

麓山遺跡から出土した資料の金属考古学的調査を行った結果、以下の4点が明らかになった。

① 麓山遺跡には複数の地域から鉄器または鉄器製作の素材として使用された原料鉄がもたらされていた可能性が高い。

② 麓山遺跡出土鉄器の組成は、ほぼ同時代に比定される宮古市周辺の遺跡から出土した鉄器・鉄塊の組成と近似する。律令期における三陸沿岸の鉄器獲得状況はほぼ同じであった可能性がある。

③ 検出された椀形滓は、ほぼ同形態の2つの資料が固着したもので、凸部表面に木炭の

混入はみられない。組成ならびに検出された形状を考え合わせると、溶銑を脱炭し鋼を製造する過程（精錬過程）で生成した資料の可能性が高い。

④　③と共に出土した鉄滓も同様の操作で排出された可能性がある。

以上、釜石市麓山遺跡出土鉄滓の金属考古学的調査結果について述べてきた。今回実施した調査結果をふまえ、ほぼ同時代に比定される製品鉄器、鉄塊、鉄滓、および遺跡内周辺に分布する製鉄原料に関する調査を行うことによって、律令期の麓山遺跡における鉄器製作とその使用の実態を、より明確にすることができるにちがいない。

註

1）各種の岩石、とりわけ火成岩中の主として磁鉄鉱と含チタン磁鉄鉱を構成鉱物とする粒子が岩石の風化に伴って分離し、現地残留や風および水などの淘汰集積作用などで濃縮したものが砂鉄鉱床といわれている。従って、砂鉄を構成する主要鉱物は磁鉄鉱であり、鉄鉱石と区別することには岩石鉱物学上誤解を招く恐れがある。ここでは上述によって生成した鉱床から採取された磁鉄鉱および含チタン磁鉄鉱を主成分とする粒子を砂鉄、他の成因によって生成した鉄鉱床から採掘されたものを鉄鉱石と呼ぶことにする。

2）空気酸化により銑鉄中の炭素を脱炭した場合、操作方法によってはただちにαFeに近い組成の鉄が得られた可能性がある。古代の鋼製鉄器の製作にしばしば使用がみられる亜共析鋼が、銑鉄を精錬しただちに得られたかどうか不明なため、本論では間接製鋼（鉄）法という表現をとった。

3）発掘調査報告書準備中。

引用文献

赤沼英男　1997「みちのくの地から中世の鉄をみる」ふぇらむ、Vol.2 No.1、社団法人日本鉄鋼協会、pp.44-51

赤沼英男・福田豊彦　1997「鉄の生産と流通からみた北方世界」国立歴史民俗博物館研究報告、72、pp.1-40

赤沼英男　2008「キウス9遺跡出土鉄関連資料の金属考古学的調査結果」『キウス9遺跡』青森県教育委員会編、2000『野木遺跡Ⅲ』

財団法人北海道埋蔵文化財センター、pp.362-408

赤沼英男、佐々木稔、伊藤薫　2000「出土遺物からみた中世の原料鉄とその流通」『製鉄史論文集』たたら研究会編、pp.553－576

五十川伸矢　1992「古代・中世の鋳鉄鋳物」国立歴史民俗博物館研究報告第46集、pp.1-79

五十川伸矢　1996「古代から中世前半における鋳鉄鋳物生産」季刊考古学、57、pp.57-60

大澤正己　1984「古墳供献鉄滓からみた製鉄の開始時期」季刊考古学、8、pp.36-40

河瀬正利「中国地方におけるたたら製鉄の展開」『たたらから近代製鉄へ』平凡社、1990年、p.11

佐藤知雄編　1968『鋼の顕微鏡写真と解説』丸善株式会社

佐々木稔、村田朋美　1984「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」季刊考古学、8、pp.27-33

関清　1996「古代末の北陸-富山湾岸部の遺跡群-」季刊考古学、57、pp.30-32

東北大学金属材料研究所編　1953『金属顕微鏡組織』
日本鉄鋼協会編　1981『鉄鋼便覧』丸善株式会社
福田豊彦　1999「近世前期，和鉄の生産と流通の基本形態」たたら研究、39、pp.15-24
福田豊彦　2000「近世における『和鉄』とその技術－中世の『和鉄』解明のために－」『製鉄史論文集たたら研究会創立四十周年記念』たたら研究会、pp.195-228
村上英之助　1996「村上・中澤の往復書簡」たたら研究、36・37、p.78-88
盛岡市教育委員会編　2008『志波城跡』
Knox.R. "Detection of carbide structure in the Oxide remains of ancient steel", Arcaeometry, Vol.6, 1963, pp.43-45.

No.	資料名	検出遺構 グリット	層位など	資料 番号	肉眼観察結果
1	鉄鏃	Ｅ６ｃ３	Ⅱ層	33	－
2	紡錘車紡輪	Ｅ６ｄ２	Ⅱ層	38	－
3	小刀破片	Ｆ４ａ４	Ⅱ層下部	1	－
4	鉄滓	Ｅ４ｃ５	Ⅱ層下部	78	黒褐色を呈する椀形滓の一部。ほぼ同形態の２つの椀形滓が固着している
5	鉄滓	Ｈ８Ｐ	１層	160	黒褐色を呈する板状の鉄滓。いたるところに空隙が見られる
6	鉄滓	Ｈ８Ｐ	１層	161	黒褐色を呈する塊状滓
7	鉄滓	Ｈ８Ｐ	１層	190	鉄錆と鉄滓が混在する小塊状滓
8	鉄滓	Ｈ８Ｐ	１層	303	黒褐色を呈する板状の鉄滓。いたるところに微小空隙が見られる
9	鉄滓	Ｅ４ｃ２	Ⅲ層	312	黒褐色を呈する小塊状滓。著しく発泡している
10	鉄滓	Ｈ１Ｍ	３層	328	塊状滓。発泡し、いたるところに空隙が見られる

*調査資料は共伴土器によって９世紀前半に比定されている。

第4-1表　調査資料の概要

No.	資料名	資料番号	Sa	鉄質	化学組成(mass%) T.Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	S	Mo	Co*	Cu*	Ni**	Cu**	ミクロ組織	n.m.i.
1	鉄鏃	33	1	M+R	84.54	0.008	0.006	0.014	0.001	0.03	0.037	0.21	0.027	0.069	0.006	0.004	0.01	<0.001	2.33	1.33	0.43	0.57	Pa(0.7-0.8)	XT,Gl
				R	59.79	0.006	0.004	0.010	0.003	0.34	0.050	0.97	0.034	0.486	0.036	0.007	0.03	<0.001	2.50	1.50	0.40	0.60	－	－
			Suf	－	7.43	0.006	0.004	0.001	0.070	0.22	0.668	20.2	0.068	9.02	0.599	<0.001	0.03	0.001					－	－
2	紡錘車紡輪	38	1	R	63.38	0.005	0.005	0.008	0.006	0.31	0.014	0.70	0.013	0.246	0.027	0.002	0.05	<0.001	1.60	1.00	0.63	0.63	Cm(0.3-0.4)	Ma
			Suf	－	28.95	0.002	0.002	<0.001	0.028	0.32	0.465	14.1	<0.001	4.70	0.238	<0.001	0.05	<0.001					－	－
3	小刀破片	1	1	R	67.74	0.004	0.012	0.016	0.001	0.10	0.006	0.26	0.003	0.134	0.004	0.001	0.08	<0.001	1.33	0.33	0.75	0.25	no	no
			Suf	－	28.53	0.002	0.002	0.002	0.045	0.14	0.436	12.2	<0.001	4.63	0.302	<0.001	0.10	0.001					－	－

*No.は表1に対応。Saはサンプル摘出位置。Mはメタル試料、Rは錆試料、Sufは鉄器表面採取試料。化学成分分析はICP-AES法による。
**Paはパーライト、Cmはセメンタイトまたはその欠落孔。括弧内の数値はミクロエッチング組織から推定される炭素量。noは見いだされず、－は分析せず。
***n.m.i.は非金属介在物組成。XT：主として酸化鉄および酸化チタンからなる化合物(鉄チタン酸化物)、Gl：ガラス質ケイ酸塩、Ma：微細粒子が混在したガラス化した領域
****Cu*は(mass%Co)/(mass%Ni)、Cu*は(mass%Cu)/(mass%Ni)、Ni**は(mass%Ni)/(mass%Co) 、Cu**は (mass%Cu)/(mass%Co)

第4-2表　鉄器の分析結果

No.	資料番号	Sa	化学組成(mass%)														鉱物組成
			T.Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	S	K	
4	78	1	53.76	0.002	<0.001	0.002	0.048	0.19	0.410	8.46	0.731	2.52	0.340	0.006	0.03	0.51	IO, Fa, Ha, Ma
5	160	1	64.63	0.001	<0.001	0.002	0.170	0.16	1.11	4.66	0.686	1.64	0.289	0.144	0.03	0.29	Mag, Fa, Ma
6	161	1	61.66	0.001	0.004	0.010	0.172	0.41	0.763	3.81	1.33	0.906	0.195	0.143	<0.01	0.36	Mag, XF, Ma
7	190	1	56.80	0.002	<0.001	0.002	0.267	0.34	1.44	6.13	1.02	2.51	0.350	0.218	0.01	0.34	Mag, XF, Gl
8	303	1	63.18	<0.001	<0.001	0.001	0.255	0.43	1.08	5.13	1.21	1.70	0.312	0.270	0.02	0.24	Mag, Fa, Ma
9	312	1	7.42	0.001	0.002	<0.001	0.062	0.09	0.518	28.0	0.732	7.46	0.928	<0.001	<0.01	3.08	(Qtz, Gl), (Mag, Gl)
10	328	1	8.14	0.006	0.007	0.003	0.109	0.08	0.872	26.1	0.223	11.6	1.35	<0.001	<0.01	1.21	(Qtz, Gl), (Me, Mag, Gl)

*No.は表1に対応。化学成分分析はICP-AES法による。

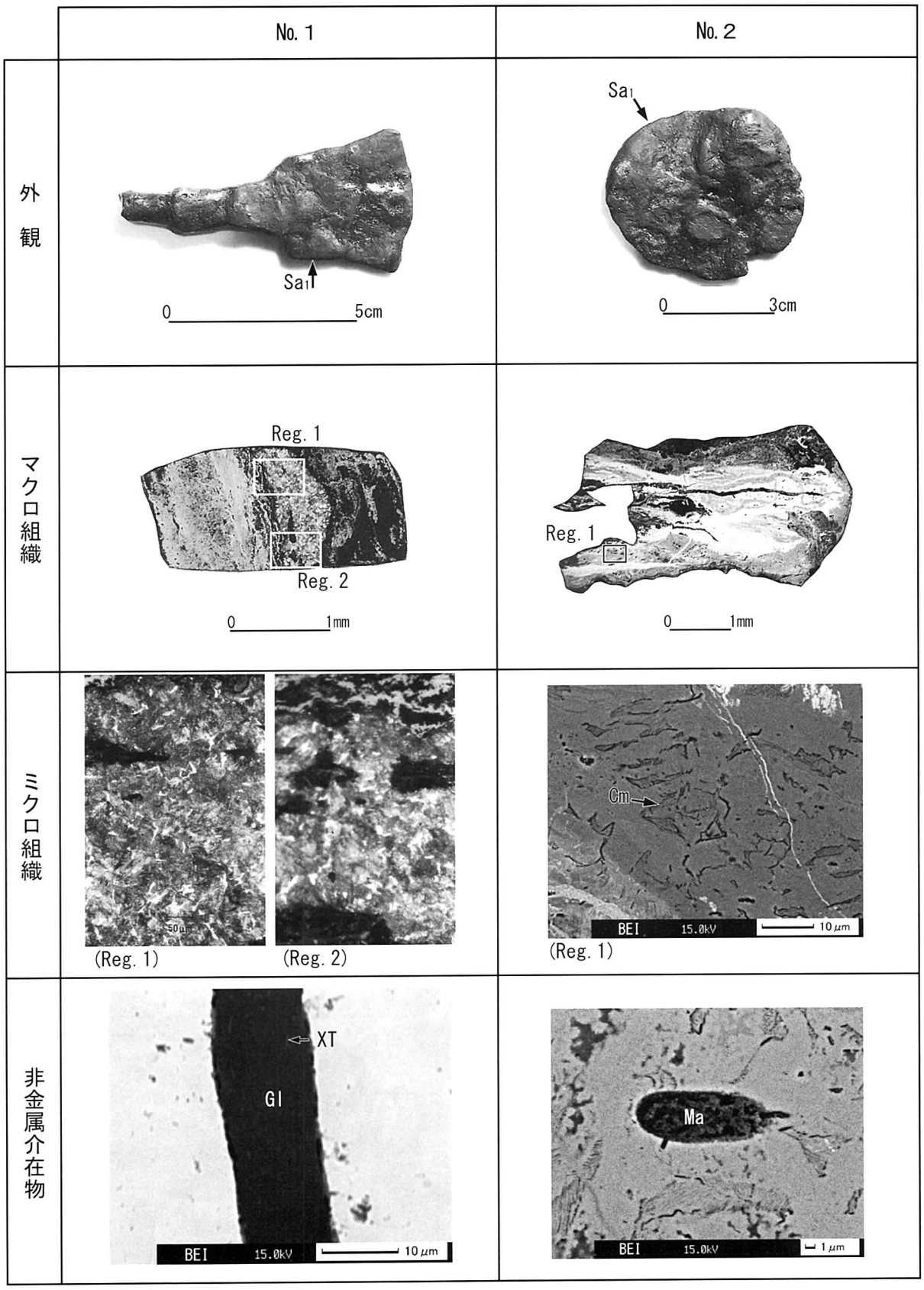
**IO：Fe-O系化合物、Mag：マグネタイトと推定される化合物、XF：Fe-Mg-Si-O系化合物（Fa：鉄かんらん石）、Ha：Fe-Al-O系化合物（ハーシナイト[$FeO \cdot Al_2O_3$]と推測される）、Qtz：石英、Gl：ガラス質ケイ酸塩、Ma：微細粒子が混在したガラス化した領域。

第4-3表　鉄滓の分析結果

No.	Spot			化学組成(mass%)													total
	Fig.	Reg. 1	m.c.	Na_2O	K_2O	MgO	CaO	Al_2O_3	TiO_2	SiO_2	V_2O_5	FeO	ZrO_2	MnO	Cr_2O_3	P_2O_5	
4	3	1	IO(1)-1	<0.01	0.02	0.02	0.03	0.51	0.37	0.19	<0.01	94.2	0.04	0.02	0.01	0.00	95.41
			Fa(1)-1	<0.01	0.07	0.14	1.34	0.19	0.02	29.2	0.16	65.9	<0.01	0.10	<0.01	0.25	97.37
			Ha(1)-1	<0.01	<0.01	0.02	0.06	51.5	0.54	0.35	0.01	45.0	<0.01	0.01	0.00	0.02	97.51
5	3	1	Mag(1)-1	<0.01	<0.01	0.05	0.06	0.98	1.20	0.27	0.32	93.3	0.20	0.17	0.06	0.00	96.61
			Fa(1)-1	0.03	1.39	0.39	1.59	0.96	0.31	27.9	0.00	65.4	0.06	0.52	0.00	0.37	98.92
6	4	1	Mag(1)-1	0.02	0.00	0.05	0.06	0.65	1.06	0.40	0.45	90.8	0.01	0.22	0.06	0.02	93.80
			Mag(2)-1	0.01	0.01	0.07	0.09	1.72	1.28	9.55	0.29	80.7	0.05	0.28	0.08	0.23	94.36
7	4	1	Mag(1)-1	0.03	0.03	0.13	0.04	0.85	2.14	0.38	0.75	90.2	0.18	0.21	0.08	<0.01	95.02
8	5	1	Mag(1)-1	0.05	0.03	0.03	0.11	0.38	0.82	0.29	0.56	93.0	0.03	0.17	0.08	<0.01	95.55
			Mag(2)-1	<0.01	0.04	0.04	0.09	0.44	0.89	0.25	0.64	93.3	<0.01	0.16	0.10	<0.01	95.95
			Fa(1)-1	<0.01	0.04	0.38	1.75	0.26	0.11	29.4	0.09	64.1	<0.01	0.62	<0.01	0.29	97.04
9	5	1	Qtz(1)-1	0.07	0.10	<0.01	<0.01	0.30	0.02	97.0	0.00	0.08	0.05	0.03	0.09	<0.01	97.74
			Gl(1)-1	2.03	4.14	0.58	0.31	18.0	0.41	55.6	0.05	12.4	<0.01	0.10	<0.01	0.18	93.80
			Gl(2)-1	1.82	4.45	0.51	0.30	18.1	0.41	58.3	0.18	11.2	<0.01	0.01	0.06	0.05	95.39
	5	2	Mag(1)-1	0.02	0.05	0.15	0.02	7.50	1.19	0.19	0.15	79.9	0.10	0.07	0.26	<0.01	89.60
			Gl(1)-1	1.82	4.52	0.10	0.76	13.9	0.10	60.7	<0.01	13.7	0.05	0.05	0.08	0.22	96.00
			Gl(2)-1	1.60	3.96	0.22	0.65	12.9	<0.01	60.6	<0.01	15.3	0.04	0.05	0.04	0.16	95.52
10	6	1	Qtz(1)-1	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	0.04	97.2	0.01	0.06	0.02	<0.01	<0.01	0.02	97.35
			Gl(1)-1	0.62	2.01	0.53	0.78	21.0	1.15	56.1	<0.01	12.4	<0.01	0.18	<0.01	0.16	94.93

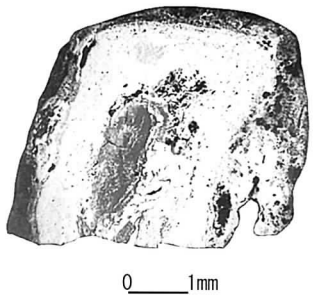
*No.は表１に対応.

第4-4表　調査鉄器の非金属介在物に見出された鉱物相のEPMAによる分析結果

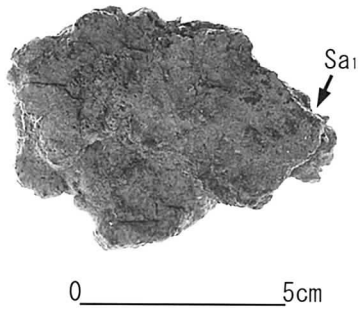
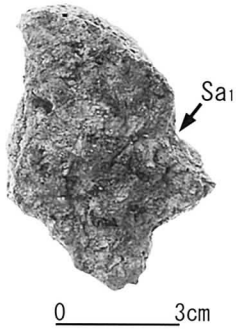
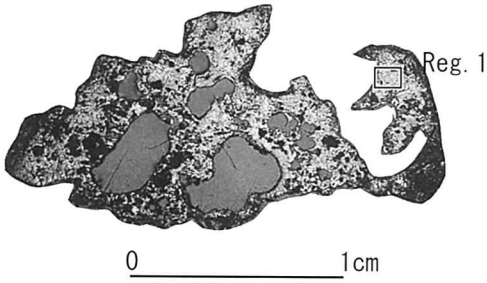
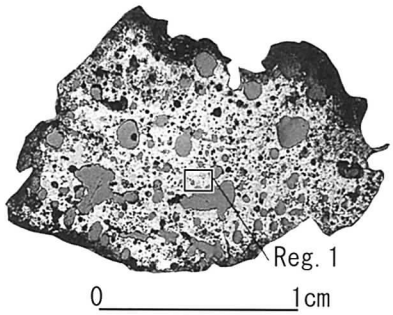
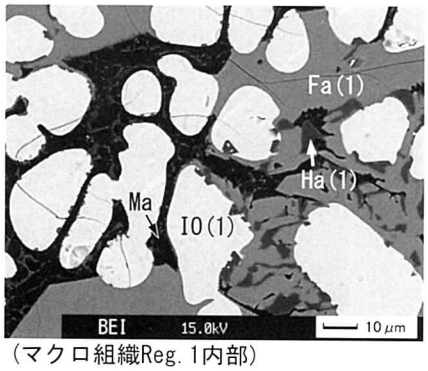
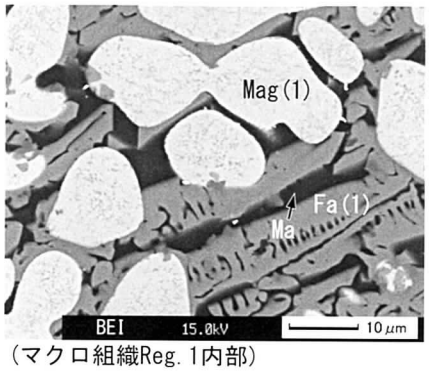


第4-19図　No. 1・No. 2から摘出した試料の組織観察結果

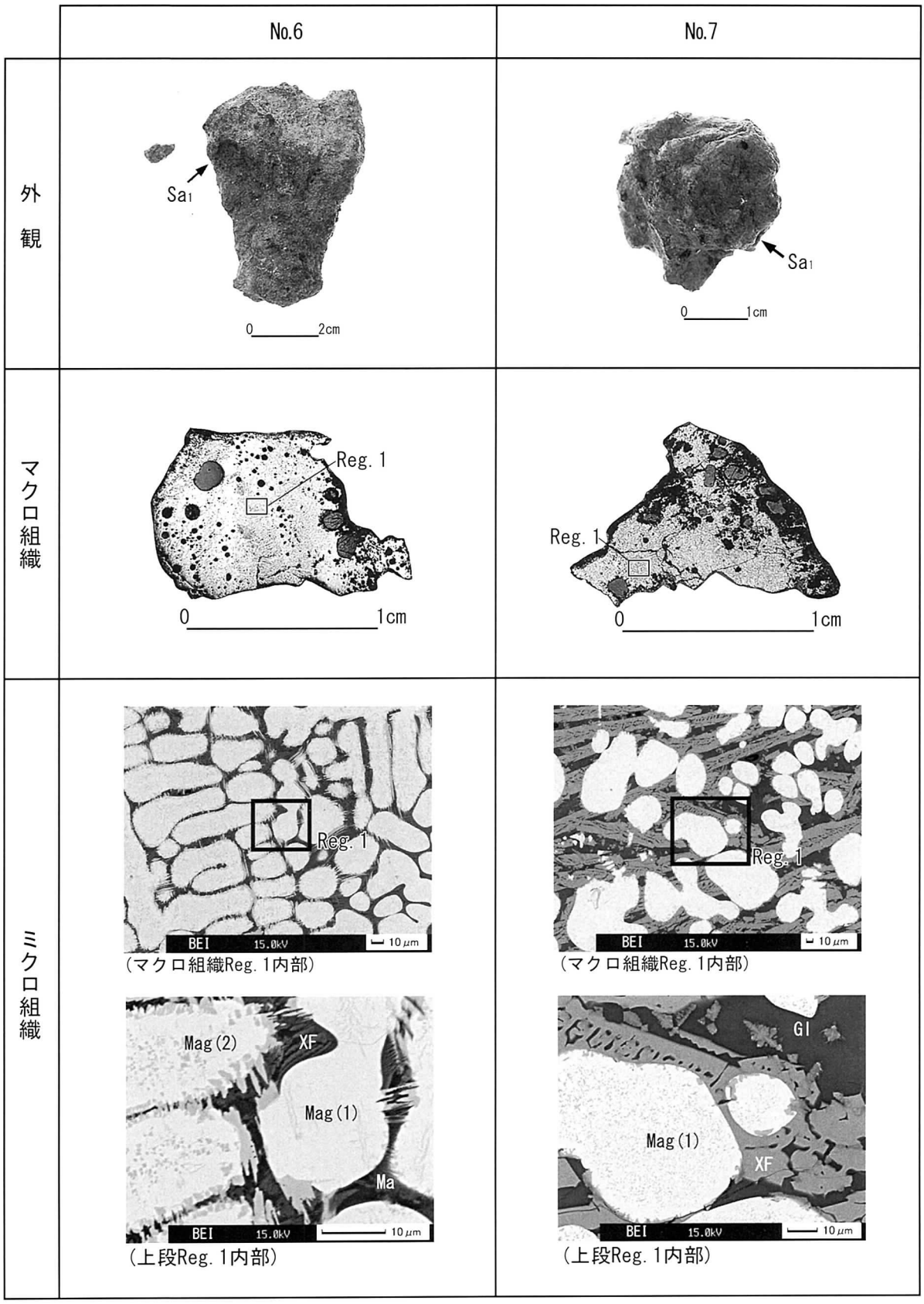
外観の矢印は試料摘出位置。No. 1から摘出した試料についてはナイタールによるエッチングを実施。Cmはセメンタイト(Fe3C)またはその欠落孔。XT：鉄チタン酸化物、Gl：ガラス質ケイ酸塩、Ma：微細粒子が混在したガラス化した領域。



第4-20図　No. 3から摘出した試料の組織観察結果
外観の矢印は試料摘出位置。

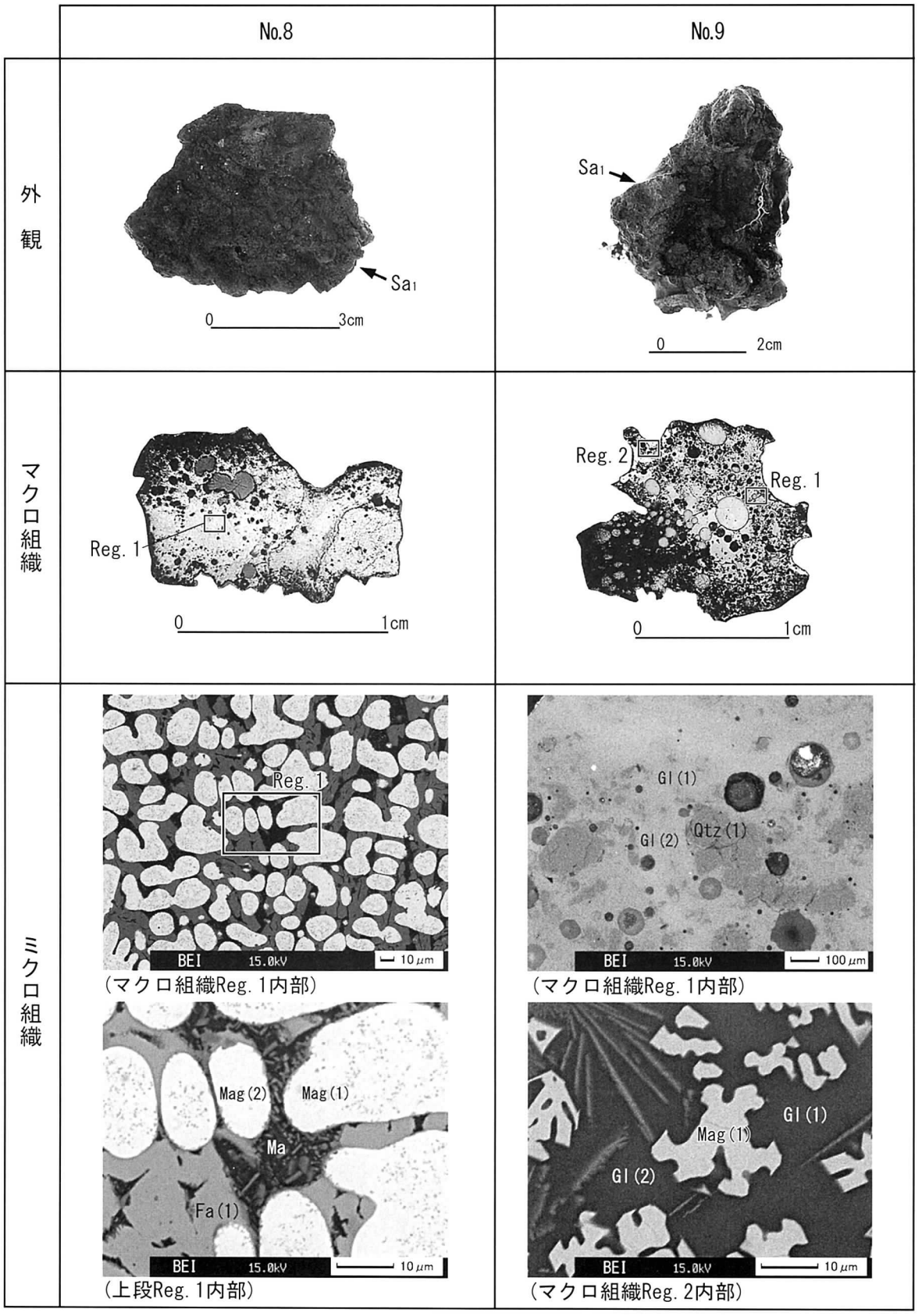
	No. 4	No. 5
外観		
マクロ組織		
ミクロ組織	 (マクロ組織Reg. 1内部)	 (マクロ組織Reg. 1内部)

第4-21図　No. 4およびNo. 5から摘出した試料の組織観察結果
外観の矢印は試料摘出位置。IO：Fe-O系領域(ウスタイトに近い)、Mag：マグネタイト、Fa：鉄かんらん石、Ha：Fe-Al-O系化合物{ハーシナイト(FeO･Al2O3)に近い}、Gl：ガラス質ケイ酸塩、Ma：微細粒子が混在したガラス化した領域。



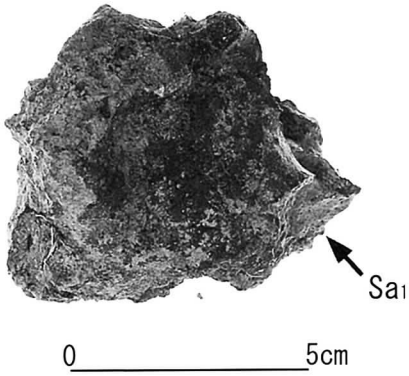
第4-22図　No. 6およびNo. 7から摘出した試料の組織観察結果

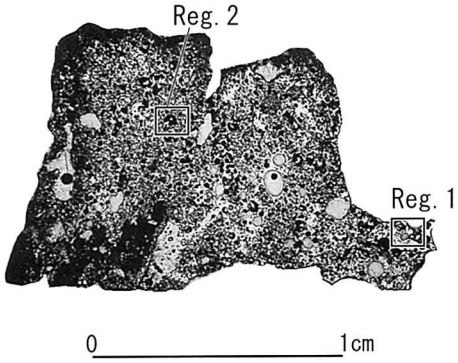
外観の矢印は試料摘出位置。Mag：マグネタイト、XF：Fe-Mg-Si-O系化合物、Gl：ガラス質ケイ酸塩、Ma：微細粒子が混在したガラス化した領域。

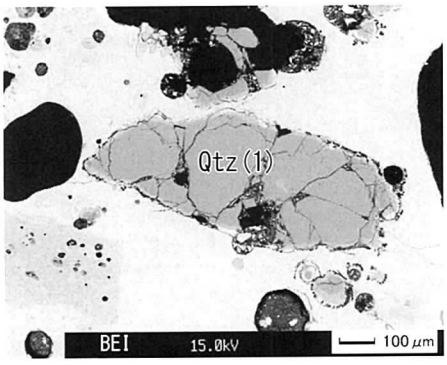
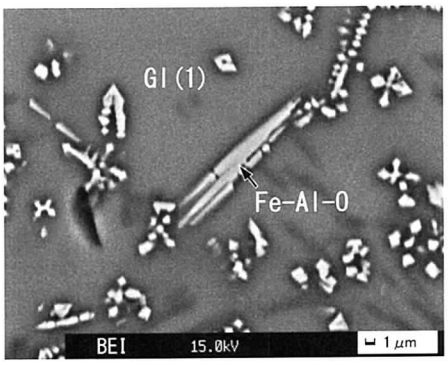
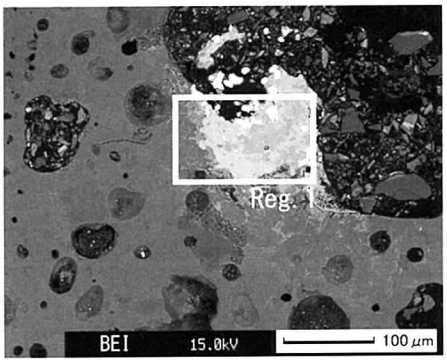
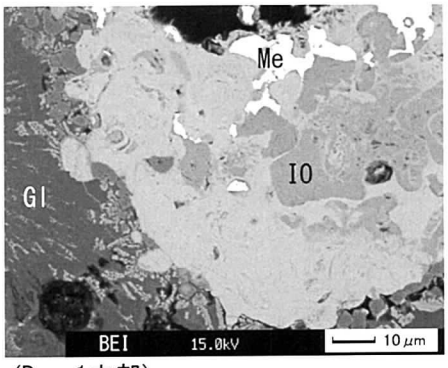


第4-23図　No. 8およびNo. 9から摘出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料摘出位置。Mag：マグネタイト、Fa：鉄かんらん石、Qtz：酸化ケイ素(石英と推定される)、Gl：ガラス化した朗域、Ma：微細粒子が混在したガラス化した領域。

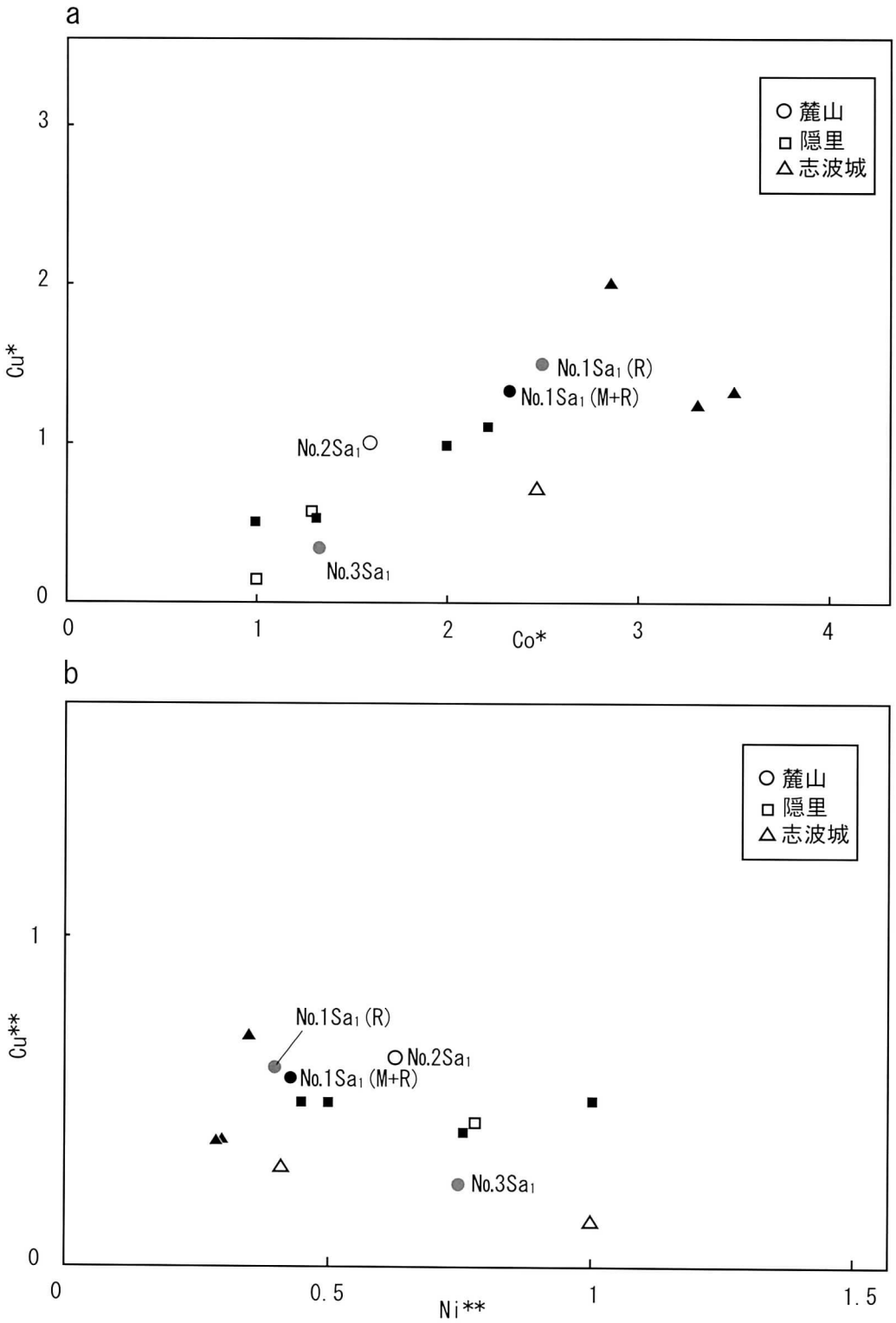




	マクロ組織 Reg. 1	マクロ組織 Reg. 2
ミクロ組織	 	  (Reg. 1内部)

第4-24図　No. 10から摘出した試料の組織観察結果

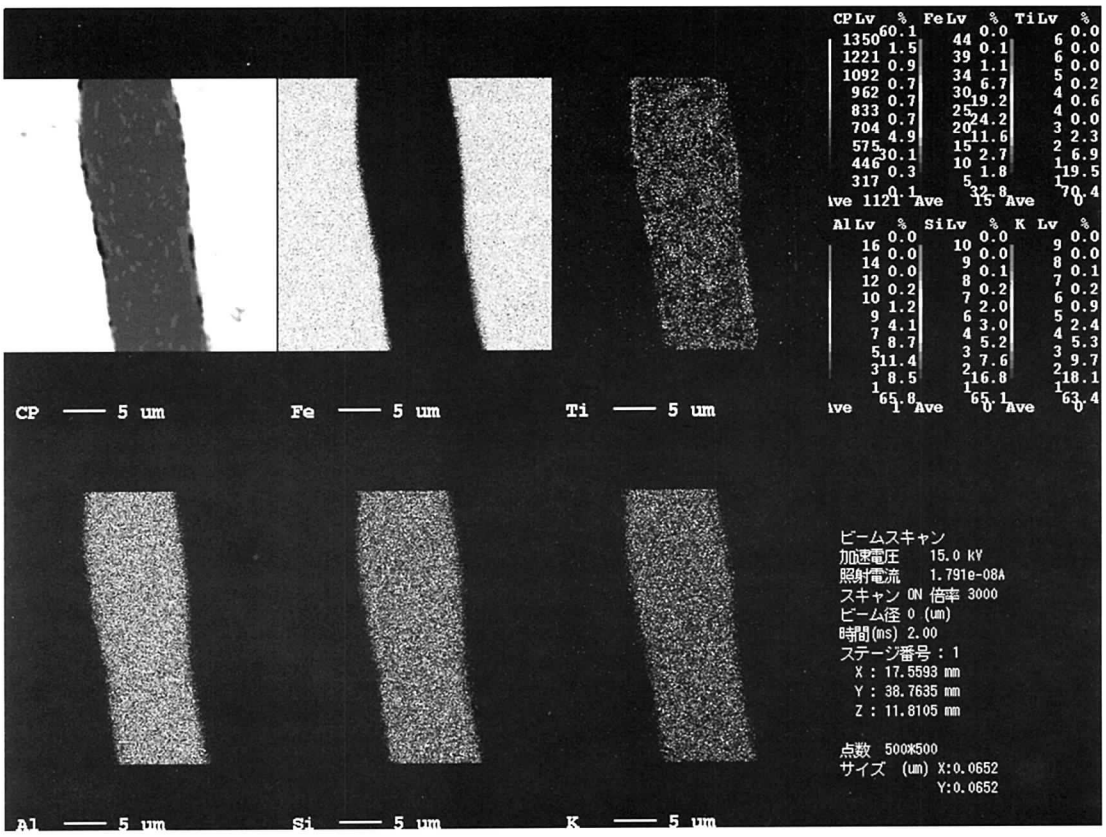
外観の矢印は試料摘出位置。Qtz：酸化ケイ素(石英と推定される)、Me：鉄粒、Gl：ガラス化した領域。



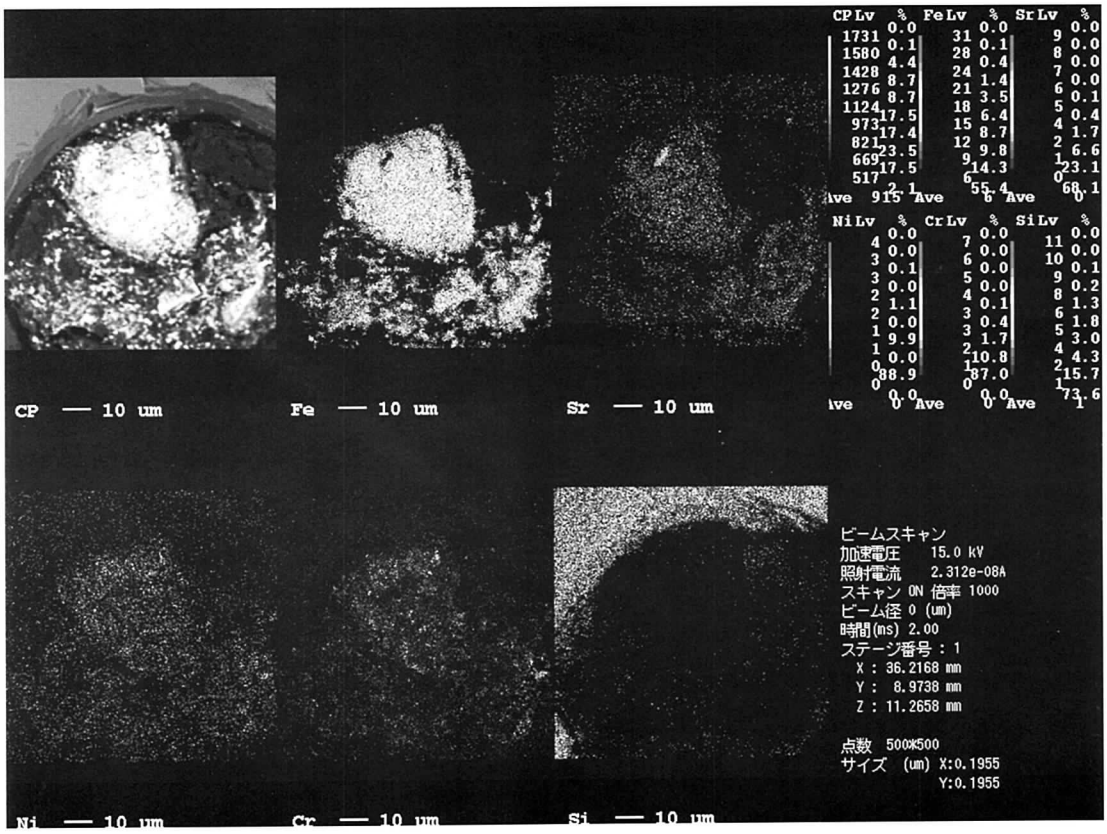
第 4-25　鉄器に含有される Cu・Ni・Co 3 成分比

No. は第 4-1 表に対応。三角（△）は盛岡市志波城跡出土鉄片・小鉄塊、四角（□）は宮古市隠里Ⅲ遺跡出土鉄器および小鉄塊系資料。白色の記号標記は非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出されなかった資料、黒色の記号標記は非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出された資料、灰色の記号標記は非金属介在物が見出されなかった資料

Co*：(mass%Co)/(mass%Ni)、Cu*：(mass%Cu)/(mass%Ni)、Ni**：(mass%Ni)/(mass%Co)、Cu**：(mass%Cu)/(mass%Co)。



第4-1写真 No.1のメタル中に見出された非金属介在物に含有される元素濃度分布のカラーマップ



第4-2写真 No.9のガラス中に見出された化合物に含有される元素濃度分布のカラーマップ

5. まとめ

今回の調査では、縄文時代や弥生時代、平安時代の資料が出土した。以下に特記事項についてまとめていく。

1）出土弥生土器の編年的位置づけ

第4－10図1～8は中期前葉の谷起島式に属する資料である。近年石川日出志氏は滝沢村湯舟沢遺跡資料を基に古・中・新の3段階に分類している（石川2005）。古段階は変形工字文C－1型が多く、磨消が少量で、中段階はC－2型、C－2型＋磨消縄文、C－3型＋磨消縄文、新段階は曲線的な磨消縄文と変遷している。麓山資料においては1のようにC－2型と2のような磨消縄文の組合せからこれらは、中段階に相当すると推定される。

9～11はいずれも壺で、9は頸部縄文帯部分に点列が施されている。谷起島式に後続する資料であると推測される。石川氏は縄文帯への点列を施文する段階を点列を施す段階（火行塚段階）→点列が顕著となる段階（川岸場段階）・縄文帯の狭小化に伴う中央へ点列を一列加える手法になる段階（兵庫館段階）に分類し、川岸場式古・中・新段階を提唱している。9～11は以上を踏まえると川岸場式中段階に相当する。

12・13は縄文帯に波状沈線が施されている。縄文帯への波状沈線が施文される例は二戸市大渕遺跡（岩手県埋蔵文化財センター1981）や、奥州市橋本遺跡（佐藤・伊藤1982）、一戸町上野遺跡。群（一戸町教育委員会1984・1985）、宮古市和井内東遺跡（小田野1985）などで見られる。これらは川岸場式新段階～天王山式直前までに位置付けられる資料に共伴する。縄文帯の狭小化の方向性が川岸場式以降も採用されるのであるならば、12・13は和井内東や上野遺跡資料より古いものと考えられる。

14～17は同一個体と考えられるが、口縁部内面に縄文を施す甕は陸前高田市山崎遺跡資料に見られる（陸前高田市・岩手県土木部1984）。小田野氏は山崎遺跡資料を和井内東資料より古く位置付けている。以上麓山遺跡出土の弥生土器は中期前葉から後葉までに位置付けられる。

2）出土古代遺物の意義

麓山遺跡から出土した古代に属する資料については、土師器の甕や第4－11図1の坏は、8世紀台の形式を有しているが、ロクロを使用し、底部を回転ヘラケズリする土師器坏や共伴する須恵器などは9世紀前葉のものと考えられる。釜石市域は古代において、気仙郡と閉村の境となっていた。官衙遺跡ではロクロ使用土師器の出土とともに、未使用土師器は消滅していくが、それ以外での集落遺跡では、9世紀になっても、8世紀の技法が残る例は内陸でも見られることから、9世紀前葉資料と考えたい。

これらの資料の中で、釜石市内では初となる墨書土器が3点検出された。解読できるものは「備」の1点であるが、文字の移入がこの時期に確実にあった証拠となる。

また2点の赤彩球胴甕が出土している（第4－12図10・11）。小片であるものの沿岸では大槌町夏本遺跡についで2例目となる（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1989）。夏本遺跡資料に比べ、本遺跡資料は甕の成形や赤彩の方法など、赤彩球胴甕が多く出土している和賀川周辺資料に近い。杉本良氏はノーマルタイプとする赤彩球胴甕をⅠ期・Ⅱ期に分類し、Ⅰ期を古・新に、Ⅱ期を3段階に細分している（杉本2001）。10は赤彩の縦線があることからⅡ期に位置付けることができる。杉本氏は、9世紀初頭まで赤彩球胴が残るとするが、新段階では文様が複雑化するとするが、典型例に近い本資料はⅡ期中段階（8世

紀第３四半期）の形式に相当する。この資料が釜石で出土したことは当時の内陸と沿岸との関係を知る上での手がかりとなると考えられる。

参考引用文献

石川　日出志　2005　「弥生中期谷起島式に後続する磨消縄文土器群」『岩手考古学』第17号

石川　日出志編　2005　『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年　平成14年度～平成16年度科学研究費補助金研究成果報告書』

一戸町教育委員会　1984　『上野遺跡』一戸町文化財調査報告書５

1985　『上野遺跡』一戸町文化財調査報告書13

岩手県埋蔵文化財センター　1981　「大渕遺跡」『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第23集

岩手県立博物館　1982　『岩手の土器』

小野田　哲憲　1985　「和井内東遺跡出土の弥生土器」『日高見国』菊地啓治郎学兄還暦記念会

1990　「岩手県における弥生式土器編年研究のの現状と課題」『第２回縄文文化検討会シンポジウム「東北地方の弥生式土器の編年について」』縄文文化検討会

1990　「岩手県における天王山式期の現状と課題」『「天王山式期をめぐって」の検討会記録集』弥生時代研究会

北上市教育委員会　1989　『藤沢遺跡(1988年度)』

2002　『立花南遺跡』

2004　『立花南遺跡(2003年度)』

2007　『立花南遺跡(2005年度)』

日下　和寿　2001　「上閉伊郡の土偶」『岩手県立博物館研究報告』第18号

佐藤　正彦　2004　「小泉遺跡と出土遺物」『陸前高田市立博物館紀要』第９号

佐藤嘉広・伊藤博幸　1992　「岩手県水沢市橋本遺跡出土土器について」『岩手県立博物館研究報告』第10号

1995　「岩手県水沢市橋本遺跡出土土器について（補遺）」『岩手県立博物館研究報告』第13号

杉本　良　1998　「岩手県北上盆地における蝦夷（エミシ）集団の動態－北上市藤沢遺跡の再検討から－」『考古学研究』第45巻第１号

2001　「赤彩球胴甕再考（１）」『北上市立博物館研究報告』第13号

2002　「赤彩球胴甕再考（２）－分布とその傾向(和賀川流域編)」『北上市立埋蔵文化財センター紀要』第２号

須藤　隆　1976　「亀ヶ岡式土器の終末と東北地方における初期弥生土器の成立」『考古学研究』23－２

1998　『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究－縄文から弥生へ－』

村木　志伸　2004　「小泉遺跡の墨書土器」『陸前高田市立博物館紀要』第９号

八木　光則　2004　「小泉遺跡出土土器の編年的位置付づけ」『陸前高田市立博物館紀要』第９号

陸前高田市教育委員会・岩手県土木部　1984　『山崎遺跡発掘調査報告書』

※　脱稿後、平川南氏より本遺跡出土墨書土器は「備」ではなく「満」ではとの御指摘をうけている。

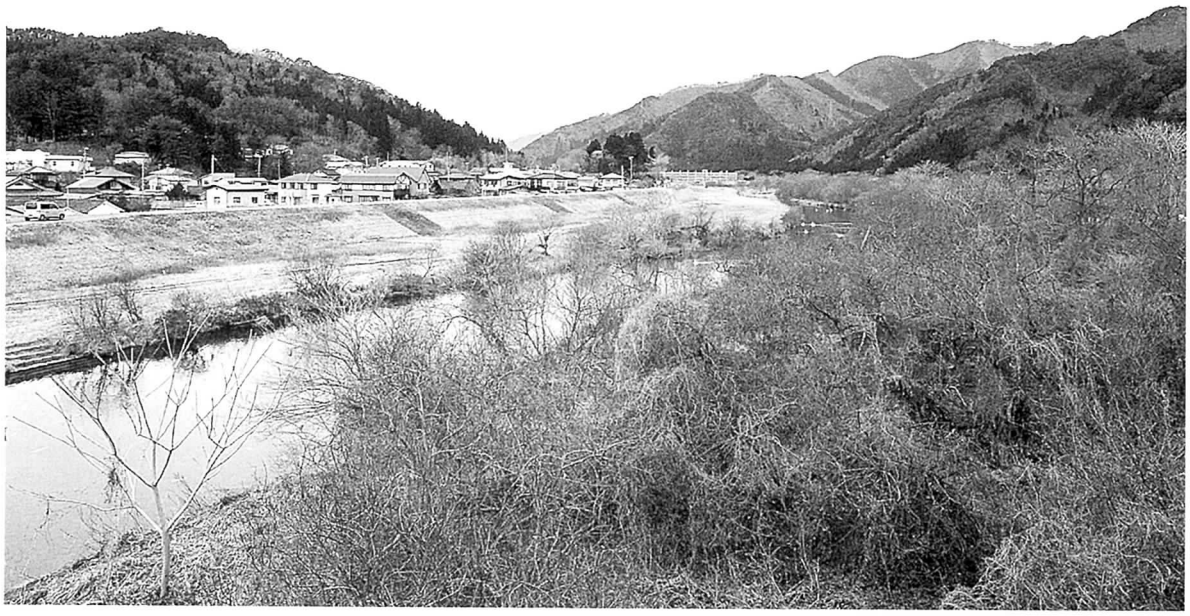


写真1　麓山遺跡遠景(東より)

写真2　麓山遺跡近景(南東より)

写真3　麓山遺跡近景(北東より)

写真4　調査終了状況(東より)

写真5　調査終了状況(南西より)

図版4-1　調査写真1

写真６　表土掘削状況

写真７　発掘作業状況

写真８　Ｊ１号土坑完掘状況(南より)

写真９　Ｊ１号土坑断面(南より)

写真10　Ｈ１号土坑完掘状況(東より)

写真11　Ｈ１号土坑断面(東より)

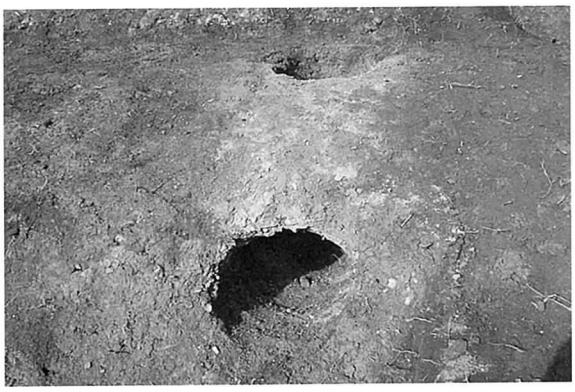


写真12　Ｈ５号ピット土坑完掘状況(南より)

写真13　Ｈ８号ピット断面(東南より)

図版４－２　調査写真２

写真14　Ｈ１号溝完掘状況(南東より)

写真15　Ｈ１号溝検出状況(北東より)

写真16　Ｈ２号・３号溝完掘状況(北東より)

写真17　Ｈ３号溝断面(北西より)

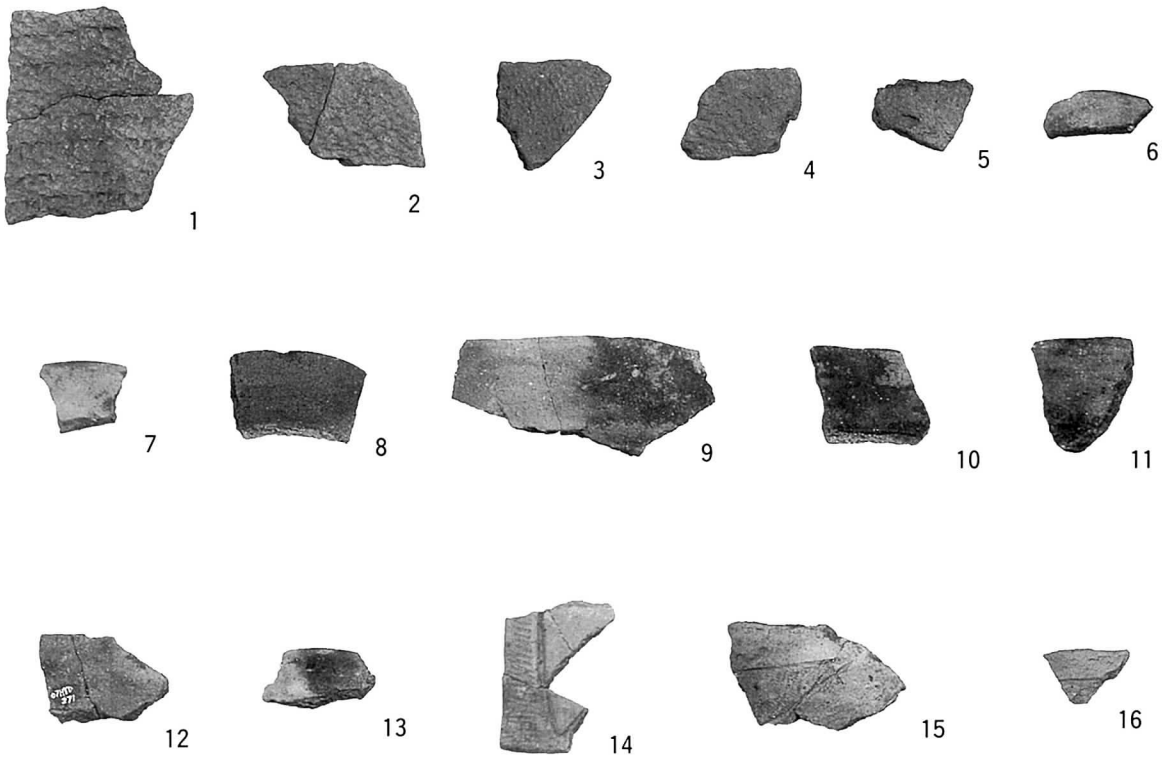
写真18　Ｈ４号溝完掘状況(北より)

写真19　Ｈ４号溝断面(南より)

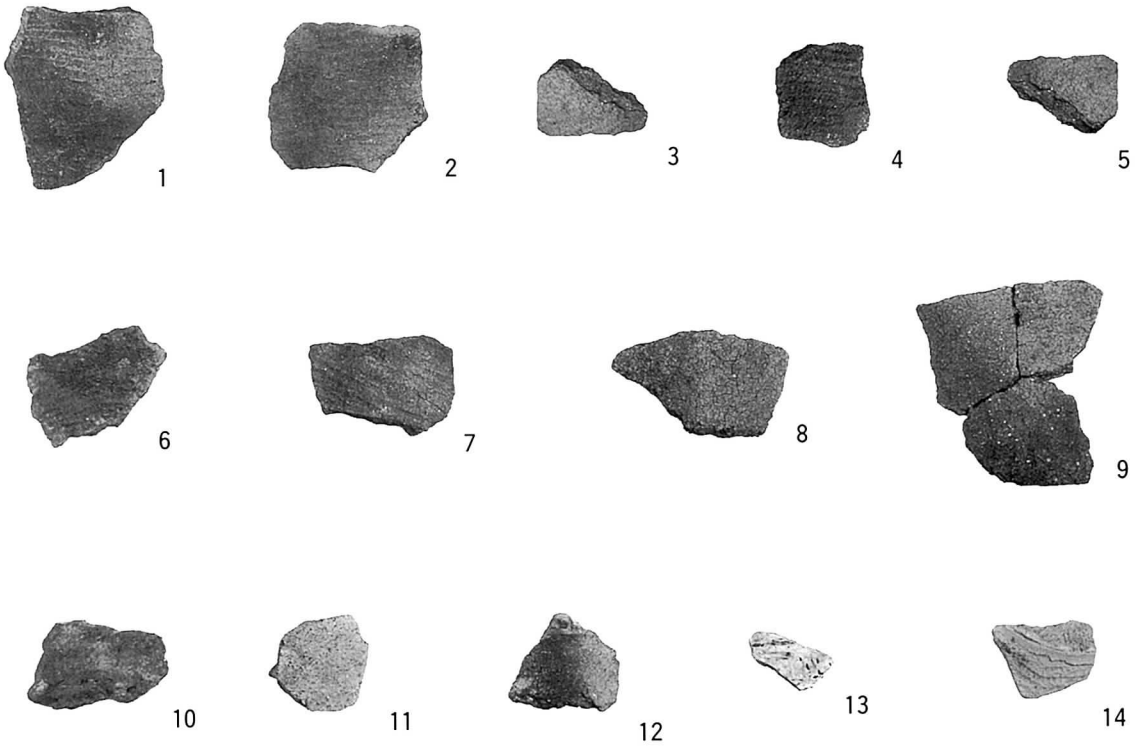
写真20　調査区北部平場(南東より)

写真21　墨書土師器出土状況(第４-11図４)

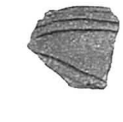
図版４－３　調査写真３



図版 4 - 4　出土遺物 1（縄文土器 1）



図版 4 - 5　出土遺物 2（縄文土器 2）


1

2

3

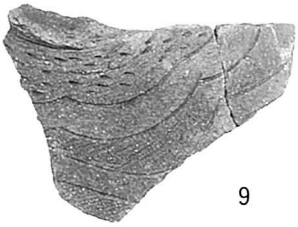
4

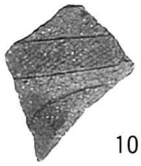
5

6

7

8

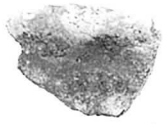

9


10

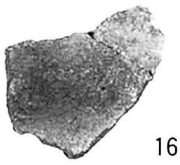
11

12

13

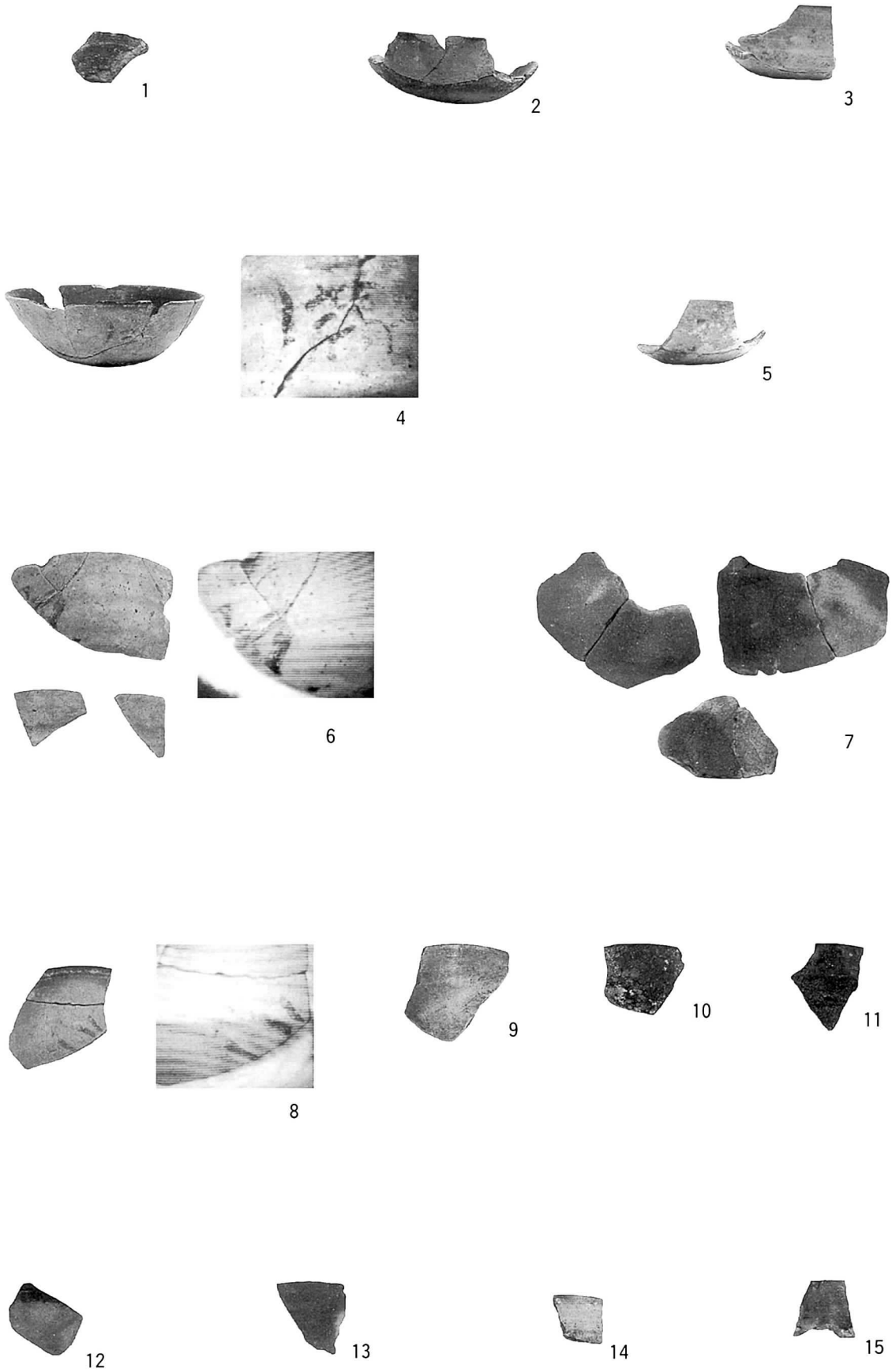

14

15

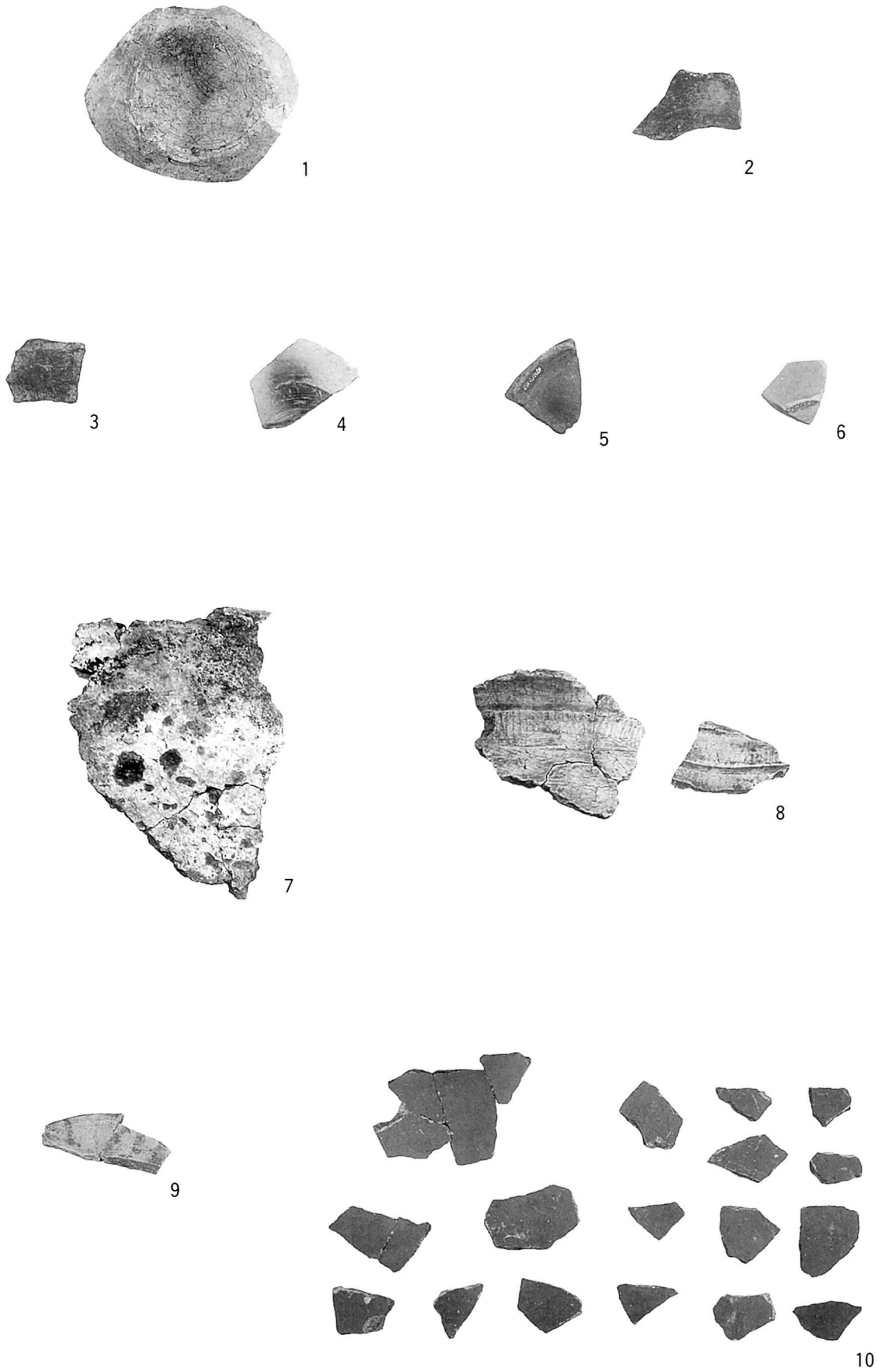

16

17

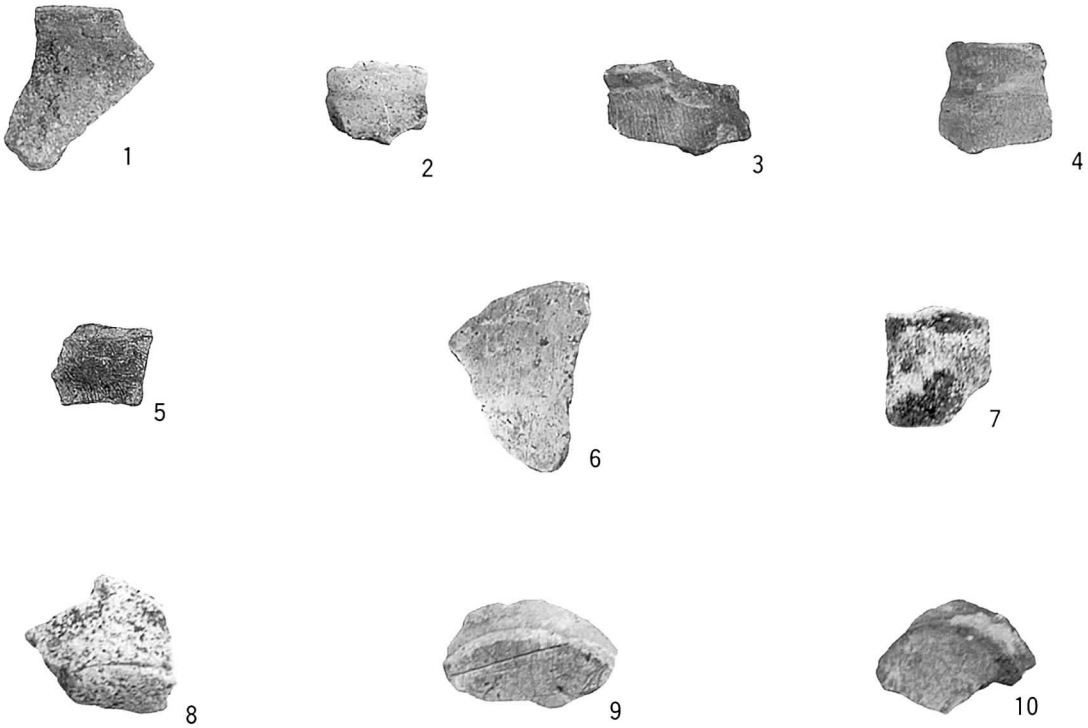
図版 4－6　出土遺物 3（弥生土器）



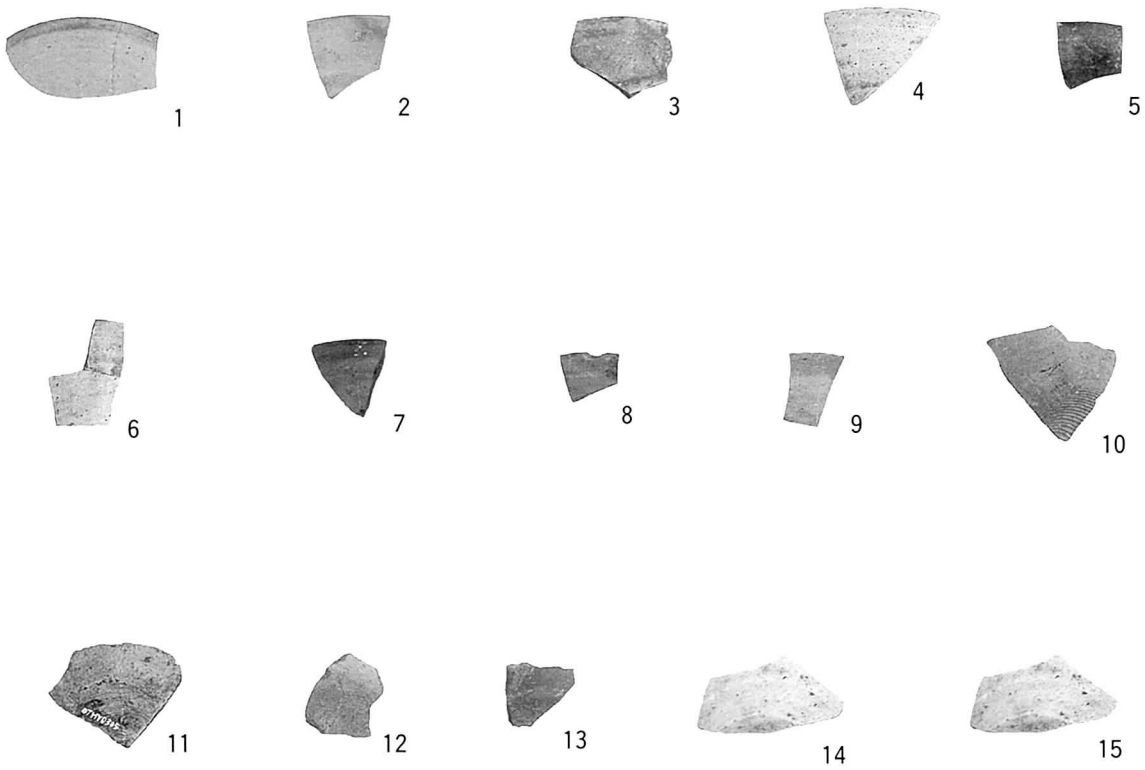
図版 4 - 7　出土遺物 4（土師器 1）



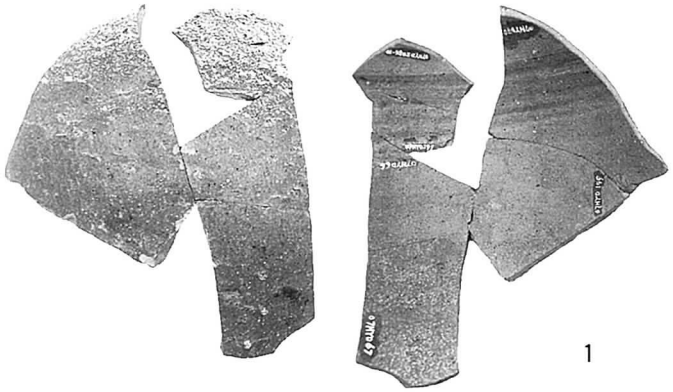
図版４－８　出土遺物４（土師器２）



図版 4 - 9　出土遺物 6（土師器 3）

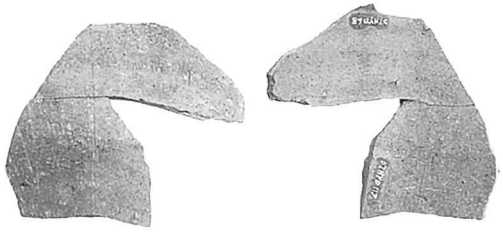


図版 4 -10　出土遺物 7（須恵器 1）


1

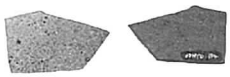
3

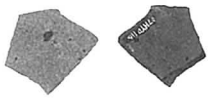
4


2

5

6


7

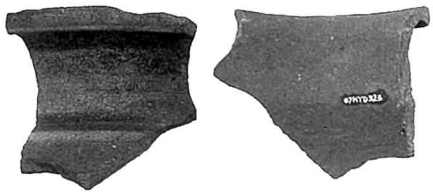

8

9

10

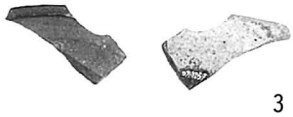
11

図版 4 -11　出土遺物 8（須恵器 2）



1

2



3

4

5

6

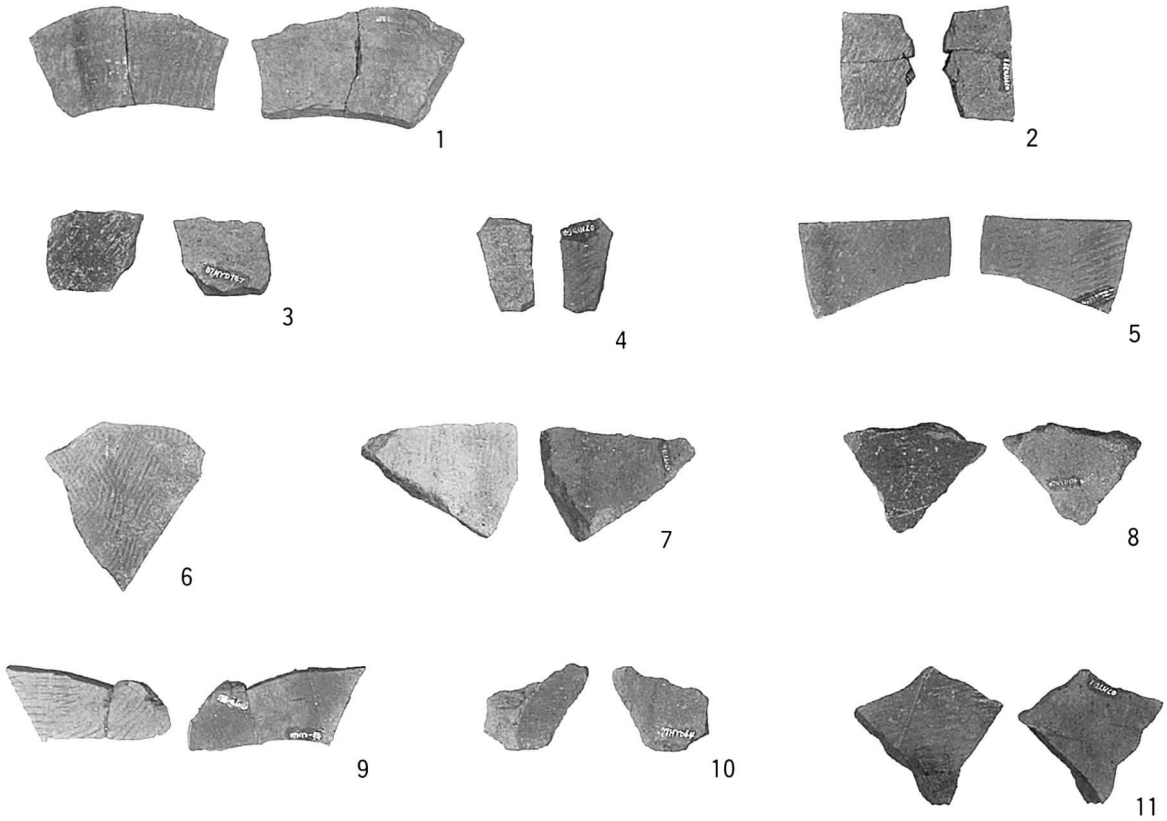
7

8

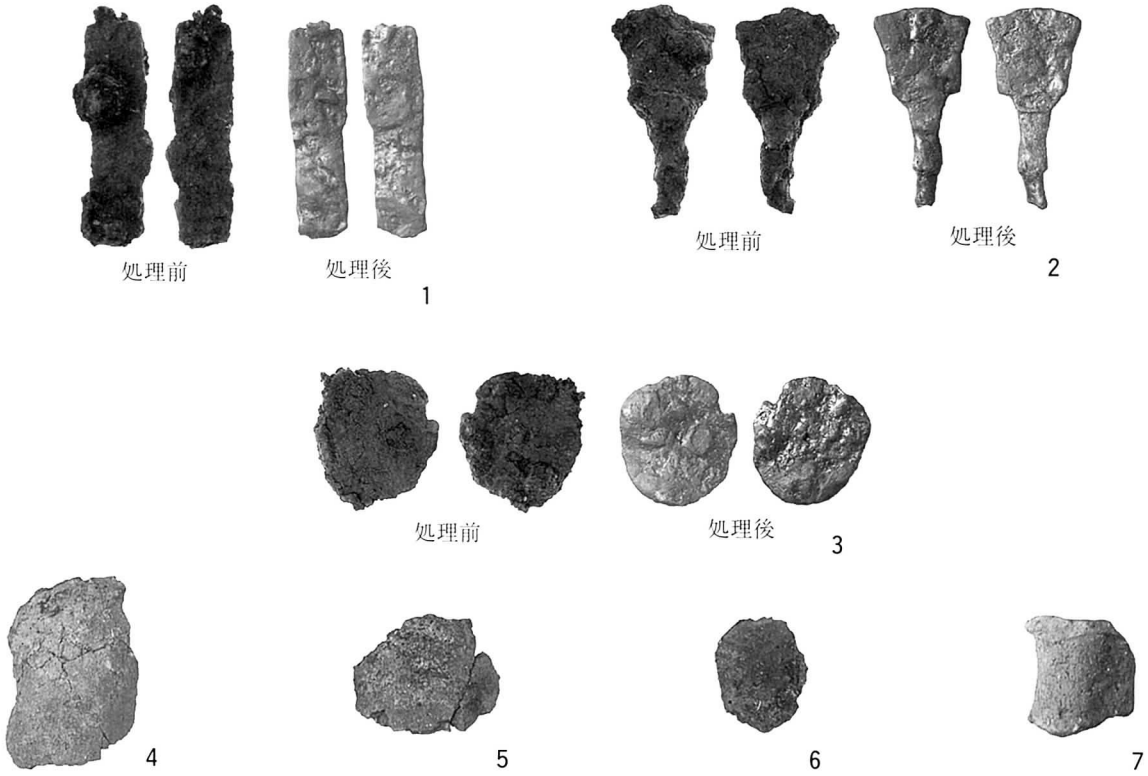
9

10

図版 4 -12　出土遺物 9（須恵器 3）



図版 4 -14　出土遺物10(須恵器 4)



図版 4 -14　出土遺物11(鉄製品・フイゴ羽口・土製支脚)

岩手県文化財調査報告書第128集

岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成19年度）

発行日　平成21年３月26日
発　行　岩手県教育委員会
　　岩手県盛岡市内丸10－１
編　集　岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課
印　刷　小松総合印刷株式会社
　　盛岡市鉈屋町15－４